PL
726
.6
K47

East
Asiatic
Studies

Kimura, Ki
Bungei tōzai namboku

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

文津四閣北

文藝東西南北

木村毅著

新潮社版

PL
726
.6
K47
LIBRARY
MAR 29 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

序

木村君は東西古今に亙る多讀家を以て知らる。就中明治文化に就ては夙に潜思して博渉最も力む。日に古書肆を採訪して露店までも漁つて倦まず、往々意外の逸書を堀出して忘れられたる資料を捜り當てる第六感を持つてをる。木村君と私とは大分年齢の距離があるが、年長の私が弱齢の木村君に却て教へられる事が多い。

一體明治文化と此頃は頻りに騒がれるが、明治十七八年までの明治の文化は混沌期で殆んど錄するに足るものが無い。研究の對照としては動物學者が微生物を珍重する如くドンナものでも研究に値ひせざるは無いが、明治の初期は文化的にはブランク・ページであつて史料以外の價値ある著述は殆んど一冊も無いと云つても決して太過は無い。其中から木村君は時に意外の堀出し物をする。

木村君は音吐碌々たるをもてライオンと稱されてをる。ライオンは食餌とすべき禽獸に富める森林よりは嶮岨荒涼のバーレン・ソイルに棲みて時々道を失する羊や沼澤に飲する

牛馬を殺獲する。木村君が文化的にバーレン・ソイルなる明治の初期の産物から屢々意外の獲物を捉へるは亦ライオンと諢名される名詮自稱なる乎。

此の東西南北は卽ち木村君の古書肆を漁つた獲物の報告である。俗にライオンス・シエアと稱して獅子が餌食を獲るや殆んど全部を獨占めして決して他に分配しないさうだ。が我が木村ライオンは本物のライオンほどに貪慾で無い。少くも滋味を報告して我々讀者に津を呑込ませる。我々讀者は木村君の報告に由て食慾を刺戟され、遲蒔ながら木村君が漁つた跡を追つて折々殘滓に幸ひするを得るは亦木村君の賜物である。

四月三日

魯庵生

序

さる先輩の藏書家のところへ往つて、斯く〳〵の本を見付けた、高いけれども珍本と思ふから買つて置かうと思ふがと相談したら、そんな本は幾らでもあるよ、珍本でも何でもないと無雜作に云ふ。其時はさうかなアで分れたが、後で聞くと、彼はこの同じ本を多年探し求め、先き頃やつと一本を手に入れたのださうな。實際珍らしいものなのだが、一旦手に入れると斯んなものは百年も前から有つてるンだと云ふやうな風を見せびらかすのが、時々專門大家のうちにある。正直に教へて貰はないと我々後進は大にこまる。

看板だけ大きくて其實何も知らぬもの、知つてるには知つてるが何を聞かれても知らぬと云ひたがらぬため時々出鱈目を云つてはボロを出すもの、そんな專門家は固より相手にする必要はないが、本當の專門大家でも、親しく教を乞うて後進に適切なる「正直な垂教」を惜まるゝ者のあるのは、我々の常に遺憾とする所である。

そこで私は、何か新しい問題を研究するときには、毎に斯道專門の大家に教を乞ふと同

時に、亦必ず目下研究中の篤志家を友として相談することにして居る。專門家に疑を質すことは固より絶對に必要だが、問題の地位とか研究の方針とかは、同じ道に多少の苦勞をした同好の學友に諮るまでは、どうしても呑み込めないからである。非凡の才分を惠まれて居る者には、之を缺くも他日の大成を期し得ぬことはあるまいが、少くとも我々程度の鈍才に取ては、此種學友の經驗を聽くのはどれだけエネルギーの節約になるか分らない。

木村毅君は明治文化の研究に於ける斯うした私の益友の一人である。同じく明治文化の一部門ではあるが、文藝の事は實は私には分らない。從て木村君の造詣に就て私は之を適當に評價するの資格はないが、たゞ所謂專門の大家でないことは明白だ。年の若いのが何よりの證據である。之と同時にまた明白疑のないのは、君が孜々汲々として研鑽につとめて倦まざることである。私共をしてあの若さに拘らず蘊蓄の相當に深いことを想はせずにはおかぬ所以である。君と初めて相識るに至つた仲介者の川原次吉郎君は、君を雜學博士として私に紹介した。親しい友人間のニック・ネームだらうが、冗談半分のこの稱呼のうちにも、君そのものゝ面目は幾らか含まれて居ると觀ていゝのであらう。

孰れにしても、私は君の「文藝東西南北」を讀んで、私が君を待つことの謬らざりしことを感ずる。何となれば、私は之に依て教へられたといふよりも、一所になつて共に研究を續けて行くやうな、親しい氣持になつて益を得ること頗る多かつたからである。明治大正の文藝史と觀ては固より不完全なものであらう。あれ丈のものとしても未成品といふ匂ひが著しい。けれども之を讀んで遂に、最近文藝の史的考察に新しき興味を覺えて、我知らずその研究に引き入れられざるを得るもの、果して幾人あらうか。是れ題材の擇び方とか措辭の輕妙とかに因ることもあらうが、主としては著者がつとめて專門家らしい判斷を避け、絶えず清新なる研究的態度を一貫して行つたからではあるまいか。

細かい事をいへば、明治大正に通ずる重なる作品の解題がある。又それと時代の背景との交渉も說いてある。一般文壇の傾向の變遷もわかる。古い所では飜譯小說や社會主義文藝の創始時代のこともある。新しい問題として、私共の注意をそゝるものには、水平運動文藝や、モダアン・ガールの問題や、軍隊小說の論がある。說いて精ならざる所はあらう。「此人に斯んな著があつたと思ふが、今手許にないから正確なことは分らない」とか、「……

といふ小説が何々の本にあつたやうに記憶する」とか、可なり横着な言ひ方に面喰はされる事もあるが、不たしかなことをはつきり言ひ誤らるゝよりも、此方がどれ丈け有り難いか分らない。自分の新に研究を始める手引とすれば、この「文藝東西南北」は痛快にして重寶至極な本だ。相當研究を積んだ者に取ても、古い記憶を喚び起して新なる境地へ進む助けには必ずなる。明治文化研究の流行する今日に當て洵に恰好の著述であると私は考へる。

斯く云ふことを著者が喜ぶか又そが出版者の爲になるか、そんな事は皆目分らない。門外漢たる私は、その校正刷を全部讀んで非常に面白く感じ又非常に多くの益を得たのだが只面白い有益だと云つただけでは、空世辭と取らるゝの恐がある。乃ち退いてその面白く有益であつた所以を探究し、斯うもあらうかと一氣に筆をはせてこの序文を作つたのだ。固より木村君を賞めるに非ず、君を譏るの意も亦毛頭ない。只本書を讀んで一人でも多く同好の研究者の殖えんことは、私の希望してやまない所である。

大正十五年四月

吉野作造

序

さう云つては外の諸君に悪いが、木村君は、早稲田出身の文學者中、學問に富んでゐる一人であるらしい。少くとも好學の人らしい。自分は、木村君の「小說研究十六講」を熟讀したものである。直感と常識とだけで、物を云つてゐる人の多い中に、木村君位、學問的背景を持つてゐる人は少いと云つてよい。

此の頃文壇にも好學の風が、漸く盛になりかけて來たが、木村君の如きは、さうした風潮の先驅をなした一人であらうと思ふ。

さう云ふ意味で、木村君の此の文集は、作家の感想隨筆集とは、全く別なもので、汎くよまれていゝものだらうと思ふ。

大正十五年四月

菊池寛

序

私は人並すぐれた一個の漫談ファンであり、駄辯癖である。何等「人生に寄與せぬ」事に、舌を轉辷させて、終日倦むことを知らぬ。と共に、恐らく誰れしもが所有するであらう程度の、些少な研究心は持たぬわけではない。

現時の文壇はゴシップ流行の文壇である。併し一方では明治文學の研究熱の盛んなことが、一つの著しい特徴として數へられる。

個人的に言へば前者の兩個の氣持、社會的に言へば後者の二樣の流行の、相交錯した中から、本書は混血兒（あひのこ）として生れ出でた。

もし此の中に、多少とも私の愛着を絶ち得ぬ篇があるとすれば、それは水平文獻以下數章より成る、明治・大正文學に、章類的、類題的考察を加へたものでなくてはならない。これは數年前、『英國文學に現はれたるユダヤ人』と云ふやうな標題の書物を見た時、面白いと思つて、自分の狹い讀書範圍の中から、多少の系統を立てゝみたのである。從來數種出た明治文學史が、大抵列序式記叙を踏襲してゐる中に於て、この書のやうな考察は若干の新彩を點じないとも限るまい。況んや萬一これが後來の篤學者に何等かの新刺戟を與へて、廣汎深邃なる貴重な章類的研究が生れ出づる端緒にでもなるとし

たら——この書の如きも全然無意味だと速断はして了へぬ。

たゞ執筆の際、参考書は大抵座右になく、過去の讀書の記憶にたよつたものが多いから、本書の中には幾多の誤謬と認識不足とがあるだらう。だが、併し古來からの如何なる書が、敢へてこれ無しと誇揚し得るか！　尤も私はこれを以て、著述にはどんな無責任も許されると曲論する積りは毫末もない。かゝる性質の書として、缺陷の指摘に寛大ならんことを讀者に要求するのである。示教を仰げば決して是正に吝なるものではない。

最後に、思想界乃至文壇の、三個の大きな先輩の序を、巻頭に飾り得たことは、私の光榮として感謝して措かぬ所である。

顧みれば少年の頃の私が、明治文學の研究も亦、外國文學のそれに劣らぬ意義と價値と興味とのあることを初めて知つたのは、内田先生の「きのふけふ」（後に「思出す人々」と改題）を讀んだが爲めであつた。後に先生の知遇を得、特にこの數年といふもの、私は先生の如く大きな讀書的指導を與へられた人を、他にもたぬのである。

吉野博士の專攻の學問に對しては、私は一片の「馬の耳」にも當らぬことを、自ら悲しむ外ないが、世の見て以て博士の副次的專門となすところの明治の文化研究の方面は、多少私の興味とつながる點がある。幸ひ最近、私は博士の門を叩いて示教を受くる事數次なので、無理に序を乞うて、快諾を得

取したのである。

菊池氏は、私にこの種の文を最初に公けにし得る機會を提供された恩人である。即ち去年の二月『文藝春秋』に寄稿を依頼され、雜學問答を送つた。それはまことに、つまらないもので、原稿は必らず書留として郵送する慣習ある私が、普通便として送つた(つまり紛失も意としない)程度の断想であつた。實際私は、それをポストに投げこんでヒヤリとした位であつた。然るに意外にも、それが或る方面の歡迎する所となつて、去年新聞雜誌から依頼された原稿の八分までがこの種のものであつた。この書の收むる所『ハムレットとアミエル』の一篇を除くの外悉くが、去年一ヶ年の執筆にかゝるものである。

三家に序を乞うたのは、特に以上の因緣による。

一九二六年三月

木村毅

目次

文壇モデル考……………………………………三

（一）モデルと云ふ和製英語――（二）『不如歸』『金色夜叉』『虞美人草』――（三）『書生氣質』のモデル高田前文相――（四）拳骨で水瓜を破つた雪嶺博士――（五）山田美妙の失鬪――（六）『破垣』と末松謙澄――（七）『水彩畫家』と『並木』――（八）『舊主人』と作者の態度――（九）蘆花氏の描いた初期同志社――（一〇）泉鏡花の使つたモデル――（一一）『島の聖』と河上肇博士――（一二）『無明』と島田翰――（一三）外人をモデルにした短篇――（一四）自分のこと

水平部落解放運動と文藝……………………………………五〇

水平民族文獻の研究……………………………………五九

（一）特殊部落文獻――（二）幕府への訴願書――（三）外人の觀察――（四）風葉の『寢白粉』――（五）『想夫憐』と『琵琶歌』――（六）藤村の『破戒』――（七）鏡花の『妖劍紀聞』――（八）浪六の『いたづら者』――（九）栗須氏の二著――（一〇）紀南事件――（一一）部落解放の先覺

明治の社會主義小說……………………………………九四

(一)飜譯と飜案——(二)日本で唯一のユトーピアー——(三)蘆花の『黒潮』——(四)木下尚江氏の諸作品——(五)土地放棄——(六)百姓一揆

南蠻文學解說……一三

(一)南蠻小說の分類——(二)南蠻傳記小說——(三)がらしあ主題の作品——(四)趣味的・好事的作品——(五)南蠻詩の一二

飜譯文學雜考……一三

(一)海外文學三如來——(二)日本飜譯史——(三)逐字譯の先驅と森田思軒——(四)二葉亭四迷——(五)森鷗外——(六)坪內逍遙と增田藤之助——(七)內田魯庵と高安月郊——(八)その他の諸家

女……一五

(一)藝類的文學史——(二)藝娼妓と町娘——(三)女學生の出現——(四)モダン・ガールと不良マダム——(五)四期の分類

ヒロイン列傳……一六一

(一)新文學勃興以前(毒婦と女政客)——(二)新文學勃興當時(異常な女性から平凡な女性

〔一〕――(三)硯友社時代(特に一葉女史に描かれた日本ムスメ)――(四)文學界の運動(聖母禮讃・處女崇拜)――(五)女學生の出現(『廓風戀風』の初野・『青春』の繁)――(六)青鞜時代(謂ゆる新しい女)――(七)最近の傾向(モダン・ガール)

小說に現はれたモダン・ガール……一七八

(一)モダン・ガール――(二)カツフエ女給――(三)不良マダム――(四)活動女優――(五)漱石以後――(六)關西式と關東式

明治・大正文學と經濟意識……一九五

(一)文學と經濟學の相關關係――(二)福澤諭吉と菊池寛――(三)夏目漱石の經濟意識――(四)三個の代表的作品――(五)結語

軍隊小說について……二一四

明治文壇雜事二三……三一〇

(一)Passion の譯字――(二)獨歩の懸賞小說――(三)トルストイと德富蘇峰――(四)臨川の杜翁論・橘香の批評――(五)大西操山の社會主義觀

成島柳北……三八
（一）平凡な一市人——（二）柳北の略歴——（三）常識的小不平家——（四）常識的風流人——（五）詩學への着眼
泉鏡花……二四一
モダン・ガールの創造者……二四四
（一）elleとは？——（二）擬似戀愛——（三）モダン・ガールの母胎——（四）瓢箪男
明治文學渾沌期補遺……二六六
（一）明治文化研究熱の原因——（二）新舊四個の視點——（三）飜譯小說と譯詩——（四）「小說」と云ふ言葉
雜學閒答……二七八
第一、出典——聖範——天來の『神曲物語』——ユリシスと百合若——葡國新作家——菊池純——知りたい事二つ
第二、蘇峰學人よりの來書——ヨーク——『氷川清話』——『田舍源氏』
第三、自家廣告——假裝行列——圖書供養——『秋水隨筆集』

第四、『二十五絃』の公孫樹――南原陷落の記事――『春香傳』の舞臺――『美味求眞』補遺

探偵小說家としてのアラルコン……三一七

ハムレットとアミエル……三三三

雜著亂讀抄……三五九

(一)あまんじやく――(二)明治元年の出版物――(三)明治初年の職業婦人――(四)古本道樂――(五)切支丹關係の珍籍――(六)『義經再興記』――(七)『沙漠の花』――(八)追悼號――(九)トルストイの手紙――(一〇)コムニスト黨――(一一)西洋小說の支那譯

文藝東西南北

―明治・大正文學諸斷面の新研究―

木村毅著

文壇モデル考

（一）モデルと云ふ和製英語

明治文藝に於て、繪畫上の用語が文藝上の用語としても併用されて抜き難い地歩を占めたものが少くとも二つある。

一つは寫生といふ言葉で、今一つはモデルといふ言葉である。寫生はその手法や精神を文藝にも轉用する事を正岡子規が頻りに唱道した結果、遂にその主宰するホトトギスの一派に、寫生文なる一新體を生じた。虚子、四方太、鼠骨などが之に巧みで、影響は漱石にまで及び、やがて自然主義といふ種子が卸されるまでの、文壇の開拓をなした。謂はゆる文章體、もしくは雅俗折衷體の小説の文から、言文一致のそれにまで推移し切つて了ふまでに、寫生文の致したる貢献は決して尠少でない。

今一つのモデルといふ言葉は、今のやうな意味で何人が使用し初めたのかを知らぬ。明治十

七年に出た坪内逍遙博士の『小說神髓』、廿年代に大部分が書かれて、卅年に初めて一冊の單行本に纏められた森鷗外博士の『つき草』、三十年代に出た樗牛の論文などに於ても、今の意味に於けるやうなモデルなる言葉は使用せられて居らぬが、明治四十二年に出版せられた田山花袋氏の『小說作法』を讀むと、頻々として出て來る。とすれば、恐らくモデルなる語は四十年代の初め自然主義の勃興など、關聯して使用せられ初めたものであらう。

これは勿論、オールド・ミスなどゝいふのも同じ一種の和製英語で、日本のやうな意味に於ては、決して外國ではこの語が使用せられて居らぬやうである。外國で小說のモデルと言へば、業作家の模範ともなるべき名作の意味のやうである。古代羅馬の名作『ダフニスとクロエ』が後世の田園文學、牧歌文藝のモデルをなしたといふやうな意味で用ゐられてゐるらしい。所が日本では、その小說に題材となつた人物の事をモデルといふのだから、英語の原義とは非常に意味の懸隔がある。

たとへばツルゲーネフは『父と子』のバザロフに革命家ヘルツェンの面影を描いたと言はれて居り、ドストイエフスキーは『惡靈』の中のカルマジーノフにツルゲーネフを侮蔑的に戲畫化した。それと反對にハムフリヲード夫人は『ロバアート・エルスミア』の中のグレイ教授に、

例の自我實現說で名高い倫理學者トーマス・グリインを映美的に直寫した。

日本の文藝史家もしくは批評家ならさういふのは「モデルにした」と書くべき所だが、今手許にある限りの文藝史をのぞいて見ても、さうは書いてない。

だから繰返して言ふ。小說の題材とした實在人物をモデルといふのは和製英語であるらしい。

(二)『不如歸』『金色夜叉』『鷹美人草』

さて明治から大正にかけ、誰でも讀んでゐる小說で、しかもそのモデルが誰にもわかつてゐるやうな作品が七八つはある。そんなのは詳しく述べるまでもないから、十把一からげに略叙しておかう。

第一に思ひ浮ぶのは德富蘆花氏の『不如歸』の浪子である。これが故元帥、公爵大山巖の令孃信子をモデルにしたものであることは、餘りに有名すぎる程、よく知れ渡つた事實である。信子の墓は青山墓地にあるが、今はどうだか知らないけれど私達が文學青年であつた明治の末から大正の初めの頃はその柵に「あゝ、浪さんなぜ死んだ」とか、「この薄命の佳人のために萬斛の淚をそゝいで惜しまず」とかいふやうな、俗謠やらセンチメンタルな文句の落書やらが一

ばいあつたものだ。私はまだ立寄つて見ないけれど、逗子の浪子不動でも恐らくは同じ事であらう。

ついで思ひ浮ぶのは尾崎紅葉の『金色夜叉』の貫一のモデルが巖谷小波氏で、あの貫一の高利を借りていぢめらるゝ何とかいふ法學士が川上眉山だといふ話しである。この事については巖谷氏自身が婦人雜誌などに再三書いて居らるゝから讀者の就いて見らるゝ事を希望する。

以上の二例で分る通り、ある小說においてはその女モデルのみが有名となり、又ある小說においては男モデルのみが有名となつてゐるが、男女のモデルが共によく世間に知られてゐるのに夏目漱石の『虞美人草』がある。あの中の銀時計を鼻にぶらさげる文學士小野が厨川白村でクレオパトラタイプの女藤尾が蝶子夫人だといふのである。但しこの眞僞は詳らかでない。

數年前大阪朝日新聞で滿鮮に夏季講演を催した時であつたが、白村博士は蝶子夫人同伴で渡鮮した事がある。その時訪問の記者が藤尾のモデル問題のことを蝶子夫人にたゞすと言下に否定して「私はあんなに恐ろしい女ではありませんよ。」と答へたといふことが、新聞に出てゐた事を記憶する。

人を呪はゞ穴二つのたとへにもれず、人をモデればまたすぐモデりかへされるので、その漱

石の愛嬢筆子氏のことは、何度久米正雄氏によつてモデられたか分からず、その最後にして最大なる作が例の『破船』である。

かと思ふと、今度はその久米氏は菊池寛氏の『神の如く弱し』において、モデられた。

その以前においてモデル問題を沸騰させたものには今の永代美知代夫人を描いた田山花袋氏の『蒲團』もあれば、馬場孤蝶、戸川秋骨兩氏を描いたと稱された島崎藤村氏の『並木』もある。その他相馬泰三氏の『荊棘の路』、生田春月氏の『相寄る魂』、細田源吉君の『罪に立つ』等等々ー

(三)『書生氣質』のモデル高田前文相

但しさうした最近の諸作まで一々、モデルの名前を列擧すると、文稿の餘りにも生々(なまなま)しくなる恐れがあるから、話を昔に還すであらう。

明治の小說中、モデルと稱するに値する人物を描いた最初の人は誰であらうか。試みに田山花袋氏の『小說作法』の中の『明治名作解題』を繙いてみると、最も古い所では春廼家おぼろ事、現在の坪內逍遙博士の『一讀三嘆、當世書生氣質』がある。

これと前後して出でた須藤南翠の『新裝の佳人』については、同じ花袋氏が同じ著書の中で、「當時流行の舞踏會の光景や、若手の政治家や妙齡の佳人などが描かれてあつた。かれはこれと皆想像する事が出來るやうに書いてあつた。」といひながら、モデルの文字は用ゐてゐないで、「書生氣質」の方にのみ「作中に書かれたいはゆる書生の多くはモデルがあつたので、一層內部の喝采の聲を高うした。今日、仔細にその人物を點檢し來たつたら、餘程面白い興味を感ずるに相違ない。」といつてゐる。花袋氏が無意識と不用意の間に試みたこの區別は、實は文藝上のモデルの字義を定める上に、非常に重要なる一つの手がゝりを提供してゐるものと言へる。想ふにモデルにしたといふ以上、少くともその人物の似顏繪位な實在性はどこかに持つたものでなくてはなるまい。南翠の作は作中人物が實在人物と想像のつくやうには書いてあつても、實は新聞や世間話位で聞き知つた粗笨な外輪を描き得たに止まる。それに反し、春廼家のは單なる事件や行爲の外輪のみでなく、性格的實在性を多少とも傳へた點がある。言を換ふれば春廼家のは直接その人物を觀察したもので無ければ描き得ない多少の特殊性があるのに反し、南翠のは新聞の三面記事や噂話で誰れにも想像がつく位な一般性しか捉へて居らぬ。この差異が花袋氏をして、モデルなる語を、或は用ゐしめ、或は用ゐしめなかつた主要原因ではあるまいか。か

う見て來ると、この使ひわけには輕からぬ意味と含蓄がある。

この小說の內容だが、『文藝講座』に載つた小島政二郎氏の言葉をかりると「六七人の書生の生活が、誰が主人公といふ譯もなしに、萬遍なく平面的に寫生されてゐる。その間にそのころの書生の生活氣分を髣髴させようといふのが作者の目的らしい。對象は女だ。小町田といふ書生は下谷數寄屋町の藝者田の次と戀愛を釀してゐる(下略)……。」といふ一節がある。

この小町田粲爾は篇中、讀者の興味の最も多く集まり得る書生だが、それは前の文部大臣、現在の貴族院議員、早稻田大學總長、法學博士高田早苗氏がモデルだといふ噂が當時から今に至る迄、四十年の久しきに亙つて文壇に傳はつてゐる、明治四十年頃は、今とは違つて、初期明治文學の研究熱も一向湧いてはゐなかつたのだが、それだのに、私の鄉里なる美作の山間の小村でも、文藝好きの青年がそんな噂をなし、現にそのころ十三四の少年だつた私が小耳に挾んで覺えてゐる位だから、餘つ程有名な話しであつたには違ひない。

されば玆に該作から、小町田を描いた一節を摘錄するは、帝國大學々生時代の高田博士の風貌を偲び得る材料として、多少の興味があらう。

「年のころは二十一二。痩がたにして中背、色は白けれども、麗やかならねば先づ、青白い

といふ貌色なるべし。鼻高く、眼涼しく、口元もまた尋常にて、頗る上品なる容貌なれども頬の少しこけたる蘢梅、髪に癖ある様子なんどは、神經質の人物らしく、俗に謂はゆる苦勞性ぞと、傍で見るさへ笑止らし……」

元來モデられるといふ事は、よく書かれゝば操つたく、又惡く書かれゝば不愉快で、いづれにせよ餘り氣持のいゝものではなさゝうだ。だから現代作家に於ても『荊棘の路』の爲めに相馬泰三氏と谷崎精二氏の仲が拙くなつたとか、『相寄る魂』の爲めに生田春月氏が大變孤獨な地位に陷る事になつたとか、最近は新居格氏が『文藝日本』に寄せた名篇『明暗』の爲めに、美しき大井なにがし夫人が柳眉を逆立てたとか、色んな噂をきくが、併し溫厚な高田博士は、モデられても決して厳な顏をせず、友人の新著の爲めに叮嚀な批評を發表せられた。その中には書生氣質を目してユーモアはあるが、ペエソスがないとか、サッカレイ式の Novel without the hero の小說だとか、今日の最も進んだ文藝批評と伍しても、些少の遜色もない立派な評價を下された。

當時の高田博士は、いづれかといふとその才氣において坪内博士を凌ぐものがある、もし博士が政治や教育方面に入らずに、文藝に携さはられたら、きつとその方面でも大いなる貢獻をせられたに違ひない。

後に明治廿年代になつて、高田博士の書かれた論文には、既にドストイエフスキーやモウパッサンの名が出てをり、大正になつて出版された片上伸氏譯の『ドン・キホーテ』には長篇の序を寄せられた。歴代の文部大臣なり、貴族院議員なりにおいて、これだけの事が出來る人は、故外山博士を除けば小町田粲爾のモデルなりといはるゝ高田博士以外にはない。

(四) 拳骨で水瓜を破つた雪嶺博士

併し作者なる坪内逍遙博士自身は、小町田のモデルが高田博士であるとの世上の噂を、全然否定もされないと同時に、必ずしも肯定もせられない。即ち曰く

「小町田粲爾を高田君だと世間で言つてゐるらしいが、「田」がどちらにも付いてゐるので、そんな事に見られるのだらう。」(神代種亮氏稿『書生氣質解題』による)

だが、かう言つて曖昧にして了ふには、このモデル話は餘りに有名であり、且つ餘りに歴史が付き過ぎて、煙と消えさせるのが惜しい。

ついで坪内博士は、前引田山花袋氏の言に依つても分る通り、長い間世上の好奇心を繋いで來た『書生氣質』のモデルの一部を洩らされた。

「モデルは或程度まで有る。三人を集めて一人にしたり、二人を一人にしたりしたのも有る。任那は山田一郎で、此れは立派にモデルである。山田は廣島の人で、山陽氣取りで、非常に健筆家であつた。須河のモデルになつた人は亡くなつた。桐山を三宅君だといふ話を聞いたが、あんな頭の男が三人居つた。それを一つにしたのが桐山である。あの老成人は岡山兼吉と關直彦君を一つに集めて拵へたので、岡山は生きて居れば關君位には成つて居る男であつた。それからよく食ひよくしやべる男は、あれは或男と私とを一つにしたやうなもので云々。」(同上)

『書生氣質』に西瓜を拳骨でぶち破つて食ふ男が出て來る。あれが三宅雪嶺博士であるとは、これ又私達が早くから耳にしてゐた所であつたが、今試みにその項(第九回)を開いてみると、成程、水瓜割りの快漢は桐山であるから、前記坪内博士の談が、この世上の噂を有力に裏書きした形になつたのは愉快である。

『書生氣質』以外に坪内博士の作で、モデルで世の物議を呼んだものは『細君』である。(博士に『外務大臣』なる新聞小説があつて、黒田清隆をモデルに使つてあると聞いたけれど私は讀んでゐない)。これが明治最初の短篇小説の一つとして注目すべきものであるのは等しく世の知る所、そしてモデルの噂も色々ある。末松謙澄を書いたのだといふ事も聞いたし、有賀長雄博

士を書いたのだといふ話は、文壇の先輩から屢々耳にもするし、實際さう書いたゴシップ記事を、或る雜誌で讀んだ事すらもある。

多分有賀博士が袁世凱の顧問か何かになつて、盛んに新聞種子を供しつゝあつた前後に書かれてゐた記事であつたと記憶する。

但しこの說は、小町田嵩爾が高田博士をモデつたものだと言ふより、もつと疑はしい話である。確か洋行歸りの亂倫な大官の家に仕へてゐる小間使が、最後に井戶に飛びこんで自殺する話だつたと記憶してゐるが、作者は當の大官に最も好意を惜しんでゐる。有賀博士を友人とせられた坪內博士に果してこの事があり得たらうか。

明治末期と記憶する。學士會に只の一度も出席した事のない坪內博士が珍しく出席されたと思つたら、それは法學博士の有賀氏が新たに文學博士にも推薦されたのでその投票の爲め、わざ〳〵出向かれたのであつたといふ新聞記事を讀んだ。それは坪內博士が如何に友情に厚いかを證據立てやう爲めの記事だつた。その坪內博士が、いかに靑年時代だとは言へ、友人を描くに『細君』のやうな筆法でせられやうとはどうしても私の思ひ得ない所である。有賀博士が私行に於て兎角の世評のあつた人だから、恐らくはそれでこんな噂も生れたのであつたらう。

（五）山田美妙の失脚

モデルにするのだと天下に揚言して不徳を行ひながら、實際はその小説を書かなかつたものに山田美妙がをり、實際モデルにしたのではないのに、モデつたのだといつて發賣禁止の厄にあつたものに内田魯庵氏の『破垣』がある。

日清戰爭の初まつた年なる明治廿七年の秋、時の萬朝報は山田美妙が淺草魔窟に入り浸つてゐる事を嗅ぎつけて、これに筆誅を加へた。その時の美妙の辯駁文が左の通りである。

「妖艶の巢窟なる淺草公園地にても殊に腕前の凄しといはれし石井をとめその人の人爲りは初めより知りてこれを種にせんと思へばこそ近づきたれ、顧れば玆に三五年、その間の研究にて人事千百その怖るべくその悲むべくその笑ふべき所もいさゝかは覺えつ、ひそかに枯骨に肉する感、世暮れて夢寒く今や殘月雲を離れ覺悟の禪味漸く深し。イザヤ久しぶりの筆を染んかと心ひそかに期せし際、はからざりき、御社新聞の記事によつて早くこれを世に紹介され、端しなくも御社新聞が美妙の前觸れ太鼓とならんとは。夫故にこそこの場合御社の記事の誣妄なるをのみ責めず、また腹ぎたなく怒りもせず、已に昨日を以てその小説の稿を起こ

し、破廉まづ御社の記事をそのまゝに轉載せり。小説中の人物もまた更に詐らず隱さず凡て現存の人をその儘に描き出だして事の眞僞を一擧に示すべく、近くは淺草最寄の酒樓茶店などに奉侍する婢女下僕の類に至るまでも筆に任せて列擧せん。兎に角に事情右の如し。枸子定規の條例に由れば貴社の記事のかなり誤れる點は改たまつて取消しを望むのみ。」

卽ち見るべし。モデルといふ文字こそ使用してないけれど、今日のモデルに取るといふのと同じ意氣込みが美妙にある事を。

併し世間は美妙のこの辯明では承知しなかつた。中んづく坪內逍遙博士は「小説家は實驗を名として非義を行ふ權利ありや」と題する五十枚にも渉らうかと思はれる論文を稿して、一大鐵槌を美妙齋に下された。

一時はシエークスピアの再來とまで文壇にたゝへられた美妙も、これが主因となり他に美人の聞こえ高かつた閨秀小説家稻舟女史との事件もあつて、遂に全く人氣が落ちて了つたのである。

併し世にはそんな事で美妙が失脚して了つたのに同情するものもないではなかつた。後に青柳有美氏が、美妙は稀な天才だつたのに、わづかあの位な事件で坪內博士に叩き潰されて了つ

たのは惜しいと書いてゐたのを見た記憶がある。

また大町桂月氏は、美妙が後年の作『可憐狂』を、懺悔の氣持ちが現れてゐるといふのゆゑを以て、「世界の文壇に上すも決して恥しからぬ、明治年間第一の傑作なり。」と稱して、高山樗牛から散々背を絞ぼられた。

（六）『破垣』と末松謙澄

内田魯庵氏の『破垣』は明治三十四年正月號の『文藝倶樂部』にのつて正月四日に風俗壞亂のかどで發賣禁止の命が下つた。今から見るとどうしてこんな作を禁止にしたのだらうと思はれるし、當時においても同誌の主筆なる三宅青軒も、作者自身も、そのゆゑを解するに苦み、暗く茫然としてゐたといふ事である。

作の内容は、某といふ新男爵が、表には風俗矯風倶樂部といふものを設けて世間を欺きながら、裏ではその家庭に出入する婦人家庭教師や、小間使に一々手をつけてゐるのに對し、ある少女と小學教師とが反抗する事を描いたものである。

魯庵氏の作はすべて感能的、情趣的のやはらか味に乏しいのを弊とする位で、むしろサーカ

スチックだから、諷刺的意味こそあれ、風俗壞亂の惧れは絶對にあるものではない。

果然、この作が禁止せられた理由は外に存するのであつた。それは時の內務大臣をモデルにして、その家庭の內祕をあばいたから怪しからぬといふわけで、下僚が大臣の意を迎へる爲めにした事であつた。

時の內務大臣とは末松謙澄である。そして末松謙澄は伊藤博文の愛婿であるが、すれば『破垣』の主人公が風俗矯風倶樂部を起こすについて擔ぎ上げた伯爵といふのは伊藤博文になるわけだ。

事實それをモデルにしたのだつたら、時の總理大臣と內務大臣とを筆先で手玉に取つて投げ出した『破垣』なる作は確に怪しからんであらう。風俗壞亂といふ名目はあたらないが、自分に都合のよくないものを發賣禁止にする位は爲政者根性としてはあたり前である。

だが作者なる魯庵氏には、內務大臣などをモデルにしようとの意識は全然なかつた。

「この作は或る外國のつまらぬ小說からヒントを得て、偶々聞きこんだ某氏の家庭の紊亂に結び付けて書いたので、私が知りもしない當時の內相の家庭の祕密話などゝ臆測されるのは飛んでもない見當違ひである。が、さういふ誤解から筆禍を買つたので想像すると、私が『破

垣』に書いたやうな家庭の紊亂は當時の上流階級を一貫してドコの家庭にも有つたものと見える。一々自分の神經から勝手に當推量して、やたらとモデル問題を擔ぎ出されるのは作者としては迷惑千萬である。」

と、自分でも書いて居られるし、私自身も直接氏の口からさう聞いた事がある。

今でこそ氏も一場の笑話として過去を回想してをられるが、その當時の憤慨は非常なものであつた。

『「破垣」發賣禁止につき當路者及び江湖に告ぐ』なる大論文を草してをられる。この說には今日も傾聽すべき事が少くない。たゞ氏の語氣が餘りに猛烈だつた爲め、確か『太陽』では掲載を躊躇したので、二六新聞に發表せられたのだと聞いてゐる。氏の著『社會百面相』の附錄としてをさめられてゐるから、篤志の人はついて見らるゝがよい。

後に『文章世界』で風葉、天外その他二三作家と共に、魯庵氏にも意見を叩き、『發賣禁止に對する感想』といふやうなものを發表した事があつた。

その時に氏は、「見ずてん藝者に灸をすゑるつもりで、文藝的作品を發賣禁止されたのでは堪つたものではない。」といふ意味の事を語つてをられたのを、少年時代に讀んだ記憶がある。

氏の論文の二三節をぬいて、その時の憤慨の狀を想見するのも興味があらう。

「およそ他の製作を目して風俗壞亂なりといふは取りも直さず汝は破廉恥漢なりといふに同じ。士人の面目を傷つくる最大侮辱にあらずや。苟くも精神界に住して文明を補足しつゝある文士にこの最大侮辱を與へて毫末の說明を與へず、單にしかく認定すと稱して顧みざるは國家の文藝學術に對する禮を失ふものゝ甚だしきにあらずや。」

「所詮、『破垣』は風俗壞亂を以て稱せらるゝ廉ありと信ずる能はず。少くとも道義心の最も發達せる嚴格なる英國社會にてはこの物語の禁止せらるゝ憂決してなかるべきを確信す。われは『破垣』が禁止せらるゝより、風俗壞亂の語が頗るうるはしき意味を加へたるを斷言して憚からざるなり。」

魯庵氏は、モデりもしないのに、モデつたのだとの非難を受くる作を外にも書いてゐらるゝ。それは『破垣』より前に出た『落紅』である。

この作は『文藝小品』(明治三十二年出版)の中にをさまつてゐるが、序においてかくことわつてある。

「『落紅』はその某文士を描きたりといひ、或ひは他の某文士の夫人と女主人の名と職業と

を同じうすといひ頗る物議を生じたるものなり。予が疏慢の質計らずもこの罪を獲たるは深く自らはづるといへども、抑々同一社會に住する同一人情を描くものが時としてたま〳〵多少の類似點を生ずる事あるはやむを得ざるべし。……（中略）……流安の讐説の如きは敢て呶呶するを好まずと雖も、誤つて粉本視せらるゝ某々氏のためいさゝかその虚謬を辯じおく。」だが八文字屋金平の匿名に隠れて書いた、『文學者となる法』といふ著作において、主として硯友社文人を痛烈に諷刺して、激怒を買つた氏のことであるから、或ひは存外、某をモデルにしてゐられるのではないかといふやうな、人の悪い感想も湧かないではない。

『文學者になる法』は勿論小説ではないが、田山花袋氏が「當時の文人を罵倒しつくして、殆んど骨を抉ぐるの趣がある」と評してゐる丈けあり、確にモデルが使つてあつて、讀んで非常に痛快なるものである。正に明治文藝の珍本の一つである。後に生方敏郎氏がこれを模して、同じやうな文を書いた事があつた。

（七）『水彩畫家』と『並木』

島崎藤村氏の小説には、そのモデルの文壇にはつきり分かつてゐるのがかなり澤山ある。

『破戒』は作の結構からいふとドストイエフスキーの『罪と罰』の換骨脫胎だが、あの穢多の主人公は實在の人物で、實際あんな話しがあつたのださうである。毎年よく十二月の末になると、藤森成吉氏が鮫の會なるものを催して知友を招待し、氏の鄕里なる諏訪の湖水で捕れた鮫料理を御馳走されたものである。あの鮫は諏訪で新聞の經營などしてゐるO氏から送つて來たのださうで、私は信州に旅行した時、一度その人に會つた事がある。O氏は何でも『破戒』の主人公と師範學校時代に同窓であつたさうだ。私はその主人公の名まで聞いたのだが忘れてしまつた。

『春』のモデルについては馬場孤蝶氏が詳しく語つてをられる。あれはもと四十一二年ごろの『文章世界』の巻頭に出たもので、私達はあれを手引に胸を躍らして『春』を讀んだものである。今は『孤蝶隨筆』の中にをさめられてゐる。『家』『新生』――それらについては語るまでもなからう。

前の作では『水彩畫家』が問題になつた。これは明治三十七年の新小說の巻頭に出たのだが、その時は大して問題にならず、越えて四十年藤村氏が最初の短篇集『緑葉集』の中に收められるとともに、畫家丸山晩霞氏が、自分をモデルに使つてある爲め非常に迷惑を蒙つたといつて

長篇の抗議を『中央公論』に寄せた。明治四十年十月特別號に載つてゐる『島崎藤村著「水彩畫家」の主人公について』がそれである。

今それに依つて見ると、晩霞氏は西歐より歸朝した三十六年頃、三宅克己氏の紹介で當時信州の小諸義塾に教師をしてゐた藤村氏と知り合ひになり、又その關係で繪を敎へに一週間に一度づゝ塾へ行く事にしてゐた。

或る日藤村氏は晩霞氏を一室に呼んで、一堆の原稿を見せ、一讀を乞うた。題はまだ付けてなかつたが、讀んでみると自分の事が一部分モデルとして使用せられてゐるので、不愉快な顏色をした。

すると藤村氏は「君の許可次第でこの力作が世に浮びもし、世から葬られもする」といふやうな沈痛な眼色をしたので、晩霞氏も止むなく承諾した。所が翌年雜誌に發表せられたのを見ると『水彩畫家』となつて居り、てつきり自分の事と思ひ謬まれる危險があるので、さすがの晩霞氏も慚乎とした。

併しその時は信州の田舍にゐて、影響の及ぶ所がさう廣くなかつたから、餘り氣にも掛けなかつたが、『緑葉集』の出た時は東京に出てゐたので、いろんな不愉快な噂が耳に傳はつて來る。

「あのヒロインが君の今の細君かね。」とたづねる友人もあり、小説ではヒロインに前に戀人がある事になつてゐるから晩霞氏夫人の里方から抗議が來たりした。

そこで藤村氏は、

「あの傳吉は僕で、お初は僕の妻で、實際あの通りであつた。しかも僕の家内と昔契りし男(直衛)といふ男にやつた手紙は一句も添へず、一句も削らずだつたよ。」と、辯解した。

だがそんな事で晩霞氏の憤懣は收まらず、逐條、あの小說と自分の實歷との差違を詳叙した。

今日からそれを見ると晩霞氏の言分にも多少尤もな點がないではない。が、あの言葉の調子が餘りにも卑俗すぎた。『水彩畫家』の傳吉は三等車に乘つて歸鄉したが、自分はそんなケチくさい眞似はしなかつた、二等車に乘つた、あるなら一等車にでも乘りたかつたのだとか、自分の生家はあの小說の如く矮小な陋屋ではないとか、自分が女の友をもつたからとて母からたしなめられる所か、母は跪さへあるなら妾を置へてもいゝといつてゐる位だとか——あの、中心を逸した餘計な辯解が、却つて藤村氏に同情させるやうになつて了つた。

當時岡木田獨歩はかゝる意見を發表した。

『水彩畫家』は丸山某の傳記ではない、又丸山某其人がそつくり『水彩畫家』の一篇中に

呼吸してゐる譯ではない。傳吉は藤村君の作つた人物である。傳吉に伴ふ事件は藤村君が傳吉を作る爲めに、傳吉を現はす爲めに作つた事實である。所で丸山某の行爲の節々が用ゐてあるとするならば、それは傳吉なる人物を描き出す爲めに用ゐた繪具の一種だ。繪具は繪その物ではない。」」（新潮社版『病牀錄』一六三頁）

晩霞氏に同情しなかつたものは文學者ばかりではない。江見水蔭氏の弟子に萬代花舟といふ小說家があり、その頃に萬代恒志といふ畫家があつた。少女雜誌の挿繪畫家として竹久夢二氏の次ぎの時代に鳴らしたものだが、若くして死んだ。私とは同鄕の友であつた。彼れが「晩霞に對して憤慨したね。」といつて、その『中央公論』を私に貸してくれた事があるのを記憶する。

これより前、同じ藤村氏の作なる『並木』が馬場孤蝶、戸川秋骨兩氏を描いたものだとの噂を文壇によんでゐた所へ、晩霞氏の此の一文が出たのだから、火の起らんとする所へ薪を添へた形になつて、恰も自然主義の勃興と相伴ひ、モデル問題は文壇の中心的興味を占めることになつた。時の『中央公論』が「『並木』の副主人公原某」作の『金魚』なる小說を掲げたり、戸川秋骨氏に乞うて「モデル問題」を論じさせたりしてゐるのを見ても、當時の文壇の情勢が今日から想見せらるゝ。私は、事によると原義をはなれて特殊な和製英語となつた「モデル」な

る語を、最初に使用したのは此の時の丸山晩霞氏の文が最初ではあるまいかと思ふのである。晩霞氏は畫家であるから、文藝上に別義のあるを知らず、之を混用し、誤用せられたのは極めてありさうな事ではないか。

(八)『舊主人』と作者の態度

『水彩畫家』以前に物議をかもしたのは『舊主人』である。この作は發賣禁止になつたのであるが、その理由とする所は、「後進の身を以て先輩の事を書き立てたから生意氣だ。」といふにあつたさうである。

年のひどく違つた男に嫁したことゝ、東京に生れながら信州の田舎へ住まねばならないこと、この兩樣の淋しさ、物足りなさを感じてゐる美しい人妻が、夫からは望むもの凡てを與へられながら滿足出來ず、遂に同じく東京から來た醫者と通ずるに至る經路を、女中の口から語らせた一人稱小說である。

だが作を讀んだ丈けでは何故禁止されたのか一寸分らない。どこにも禁止されさうな點は見當らぬ。だからこれには勿論裏面の事情があつたに違ひない。私は不思議な因緣で、この作に

描かれた主人公については多少傳聞した事がある。その主人公といふのは友人S君の嚴父なるKといふ人で、八十幾歳の高齢なから只今も丈夫で存命の老人である。

K氏は舊幕臣で、青春の頃は小栗上野介や山岡鐵舟の後進として、かれ等に引き立てられてゐた。幕末騒亂の際京都に守護職がおかれるとその一員として上洛し、市内の巡警にもあたつた事があるらしい。だから新撰組の近藤勇などは、部署からいへば彼れの配下になつた譯である。

明治の新政が布かれると共に、彼れはキリスト教界に入つた。幕臣は節を屈しなければ政治界に驥足を伸ばすことは出來ない。そこで少し氣骨のある者は他の文化的方面に伸び出て、薩長初め政治界に入つた者に對抗しようとしたので、ひとりK氏に限らず、基督信者になつた人は幕臣の仲間には多い。中でもK氏は最も顯著な功績を擧げた人で、明治女學院や青年會館創設の功勞者である。前者は巖本善治氏の名によつてより多く有名で、文學界一派の人達にはこの學校に教鞭をとつた人が多い。

K氏はやがて去つて信州に入り小諸に學塾を建てた。島崎藤村氏は教師としてこの塾に聘され、數年を送る内に『藤村詩集』にある大部分の詩、及び小説『破戒』を脱稿した。その意味

からいつても、小諸義塾は明治文藝史と密接な關係がある。

義塾の教師としての藤村氏は、K氏から大いに嘱目され、暗にその後繼者を以て擬せられてゐた程であつたのに、たま〳〵それをモデルに取つて『舊主人』の如き作を書いたので、K氏と藤村氏との關係を熟知してゐた山路愛山氏が憤慨し、内務省の檢閲課に談じこんだ結果が、遂にこの作の發賣禁止になるに至つた經路であるといふ。

併しこの時も文壇の同情は藤村氏に寄せられた。然らば藤村氏がモデルに對する態度は全的に肯定してよいかといふに、私は決してさうは思はない。元來、同一人が再三モデル問題に物議を起すといふこと丈けでも、既に當の作者にはある反省がなくてはならない筈だ。藤村氏自身もまた「私は何といふ不幸な男であらう。『舊主人』は禁止となり、『並木』では親しい友人を怒らせ……」云々と書いてをられたのを記憶するが、そこまで氣づいたのならば、それ丈けでは濟ましておかれまいと思ふ。

藤村氏以後において、よくモデルに物議を起した人は、中村星湖氏である。氏の作においても、肺病の友人が怒つて早死したとか、叔母たる人が離緣になつたとかいふやうなゴシップが立ち、堀切茂雄君をモデルにしたとの評のあつた諸作もかなりにその態度を非難された。

モデルに對する藤村氏の態度と星湖氏のそれとの間には一味共通の或るものがある。小說のモデルにしたからとて差支へないので、一々作家が恐縮するには當らないのだが、併し久米正雄氏の『良友惡友』が毒素を含蓄したやうな問題にならないのに反し、藤村氏のと星湖氏のがモデルの實生活に深刻な惡影響を與へるのは、そこに何等かの態度上の缺陷があるのではないか。

この問題に關し、私の結論しようと思ふ事は、疾くに戸川秋骨氏が明快に言つて居られる。

「それが他人の迷惑になるか、ならぬかは、少し考へれば容易に解る事である。それが解らぬ位なら、小說は書かぬ筈である。それで若し迷惑になると知つたら、これは如何に面白いものでも割愛しなければなるまい。少くとも時期と事情の變るまで發表せずにおくのが普通の道であらう。敢へて德義などゝは言はぬ。今の場合余は、島崎君が不必要な事件を作中に混入したことを遺憾とするのである。」(明治四十年十二月『中央公論』)

(九) 蘆花氏の描いた初期同志社

德富健次郎氏の『富士』は、小說といふよりも一種の人間記錄として、又より多くその當時

の時代記錄として一讀するに足りる。そこに描かれた著者夫妻の生活から、多くわれ等の敎化され、刺戟され、示唆される所はないけれど、その青年時代の閲歷が、キリスト敎思想の根源なる初期同志社と、新思想の淵叢なる民友社とに跨つてゐるので、明治の文化史の研究者には貴重な材料である。

そして『富士』を眞に理解しようと思へば、その前に『黑い眼と茶色の眼』を讀んでおく必要があらう。これは非常に純朴で、簡勁な筆つきの面白い小說で、私は蘆花の全著作中、『自然と人生』や『巡禮紀行』と並べてこの作がすきである。

『富士』は材料が殆んど生まのまゝ投げ出されてゐて、別に大した藝術的醇化を受けてゐるわけでもないから、その中からモデルの名を拾ひ出すが如きは無用の手數であらう。それ故に玆では單に『黑い眼と茶色の眼』のみについて、私にもそれと想像のつくモデルを拾つて見よう。元來この作は、新島襄先生の夫人の姪と蘆花氏自身との戀愛物語り——といふよりも、むしろ告白である。それがかなり露骨で大膽な爲め蘆花氏夫人はこの書を讀んでかなり動顚したとの事がたしか『新春』に書いてあつた。

書中の主人公敬二はもちろん蘆花氏自身で、「敬二の眼に映る兄は、十代の昔から常に儼然と

して立つ丈夫であつた」と書き、「『未來の日本』とその新たに開かれた著者の評判とは東京の新聞を經てぽつ〳〵協志社にも響いた。」と書いてある。その兄といふのは德富蘇峰氏のことである。協志社が同志社であり、『未來の日本』が『將來の日本』なるは斷るまでもない。

「帝國大學の前身開成學校から來て、別格バイブルクラスの二三を下らぬ秀才として校長飯島（新島）先生から下へもおかぬ待遇を受けてゐた又雄さん」とは、日糖事件以來全然影をひそめてしまつた橫井時雄氏の事であらう。時雄氏は橫井小楠の息である。德富兄弟の嚴父淇水翁は、その小楠の弟子でもあつたし、姻戚關係にもなつてゐたやうだから、篇中、ところどころに小楠の面影が描かれてゐる。沼南先生として出てくるのが小楠だ。

又雄（橫井時雄氏）さんの夫人お稻さんの實父として山下勝馬といふ人が出てくる。これは明治初年の京都の名士山本覺馬の事で、新島襄氏の片腕となつて同志社創立をたすけた事は大抵の明治文藝史にも書いてある。

「今年六十歲……會津の藩士、佐久間象山の砲術の門人、大砲頭取となつて元治元年七月長州兵が禁闕にせまつたのを、蛤御門に打ち破つた當年の勇士。」と書いてある。

柴東海散士が『佳人の奇遇』の第二卷、會津落城を追想するの項に「明日よりはいづくの人

かながむらん、馴れし御城にのこる月影」の歌を題し、薙刀をふるつて活躍した烈婦の事を書いてゐるが、それは山本覺馬の妹で後に新島先生の夫人となつた人だ。この小説にはお多恵さんの名で出てくる。

青年蘆花氏の戀人は、この山本覺馬が後妻に迎へた鴨東の歌妓の胎に生まれた娘で、横井時雄氏の夫人には妹、新島襄氏夫人には姪に當る女であつた。小説の中では壽代さんとして出てくる。京娘とは言ひ條、大膽で、お俠で、今のカッフエあたりに巣喰ふモダン・ガールをさへ後へに瞠著たらしめるやうな娘さんだ。

初期同志社は、先生の手が足りないので、上級生中の秀才が、下級生を教へたことがあると見える。蘆花氏は二年まで修學してから、一度退學して田舍へ歸り、また上洛して今度は三年の編入試驗を受けたのだ。その時試驗官に安部磯雄氏らしい人と浮田和民博士らしい人との見えるのは頗る讀者の興を惹く。

「最初は地文學の試驗であつた。西洋人が英語でするのかと思うたら、協志社出の教授の一方腫ぼつたく、一方に小さい片ちんばの目をした矢部さんが、邦語で二三の試問をして、ある個所の譯讀をさした。矢部さんは、敬二が前二年の協志社生活中一年おくれて入學した人

で、敬二からウヰルソンの第一讀本をそはつた事もあるさうで試驗をする時冷汗が流れたと人に話したさうな。」

この矢部さんが安部磯雄氏であらう。安部氏はこの試驗に十點を與へてゐる。

「米國史は、面識ある沈田先生がさつさと十點を呉れて出て行つた。」

この沈田先生は多分浮田和民博士であらうと思ふ。更にまた敬二（蘆花氏）が滝瀧の宿舍においてユーゴーの『レ・ミゼラブル』を讀むの項に、「一枝のペン先に千軍萬馬を躍らすヲオトルルウの大戰の雄麗な描寫は、かつて壽代さんから借りたアップルトンの第五讀本で、沈田先生の講義をきいた」とある。リーダーの先生浮田和民博士は面白い。

それから森有禮の事の書いてあるのも興味をひく。四十二歳で伊藤内閣に文部大臣となつた覇氣滿々たる彼れは、上洛して同志社を參觀した。何處かで歡迎の酒に眞赤に醉うて、インテレクチュアル・フアカルチイがどうの、モラル・フアカルチイがかうのと、管をまくやうな演說をした。それから生徒の體操を所望して見學した。

「通路の砂利を靴の尖で蹴り蹴り、あさみ笑うて見てゐた眞赤な大賓は謙讓で而もゆたかに地歩をしめた蒼い沈痛な顏の主人（新島先生）を目して、嘲笑的な質問をしてゐた。敬二（蘆

花氏）はその無禮な態度に對して大なる侮辱を感じた。頭のいら〳〵はおさへきれなくなつて來た。生徒はみな門外に整列して、文部大臣をおくつた。ヒヨロ〳〵した大臣が五六歩敬二の前を通り過ぎると、敬二は氣ちがひの如く大聲を擧げてヒヤ〳〵とさけんだ。生徒は目を圓くして敬二を見た。」

とある。明治の文化史を、古書によつてあさるのもいゝが、かういふ小説の中にも、なか〳〵貴重な材料がころがつてゐる事を、附け加へて言つておく。

（一〇）泉鏡花の使つたモデル

今度は一つ方面をかへて、泉鏡花氏がどんなモデルを使つてゐるかを知りたいと思ひ、多少その方面の事情に通じてゐる先輩ＹＰ君をたづねて、意見をたゝいてみた。以下しるす所は彼れの話である。

「まづ初期傑作の一つにかぞへられた『湯島詣』の紅茶の會に出てくる大學生は、笹川臨風や登張竹風やをゑがいたものだといふことだ。」

「それから『通夜物語』の畫家――あれは鏡花の從兄弟が下村觀山だからそんな所から思ひ

ついたものであらう。それから『風流線』の中の、加賀白山にかくれゆく秀才、あれが藤村操をモデルにしたのである事は、當時有名な話しだつたから君も知つてゐるだらう。」

——だが案ずるに、『通夜物語』における下村觀山氏、『風流線』における藤村操の如きは、それこそほんの暗示とした程度にとゞまるもので、恐らくモデル考の材料ではない。もしそれをモデルにしたのだといひ得るならば、『風流線』の口繪にあつた赤い腰巻を出して深山の奥深く愛人をたづねて行く何とかいふ娘は、操のひそかなる戀人であつたと聞く菊池大麓博士令嬢にあたるわけだが、モデル考においてはそこまで延長して考へる事はつゝしまねばならないと思ふ。

「新小説の泉鏡花號に長谷川しぐれが、『私がモデルを知らない前にお書きになつたものゝ方がグツと好きなのです』と書いてゐるんだがね、鏡花の藝者モデルに對して、何か心當りはないか。」と、私はきいてみた。

「僕は鏡花の最近のものを一々詳しく讀んでゐないから、どの作に何といふ女になつて出てゐるとかぞへ立て出來ないけれど、彼れが藝者のモデルにするのは、大抵日本橋のSといふ女なんだよ。『白鷺』もその女を書いたのだともいふし、また、いやあれは新橋の藝者だともいふ。

『日本橋』には屹度そのSが出てゐるだらう。靜岡の双街から出て來た女で、今年四十二三にもならうか、無口な、おとなしい女さ。この廿五日まで帝劇の女優劇の地をひくのに出てゐた。都新聞にその寫眞がのつてゐたんだが、君は氣がつかなかつたか。」

遺憾ながら私はその都新聞を取つてゐないのである。それが爲め遂に天才鏡花の描く女性に躍活の氣を不斷に帶ばしめてゐる美しき人の寫眞を見はぐつたのは殘念至極であつた。

無口な、おとなしい人と聞くからは、あの『日本橋』に、お酌時代はお嬢さんと諢名され、一本になつてからはまた奥さんと諢名さるゝ藝者が出て來たと思ふが、彼女の中にその面影の一部でも宿つてをらうか。(註一)

YP君はまたつゞける。

「鏡花のモデルで興味があるのは藝者小說より『歌行燈』だ。あれに出てくる捻平老人逸見秀之進、近ごろ孫に代を讓つて雪叟と號して隱居した、小鼓取つて本朝無双の名人といふのは、幸流の小鼓の名人三須錦吾をモデルにしたのだ。またその相棒の彌次といふ能役者當流第一の老手恩地源三郎とあるのは松本金太郎がモデルになつてゐる。

「それから三重といふ藝者に舞をしこんだ博多節の兄い——あれは能役者の松本長と瀨尾要

とを一緒に合せてモデルにしたんだ。瀬尾要は本當の天才肌の男で寶生九郎から三度も勘當されながら、その才を惜しまるゝの餘りにまた歸參がかなうたのだ。それに比して松本長は堅實に藝を練り上げた偉才といへるだらう。あの博多節の兄いにはこの二人の面影がある。

「松本金太郎は鏡花の叔父さんでその子の松本長はやつぱり鏡花の從兄弟だ。つまり藝道の名人を出す血すぢなんだな。

「鏡花はつい先年まで袴がなくてね。何か事があれば松本金太郎の所へ書生を使にして借りにやつたものだから、金太郎は、鏡花さんもまだ袴が一具出來ないのかなといつてたもんさ。」

『新小說』の鏡花號を見ると辻潤氏も此『歌行燈』を愛讀して措かれぬやうであり、又東洋經濟の竹森一則氏までそのお仲間とは、年來、これに心醉してゐた私も大いに心丈夫なわけである。鏡花氏の才をかなり高く評價してゐた文界の巨人に夏目漱石がゐる。漱石の『坊ちやん』もよくモデルの事で騷がれる作品で、なかんづく山嵐の數學教師が屢々詮索の種子になる。今から十何年も昔に遠足にいつて南京豆を買つたらそれが丁度同文館から出てゐた教育雜誌をほぐして作つた袋に包まれてゐて、それに四國の教育界總まくりのやうな記事があり、中に山嵐のモデル某先生が世界的な數學者である旨を書いてあつた。

（二）『島の聖』と河上肇博士

泉鏡花氏に一時非常に近づいて行つた者にドイツ文學專攻の登張竹風氏がゐる。竹風氏の譯したハウプトマンの『沈鐘』は、鏡花氏が文に雌黃を加へて、兩氏共譯になつてゐたのは、多くの人の記憶に新たであらう。その竹風氏が『新小說』の同人となつて明治四十年正月號に初めて公けにした作に『島の聖』といふのがある。これは現在のマルクス研究の權威河上肇博士をモデルにしたものだとの噂が、當時專ら行はれた。

竹風氏は今こそ地方の高等學校に埋もれて了つたが、一時は盛名、高山樗牛に次いだやうな時代もあつた。卽ち樗牛が美的生活論を唱へてゐた當時は、彼は恰かも『帝國文學』の編輯を擔當してゐたので、相呼應して立ち、ニイチェ主義を唱へた。そして坪內博士などゝ猛烈な論爭をしたもので、『舌筆錄』一卷はその頃の論文を集めたものである。

が、竹風氏は途中志を變へて、山口の高等學校の獨逸語の教師となつて行つた。その時彼の教子に一人の眉目淸秀なる俊才がゐた。それが後年の河上博士である。

博士は當時文學志望だつたから、東都文壇の花形論客であつた竹風氏を殊の外仰慕し、竹風

氏は亦この英俊に大いに嘱目する所があつた。

が、この秀才はやがて竹風氏の嘱目を裏切つて經濟學に興味をもち出し、大學ではその科目を專攻した。彼は一ツ橋の講堂で當時賣出しの福田德三博士が該博な蘊蓄を傾けた經濟學の講演を聽いて、他日ひそかにその右に出づる學者たらん事を期しては胸を躍らせた。

年が經つて明治三十八年、讀賣新聞に千山萬水樓なる假面に隱れて『社會主義評論』なる長篇を連載し初めた者がある。筆鋒甚だ銳烈、田島錦治氏の『社會主義論』を痛駁し、日本社會黨にも一太刀を浴びせ、マルクス、エンゲルス、クロポトキン、トルストイ等を引照して、華麗な才筆に滿都論壇の注意を奪うた。

それは彼が世に出る腕だめしであつた。そして華々しい成功を收めた彼は、やがて意氣揚々として假面を脫いだ。それはその昔登張竹風氏を嘱目せしめた河上肇氏であつた。

が、その論文の稿を終る頃から河上氏の心機は一轉し、著しく宗教的に傾いて、當時一部を風靡してゐた伊藤證信氏の『無我の愛』の信仰に入つた。伊藤氏は今でも河上博士をその昔弟子に持つたといふことを何よりも誇としてゐる。

彼が無我の愛に入つたのを見て、皮肉な微笑を洩らした者は竹風氏であつた。——その時竹

風氏は山口を辭して東京に歸り、明治大學の文科にも關係し、『新小說』にも筆を執つてゐたが、その關係から『島の聖』一篇の小說を世に問うた。

これは作としては非常な惡評を受けた。竹風氏が創作を斷念したのは、恐らくこれが有力な原因になつて居りはすまいかと思ふ。私は十五六の子供の時に、それを一讀した記憶を有するが、少しも面白くなかつた。筋なども殆んど忘れて了つたが、何でもある無我愛的な宗教家が同じやうな憧憬を有する戀人を得て、二人で理想的な生活をする爲めに南海のある島に移住するのである。

女は非常に子供を欲しがつてそれを夫に訴へると、彼は今に生れると言ふ。「だつて夫婦の交はりもしないのに何うして出來ます？」と言ふと

「マリヤは處女でも懷胎したではないか」との答へ。

女は到底、そんな空靈的な理想生活には堪へ得られないので、島を去るのだが、何でも離別する前に、濱邊の砂の上で夫婦が相撲を取つて、女が夫なる聖者を取つて投げる所が書いてあつたと思ふ。

勿論、これは今振返つて見る程の價値はない作だが、河上博士がモデルだと言ふ噂が當時か

らあり、そして博士の聲望が隆々として學界を壓してゐるので、今も時に人々の噂にのぼるやうである。

（一二）『無明』と島田翰

去年の春（大正十四年）國民新聞に德富蘇峰氏が田中敬氏の新著を批評された『圖書學概論』なる論文の連載されてゐたのを記憶する人は、その第三回に『島田翰と古文舊書考』なる一項があつた事を忘れまい。その全文は左の通りである。

「支那及び日本の印刷等に關して、本書は、島田翰の古文舊書考に據るところ少くない。此れは左もある可き筈だ。何人も支那、日本の書籍に就て語らんとするには、古文舊書考を看過する能はず。

＊　＊　＊　＊

記者は此の機會に於て、島田翰其人に就て、一言するを禁じ得ない。彼は校勘學に於ては、恐らくは現在の日本に於て若し唯一人と云ふ能はずんば、第一人と云ふも、溢言ではあるまい。此道にかけては、吉田篁墩、狩谷掖齋、市野迷庵も恐らくは、後生畏る可しの嘆を發し

たであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

彼は島田篁村先生の第二子で、其母は鹽谷宕陰先生の孫女。されば胎内より、書籍を生命として出で來つたもの。古文舊書考は、彼が二十五歳の著であるが、其の學問の淹博にして其の見解の徹せる、其の辯論の精悍にして、其の文字の俊鋭なる、支那の大儒俞曲園をして、嘆美止む能はざらしめ、爲めに曾文正公の己に贈りたる『眞讀書人』の四字を、轉じて彼に贈らしめたる程であつた。

＊　＊　＊　＊　＊

若し公平の審査者あらば、一部の古文舊書考は、彼をして文學博士たらしむるに餘りあり。然も島田翰は其の餘りに愛書僻の爲めに、遂ひに幾回か贖きて、自から死するの已むなきに到つた。才ありて命なしと云はん乎、學ありて行なしと云はん乎。

＊　＊　＊　＊　＊

記者は本來、島田翰とは面識なかつた。明治三十六年の暮、故大野洒竹の紹介にて相見た。而して彼が書籍上に於ける知識の豐富なるに傾倒し、其の前過と性僻とを知り、且つ第三者

より屢ば警戒せられたるに拘らず、彼のために區々の力を竭し、民友社より古文舊書考四冊及び彼の校勘したる寒山詩集、薩天錫逸詩、合卷一冊を出版した。前者は三十八年三月、後者は同年七月、何れも日露戰役中であつた。

* * * * *

今や此の古文舊書考が、田中君の著作の資料に供せられたるは、著者の島田翰は勿論、其の出版の援助者たる予に取りては、快心の事である。但だ今日に於て、翰其人亡きを憾とするのみ。」

この島田翰が如何に日本人離れのした凄いビブリオマニアであつたかは內田魯庵氏が讀賣新聞に連載せられた『蠹魚の自傳』に詳しかつた。その中にはまるで西洋の探偵小說のやうな面白い話もあつた。

そして彼が又永井荷風氏の青年時代の親友であつた事は、例の『麻布雜記』の中に出てゐるから人の普く知る所となつてゐるであらう。その一節にかうある。

「その頃われ〳〵が漢籍の種別と其の價格とについて少しく知る所のあつたのは、私と共に支那語を學んでゐた島田のおかげである。こゝに少しく彼について言はなければならない。

島田、名は翰、自ら元章と字してゐた。……翰は一時神童といはれてゐた。われ〳〵が漢文の教科書として文章規範を讀んでゐた頃、翰は夙に唐宋諸家の中でも殊に王荊公の文を諳じてゐたが、其性驕悍にして校則を守らず、漢文の外他の學課は悉く棄てゝ顧みないので、試業の度毎に落第をした結果、遂に學校でも持てあまして卒業證書を授與した。」

又曰く、

「啞々子（井上）が通鑑綱目を持出した頃、翰も亦その家から折々書物を持出した。しかし翰の持出したのは、啞々子の持出した通鑑や名所圖會、またわたしの持出した群書類從、史記評林、山陽の外史政記のたぐひとは異つて、皆珍書であつたさうである。先哲諸家の手寫した抄本の中には容易に得がたいものもあつたとやら。後に聞けば島田家では藏書の紛失に心づいてから市中の書肆へ手を廻し絶えず買戻しをしてゐたといふはなしである……」

併し此の偉才、島田翰をモデルにした小說のある事は、世が餘りに多く知るまい。加藤一夫氏の『無明』がそれである。今、手許にその書がないから、何と言ふ名前になつてゐたか忘れたが、あの自叙傳的小說に於て主人公と戀人を爭ふのが島田翰である。

加藤氏はこの外『酔つぱらひ演說』なる作に於て衆議院の酔漢田淵豊吉をモデルにしてゐる。

（一三）外人をモデルにした短篇

以上は總て日本人がモデルになつた小説だが、外國人が題材になつてそのモデルの分かつてゐる作も、多少ない事はない。その中で細田源吉君の『牧師館のボーイ』は特筆大書するに値するだらう。比較的初期の作だから、讀んでゐない人が多からうと思ひ、當時の批評を援引して、梗概を語るにかへる。

「もらひ子である一青年が國許と折り合が悪く、東京で勉強しようと思つてもろく〳〵金を送つてくれないので、宣教師をしてゐる或外人の家にボーイとなつて住み込んで以來の生活を描いたのである。これなら勉強も出來る、英語も教はれると思つてゐたところが、用事は厨房にもあれば、主人の部屋にも待つてゐるといふので身體の休まるひまがない。宣教師だからさぞ道德的だらうと思ふと、夫婦の生活など極めて面白くないらしく、子供は二人以上はいらないといつてチエックするのだといふ事を聞かされもすれば、厨房の女コックの所へは、毎土曜日に男がくる。さういふ間にあつて青年の性的慾望が次第に目さめて行く徑路……などが、如何にもあさやかな筆致で描かれてゐる。」（宮島新三郎君の『新進作家論』）

この宣教師はペニングホフ氏がモデルになつてゐるのだといふ。

ペニングホフ氏の事は私はよく知らない。しかし私達が早稲田大學の文科の生徒であつた時は、氏は特殊研究の『群衆心理學』の講座を受け持つてゐた。よく分かる英語で講義してくれるので、私も二三回出席した。細田君にぢかに聞いたのではないが、何でも細田君は一時ペニングホフ氏のうちに寄寓してゐた事があるのだといふ。細田君はこの外にも當時のことを材料にしたのであるらしい小説を書いてゐる。『本心』といふ集にも一つは入つてゐるが、(題を忘れた)恐らく集中、屈指のいゝものといつてよからう。

傳聞する所によれば、德富蘇峰先生が細田君のこれ等の諸作を讀んで興がつてをられたといふ。とすれば作者は、文壇に擡頭早々からよき讀者を惠まれたものといふべきだ。

大正三年ごろの事だが、明治大學がアメリカの某大學野球團をまねいて、柏木の舊運動場で早慶明との間の對戰を行つた事があつた。慶は第一回を三對二位なクロース・ゲームで勝つたのに早は十三對二位な大スコーアで慘敗した。だから早は次ぎの戰ひを是が非でも勝たねばならなかつたのだが、投手難の爲め勝ち味は殆どない。第二回戰も二對零位なスコーアで第七回まで進んだ。早は走者三二壘によつたが既に二死後である。そして打者が二ストライキを取られ

てしまつた。その刹那、三壘にゐた大村が大膽な本壘突入を試みたのと、安打が續出したので、形勢はこゝに一變し、早は一擧にして七點を占めた。そして勝ち味の全然ない試合に大勝した。

當時趙といふ支那留學生選手の中堅がゐて、それが打者に立つた時、私の傍にゐた西洋人の少年が、彼れは强打手かと聞いたから「イエース。ヘビイ・バッタアー」と答へて私はまたも熱心に戰況に見入つたのだが、後から氣が付くと、ベニングホフ氏が傍にゐた。その少年は氏の令息であるらしかつた。

今、當時を回想し、更に細田君の小說を思ふと、かすかに微笑を禁じ得ないのである。

(一四)自分のこと

こんな調子で小說のモデルの詮索など試みれば、興味ある話材はまだ無盡藏であらう。併し筆者なる私の方で少々飽いて來たから、この最終回に自分のことを少しばかり書いて退壇としよう。

前に藤森成吉氏の『煩惱』が本紙(東京日々新聞)に連載せられた時、TS堂とかの娘さんが

モデルになつたのだと噂されて、掲載中止の談判を藤森氏は受けたと聞いたことがあつたが、由來本紙の小説欄はモデル問題で祟る所と見える。元より藤森氏の名作と比すべくもない悪作だが、去年の秋私の『龍泉寺一族』が夕刊に載つてゐる時、原宿のR寺から、自分の寺をモデルにしたとは怪しからんといふので、釋明と掲載中止の交渉を受けた。再三手紙が來たが、放擲しておくと、今度は代理辯護士、青山南町在住の岡某からおどかしの手紙が來た。それもすてゝおくと二度目には「うまく解決を付けて上げるから立寄つてくれ。」とのなだめるやうな手紙が來、それにも返事しなかつたので、いよ〳〵アルチマタムに「法に訴へて手續を取る。」といつて來た。私も喧嘩腰で、「勝手に」とハガキで返事してやつた。

それから丁度松村みね子夫人の令弟に當るY辯護士が前からの知り合なので、念のため調査してもらつたところ、たとひ架空の小説でも、作者が確にある實在の人物を描き、それを誹謗し、侮辱してゐるのである事を、萬人が認めるだけの證據が集まれば、名譽毀損罪の成立する可能性は十分にあるとの事であつた。それにしても罰金は五十圓位で濟まうとの豫測。

私の作はR寺を描いたものと萬人が認める氣遣ひもないし、よしまた認めて罪になつても罰金五十圓なら、高が知れてゐる。作を掲載中止にして稿料全部をフイにするより餘ツ程とくで

あると考へて、訴訟するならせよと腹をきめておいた。

所がいかに頭の悪い辯護士でも、これが問題にならない位はさとつたものと見えて、事件はそのまゝ煙の如く立消えとなつてしまつた。

特に以上の事をしるすのは、今後、どの作家にどんなモデル問題が起こらないとも限らないから、多少その時の參考にもならばと思つてゞある。

もし私の作で訴へられたら、法廷へ出て、事實と小説との相違を說き、どうせ人間を書くのだから、相似よつた事のあるのは當然である事を說き、相似よつた事もないやうだつたら到底小説を讀むの興味は起こらない事を說き。更に蘆花氏の『不如歸』では大山公爵、同氏の『寄生木』では乃木大將、佐藤紅綠氏の『大將の家』では大隈侯がモデルになつてゐると噂さるゝに拘はらず訴訟問題など起こらなかつた事を說き、この訴訟の如何に謂はれないものであるかを論じて、懸河の辯をふるつてやらうと思つてゐたのに、遂にその實現を見なかつたのは殘念だつた。大正の雄辯史はかくて、まさに光彩を添ゆべかりし一大雄辯の記錄を、遂に空白の頁のまゝに殘さねばならない不幸を見たわけである。（大正十四年五、『東京日々新聞』）

（註1）鏡花先生の傑作『日本橋』の「諱名を×夫人といふ、十六七、二十の頃までは同じ心で令嬢と

いつた」横笛の名手瀧の家の清葉とは、今も猶日本橋上槇町の名うての待合藤村家の女将で、故人せ組の棟梁の養女、今年四十五六の華奢姿、曾ては藤村家（藝妓屋時代の）の小清と嬌名の高かつた藤村もと子さんのことです。水上瀧太郎氏と吉右衛門が大好きでクレオパトラと綽名された美人の鶴子さんの養母にあたる人で、故人田中長兵衛氏が後見でした。「夏は日向、冬は日蔭へ道を譲つて」とある通り、もと子さんは往來も眞中を歩かぬ程淑やかな婦人です。本文の「能衣裳まで納つて」も居なかつたでせうが、震災前は立派な土藏が二戸前もあり、大濫好みの茶座敷には伊藤博文公の七言絶句の大幅なんかが懸つてをりましたつけ。（『東京日々新聞』所載、沼津市八千代氏投）

水平部落解放運動と文藝

一

部落の解放はもとより内部の人の堅い團結と、白熱的運動とに、主として據つて成就せらるべきであり、又せられるであらう。

政府の布告が何の效果もないことは、明治四年に太政官で穢多非人の稱を廢し、新たに平民に列したるにそれがたゞ新平民なる新名稱を作るに留まつて、實質上、侮辱と迫害の輕減には少しもならなかつたのが、何より有力に證明してゐる。

又謂はゆる同情家の行爲が些の意義ももたない事は、一部のブルジョア有志や嘗て內務省當局のすゝめた部落改善が、決して差別待遇の撤廢になつてゐないのに依つても明かである。

然らば部落解放は、內部の人の直接運動のみに期待すべきかといふに、私はさうは思はない。徹底的成功を期する爲めには、凡ゆる手段を、最も有效に用ふべきではないか。斯く考へて來

て、文學も亦水平運動に重要な役目を果たし得べき事が思はれる。文學は果して如何なる方面になし得べきか。

これは過去に於て水平運動に類似の解放事業に、文學が如何に貢献したかを見る事によつて明かにせられる。だが私は今更ツルゲネフの『獵人日記』が農奴解放運動に、ストウ夫人の『トム叔父の室』が黒人奴隷解放に資する所の多かつた事など、一々繰返して論じてゐる暇がない。

併したゞ一つ丈け言つておきたい事がある、政府の布令もブルジョアの進言も、一向部落の解放に役立たなかつたのは、勿論政府やブルジョアが施設指導のよろしきを得なかつたに起因する事勿論であるけれども、一つは一般民衆の感情が十分に謂ゆる部落民を受け容れるだけに解放して居らぬからである。

輿論は常に何によりて定まるか、それは少數先覺者の傑れた見解によるのではない。もしそれによつて定まるのだつたら先覺者の悲劇はない筈である。

輿論を形成する最大動因の一つは、或は愚昧であるかも知れない民衆の感情である。

既に民衆が抱くのであるから、時代の最高標準から見れば、遙かに庸劣なのは知れ切つた事

である。又感情に基くのだから正邪の辨別の明かでない場合が多い。民衆は必ずしも進歩した思想によつて行動するものとは限つてゐない。又民衆は必ずしも正しい見解を奉ずる者とも限つてゐない。こゝに氣付いたならば、今後の水平運動はその目標の一つとして、大多數民衆の感情に自分達を理解させ、認識させ、受容させる事に努めねばならない。民衆の感情は實に强固な差別的鐵壁を作るのだから、それを突破するの必要がある。爲政者やブルジョアに迫るのなら直接運動が有效だけれど、民衆に迫るのには、感情的に受容させる力ある文學を借りなければなるまい。今迄の水平社の運動には、文學の有效なことが全然無視せられてゐないまでも、少くとも輕視はせられてゐた。

二

現在のロシヤ國民は、人類の來るべき社會の試練のために立つて、凡ゆる世界爲政者からは最も恐るべきものと思はれてゐるが、大多數の民衆からは最も親和すべき民族だと思はれてゐる。

然るに前世紀の前半までは、今、親和感を抱いてゐる世界の大多數民衆も、現在の爲政者と

同じく、ロシヤ民衆を、最も慓悍な、最も野蠻な、最も兇暴な民族だと思つてゐた。理解の洽きアミエルでさへさうであつた。テニスンも亦『プリンセス』なる詩の中にロシヤを非常に獰惡なやうに歌つてゐる。

その位だから尚のこと一般民衆は、ロシヤ人を眞の溫いハートをもつ人種であるなどゝは思ひそめても居なかつた。

それが僅か一世紀の間に、一變して、今では最も親和感を抱かせるまでに至つた其の動力は何であるか、ラフカディオ・ヘルンは言つてゐる。

「遠い外國の事情に對する國民的感情は何によつて形作られる乎……他國民、他國文化に對する輿論を形作るものは小說と詩である。ヨオロッパ一國民が他國民に對して知悉してゐる事は、主に浩瀚なる統計書や生眞面目なる歷史や博識なる旅行書から得られたのでなくて、その國民の文學——情緒生活の發現である文學から得られたのである。」

又この意味を更に敷衍して私の書いた論文があるから、その一節を玆に轉載することを許して貰はう。

「併しこの謬見（ロシヤ人を獰惡視する）は直ちに一變して了つた。現在ではロシヤの大作

家の傑作が、佛譯、獨譯、英譯となつて續々現はれて、偖らぬ露國國民性を紹介する事となつた。最初に現はれたのはトルストイの『コサック』で、これはペテルブルグ駐在アメリカ大使シェイラア氏の筆になつた。次いでメリメがゴーゴリとプーシュキンを佛譯した。それからツルゲェネフとドストエフスキイが紹介せられた。殊にツルゲェネフは、啻に露國の心ばかりでなく、此の大帝國の凡ゆる階級の感情や風習迄描いて居るので、文學の教養あるものには缺く可からざるものとされるに至つた。大體如上の經過で、ロシヤを了解させるといふ大事業はその小説家によつてなされた。此等の大著作に接してからは、西歐諸國民も最早ロシヤ人を蠻族とは考へなくなつた。此等の著作はロシヤ人も英、獨、佛人等と同じく、人間らしい心で感じ、愛し、苦しむ事を語つた。而してロシヤ人にはロシヤ人特有の諸德——限りなき堅忍、誠實、盛んなる信仰のある事を語つた。政治上（帝政當時の）ロシヤは依然として全歐洲の迷宮であつた。併し文學を通じて知られた其の國民は、以前憎惡と、忌避とを以つて對されたのが、今は一變して親切と同情とを寄せられるやうになつた。

「これは又、私達が必ずしも異國の例を借りるに及ばない、現在目前に見て來た事實でもある。私達の住んで居る此の日本は、日露戰爭當時、史上に未だ經驗した事のない激しい敵愾

心を持つてロシヤと戰つた。けれどもロシヤ文學を知つて居る程の少數の文學者達は國としてのロシヤは敵視しても、人としてのロシヤ人を敵視する事が出來なかつた。彼等は殆んどロシヤに傾倒して了つてゐた。戰爭に勝つて思想に負けたと云ふ言葉はこゝから生れて來たのであらう。

「當時はそれが少數の文學者達に限られてゐたが、今日ではロシヤの小說が一般に廣く流布して、讀書階級がそれに熟した爲め、多くの青年が、日露戰爭當時の文學者達と同じ傾倒の情を新組織に忙しいロシヤに向つて寄せてゐる。」(拙著『小說の創作と鑑賞』第二十章「文藝の國際的に働く力」)

三

私は以上の事を單なるロシヤのこと、又單なる國際間のことゝのみ思つて了へないのである。この公式は謂ゆる部落の解放運動にもあてはめてみて極めて有力なことを思ふものである。

部落の同胞達が決して賤民でも、又歸化外人でもない事は、喜多博士初め多くの學者に依つて徹底的に研究し、闡明せられた。否、彼等學者を待たずとも普通民にもよく分つてゐたのだ。

それだのに彼等普通民の感情上の疎隔癖、賤視癖、迫害癖、差別癖は消えない。之を消すのはヘルンも言ふ通り學者の研究よりも文學が有效である。

文學に依つて、部落民のもつ感情思想も、普通人と些かも變らず高貴でも深奥でもあり得ること、而も、謂はれなき差別待遇と迫害との爲めに、如何に尊き人間性が毀損を受け、悲痛な哀哭的境遇にあるかを知らしむべきである。さうしてのみ、感情上の差別觀は消失し得る。

私の論は決して机上の空論ではない。過去に於て黑法師の『想夫憐』や、桃郎の『琵琶歌』や、藤村の『破戒』や、鏡花の『妖劍紀聞』や、浪六の『いたづら者』を讀んで、普通民が、如何に彼等の胸に抱く差別觀の謂はれないものであるかを感じ、恥ぢ、後悔したかに想到すればそれでよいであらう。

併し以上諸家の小說もそれ〴〵に傾向を異にし、感銘、影響を異にする。とすれば如何なる文藝を創造する事が最も有效であるかも考慮の要がある。

私見によれば美的空想を本位にした『琵琶歌』『妖劍紀聞』『いたづら者』の如き作品はあまり望ましくない。なぜなれば以上のやうな諸作が部落への同情なり融和感なりを催起するは、部落の實狀へ向つてゞはなく、それを基礎に構へた美しき空想、美しきイリュージョンに向つてゞ

ある。されば、もし彼等が部落の實狀に對したならば、作品との懸隔が餘りに著しい爲めに、折角の融和感が脆く崩壞する恐れがある。

今後要せらるべきこの種の文藝は先づリヤリズムを基調とせねばならぬ。藤村の『破戒』が幾多の批議すべき點があるにせよ、普通人の部落に對する親和感を催起さすに役立つたのは、それが一番リヤリスチックだつたからである。この故に私はリヤリズムを基調として踏まへた作を第一に歡迎する。

その作者としては、部落內部の人の奮起を待つこと勿論である。併し部落外の作者の助力することも決して無效でない。內部の人の報告は、心なき輩をして誇張であり、虛構であると思はしめる危險がある。だから外部作家の精細なる研究、觀察の結果を作品に織りて、內部作家の努力を裏付けることは決して無意義でない。

次に最初取材すべき範圍であるが、都會と田舍とを比較すれば、田舍の方が疎隔と迫害が甚だしい。

同じ田舍でも關西と北越方面とでは又違ふ。關西では部落民の間にも早くから文化が入り、堅固な團結も出來、戰鬪的であつて、同じく差別、迫害を受けてゐても、反撥力が强く、互に

慰め合ふだけの部落の數もある。之に比し北越方面は殆んど孤立したのが多い。

部落解放の爲めを思へば、第一作として示して貰ふには、關西のやうな、團結的、戰鬪的な舞臺がよい。そこにロマン・ローランの『ジャンクリストフ』の如き英雄を點出し、ともすれば萎縮してゐる部落民の爲め奮起を促すのが效果があらう。この意味で、リヤリズムに終始する作品よりも、理想的現實主義といふやうな作品なら一層よいと思ふ。

次にはどうしても北越のやうな慰め合ふにも仲間なき孤立的部落民の實狀を、これは主として、部落外のものに知らしめて非道を鳴らす必要があらうと考へる。（大正十四年七月、『融和』）

水平民族文献の研究

（一）特殊部落文献

特殊部落、語を換へて言へば水平民族に關する明治大正文献に就いて聊かの解説を試みるであらう。思ひつく儘を部分けにして示すと、ざつと左の通りである。

（A）特殊部落民を題材とした小説

（1）小栗風葉作　寢白粉

（2）黒法師作　想夫憐

（3）無名氏作　續想夫憐

（4）大倉桃郎作　琵琶歌

（5）同　琵琶歌續篇

（6）島崎藤村作　破戒

（7）泉鏡花作　妖劍紀聞
（8）村上浪六作　いたづら者
（9）田口櫻村作　東風物語
（10）小川霞堤作　香涙

（B）同上戲曲

（1）福池櫻痴作　春雨傘
（2）默阿彌脚本集　第十二卷及び第十六卷
（3）岡本綺堂作　朝顏集

（C）水平社同人の手に成れる作品

（1）古手川忠助著　水平
（2）西光萬吉著　淨火
（3）栗須七郎著　水平の行者
（4）同　水平審判の日

（D）部落民に取材せる說話、詩、感想

(1) Lord Redesdale The Eta Maiden and the Hatamoto (Tale; of old Japan. P. 115)
(2) 假名垣魯文外數氏著　明治毒婦傳
(3) 矢田挿雲著　江戸から東京へ。第一卷、二卷、三卷、四卷、八卷。
(4) 三田村鳶魚著　江戸の思出（上野と淺草）
(5) 田中貢太郎著　奇話哀話（紅鹿子の笠紐）
(6) 同　毒婦と大賊（解放明治文化研究號）
(7) 輪池越智稿　五寸釘寅吉（水平第二號）
(8) 白霧生稿　漂泊の女繪師（淑女畫報新年附錄）
(9) 島崎藤村著　淺草だより
(10) 大庭柯公著　書名失念
(11) 百痴居士著　西京風雅詩集

(E) 水平民族研究書

(1) 柳瀨頸介著　穢多非人
(2) 喜多貞吉著　特殊部落研究

（3）喜多貞吉著　歴史上より見たる差別撤廢問題
（4）高橋貞樹著　特殊部落一千年史（發賣禁止）
（5）同　特殊部落史
（6）西村文則著　水平民族史物語
（7）岡本彌著　特殊部落の解放
（8）三好伊平次著　同胞諧和の道
（9）吉井浩存著　この差別を見よ
（10）篠原蓮葉著　眞の解放を望みて
（11）佐藤一男著　水平運動批判

以上は私のざツと思出したものに、中央社會事業協會の石清水一雄君の示教を得たものを加へたので、思ふにまだ此の外にも注目すべき書は數多いであらう。それから菊池寛氏の戯曲に水平民族の出て來るのがあり、近松秋江氏が『新潮』（大正十四年二月號）に掲載せられた『村火事』や、宇野浩二氏の或る作品にも、之に取材したものゝある事を知つたが、現代作家のは十分調査が行屆かないのでわざと載せなかつた。又水平社の機關誌にのつた、些末な作品は掲げ

ない。

(二) 幕府への訴願書

彼等氣の毒な被差別階級が、初めて解放の曙光に接したのは明治四年八月、太政官が穢多非人を廢して平民に列せしめた時であるが、これは、更に溯れば慶應の末年、攝津渡邊村の舊穢多某が、土佐の自由主義社の少年に啓發され、幕府に左の如き訴願書を差出したのに端を發する。

「此度御用金被仰付、冥加至極難有奉存候。就ては私共身分儀は、元來住吉神功皇后三韓御征伐の砌、御供被仰付、彼地へ相越し候處彼地風習一體に獸肉を食物に致し候より、自ら食ひ置候間、歸朝の上も獸肉を食し候より神國清淨の地にて穢肉を食候條、朝勤不相成旨を以て、淨人、非淨人と被爲分、私共に以後一切不淨掛御用可相勤旨被仰渡候て、遂に人間の交も不相成成行候事、悲嘆残念の次第に御座候。然る所今度夷國より和親交易相願候處、遂に攘夷の御期限被仰出候に付、私共に御先鋒被仰付候はゞ、一統死力を盡くして相働らき御國恩を奉報度存じ候處、追々和親に相成候趣、奉承候。右異國人は一體に獸肉を食ひ候との事なれば、何

卒私共身分に於ても穢多の二字お除き被下度候。」（明治二十五年出版竹越三叉著『新日本史』上四三頁より轉載）

但し此の時の太政官の英斷も、單に穢多なる名稱を、新平民なる新らしい賤稱に換へた以外に大した効果はなかつた。それに穢多と言ふ字の使用も決して此の時絶滅したわけではない、佐野學氏が「穢多といふ字の如何に殘酷なることよ。豐富な支那の語彙を捜しても是程の侮辱を現す文字は少いであらう」（『水平』創刊號）と言つた其の文字が、新平民なる新賤稱と併用せられてゐた。

水平社解放の第二の曙光は大正十一年水平社が鞏固なる全國的團結をなすの前までに、プルジョア階級乃至はその代辯なる內務省の恩惠的勸告、同情的指導なる部落改善の提唱として現はれた。水平社民の、兎角疎隔と賤視を受けるのは、その生活が低級で陋穢なる爲めだから、之を改善する事が差別撤廢の第一歩だと言ふのが彼等の考へであつた。同人はそれに勵まされて銳意努力した結果、成績は大いにあがつたが、玆でも改善部落なる新名稱が生じた許りで、彼等の望んだやうな差別撤廢は得られなかつた。彼等はうまく〳〵とプルジョアの詐欺的言辭にのせられたわけである。

「凡俗なる爲政者と行政者とは、職業的同情家及び改善家と共に吾々に催眠作用をなすことに役立つた」(『水平』創刊號、南新吉氏の論文)といふ憤激は至當で、これが、彼等の解放は彼等自身の團結による外ないとの强い自覺を促した。

併し彼等は今後の自分達の解放の爲めには、凡ゆる武器を最も有効に使用する事を忘れてはならぬ、この意味に於て文學も考慮の中に入るべきである。

爲政者の法令もブルジョアの恩惠的施設も、結局彼等の解放に資しなかつた一面は、普通民の感情が長い因襲の爲めに差別に馴らされてゐたが爲めである事を思はねばならない。この感情に理解と融和と同感とを與ふる動力となるのは文學が第一である。例としてはロシヤを好戰的野蠻人とのみ思つてゐた西歐人の疎隔感情が、ツルゲェネフ、トルストイ、ドストエフスキー等の小說に依つて、十分に感情上の理解を得た事を言へば足るであらう。

(三) 外人の觀察

かくて文藝も亦、水平社解放運動の有力な補足となり得る事だに分れば、過去に於けるそこに取材した文藝の檢討が、決して無意味でない事も當然に歸結され得る。私のこの稿の企圖は

そこにある。

明治の文藝的作品中、彼等被差別階級を題材に用ゐた最も古いものは恐らく『明治毒婦傳』であらう。これは高橋お傳、鳥追お松、夜嵐お絹、權妻お辰その他數人の、謂はゆる明治の毒婦の傳記を合巻風に綴つたもので、初めは各人別々に大抵明治十年頃までに一わたり出たのだが、確か明治十六年頃合冊されて『明治毒婦傳』となつた。この中の鳥追お松が非人であつた。非人と穢多とは地方に依つて同一義に用ゐられてゐる所もあるが、その差異ある事は敢へて喜多博士の研究を援引せずとも普く人の知る所であらう。たゞ當時に於ては殆んど同じ虐遇を受けた被差別階級であつたから特に茲に言及したのである。この外にもまだ一時穢多仲間に墮ちる女の事が同書に見えたと思ふが、それは毒婦を一層賤しめさせ、憎ましめる材料として穢多を側役に用ゐたので、後に解放運動の遮閉とこそなれ、資する所は絶無だつた。(なほ鳥追お松については本間久雄氏の論文『似而非惡魔主義(近代藝術論序說)』及び田中貢太郎氏の『毒婦と大賊』を參照せよ)

同胞の間では斯く蔑視せられた彼等は、外國人の眼には何と映つたであらうか。この消息を窺はすのが、リーブデール卿の『舊日本諸物語』(Redesdale. Tales of Old Japan)の中に收ま

つてゐる『穢多の娘と旗本』(The Eta Maiden and the Hatamoto) の一章である。

リデスデール卿は幕末から明治の初めに英國公使館員として日本に駐在した人で、この著書は、一八七一年(明治四年)イギリスで出版せられた。可なり有名にもなり、廣くも讀まれたので初版は珍本として好事家の間に珍重せられてゐると聞いてゐる。又英國近代小説壇の鬼才スティーヴンスンが『予の感化を受けたる書物』(Books Which Have Influenced Me) なる論文に於て「私はこの書により、初めて、日本に對して、合理的人間の執るべき正しき態度、及びこのアジヤの島國に見出され、保たれてゐる祕密を學んだ。」と言つてゐるのを讀んだ事がある。

『穢多の娘と旗本』は講談などによくある鳥追おこよと座光寺源三郎の戀愛物語である。尤も原本には Takoji となつてゐるが多分これは Zakoji の謬りであらう。(田中貢太郎氏の『紅鹿子の笠紐』に書かれた鳥追おこよと座光寺藤三郎の物語も、筋はかなり違ふにしても、もとの話は多分同じなのであらうと思ふ。矢田挿雲氏の『江戸から東京へ』の此の項はまだ讀んでゐないから、私は原話を知らぬ)。

このリーブデール卿の作には、際立つた被差別階級への同情も、又その解放に資する示唆もあるわけではない。併しそれとなき一脈の溫かな同情を寄せてゐる事が言外に感じられるのは、

同じ時代の日本文學に比して稍々異色とせねばならぬ。彼はその章の前書に於て、慶應の末年神戸で起つた村落戰の流彈で穢多の老婆が傷ついた事をしるし、「日本の社會の說明に穢多の存在を除外しては決して完全でない」とも言つてゐる。

(四)風葉の『寢白粉』

前揭の表中、小說で文藝的鑑賞に堪へ得られるものは僅かに風葉、桃郎、藤村、鏡花、浪六の五篇しかない。

その中風葉氏の『寢白粉』は發賣禁止になつた加減か割合に今の讀者は知つて居らぬ。田山花袋氏は『明治名著解題』(『小說作法』二二二頁、もとは『文章世界』の第一增刊「文と詩」に載つた)に於て、風葉は「寢白粉」に兄妹相姦を描き、「色是魔」に手淫を描いたと言つて、風葉氏の肉慾描寫癖に言及してゐる。

なる程「露骨な描寫」が一目標であつた自然主義時代に於て、田山氏のやうな觀察の下されたのは無理もない。併し今日から見ると寧ろ、被差別階級民をまじめな文藝題材としたと云ふ點で、より多く記憶され、記念さるべきであらう。風葉氏は先月の『文藝春秋』(大正十四年七

月）に於て、このやうな作を書いてゐた事を大いに恥として居られるが、決して恥づるに當らない。處女地に最初の鋤を入れた事は、たゞそれ丈けでも一つの功績である。

梗概を述べれば宗太郎お桂の兄妹があり、お桂は頗る美人だが緣遠くて町から萬年娘と言はれてゐる。ある時發句の會で三味線をひいて女たらしの三之助と云ふ色男に見こまれ人を介して嫁に所望されるが兄が不承知である。併しお桂も三之助戀しさの情に堪へず、遂に家を出奔して男の許へ身を寄せた。兄は連れ戻しに行つたが、出して呉れないので、初めて自分が穢多である事をうちあかすと、男の態度は急に一變して、お桂に一先づ兄の言葉通り歸つてゐたらよからう、後で再び迎へに行くからと言ふ。

お桂は男の言葉を堅く信じて、直ぐ又三之助は迎へに來てくれるものと思つてゐたが、彼からは何の音沙汰もないので、遂に氣病みの狀態になり、兄はそれを慰めてゐる中に兄妹夫婦の噂が立ち初める。それから彼女は姙娠したが誰れの胤であらうといふのである。

一體風葉氏は何を意圖としてこの作を書いたのであらう。肉慾描寫を主眼として兄妹相姦に取材したのなら、もつと外に書きやうもあつたらう。被差別階級が世から疎んぜられ、遂に人倫に背いた道に陷る筋には違ひないが、併しそこに中心的力點を置いたものとしては、餘りに

人道主義的氣魄が乏しすぎる。女主人公に存外同情が乏しく、殊に「こゝに一つ合點行かぬは乳首の色、腹の形も次第にをかしと風呂にて見し近所の女房共が陰言、そもそも誰が胤にやあるらむ。あさまし」と結んであるので、被差別階級を侮蔑し、冷笑したのかと言ふに必ずしもさうではない。肉慾描寫も同情も侮蔑も宙にふらついて、どつち付かずである點で、この作は感銘に統一がない。

恐らくこの宙ぶらりであるのは、當時の多くの作者が被差別階級者に對して抱いた感じの正直な反映であらう。實際當時(明治二十九年頃)は、大抵の者が彼等に對して同情すべきか、疎隔すべきか去就を決しかねてゐたであらう。差別待遇の謂はれなきを知りながら、併し因襲が久しいので未だはつきりと同情する所までは行かなかつた。その時代的反映としてみて初めてこの作は最も價値がある。

(五)『想夫憐』と『琵琶歌』

黒法師の『想夫憐』は讀過にかなりの努力を要した。序文には「位階のみ高く、然も心も行爲も無下に卑しき人あらば如何。素性のみ悪く、階級のみ卑しく、心も行爲も勝れて高き人あ

らば如何」と言つてあつて、作者はかゝる人爲的迷謬を破するの意氣込みの下に、亂倫放縱の生活をする世の謂はゆる上流階級と、生れは被差別階級でも、小羊の如く、聖女の如く忍從を事とする婦人とを對比して描いてゐる。

之で端なくも思ひ起すのはユーゴーの劇や小說で、彼は上流階級の艷麗な貴婦人だといふと眼の敵にして淫縱に、亂倫に、敗德的に描き、階級の賤しき乞食や、顏貌の醜穢な不具には天使の如く美しい魂と、聖人の如き高德とを賦與してゐる。（ダキッドスンの『ユーゴー詳傳』中特に『笑へる人』の項を參照せよ）

『想夫憐』の作者はそのヒロインを不具や醜女には描かなかつた。が最も世から賤しめられ、指彈されてゐる新平民に取材して、そして作者の頭腦にて思考し得る限りの完全な婦德を彼女に賦與した。

たゞユーゴーの作の思想的背景は、作者の人道思想、作者が眞實にさう思ひ込んでゐる白熱的信念に裏付けられてゐるが故に、力があり、他を說得するに足る。然るに黑法師のは折角の抱負も、たゞ讀者の安價な淚を目標とする作家的コンマアシャリズムから出てゐるのだから、說得力が稀薄で、序文の壯語はそのコンマアシャリズムを掩ふが爲めの假面としか考へられな

い。但し黒法師とは渡邊霞亭の匿名だから未だ取柄があるが、無名氏の作になる續篇は到底讀むに堪へない愚作である。

『想夫憐』に比較すれば桃郎の『琵琶歌』はさすがによい所がある。

『琵琶歌』は『無花果』と並んで、明治卅年代に續出した懸賞小説中、文學史にも名を記載せられて、今も讀者を絶たないかなりの名作であり、一方では『不如歸』『濱子』（草村北星作）などゝ共に當時の清新な家庭小説として並び稱せられる。

この作が世間の人氣を煽つたのは、懸賞當選の結果が發表せられても半年の間その作者が分らず、或は名利を欲せざる文壇名家の匿名の作であらうと言ひ、或は作者は遠く海外へ移住したのであらうと言ひ、或は丁度日露戰爭中であつたから出征軍人で既に戰死した人であらうとも言つて、様々な揣摩臆測が行はれたが、讀賣新聞に出た角田劍南氏の評論から、端なくも作者の手がゝりが付き、而もそれは旅順攻圍軍に加はつてゐる出征軍人だといふ事が分つたので、俄かに同情が集まつたのがその因をなした。

それは實に明治文壇有數の大きなロマンスであつた。が、たとへそれが無かつたとするもこの作は注目されてよい要素を取材の上に持つてゐる。『無花果』が基督教を背景とした小説であ

るのに對し、この作は將校でなくて一兵卒の主人公を點出した點でも注目さるべきであり、且つ特殊部落民を取扱つた點で更に意義があると思ふ。風葉氏が特殊部落民に對し、同情と侮蔑との中間に彷徨してゐたのに比し、桃郎氏ははつきり、彼等に同情し、その差別的待遇が如何に謂はれないものであるかを痛感してゐる。

表現も素朴で巧緻に過ぎない點に好意がもてる。

軍隊では模範の上等兵といはれた荒井三藏が、たつた一人の妹の里野をある小學教師から嫁にと所望され、穢多を兄にもつと言はせたくない許りに絶縁して嫁せしめるが、彼女は舅から横戀慕され、夫婦間は飽きも飽かれもしないDに離別される。その惱みのため彼女は狂し、時も時兄は日露戰爭で充員召集を受ける。併し狂した妹は、同じく薄命に泣いゐる華族の令嬢の手に引取られる。この筋は、改めて語らずとも、人のよく知る所であらう。

玆には同情はある。併し根が審美主義的傾向の上に構へた空想で、迫眞力が乏しいから未だ被差別階級解放の强き動力となる事は出來なかつた。

外國でもユダヤ人やジプシイが題材とせられる小說や劇は、兎角美人が出ないと何となく物足りない。ユーゴーの『ノートルダム』、スコットの『アイヴァンホウ』、トルストイの『生ける

屍』、ヲッツ・ダントンの『エルキン』などみな美人が主要な役目を務めてゐるではないか。日本の特殊部落民小說も同じで『寢白粉』のお桂、『想夫憐』の雅子、而して『琵琶歌』の里野——何れを見ても美人ならぬはない。

殊に狂亂の里野が、朧月夜に落花を浴びて琵琶歌をうたひながら彷徨する場景は、私に『ハムレット』の中のオフィリヤ狂亂の場を思ひ出させた。

もし大倉桃郎氏が英文學の研究に精しい人であつたら、必ず讀者からこれはオフィリヤから暗示を受けたものと斷定されるに違ひない。當時その批評が出なかつたのは、氏と英文學とが結び付かなかつたからである。

この作は確かに讀者の同情を被差別階級に向けさせるに役立つたが、併し實際問題として考へると、これはかなりな危險性が伴つてゐた。といふのは、茲で催起させられた讀者の同情は、作者の空想に依つて美化された特殊部落へであつて、非道な迫害を受けてゐる現實の部落へ向つてゞはない。だから讀者が作から受けた美しいイリュージョンと實在の特殊部落とが合致すれば、この同情は保たれ、且つ有効であらうけれど、もし合致しない場合は讀者の好意は脆くも雲散霧消し去るの怖れがある。未だ水平社の解放運動の爲めに安全に有力な文學といへない所

以である。

これが續篇は、本篇に比して劣るとはいへ、併し決して『想夫憐』の續篇の如くひどいものではない。

ヒーロー三藏が旅順攻圍軍に加はつて殊勳を立てる事が作の大部分をなしてゐる。何しろ作者が實戰に經驗を有する人だから、その記述に一脈の生氣がある。三藏は負傷して內地へ歸り癈兵となつて兵役を免除されたが、戰中に立てた殊勳に依つて軍司令官の感狀を受け、今迄疎隔してゐた村の者もこの榮譽に對して急に敬意を拂ひ初める。一夜旗亭に招かれてしみ〴〵と語つた藝者が三藏と同族の者であつたやうな餘興もあつて、この作は大團圓となる。藝娼妓になる女に、特に部落出の者が多いとの世評が、或はこの作の結末の暗示となつたかも知れない。

（六）藤村の『破戒』

既に述べた通り、わが國の部落民題材の小說は、外國に於けるジプシイやジュウの場合と同じく、部落出の美人を點綴しないでは成立しない有樣だが、玆に一つの例外は島崎藤村氏の『破戒』である。

これが構想に於てドストエフスキーの『罪と罰』の換骨脫胎なるは、既に幾多の批評家に依つて論じられた。が、大體の話は實際にあつた事なのださうである。

主人公丑松のモデルになつた人の實名は聞き洩らしたが、何でも長野師範の出身であつたといふ。藤森成吉氏は毎年十二月になると鄉里諏訪湖で捕れる鯰の料理を、親しい友人に饗應せられたものである。(但し肝腎の鯰は一人宛て一匹だけで、多くは外の御馳走であつたが)。その鯰は太田といふ人が送つて來るのであつた。藤森氏の感想集『反逆藝術家』の中に『太田氏を推す』と言ふ衆議院議員候補推薦の一文があるが、思ふにその太田氏が上記鯰の施主と同一であらう。そして氏は『破戒』の主人公と師範學校で同窓だつたといふ話である。

美人ぬきの構想、實際の事件への取材——それだけからでも容易に推想し得る如く、藤村氏はかなり忠實で明確なリヤリストの態度をこの作に於て取つてゐる。小諸滯在の幾年、氏は常に懐にスケッチ帳を入れては自然觀察のノートを作る事を怠らなかつたと聞くが、恐らくそれと同じ熱心と用意とを持つて、殊に信州には多い特殊部落への接觸にも努められたであらう。番茶を饗應されたり、彼等の特に誇とする佛壇を開いて見せて貰つたりされた事が、古く何かの雜誌に出てゐたのを讀んだ記憶がある。

藤村氏は天成の詩人であるから、『破戒』も勿論徹底的リヤリズムと言ふにはかなり距離がある。併しリヤリストたらうとした忠實な努力は、却つてその詩的天分の爲め一味の光澤を加へられて、讀者の胸に觸れる。

審美主義的空想の上に立つ『琵琶歌』その他の諸作に伴ふ如き危險は、少くともこの作にはない。いや、絶無と言つて惡ければ、最も稀薄である。今日の水平社の主義理想から言へば、作の中心の思想はかなり批議すべきものが多いとしても、而も彼等同人がこの作に愛着を絶たず、作者に感謝を捧げて止まないのはその爲めである。普通民にはこの作を讀んでから部落民に對する感情や態度を一變したと云ふものは可なり多いやうである。されば啻に、明治文學のモダーンな作品として極めて鮮やかな一線を劃するのみでなく、水平運動に寄與貢獻した上からも永久に記念されるであらう。

餘事ながら附記しておく。古く『文章世界』が小說の題についての感想を諸家に叩いた事があつた。その際たしか大塚楠緒子が、「破戒」とは佛典上の言葉であるのに、それを穢多であるといふ身分を隱せと言つた父の誡しめを破るの意味に用ゐたのが、少しく變だと言つてゐたのを記憶する。

なる程變である。併し考へて通じない言葉ではない。此の、直截に通ぜしめずして、必らず持つて廻つたやうな表現法、一箇所捻つた表現法を試みるのは、藤村氏に著しいテクニックであり、恐らくは氏の人それ自身でもある。だから多い氏の作中、標題に最もよく氏の面目の現はれてゐるのは、私はこの作であるやうな氣がする。

（七）鏡花の『妖劍紀聞』

『妖劍紀聞』は數多い鏡花氏の作中でも、私の最も好きなもの〳〵一つである。既に『新小說』の鏡花號にも論じた通り、私は氏の作中藝者が主題になつたものより、妖怪趣味になつた作、名人の藝の三昧境を描いた作などの方が好きなのである。

これは右の中後者に屬するもの〳〵一つで、刀を打つては本朝無双の名工なる非人清光の出世譚である。

彼が少年の日、關口の大瀧を見ての歸りに、鳥追の美人に請うて、その賤ケ伏屋の庭先に咲く美事な杜若の花を切つて貰つたが、「今のは穢多じやぞ。御身が汚れる。……ええ、汚らはしい、出世前だのに。」と同行の先輩にたしなめられたので彼は折角貰つた花を流れに捨てた。

美人の名はお町である。小川を見ると、先程、その面影のまだ幻に殘つてゐる美少年に切つて與へた杜若の花が流れて來たので、彼女はそれを拾つて、丁度その途端に切れた三味線の三の絲に結んで、懐紙に包んだ。

話は變るが大瀧の壺は、一つの魔の淵で毎年水難を蒙るものが數人を下らない。幕府で埋めたが、すぐもとの通りの淵になる。何か怪異が潜むかと思つてある法印が淵の底をさぐると、岩の上に水にも錆びず一口の短劍が載つてゐた。

その短劍こそ祟りをなし、怪異を働く本尊であると畏れて不動尊本堂に供へておいた所、いつの程にか元の淵へ歸つてゐる。そんな事が三度あつた。三度目に法印が拾ひ上げた時には狐格子に入れて、鍵を掛け、番の老爺まで付けておいたその夕方、淵から上つた劍を見せて貰ひたいと言つて來たのが先日杜若を捨てた美少年清三郎である。が、件の劍はいつの間にか失せてゐる。とみると、夕闇の中を、淵に飛びこむ美人があるので、清三郎が救ひ上げてみたら、鳥追お町であつた。彼女は清三郎を見て以來、戀の叶へたさに乳房を裂いて、賤しい濁つた血を洗ひ淨めようと決心した。幸ひその夜、堂に來てよそ目ながらも戀人の面影を望んだので、もう思ひ殘す事はなく水に飛びこんだのであつた。

清三郎も剣を拝見したいと言つたのは實は口實で、お町の面影を忘れ難くて訪ねて來たのが、道を迷うて不動堂へ出たのである。お町の臨終の際に二人は夫婦の契をする。水の冷たさにお町の出血は一時留まつてゐたのが、又吹き出した。乳房の下に突刺つたまゝになつてゐる剣の刃を縦に含んで、切尖から、清三郎は彼女の血の塊りを吸つた。この瞬間、剣の鍛へを神會した。

以上、私の梗概は非常に拙い、その上、作を一讀してゐる人には甚だ詰まらないであらう。だが、未讀の諸君には、せめて原作を讀みたいと感じさせる手掛り位にはなるであらう。

私は『融和』誌上に、無暗な特殊部落美化の作品、リヤリズムに立脚しない構想は、後に却つてその運動の害となるので、餘り望ましくない事を論じておいた。が、美化も鏡花氏位になると、餘りに現實ばなれがし過ぎてゐて、さういふ非難をする事が憚られる位である。まことに特殊部落美化の文學中の逸品と稱せざるを得ない。

一體部落の中には、特殊に鋭敏な讀書神經の所有者がある。彼等は無數な新聞、雜誌、書籍の中、只の一字でも苟くも部落に關する記事があつたら、決して見遁さない。たとへば岡本綺堂氏のある劇には「穢多のやうな奴」なる語があり、田中純氏の小説には「特殊部落のやうな

村」なる語がある。それは共に特殊部落を主題としたものではないが、さうした不用意に發せらるゝ形容語の中に、文壇の士が部落に對する謂はれなき賤視觀念は明瞭に窺はれると、彼等は論ずる。

假りにさうした立場に倣うて鏡花氏の『妖劍紀聞』を眺め、鏡花氏が部落民に對する態度を測量したらどんな事になるであらう。

主人公は穢多の娘の血を呑み、彼女と夫婦を契つて、鍛工の祕義を神會した。——と言へば穢多賤視はおろか、却つて禮讃であるとの觀測も成立しない事はない。

だが、それなら作者はヒロインを何故に殺したか。ヒロインの死に依つて讀者の同情を求めたか。何故に彼女を殺さずに、作の効果を擧げる事を計らなかつたか。恐らくは此の名人が穢多の娘如きを配として長くゐたのでは、その主人公の價値が減殺されるといふ感じが、暗々裡に作者にあつたのだらう。つまりあのやうな境遇の女を妻として永く生活さす事は、作者の趣味に合はなかつたからであらう。とすれば、作者の腦裡にはかなり深く部落民賤視の觀念が食ひこんでゐる事になる。

因みに言ふ。この作の結末は甚だよく『通夜物語』と吻合する。あの作に出て來る丁山は自

分の血潮を供して夫に繪を書かしめた。だが彼女は部落出の女ではなかつたやうだ。

（八）浪六の『いたづら者』

正直に言つて世間では浪六氏の才をどの程度に評價してゐるのであらう。私はかなり高く買つてゐる。「おでん」を喈食する事に依つて私の味覺は友人の侮蔑を買ひ、浪六を愛讀する事によつて私の文藝鑑識眼は嘲笑を受けてゐるが、懸値なく言つて、文壇の諸先輩は本當に浪六を讀むに堪へないものと思つてゐるのであらうか。

私の考へに依ると、一時狂的に流行した小說には第一流の名作も無い代り、その代りどこかに流行さす丈けの取柄はあるものである。『佳人の奇遇』や『世路日記』にでも一讀の興味だけはある。弦齋や淚香や近くは島田清次郎君、倉田百三君、賀川豐彥氏などの作にも、成程と感心さす特長は必ずある。況んやわが村上浪六をや。

數年前私は漱石と浪六とを同架して論じて、藤森成吉氏の眼をみはらせた事がある。が、私は今でも兩者の間に同一系統の才　通ずるものあるを認めざるを得ない。漱石はその豐富な教養と淡雅な趣味とに依つて自分の才に磨きを掛けたから、高さ、廣さの點から言へば浪六如きは

到底問題にならない。浪六は自分の才の培養といふ事は少しも心掛けなかつた。併し才の濃度強度の上から論ずれば或は漱石以上であらう。

その作中、私は『三日月次郎吉』以下『元祿女』に至る頃までの歴史小說をより多く愛讀する者であるが、『當世五人男』や『八軒長屋』も決て棄てたものではない。

而して氏に『いたづら者』なる部落民文學あるは私の甚だ欣幸とする所である。

この作の主人公はまことに痛快な快男兒である。新聞の人事欄に「未亡人、年廿五、財産鑒理上誠實懇切の相談人を求む。晝間三食を供し必要實費の外に月酬四十圓、本人來談」の廣告を女名前で出したりするものだから、色と慾との兩道に掛つた連中がうよ〳〵と、それに書かれた所番地をさがしに行くが、そこは人家もない草茫々たる空地なのである。かと思ふと今度は惡辣な高利貸の話を聞いて、彼が死にもしないのに大きな死亡廣告を出したりして世間を騒がせる。先づ米國伯爵山崎今朝彌氏に輪を掛けたやうな奇拔な計畫の實行者である。

作者は恐らくかゝる男が好きなのであらう。彼は作者の理想人物なのだ。モウリス・ルブランに於けるアルセーヌ・リュパン！——先づそんな關係にあるものと思はれる。彼は華族の倒子である。

その夫人は温良、貞淑、聰明、怜悧、非の打ちどころのない賢夫人である。生れは下賤なのに違ひないが、兩親には早く死に別れ、子供の頃を育てられた叔父の行方も失うたので素性は一向分らなかつた。所がその叔父が何十年目かに彼女の眼前に出現してみると、初めて自分が特殊部落の生れである事が分つた。

彼女は自ら識らずしてとは言ひながら、下賤の生れを以て夫を汚した事を後悔し、夫には詫びの遺書を書いて自殺する。

このヒロインも恐らくは作者の理想的女性なのであらうか、作者は用心よく彼女に子供を生ませないでゐる。それに鏡花氏と同じく最後に殺してゐる。これは鏡花氏のよりももつと明白に、作者が部落民に對する賤視觀念を暴露したものであると言へる。私の敬愛する作家浪六氏の爲め、頗るこれを惜しまざるを得ない。

(九) 栗須氏の二著

田口櫻村の『東風物語』は讀むに堪へない愚作である。ヒロインなる部落出の美人の狂する所を描いたのは『琵琶歌』の後を追うたものである。それに此の作者こそオフィリアを念頭に

於て構想したのではないかと思はれる節があるが、藝術的効果は少しも擧つて居らぬ。小川霞堤の『香涙』はまだ讀まない。私の記憶にして謬らずば此の人は確か渡邊霞亭の門下の筈である。

水平社同人の中から出た『淨火』(西光萬吉氏作)もまだ讀まない。『水平』(古手川忠助氏作)は一過讀したが、まだこれ丈けでは推稱の餘地あるを發見せぬ。強ひて言へば、只態度が多少眞摯であるのを取るべきか。同人の中から傑れた作の出れるのは今後であらう。

但し玆に一言苦言を呈しておきたいのは、餘りに愚作を濫刊するなら、水平社同人の藝術的手腕に對する讀書界の信用が全く失はれて、たとへばイソップ物語の『狼來』の少年の場合に於けるが如く、たま〳〵傑作が生れても、相手にされない恐れがないとも限らぬ。尤も、傑作は如何なる場合でも光らずにはゐないから、その懸念は無用であると言ふならそれまでだが……。

私一個の立場から言へば、藝術上の才能も修練もないものが、やたらに小說を書き飛ばすことには實は反對したい。その位なら寧ろ忠實な記錄を見せて貰つた方が有難い。この意味から同人栗須七郎氏の『水平の行者』と『水平審判の日』とは面白く讀んだ。

『水平の行者』の前半は氏の自叙傳である。日露戰爭の際、氏が看護卒として從軍すると氏を

迫害した事のある上等兵が重病に掛りながら、何か仕返しをされはしないかと氣遣つて、どうしても診察を受けに來なかつた項の如き、一讀悚然、深い感銘を受けずには居られなかつた。

後半は水平大會記事や、迫害史で埋められてゐる。この中にも胸を打たれるやうな記述は多い。殊に第二回全國水平社大會の第二日に東西兩本願寺の一角を占領して、賽錢箱を蹴ツ飛ばしながら痛烈な演說をする所は面白い。

かつて佐野學氏が論じた事がある。「水平社に對する要求の第一は一切の宗教的氣分を斥くべきことである。過去に於て特殊部落の人々が解放され得る道は宗教であつた。眞宗が彼等の間に扶植し得た勢力は實に偉大なものがある。現世に解放される事の絕望であつた彼等は、希望を死後の世界に掛け、精神的に解放される事を以て滿足せざるを得なかつた。精神的！　これは現代の人々によりて餘り緣が遠い。現代はもはや精神的解放を唯一の道とする時代でもない。水平社の人々は宗教的氣分を斥けねばならぬ。外部の傳統と戰ふと共に內部も總括的に宗教的運動を拒否すべきことを徹底すべきである。」と。

私は多くの左傾派思想家とは異なり、宗教の絕對的拒斥者ではあり得ない。その社會的効用も認め、多分の愛着も信賴も以てゐる。現在既成宗教の何者をも信奉してはゐないが、エイチ・

ジ・ウェルズの『見えざる王としての神』に説かれてゐるやうな意味に於ては、私も立派な宗教の信奉者であり得る。それ丈けの事を明かにしておいた上で、私は佐野氏の説に賛し、水平社の本願寺占領を痛快とした。

木下尚江氏の『野人語第一』の巻末に幸徳秋水の遺著『基督抹殺論』を評した講演がのつてゐる。確か早稲田大學の雄辯會で試みられたもので、氏はこれを最後に、先日の島田三郎追悼演説會に出席されるまで、十數ケ年間沈默を守られた筈である。

その講演の中に斯る一節のあつた事を記憶する。北米新英州の移民が故國からの迫害に堪へ難くて、獨立運動を試みようとした事は何度に及ぶか分らなかつた。併し獨立すれば祖國との間に宗教的連絡が絶たれる。これは彼等信仰に篤い民衆には到底堪へられない事なので、常に蹶起を躊躇してゐた。その時に『基督抹殺論』なる小冊子が現はれ、十三州の間を小鳥の如く飛び廻つた。この小冊子は完全に宗教を否定したので、民衆も初めて信仰連絡途絶の懸念から遁れ、鐵火碧血の間に祖國と相見ゆる決心をした——と。

木下氏は如何なる書からこの原話をぬいて來られたのか知らないが、私は學生の頃非常な興味を以てこれを讀んだ。そして今、私の聯想ははからずも一部史家の間に問題になつた親鸞抹

殺論に及んで行かざるを得ない。史學的根據は兎も角もとして、水平社運動の爲めを思へば、親鸞の抹殺は白熱的强調を以て叫ばるべきであるかも知れない。

（一〇）紀南事件

同じ栗須氏の『水平審判の日』は衆議院議員田淵豐吉氏と栗須氏初め南海の同人との爭議から、遂に栗須氏が留置され、罰金刑に處せられるまでの感想と物語とである。

前の『水平の行者』は、私も一寸知つてゐる或る老進の小說家が口述を筆記したといふことで、餘りに筆達者な漢文脈が素直に胸に響いて來ない。『審判の日』は誰が筆記したのか知らないが、著者の信念と表現との間に餘り間隔なく、隨つて書かれた事を氣持よく受取る事が出來るやうである。

田淵氏は音に聞えた議場の醉漢で、これをモデルにした加藤一夫氏の『醉つぱらひ演說』なる小說さへもある。彼は華族會館で水平社の誹謗に當る演說をした。元來、彼はその初め紀南の水平社同人の援護もあつて代議士に當選したのに、この事あつたので、同志は憤慨してゐたが、時も時、議會は解散となつた。さすがの仙人も投票を集める關係上、水平社の了解を得て

おかなければ工合が悪いので、のこ〳〵と訪ねて來たが、彼は詫びを言はないで許して貰はうといふずるい腹であり、同人は是非詫びさせようといふのだから、話の纏まる筈はなく、そして彼は結末を付けないまゝ口實を設けて歸らうとした爲め、同人は無理にも歸すまいとし、端なくも亂鬪を演じ、彼は二つ三つなぐられて遂に栗須氏を起訴した。

檢事は單純なる傷害罪として罪に陷らせようとし、栗須氏は思想の食ひ違ひだと言つてそこに力點を置かうとする。そこを書いたのにかういふ一節がある。

「田淵君と吾々の繫爭は、思想問題なんです。なぐり合つたなんてことは、てんで問題にするに足らないことなんです。もとより同人達が、田淵君の頑冥な答辯に、多少騷ぎ立てはしましたらうが……」

私は亢奮に驅られて叫んだ。

「いや、その思想問題とやらも、お伺ひはしたいと思つてゐるんですが……」

檢事はきよとんとした風で云つた。そして傍の折かばんの中から、有島武郎氏の著作にかかる『愛は惜しみなく奪ふ』の單行本を、ちらと、手に取つて見せた。」（六七―六八頁）

檢事が聽取書を作る時、『愛は惜しみなく奪ふ』をチラと見せたのを讀者諸君は一體何のおそ

厭だと判ぜらるゝか。著者は「彼が、自分だつてこれ位の書物は讀んでゐるぞといふ、彼の、まんざら思想問題の分らない人間ではないことについて、見榮を切つたのだと察せられた」と言つてゐる。

この前の政變の際、菊池寛氏が政友本黨から立候補の慫慂を受けたと云ふ噂が文壇に傳はつた時、ある種の批評家達は、これを文藝家が世間に重んぜられて來た瑞兆となして、歡天、喜地、拝舞雀躍してゐたやうだが、さうした蛆蟲共は、有島氏の著書が法曹家の頭腦を測る思想的バロメータアになつてゐる事を知つたら、又大白を擧げて盛宴を張らないものとも限らぬ。

（二）部落解放の先覺

兎もすると冗漫に流れて、或る時は肝腎の文壇とはなれ、又ある時は中心なる特殊部落の文献とはなれて讀者を飽かしめたる罪は輕しとしない。

終りに、前記の文献の表中記載洩れのあつたものを知つたから、聊か補遺しておかう。

春風浪作　藤浪（小説）

長野葉水作　夜の風（小説）

田中桃葉作　模範村長（小説）

以上は高橋貞樹氏の好著『特殊部落史』に散見するが、私はまだ一讀して居らぬ。生田長江氏にも確か特殊部落に取材した小説のあつた事を思ひ出した。多分『面白倶樂部』に連載されたのだと考へるが、まじめな意味をもつゝ作であつた。

外人のものでは恐らくラフカディオ・ヘルンに何かあるらしく考へられる。彼の作中私の讀んだのはドイツで出版されたタウチニッツエディションになつてゐる六冊と、帝大でした講義を集めた四冊、及び零細な遺文を集めた『歐洲及び東方文學諸論文』だが、この中では一寸思ひ出せない。あるとすれば恐らくそれらの書以外であらう。

五寸釘寅吉の話は先頃大阪朝日新聞に連載されたものが詳しかつたさうである。なほ田中貢太郎氏の書いたものに依ると李鴻章を狙撃した小山六之助は北海道網走監獄入獄中、寅吉と一緒になつて、出獄後その事を書いた本があるらしいけれど、これも私は讀んでゐない。

擱筆する前に、私は、水平民族研究に先鞭をつけて『社會外の社會・穢多非人』なる好著を、明治三十四年の昔に出した柳瀬顕介が先驅者としての功績について一言せざるを得ぬ。此の書

は早くから私の手に入れたいと思つてゐたもの〻一つだが、遂にどこの古本屋でも求め得ず、漸く頃日、内田魯庵氏から借りて一讀の機を得たのである。

その序文を見るに、著者がこの方面の研究に志したのは明治二十二三年頃からで、それよりも前水平部落に小學校の開かれた時、聘に應じて教鞭を取るものが無かつたので、自分から進んで事に當つたこともあると言ふ。後に上京して東京法學院に學び、古代法制の沿革を研究してゐて、穢多一人の生命が平民の七分の一にしか相當しない時代もあつた事を發見したのが、直接著作の動機となつたものであるらしい。二十六年稿を起し、廿七八年の間に於て稿を改むる事三四回に及び、日本法律學校で研究を發表した事もあつたさうである。廿九年十月、臺灣總督府に務めてゐる間に病を得て死んだ。書は彼の死後五年、初めて世に出でたのである。

私の借覽した書の巻末には、魯庵先生自らペンを取つて左の如く題されてゐる。先生の許可を得ないが、その價値を普く世に傳へる爲めに玆に引用するであらう。

「大學館は其頃の赤本屋並の書肆にて、此家にて出版されたものは愚書俗書のみにて、一點として有識なる讀書人の案頭に置くを値するものが無かつた。頸堂の遺著が斯る書肆にて出版されたのは、誠に氣の毒であるが、當時頸堂の名は知られず、穢多非人の如きは耳を傾くる

ものも無かつたので、誠に止むを得なかつた。が、穢多非人の研究として頸堂は實に第一指を染めたる先覺者にて、この研究は猶ほ盡くさざるものはあるが、部落解放のパイオニヤたる名譽は、此の頸堂の遺著が負ふべきである。今や此書稀覯となつて、書名をだに知るもの少し、極めて粗笨であるが部落に關する文献としては、本書は永久に朽ちざるものである。」

（大正十四年八・九月、『新潮』）

（附記）徳田秋聲氏の出世作『藪柑子』も同じく穢多に取材したものである事を氏自ら語つてゐられる（大正十五年三月『新潮』）。とすればこれは二十九年八月の『文藝倶樂部』に出たので鳳葉氏の『寝白粉』より世に出たことが一ヶ月早いから、私の論斷に多少の狂ひが生じて來るが、この稿を印刷に廻した後に知つたので訂正の道がなかつた。

明治の社會主義小說

(一)飜譯と飜案

明治年間に現れた社會主義的小說に關する雜考を以て、この篇の題材としたい。文獻を特に小說に限つたのは、殘餘の方面に私が無知識なる爲めで、又、特に明治期の作品のみとしたのは、大正に入つてプロレタリア文學論が起つてからの、雜然、紛然たる群小作品は、到底これを一々調査する方法がないからである。明治四十一年發行、日刊平民新聞に連載せられた石川旭山(三四郎)氏稿、幸德秋水補の『日本社會主義史』(三)に、次の如き一文が引用してある。

「高知に三大政社あり。曰く立志社、曰く靜致社、曰く中立社是なり。立志社は板垣の率ゐる所にして社員一千餘人あり……或はフランス革命を童謠に作りて市街に謳歌せしめ、或は露國社會黨の非運を小說に作つて傳唱せしめ、以て自由民權の說を平民に知らしめんと努め

たり。」

この文の原典は如何なる書で、何人の著なるかを知らない（或は富山房發行の『明治政史』？）、隨つて上記の小說が出たのが何年位の事か分らぬが、前後の文意によりて察するのに、板垣退助が征韓論の爲め廟堂の他の諸參議と議論が合はずして野に下つた直後らしいから、恐らく明治七八年の事であらう。明治の社會主義小說は多分これが最初のものであらう。

次に內田魯庵氏の論文によると、明治十七八年の頃、川島忠之助といふ人の『虛無黨奇譚』（？）なる書が刊行されてゐるさうである。嚴密な小說ではあるまいが、珍らしい文獻たるを失ふまい。

兎に角日本にはまだ社會黨の組織がなかつた時代だから、これら初期の作品が悉く題材を外國に取つたのは、極めて當然の事でなくてはならぬ。

やがて、日本人の主觀の濾過を受けずして外國の題材は外國の文豪の筆になつたものを、なるべく原型のまゝに、枉曲しないで鑑賞したいとの要求が讀書界に起つた。卽ち彼等は正しき飜譯をもとめた。そして森田思軒によりてユーゴーの有名な社會主義小說『クロオドギュウ』（二十三年）と『死刑前の六時間』（二十年）の飜譯が提供せられた。

この二篇は十年以前、私も『思軒全集』によりて一過讀した事がある。感銘はアナトール・フランスの『クレンク・ヴィユ』に似たものがあつて、あれ程巧緻でない代り、粗大な所にフランス以上の面白味を覺えた。

併し、當時まだ日本の一般讀書界は、その飜譯を十分に鑑賞し得るだけの準備が出來てゐなかつたので、彼等はすぐ之に飽いた。そして自由な飜案か、もしくは巧みに筋を按排した抄譯かをより多く歡んで迎へた。

飜案としては、ユーゴーの『レ・ミゼラブル』を、靜岡縣の事に假託して、山路愛山氏の飜案したのがあるといふ。私は讀んでゐない。明治三十年には福池櫻痴が同じく『レ・ミゼラブル』を『あはれ浮世』と題して飜案したものが『太陽』に載つた。それから多分その前年卯の花庵(宮居安吉)譯の『九十三年』が『文藝倶樂部』に載つた事がある。

黒岩涙香の『片手美人』のヒロインもたしかポーランドの革命家であつた。彼女が人道的な立場から、ある嫌疑を受けてゐる者を保護するのを、一味のテロリストが餘計な寛仁だと言つて、遂にそのヒロインまで狙ふに至る結末は、非常に面白い。涙香の數十卷に及ぶ探偵小說中これは私の最も愛好する作品である。

併し飜案の方面で最も多くの努力をした人は堺枯川氏である。氏はディッケンズの『オリバア・トイスト』を『葉櫻長吉』と題して飜案し、ゾラの『ゼルミナァル』を『勞働』と題して抄譯されてゐる。又第二次日刊平民新聞にはバァナアド・ショウの『アンソシャル・ソシャリスト』を『錐の穗』と題して、飜案連載せられた。これは完結してゐない。この外にも恐らくまだ私の知らないのが澤山あるだらう。

（二）日本で唯一のユトーピア

但し以上は明治社會主義小說の、或は先驅であり、傍流であつて、樞軸ではない。私の寓目した諸篇中、眞に創作の名に値するのは左記の諸篇であつた。

矢野龍溪著　新社會
德富健次郎著　黑潮
木下尙江著　火の柱
同　良人の自白
同　靈乎肉乎

木下尚江著　火　宅
同　墓　場
同　勞　働
同　乞　食
根本吐芳著(?)　黒　胡　蝶
中島孤島著　新　氣　運
上司小劍作　人形の子(短篇)

又私の眼を通して居ないものでも、白柳秀湖氏の『黄昏』は、ツルゲェネフの影響を多分に見せた社會的作品であると聞いてゐる。又上司小劍氏の初期の長篇『灰燼』(或は『木像』?)もさうだと聞いてゐる。

いま、多少の解説を試みるであらう。

矢野龍溪氏の『新社會』は、日本の産した唯一の社會主義的意義あるユトーピアとして、注目すべきものである。資本主義社會から、社會主義社會への推移を極めて巧みに説明したもので、されば殊に經濟學者や計數の事にも明るい實際家の賞讃を買つた。千山萬水樓の假面に隱

れた河上肇博士が夙に「措辭巧妙を極め、巧みにこの主義の弱點を蔽うて一讀感嘆の聲を發せしむる所、これもとより尋常一樣の筆に非ず」と言つてゐる。博士は後年に及んでも『近世經濟思想史論』であの著に言及して居られる。

又片山潜氏はアメリカで出版した The Labor Movement in Japan で次のやうに述べてゐる。

"He took the best there was of Utopian-socialism and elaborated on the way to convert Japan into a socialist state. He showed the most skill in picturing the trausition stage from the present Capita list state to a socialist state, adjusted admirable every phase of society and international relation under socialism. These two problems the author considered his own contribution to the literature of Utopian socialism as represented by More and Bellamy. (p. 76—77.)

安部磯雄氏も亦、この書に相當な價値を認めて居られるやうな口吻であつた。

史家の論斷に待てばユトーピアは多く、戰爭や暴政による社會決潰の直後に生れる。この故にプラトウの『理想國』はペロポネソス戰爭に國家の疲弊した間に醞釀され、モーアの『ユト

ーピア』は中世の古い制度とルネッサンスといふ新興味新組織との橋梁として、兇暴と亂雜に揉まれてゐる社會の中に芽生えた。

この標準を提げて、矢野氏の著を振り返ればどうであらう。明治三十五年と言へば、日露戰爭の前で、日清と北清二戰役の好景氣が花火の如く消え失せ、國力の疲弊し切つてゐた時である とも解釋が出來るし、又日本には、ユトーピアを必然的に釀成せしめる程の社會的決潰はない、矢野氏の著は、他の日本の諸文化と同樣、西洋の模倣であるとも結論出來る。私に定說はない。

(三) 蘆花の『黑潮』

德富蘆花氏の『黑潮』は明治三十六年の出版。前記片山氏の『日本の勞働運動』にはかく解說してある。

"Mr. Rokwa Tokutomi, one of the greatest novelists of modern Japan, wrote a socialistic Political novel, Kuro-shio (Monsoon) that shocked the very foundation of the bureaucratic regime." (p.73)

片山氏の著が出版されたのは一九一八年だが、私が讀んだのは漸く震災のあつた年の夏であつた。讀むとそれを藤森成吉氏に贈呈したのである。所が私はその本の中の、右のパラグラフのマージンに、不用意にも「俺はまだ、蘆花の『黒潮』を讀んでゐない。今度東京へ出たら必ずこれを買つて來て一讀すること。」と書き入れをしてゐたと見える(これは『漱石全集』別冊にある丹念な書き入れに剰載せられて、私も二三年、讀む本のマージンに色んな事を書き入れたのであつた。無精な私は、今はそんな手數のかゝる事はしないから、大抵どの本を見られても大丈夫だ)。

所がこの私の不用意は藤森氏の興味を剰載して、遂に氏が『黒潮』を讀まるゝの機會を作つた。氏はその讀後感をかう書いてゐる。

「實に面白かつた。遠慮なく云へば、これ位面白い小説は近年あまり見たことがない。堂々たる日本の社會主義的文獻だ。立派な藝術だ。文體はやゝ古いが、それはそれとして簡潔で、一種特有な明治時代的なつかしみがある。『不如歸』などより未完物的で、これこそまさに、外國へ飜譯して然るべきものだ、と思つた。蘆花氏一流の家庭物と云はゞ云へ、時代の背景思想の先驅、滿幅を傾倒し來る氣魄……就中、ホンの僅かながらイタリイの革命婦人を點出

して來たあたり、私は氏の偉さを初めて知つた氣がした。」(『社會主義研究』六月號)

藤森氏は恐らく『黑潮』を批評した最後の人であらう。私は氏の言以上、一言を贅する要も見ない。たゞ私自身としては、實は、この稿を草する爲めに、倉皇としてこれを一讀したのである事を正直に白狀せねばならぬ。

そして私が現在の蘆花氏に慊らぬものあるは、藤森氏と同じである。

(四) 木下尚江氏の諸作品

併し『黑潮』は、社會主義小說と言ふよりも、むしろより多く薩長政治への反抗小說である。主人公は甲州へ隱退した幕臣になつてゐるが、全卷に噴湧してゐる感情は、明治新政府への參與に立ちおくれた熊本人のそれであると言へば言はれる。吾等は木下尚江氏に來て初めて、名實相添ふ眞の社會主義小說に遭遇するのである。

氏の第一作『火の柱』は明治三十七年に出でた。これについては又片山氏の解說を聞かう。

"In the course of a few months the weekly Heimin, besides its regular issues, published many books. The most popular and largest circurated book among them was 'Fire Pillar'

a novel by Comrade Kinoshita. This book was sold in over ten editions in a few months and made a far greater propaganda than that of Mr. Yano's Shinshakai, It dealt with socialism and socialists of the present day. It is an "Iron Heel" of the Japanese socialist literature." (P. 92)

玆にある "Iron Heel" とは恐らくジャック・ロンドンの同題の小説の事を言ふのであらう。全く『火の柱』と『鐵踵』との中には一味相通ずるものがある。ロンドンの此の作は矢口達氏が『血の記錄』と題して飜譯してゐる。

『火の柱』は『黑潮』と同じく一面政治小說である。日露戰爭を中心としての當時の爲政者と政商の結託が正面から描寫してある。と共に正しく社會主義小說で、週刊時代の『平民新聞』編輯者とも覺しい主人公が讀者景仰の中心となるので、まことに火のやうな情熱に燃えてゐる作品である。

併し普通に氏の代表作と目されてゐるものは『良人の自白』で、量から言つて上中下續四卷の雄篇、アーサア・ロイドに依つて英譯までされてゐる。銀時計の秀才法學士白井俊三が主義と戀愛と恩義と愛慾とに揉まれて幾變轉の生活を經た後、遂にロシヤ虛無黨の飛丸に斃れるま

での生涯を經とし、之に翠といふ戀人、お高と呼ぶ妻、お玉といふ私娼、與作といふ小作人その他を緯として絡ませ、工場問題や共産村の事まで書いた大仕掛なもので、少年の頃の私は七八回も繰り返して讀んだ。

木下氏の著書については思ひ出す事が多い。最初に讀んだのはまだ高等小學校の生徒の頃であつた。同郷の先輩で、只今『東洋經濟新報』にゐる杉山義夫氏(當時は早稲田の政治科の豫科生であつた)の机の上に、最初その三冊を見出したのが病みつきであつた。翌年小學校を終へて大阪へ出て、最初に貸本屋から借りて來てよんだ本は、鄉里に於て一冊だけ讀み殘したその續篇であつた。

今から思へばこの作にユーゴーの『レ・ミゼラブル』、トルストイの『復活』などから多分の影響を受けた跡のあるのが眼につくが、當時の私達にはそんな事は分らない。全く無條件な心酔であつた。

「良人の自白」のやうな小説が書きたい!」——これが文壇に志すとから今日まで放たざる私の念願である。所が私のその言葉が中村白葉氏を通じて加藤武雄氏に傳へられた。加藤氏も一面に於て全く同じ素願を抱く人だつたので、二人大いに共鳴して、ある夜深更まで抱負を語り

合つた事がある。當時の加藤氏はまだ勿論創作集は一冊も出て居らず、氏の文壇的地位を確立した『嗚咽』さへも發表になつてゐない時であつた。

然るに私は一向志を得なくて、漸く文壇の一隅に危い浮沈をつゞけて居るに反し、加藤氏の聲望は隆々として小説壇を壓するに至つた。近時説をなす者あり、氏の作品を單に甘さ一遍のものゝやうに誣ひてゐるが、恐らくさう云ふ人は氏の作をよく讀んで居らず、その意圖の如きは汲まうともしてゐない。

話が思はず餘談に外れた。大逆事件の時木下氏の著作は悉く發賣禁止になつた。が、私はその全部を買ひ集めた。私の早稲田へ入つた頃はまだ自然主義の餘勢が盛んであつたが、併し島村抱月氏がある會の席上で、「早稲田からよくあんな頭のいゝ人が出たものだ」と言はれたのを思ひ出す。

木下氏の社會主義思想が作品の中に白熱したのは『良人の自白』を頂點とする。『靈乎肉乎』に於ては半ばの興味が宗教に移り、『火宅』『乞食』となるに及んで、遂に宗教が主勢力となつて社會主義熱は抑されて了つた。『墓場』や『勞働』はプロットのない一篇の回想記的作品と見る事が出來る。『民約論』に系統を引く明治十年代の自由民權論が田舍に如何に波及したかを描い

てあるので、明治思想史研究者の好参考とならう。木下氏の諸著作は、古本屋でももう殆んど得られなくなつたが、氣に掛けて居れば出ない事はない。併し『靈乎肉乎』の下篇と『火宅』とが中々見つからない。それまで渉獵してゐる人は、木下尚江氏の讀者としても餘程玄人の部に屬する。

私は氏の著作なら全部渉獵した積りでゐる。『饑渇』『懺悔』『野人語』の類ひから『法然と親鸞』『日蓮』まで眼を通した。

難を言へば氏の作品にはどれにも一種の壯士的臭味が付き纏ふ。それが吾等を飽かしめて、書架においてもつい人に遣つて了ひたくなる。私は三四回位、遣つたり、又集めたりした。

アミエルがユーゴーの作を目して、まるで硫酸で書いたやうだと言つてゐる。木下氏のは硫酸で書かないまでも、火酒か燒酎で書いた位な鋭烈味はある。それが讀者を烈しく魅し、そして烈しく飽かすやうである。——洗ひ浚ひ言つて了へば私は早稻田にゐる時、卒業論文には『木下尚江論』を書かうかとさへ思つてゐた。併し日本人題材の論文を書く者は外國語の出來ない生徒と、ほゞ相場がきまつてゐたので、私は勿論當時の生徒並以上に出來もしなかつたが並以下に不出來だと思はれるのも癪だつたから思ひ留まつた。併し一度書いて見たい氣は今でもあ

る。

（五）土地放棄

『黒胡蝶』（表題も果してかうであつたかどうか聊か疑はしい）は、木下氏の著作に刺戟されて出來た作品らしかつた。白い中に赤字で表題をぬいた紙表紙も木下氏のそれと同じであつた。作者は根本吐芳氏であつたらうと記憶するのだが、併し根本氏の外の作品と餘りに傾向が懸けはなれるので、或は私の思ひ違ひであるかも知れぬ。大學生が神戸の貧民窟へ入つての運動を題材としたもので、手ツ取り早く言へば今日の賀川豐彦氏の運動を先き振れしたやうな作品であつたが、大して面白くなかつたといふ記憶を持つてゐる。

中島孤島氏の『新氣運』も作として格別言ふ程の事はない。併し中島氏の業績を今日から細査すると、實に伸びるべくして伸びなかつた才人の感が深い。中島氏は早稲田出身者としては珍らしくよく外國語の出來た人らしい。隨つて日露戰爭前後までは『新小說』で海外文壇の紹介批判を擔當し、上田敏氏の如く垢ぬけはしてゐないが、かなりな才筆である事を思はせるに足るものがある。然るに傍らにあつた島村抱月といふ大樹が、餘りに亭々と高く聳えて、その繁

茂した枝葉の影になつて、遂に十分な成長を遂げなかつたのは氣の毒であつた。

『新氣運』は本文よりも、木下尚江氏の序に注目すべき一項がある。卽ち——

「然れども君が社會人生に對する理想目的に就ては、小生また同情に堪へざるものあり、君が近く故山の土地を擧げて農作者の中に御引渡相成候事の如きは、小生が常に地方有爲の地主に向つて勸誘罷在候所のものにて、感激不斜次第に御座候。」

當時(明治三十九年)の文壇の事情に暗い私は、中島氏の如上の財産放棄が、どの位な程度に實現せられたのかを詳らかにしないが、もし果して此の事があつたとすれば、正に有島武郎氏の先驅と言つてよいであらう。中島氏は早くからトルストイに傾倒した人で、『藝術論』の如き、最初の紹介者ではあり得ない迄も、早くその感化を蒙つた一人ではある。

上司小劍氏の初期の短篇には社會主義小說の名に値する者が數篇あるだらうが、私の今も明かに記憶するのは、明治四十一年初春の『文章世界』增刊に載つた『人形の子』(或は題は違ふかも知れぬ)一篇である。これはある社會主義の家庭を描いたもので、可憐な少女が赤旗事件の時の小旗を打ちふり、亡命のロシヤ革命家から敎はつた革命歌をうたひながら、母に連れられて入獄中の父に面會に行くといふ筋だつたかと記憶する。

それ迄の社會主義小說は、文壇の主流とは殆んど關係のない人に依つて創作されて來たのだが、孤島氏に於て文壇に接近し、小劍氏に至つて、完全に文壇に喰入つたと言ふべきである。併し文壇的になると共に著しく宣傳的效果は失はれた。玆に考へてみるべき事はないか。有力なプロレタリア文學の作成を念ずる者は、既成文壇の鑑査を餘りに眼中におき過ぎてはいけないやうに思はれる

明治四十三年は大逆事件。四十四年正月幸德一味に死刑の宣告が下つて、その後は社會運動も全く屏息し、その傾向ある作品も一向出なくなつた。但し、四十四年二月の『太陽』の懸賞脚本に太原冬夜(?)といふ人の『闇と脚光』なる一篇が、坪內逍遙博士の選で當選してゐた。何でも工場の一室に寢起きして大學へ通つてゐる大學生と、そこへフランス語を習ひに來るブルジョアの少女と、その工場を追はれて行くみじめな一人の職工とを取扱つたもので、會社が職工のをさめた保證金を色々な名目のもとに掠め取つて一厘も返さない事など、巧みに書いてあつたと記憶する。因みにあの頃の『太陽』の當選者で後に文壇に名を成した人には瀧虎彥、江原小彌太、北尾龜男氏などがある。

それから平出修氏の『逆徒』といふ一篇が題材として大逆事件に觸れたといふので、所載誌

『太陽』が發賣禁止になつたのもあの頃ではなかつたらうか。私は遂にそれを一讀する機會を持たなかつたが、併し、今でもあの作は是非一度讀んで置きたいと思つてゐる。

荒畑寒村氏の『冬』『夏』などの作品が一部の讀者に注目されたのは、多分大正に入つてからであつたらう。初めは大杉榮氏の主宰して居られた『近代思想』で讀んだと記憶する。それらの作は『逃避行』といふ集の中に收められてゐるであらう。宮島資夫氏の『坑夫』が出たのは、又それから後であつた。

以上は私の狹い視野に收め得た日本の社會的文藝發達史で、大正プロレタリヤ文藝消長の前景をなすものである。一張一弛は何物にも免れぬ所、それを以て直ちに此派の文藝絕滅と見るが如きは短見憐れむに堪へたる者がある。なほ私の見落したものは、示敎に與りたいと思ふ。

（六）百姓一揆

それから序を以て言つておく。ある講演會で農民組合のI君の小作料の講演を傍聽してゐたら、それが濟んでから突然、彼の方から「百姓一揆、若しくは上納米に關する紛擾を取扱つた小說で、どんなものがあるだらう」との質問を受けた。私は大いに面喰つたが、講談を除いて

はさしあたり左の三篇を答へた。

塚原澁柿園著　　俠足袋

中里介山著　　高野の義人

森鷗外著　　大鹽平八郎

佐倉宗吾を取扱つた小説は、私には思ひ出せなかつたし、菊池寛氏の『義民甚兵衛』は、まだ見ても讀んでもゐないのであつた。（註1）

私の擧げた三篇の中澁柿園のは幕末の信州の大飢饉が發端であり、中里氏のは高野山の上納米の桝の事から波瀾が重疊して來たのだと記憶してゐる。いづれにせよ社會主義小說の副として百姓一揆小說の蒐集も面白いであらう。手をつけてゐる人があれば研究に接したいものである。（大正十四年十月、『新潮』）

（註1）本年になつて高橋季晖氏の『百姓一揆』なる長篇戯曲が出版せられた。

南蠻文學解說

(一) 南蠻小說の分類

南蠻紅毛の史蹟に材を取つた明治大正文學の考察を試み、京都大學の新村出博士に呈したいと思ふ。實はこの起稿を思ひ立つたのが、頃者、『南蠻廣記』一卷を購うて一過讀し、興趣つくるを覺えなかつたのに依る。たゞ蕪文を以て博士の高著に對するのだから、雜魚の魚まじりにも當らないと嘲る者が多からう。笑ひたいものは遠慮なく笑つてくれ。

同じく外夷に取材した文藝と言つても、私は作に取扱はれてゐる時代に依つて左記の二つに區分して見なければなるまいと考へる。

(A) 島原亂以前、スペイン、ポルトガル等南歐の切支丹渡來期に屬するもの。

(B) 鎖國後阿蘭陀のみに交易を許すやうになつてから以後に屬するもの。

そして題材に對する作者の態度に依つて、左記三樣に區別するのが便宜であらう。

（イ）たま〳〵取扱ふ材料が多少南蠻物に觸れてはゐるが、作者の態度としては、從來の講談的、英雄崇拜的好尙の上に立つもの。

（ロ）純然として趣味的、好事的に南蠻材料、切支丹材料を取扱つたもの。

（ハ）好事的、趣味的半面と、講談的、英雄的半面との混淆せるもの。

私は何も敢へて遺漏なきを期するものではない。以下、たゞ思ひ浮ぶまゝの作品を列記しよう。

だがその前に、文壇では、いつ頃から南蠻、切支丹などの材料に着目し初めたかに見當を付けておくのも無益であるまい。一體、日本人が文祿慶長の昔、既にエソポ物語、イミタチオ・クリスチ等の邦譯、平家物語の羅馬字口語譯などの、天草や長崎の耶蘇會で出版された事を知つて興味を覺えたのは、明治廿一年 Ernest Satow に依つて『日本耶蘇敎會刊行書目』が出版せられてから後の事であらう。そして最初には史學者や、語學者の興味を喚起したらしいが、文壇の人が着目したのはそれよりずつと後れた。私の眼に觸れた限りで言へば、上田敏氏が『外國文學』（『文藝講話』所載）なる講演で之に言及されたのが最も古いものであつたが、併しそれとて三十年も後期に入つてからの事である。

そしてこれが又詩なり、劇なり、小説なり、實際に創作の上に現はれて來るまでには、十年位の歳月が經過した。言ひ換へれば明治も四十年前後になつてから、やつと一部作家の好尚がその方へ向いたやうである。

(二)南蠻傳奇小說

先づ(イ)の傳記的趣味の小説で、私の讀んだものゝ目錄を掲げよう。

(1) 中里介山作　原主水
(2) 塚原渋柿園作　天草一揆
(3) 村上浪六作　呂宋助左衛門
(4) 中里介山作　聖母の畫像

中里氏の『原主水』は初めは都新聞に連載されたものであらうが、後に單行本として自費出版された、多分まだ『淨瑠璃の仇討』も『大菩薩峠』も書かない以前の執筆にかゝるものらしく、稚拙愛すべきものゝあるのが有力に之を證明してゐる。氏は自ら「これが多分日本の切支丹の事を小説に書いたはじめのものであつたらうと思ふ」と言つてゐる。私はその單行本とな

つたものは所持してゐたのだが、今いくら書齋を探しても見當らないので、出版の年月だに明かにし得ないのを遺憾とする。

澁柿園の『天草一揆』は、三十九年東京日日新聞に連載せられて、翌四十年、單行本となつた。

澁柿園の作中でも『由井正雪』や『俠足袋』などはなか〳〵面白いが、『天草一揆』は日演筆記でもある關係から、期待した程に面白くはない。たゞ此の小說は彼の作中、古本屋を捜しても仲々見當らないものである。私も可なり長い間求めてやつと一部見出したのだが、その前にもその後にも、かつてこの書を一度も見掛けた事がない。

かつて平林初之輔君に貸したら、相當に面白かつたと言つて返して來た。震災のあつた前の二月、日露交涉が行き惱んで、ヨッフェが熱海の溫泉に微恙を養つてゐた頃の事である。勞農圖書館備品としてヨッフェの求めてゐる日本の書籍目錄が十數種一齊に新聞に出た事があつたが、その中に此の『天草一揆』も見えた。平林君が私の家へ來て「君、あれを送つてやらないか。」と言つたので、私は「だつてもう見付かつたらう。」と答へたのだが、此の一事でもこの書が割合に新らしいに拘らず多少の珍本である事が分ると思ふ。

浪六の『呂宋助左衛門』は四十五年の出版。やはり彼の作中最も面白いものとは言ひかねるが、一讀の興味はある。助左衛門の名は後に芥川龍之介氏の『報恩記』に一寸出て來る。

介山氏の『聖母の畫像』は前作『原主水』の改作で、序文にもある通り書名は私が付けたのであつた。大正十三年の出版。著者はこの書の末尾で、原主水が同宗の仲間と七條磧に磔刑にさるゝ場景を描き、

「この五十餘人が殘らず燒き亡ぼされる光景を、程離れた群集の中で、編笠越にながめてゐた壯士があつた……この壯士は、一夫恨を含めば六月霜を飛ばすと打ち吟じながら、この場を去つて肥前の天草島の方へ飛んで行つた」と結んで、由井正雪を暗示してゐる。澁柿園の『天草一揆』でも正雪が馬子に化けた天草四郎に翻弄さるゝ所から物語が展開してゐる。どの道、單なる傳說か知らないけれど正雪が切支丹と關係のあつたことが傳はつてゐるのに、併し澁柿園の『由井正雪』ではその關係が些少も書いてなかつたと記憶するから、該作を前記の表中には列記しておかなかつたのである。碧瑠璃園の『由井正雪』は大阪朝日新聞連載當時飛び讀みしただけで、切支丹に關係の有無が不明だから玆では默殺しておく。

最後に前記の諸作中、多少態度の趣味的に傾いて、南蠻又は切支丹の薫りを出すことに、意

識的努力を拂つてゐるものがありとすれば、それは中里氏の作だけである。

(三) がらしあ主題の作品

傳奇的好尚と南蠻的趣味と混淆したやうな作品は、ふしぎにも細川忠興夫人がらしあを描いたものに二三あるから、茲にがらしあを取材した作品を纒めて掲げよう。

(1) 藤澤古雪作　がらしあ(劇)
(2) 岡本綺堂作　細川忠興の妻(劇)
(3) 藤井伯民作　細川がらしや(劇)
(4) 芥川龍之介作　糸女覺え書(小説)
(5) 渡邊霞亭作　細川がらしや?(小説)

彼女は明智光秀の娘で、忠興に嫁した後、父が反逆のため離別せられて丹後の三戸野へ退隱してゐたが、その間に切支丹となつて信仰の厚い所から、がらしあなる法名を羅馬法王から與へられたのである。後、秀吉の斡旋に依つて元通り復縁が叶うたが、忠興の東北遠征中、石田三成から人質として大阪城に入る事を要求されて、それを拒み、打手に襲はれて遂に自害して

果てたのである。

私は今茲で變な好奇心を起して、カトリック公教會の宣教師である佛人 E, Papinot が明治四十二年に刊行した Historical and Geographical Dictionary of Japan に、がらしあの事を何と記述してあるか試みに引いてみた。

"……During that time Ishida Kazushige, in order to detach the diamyo who had followed him from Ieyasu, ordered their wives and children to be seized and to be kept in the Castle of Osaka as hostage. When the emissaries presented themselves at the house of Hosokawa the karo Ogasawara informed his mistress that he had received orders from Tadaoki to put her to death rather than to give her up to her enimies. Gracia submitted to the will of her husband and died courageously; she was 38 years old (1600).

この "died courageously" の際の彼女の心事が、餘程諸家の興を惹くものと見えて、前記のやうな諸作品も生れたのである。

古雪氏のは四十年の出版、一體天主の教旨を奉ずるなら自殺は嚴禁せられてゐる筈である。又武士道に隨ひ良人の命をきくなら自害しても敵の辱しめから遁れねばならぬ所である。そこ

にがらしあの、信ならんと欲すれば貞ならずの、進退谷まる煩悶があるべきなのだが、古雪氏は、『オルレアンの少女』の譯者にも似合はずこの心的苦悶を易々と片付けて、がらしあが自殺して天國に甦ることを信じてゐるのだから、感銘甚だ薄弱である。

綺堂氏のは大正五年の作。さすがに老巧なもので殊に歌舞伎劇の作者だけに、進退兩難の煩悶の後に、武士道に隨つて自害する事になつてゐる。

伯民氏のは大正十一年の作、作者がカトリックの信者で、且つ東洋カトリック婦人會の囑に依つて書き、公教青年會で出版したのだから、言ふまでもなく武士道に隨つて自殺したとの見解は排し、惡に敵するなかれの思想で家人を戒めておいたのに、彼女の子供を落ちのびさせやうため、家來が思はず敵を斬殺したのから事端が急迫し、止むを得ず家來に頼んで介錯を受ける事になつてゐる。

お玉――信仰あさき者とお笑ひ下さるな。たとひ神の教に背きましても、わたしは矢はり日本の女、武士の妻として死にまする。(岡本綺堂氏作)

ガラシヤ――凡て劍をとる者は劍にて滅びるとは、でうすの誡しめぢや、敵をも愛するがきりしたんの道ぢや、さればいかなる責苦にあふも、爭はぬが妾の決心、ガラシヤとは惠の

意味、よし味方の手で死なうとも、敵の双にかゝらうとも、妾はおとなしう喜んで、惠みに充ちて死にませうぞ。（藤井伯民氏作）

この短かいセリフを見た丈けでも、兩氏の解釋の差異は明かであらう。藤井氏の作は雜誌『カトリック』の創刊號で小山內薰氏の賞めてゐたのを記憶する。

三氏の作を去つて芥川氏の小說を見ると、これは又皮肉極まるものである。がらしあの最期については霜女の覺書が存してゐる爲め今日もその實狀が可なり詳細に分るのに對し、芥川氏は綠女なる架空の人物を立てゝ、霜女とは眞反對な覺書を假作したわけである。それによると忠興夫人は烈婦でも、賢女でも、美人でもなく、現代の上流の基督教家庭の婦人の如く、權高い、ヴァニテイの強い、顏は鼻が高すぎて厭な女になつてゐる。そして從來の史實傳說で立派に傳はつてゐる事を惡く惡くと解釋し、伴天連ぐれごり屋に殘す橫文字の五六行の遺書をするのに一刻餘りも掛つたとか、最期の際に介錯に來た二十二の若衆を見て頰を染めたなどゝも書いてある。フェルプス教授の謂はゆるパラドキシカルな手法を用ゐて仕上げたもので、がらしあを描いた諸篇中の最大珍篇である。併しかゝる作も一つ丈けはあつてもよい。私は芥川氏の南蠻物中この作はかなり高く評價してゐる。といふのは私は決してがらしあの無條件的な賞讚

者ではあり得なくて、却つて芥川氏の書いたやうな女ではなかつたかと思つた事があるからである。

渡邊霞亭のはある婦人雜誌に連載せられてゐたのを、題だけ見たので、讀んだわけではない。それから四五年前、がらしあを描いた佛文の劇が三册丸善へ來てゐたと、內田魯庵氏に聞いたが、私が訪ねて行つた時には賣り切れてゐて、たうとう手に入れる事が出來なかつた。その一册は細川家で買入れたさうである。

(四) 趣味的・好事的作品

前項で芥川氏の作品に言及したので、この稿も漸く、文壇の主流に接近して來たわけだが、文壇の現役、又はかつて現役を務めてゐた作家の作品で、私の寓目したものは大して多くはない。

(1) 木下杢太郎作　南蠻寺門前（劇）
(2) 同　繪踏（同）
(3) 長與善郎作　青銅の基督（小說）

（4）芥川龍之介作　　單行本『報恩記』に收められたる作全十四篇（悉く小說）

この位なものである。今からは十年も前にならうか。木下氏が長崎附近に切支丹の遺跡をさぐり、古老を訪ねて歩かれた見聞記を、私は非常な興を催して讀んだものである。が、『南蠻寺門前』は優れた劇とは言へない、用語なども甚しく洗煉を缺き、殊に佛僧と伊留滿喜三郎との法論の如きは、讀むのが氣の毒になる位に變なものである。『繪踏』には長崎殉教奇談なる別名までついてゐるから面白いと期待したら、その者は失望するだらう。尤も未定稿と斷つてあるにはあるが……。たゞこの作はオオバネルの短詩を上田敏博士の譯した

小鳥でさへも巢は戀し、
まして青空、わが國よ、
うまれの里の波羅葦增雲（バライソウ）（『海潮音』）

の句で始まつてゐる事を附記しておく。『南蠻寺門前』の跋を見ると佐野天聲氏に『切支丹ころび』なる史劇があるらしいが、私は讀んでゐない（註1）

長與氏の作は、寛文の頃長崎古川町に荻原祐佐と言ふ南蠻鑄物師があて、餘りに神々しい踏繪を作つた爲め、信者と誤られて殺されたといふ頗る興味ある題材で、彼が純潔な信徒の處女と、

聰明で勝氣な遊女との間に彷徨する戀心も、作に光彩と潤澤とを添へていゝ。それに長與氏には大いに描かうとするアンビシアスな力味もある。隨つて讀後かなり強い感銘は受けたが、氏の作は常に、完成の最後の一つ手前の所で大きな躓きをしてゐる。藝術に仕上げるに、肝腎な締め釘が一本足りない。題材にはかなり感心させられても、作としては十分に承服出來ないのはその點である。それに、芥川氏の作などゝ比較すると、當時の切支丹に關する研究などもかなり疎漏で、藝術的感興を殺がれる事が少くない。荻原祐佐の事蹟は長崎では誰れ知らぬ者もない有名な話であるらしい。『市史』第二卷には彼が遺作の踏繪の寫眞も二三點載つてゐる。

かくて吟味して來ると、南蠻小說は今の所芥川氏の獨擅場と言つてもよくなつて來る。それに氏には作品の數も亦最も多い。一體に主流文壇に立つ諸作品は、本稿の冒頭に私の分類した(3)の趣味的、好事的に傾いたものが多いのだが、芥川氏の作はその最高位に立つものと言つてよからう。

それに氏はさすがに世に聞えた讀書家だけあつて、南蠻の研究もなか〳〵廣く、且つ詳しいのがその作品を讀めば自ら分る。傷を新村博士や內田魯庵氏の間に求めるなら別であらうが、文壇で吾々年輩の者の間に於ては、南蠻文献を涉獵せること、恐らく芥川氏の右に出づる者は

あるまい。而も多くの場合、氏はそれを殺してゐるので、讀み流せば氣が付かないが、コーテーションも何もない文章の中で、私如きにさへ「はゝあ、これはあの本のヒントだな」と思ひ當るのがちよい〳〵出て來る。その廣汎な讀書的知識を殺してはあるが、それは恰も寶石を叩き碎いた粉末で塗り固めた壁の如く、作品の全面に一種眩しい光澤となつて輝き出てゐる。

その光澤の裏には、アナトール・フランスの如く、輕快に機智的に、皮肉に捻つて物を見る眼がある。その點については『糸女覺書』の項でも言及したが、あの特色は外の作にも見られる。wandering Jew が日本にも渡來したか等と考へる所など如何にも氣がきいてゐる。『煙草と惡魔』も面白い。その結末に氏は「唯明治以後、再、渡來した彼（惡魔）の動靜を知る事が出來ないのは返すゞ〳〵も遺憾である。」と言つてゐるが、試みに私がその動靜について答へてみよう。再渡來した惡魔は、暫く留守してゐた間に日本人が餘り惡賢くなつてゐて、惡魔の上手（うはて）に立ち得る位になつたから、さすがの彼等も策の施しようがなくて、又故郷へ逃げ歸つたのだ。（但しこれはアンドレエエフの『サタンの日記』の口眞似である）。

併し芥川氏の南蠻物中私の第一に好きなのは『報恩記』である。之は三部に分れて第一は阿媽港甚内が伴天連へのこんひさん（懺悔）の形式、第二は北條屋彌三右衞門が同じ伴天連へのこ

んひさん、第三はほうろ彌三郎がびるぜんマリアに向つての告白の形式となつてゐる

テニスンの獨語體の劇的抒情詩『ユリセス』が發表せられた時、ヤンキイの百姓哲人エマスンは「この詩は最高位をかち得べき逸品で、次の世紀に於て、この形式はより豐かに培養さるべき運命を以つてゐる」と豫言した。ブラウニングが Dramatic lyric と命名して愛用した詩體もこれで、古人今人を問はず世評と違ふ新解釋を作者が加へ、その心理を獨白體に述べさすのである。英文學には造詣の深い芥川氏のことである。『報恩記』には意識的にか、無意識的にか、ブラウニングの劇的抒情詩の樣式の影響が無かつたと誰がよく保證し得よう。

第二に好きなのは『尾形良齋覺え書』と『奉教人の死』の二篇。後者は「予が所藏に關る長崎耶蘇會出版の一書、題して『れげんだ・おうれあ』と云ふ。……上卷の扉には羅甸字にて書名を横書し、その下に漢字にて「御出世以來千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻也」の二行を縱書す。年代の左右には喇叭を吹ける天使の畫像あり。……などの註記によつて、南蠻趣味の好事家を驚倒させたので名高い。併しそれは單なる作者のトリックで、そんな本は實際には無いのだから、借覽を申し込まれたりしては、作者は當惑もし、苦笑もしたらう。——尤もあの註記を仔細に讀めば、嘘くさい節は二三ならずあるさうである。Legenda Aurea の『れ

げんだ・おうれあ』と讀むべからずして、『れぜんだ・おうれあ』と讀ますべきは新村博士に依つて指摘され(『南蠻廣記』三四三)、天使の喇叭を吹いてゐる扉繪などは、當時の出版書には無いさうである(『東洋文庫展觀書目』『甲挿畫參照』)。

なほ、今手許にこの作發表當時の『三田文學』がないが、併し芥川氏は初め「慶長元年三月上旬鏤刻也」として發表されたものらしい。所が林若樹氏の指摘に依つて慶長改元は十二月で、元年三月はない事が分つたので、單行本『報恩記』には『慶長二年』と改めてある。なほ內田魯庵氏がこれに對するコンヒサンを書かれてゐるさうである。林氏の事と、魯庵氏の事は『南蠻廣記』に依つて知つたので、私は原文を讀んでゐない。海田泣菫氏がこれを茶話に書かれたのはその當時の大毎で一讀して記憶してゐる。宇野浩二氏が『龍介の天上』なる諷刺童話を書き、「これはオラン國のラメ・デタなる書から飜譯した」と註記して、芥川氏に一矢を酬いたのも亦有名な話であつた。これ程世を騷がせた作は明治大正を通じて珍らしいであらう。それと言ふのも芥川氏が若手の中の珍本通であり、稀覯書の蒐集家であるとの先入觀念が讀者にあるから、かゝる藝當も打てたのである。

併し原典がなくて、全然あの話(白隱の逸話の脫胎のやうなものである)が、作者の空想にな

つたとすると、私は先づ、慶長頃の口語を自在に驅使したあの修辭力に驚嘆する(試みに新村博士譯「南蠻本朝家物語抄」と對比せよ)。何と言つても芥川氏は當代の文章家である。それに着想もなか〳〵慧敏で、もしあれをフランス流に輕く扱はずに、ロシヤ流に飽くまでも掘下げて行つたら、すばらしく傑れたものになるであらうと思はれるやうな題材である。たゞ氏の藝術は、鵠の風に類み、巧緻な象牙細工の案外に脆いやうな弱點があつて、長與氏に於ては餘りに過剩なるバアバリズムが、芥川氏には又餘りに無さすぎるのが私達のやうな田舍者には飽き足りない。

(五)南蠻詩の一二

芥川氏の作品で少しく道草を食ひ過ぎた爲め、島原亂後に於ける阿蘭陀材料の作品については到底解說してゐる暇がないので、埋め草までに南蠻趣味の詩一二を揭げよう。

上田敏博士は何と言つても、文壇では南蠻趣味開拓の先覺である。

眞鍮の角なる版に
ビルゼン(處女)の像あり、

諸ろの御弟子之を環る
母にてをとめ、
わが兒のむすめ、
歸命頂禮、サンタ・マリヤ。（『上田敏詩集』七四頁）

これは『踏繪』と題する詩の第一スタンザである。
北原白秋氏にも斯るエキゾチシズムに對する憧憬があつて、明治四十二年に出でた第一詩集の名からして既に『邪宗門』であつた。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹の魔法
黑船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいる
南蠻の棧留縞を、はた、阿剌吉珍酡の酒を

これは『邪宗門秘曲』と題する詩の第一スタンザで、玆には後年の阿蘭陀趣味が大部分だが、天草當時の南蠻の薫りも高い。

そのかみの筑紫の女王、今の宮崎龍介氏夫人なる燁子氏にも『踏繪』なる歌集があつたと記憶するが、不幸にして、私はまだそれを讀んでゐない。

それから日本人の作ではないが Miss. Florence Moore に "Anjiro" なる小説がある。An historical romance with the introduction of christianity into Japan in the sixteenth Century と題下に註がある。アンジロとはザビエル上人最初の日本人弟子なる彌次郎の事である。機を見てこの作については紹介する所があるであらう。（註2）（大正十四年十一月、『新潮』）

（註1）木下杢太郎氏は『改造』大正十四年十二月に『安土城記』を發表せられた。さきの暴評を取消して、この作には高き敬意を寄せずには居られない。

（註2）『源氏物語』を前に英譯した、デイッケンズに "Amakusa shiro" なる小説の作があることを内田魯庵氏からきいた。又吉野博士の所藏書目錄のなかに "Juto Ucon-dono"（高山右近）なる小説のあるのを見た。

飜譯文學雜考

（一）海外文學三如來

飜譯の一半の目的は、海外の文献を National Possession（國民的所有）にするといふ事にあると共に、他半の目的は、なるべく原語から直接に逐字譯すると云ふことになくてはならない。

この兩目的は一見相矛盾するやうではあるが、併し傑れた飜譯に於ては、ふしぎにもそれが渾然と融和し、統一されてゐる。日本に於ける海外文献の飜譯事業は、本誌（早稲田文學）の謂はゆる胎成期（小説神髄）刊行の明治十八年前後より三十年前後まで）に於て、漸く完備して來た。その功績者については、左に坪内博士の『文學その折々』の一節を摘錄して説明に換へよう。

「美文を飜譯して、勞鬼原著の現れ來たれるかと思はしむる譯者は、吾人之れをたゝへて如來と名づくべし。明治文壇幸ひにして已に三如來を得たり。英文如來を森田思軒氏とし、獨

文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。輓近內田不知庵、原抱一庵の諸氏、また大に翻譯に力を盡くせり。文界遠からずして二三の新如來を加ふべし。」

この論者自身の逍遙博士が英文如來として加はる事は勿論である。

併し吾等はこの攻究に入るに先立つて、一應、日本に於ける西歐文獻移植の經路を歷史的に大觀しておく事の便宜なるを思ふものである。

(二) 日本翻譯史

日本に於ける西歐文獻の最初の翻譯は、恐らく文祿慶長の昔、長崎や天草の耶蘇會學林で刊行せられた『イソップ物語』や『コンテムッス・ムンデ』(トマス・ア・ケンピスの『基督に倣ひて』の翻譯)などであらう。

やがて天草の亂後切支丹は禁壓せられて、海外との交易が途絕すると共に、その翻譯も亦一切中斷せられて了つた。たゞオランダ人との交易のみが許されてゐたので、將軍吉宗の時代、洋書解禁後幾何もなく、今村明恒博士の遠祖今村源右衛門に依つてオランダの馬醫馬術の書が翻譯せられた。『西說伯樂必携』がこれである。私はその本を見た事がないから詳しい事は知ら

ないが、何でも既にビールの文字に麥酒の譯字を宛てゝあると言ふ。それから今一つ特筆大書すべきは安政四年に横山由清譯の『魯敏遜漂行紀略』の出てゐる事である。オランダ書からの重譯らしく、それも粗末な梗概に過ぎない。が當時、諸種の漂流談の喜ばれてゐた時代であつたことを思ひ合せるとそこに深い意味がある。

徳川末期から王政維新までに出た譯書には兵法や砲術の書が多い。福澤諭吉や箕作麟祥の如きも亦さうした戰術書の譯をしたもので、今も時々その古本を見かける。

明治初期には譯書の範圍も廣くなり、前記戰術書の譯者によりて、英米獨佛の政治書や憲法の書の譯出が盛んに行はれた事が著しく目につく。それについては『泰西通鑑』『佛蘭西革命史』の如き史書、開化の標語の下に西歐の物質的文明を紹介した化學書、機械書の如きが比較的多く要求されてゐた。

文藝書の現はれ初めたのは先づ明治十年以降と言つてよからう。尤も明治四年に中村正直の『西國立志編』、明治六年に『イソップ物語』など出てゐるには居るけれど。

『西國立志編』は完全に近い逐字原語譯と言へる。その感化を蒙る事の深かつた增田藤之助氏がその翻譯ぶりについては、明治三十九年頃の『文章世界』に論じてゐられた事を記憶する。

このやうな道徳訓に近いものは逐字的譯法を試みても比較的理解され易いが、風俗習慣の異る小説や劇はなか〳〵さう行かない。そこで西洋小説最初の飜譯なるリットンの『アーネスト・マルトラバース』及び『アリス』は『花柳春話』なる題を附され、今なら「接吻して下さい。」とでも直譯すべき句が「乞ふ、卿が朱脣を一嘗せしめよ」と云ふ風に譯されねばならず、第二の譯書なるスコットの『ザ・ブライド・オブ・ランマア・ムーア』は『春風情話』なる題を附されて、挿繪には芝居の照手姫でも見るやうな花簪の滿艦飾の美人を揭げねばならなかつた。これは原作を忠實に紹介すると言ふよりも、海外文藝を National Possession に早くせしめたいと云ふ譯者の用意であり、又さうしなければ海外事情に通じない一般讀者には分らないので他面讀書界の要求でもあつたのである。

（三）逐字譯の先驅と森田思軒

普通逐字譯の元祖としては森田思軒が擧げられるが、その先驅とも見なさるべきもの丶一つはテレマックの飜譯なる『鐵烈奇談』である。明治十六年頃の出版。多くの明治文學史はこの書の存在を完全に見落してゐるが、柳田泉君によつて發見され、彼が原文と對照してみた結果、

殆んど逐字譯に近いことが分つた。(註1)

その一つは坪内逍遙博士の最初のシェークスピヤ譯なる『自由太刀餘波鋭鋒』(原名・ジュリヤス・シーザー)である。これは院本風に綴つたものであるが、中の對話が如何に逐語的に正確巧妙を極めてゐるかは、これ又同じく創刊當時の『文章世界』記者が、原文と譯文を對照して批評してゐた。恐らくこれは田山花袋、前田晁兩氏共纂の『評釋新古文範』の中に入つて居る事と思ふ。

森田思軒の譯文は後からは數々の非難も聞く。ユーゴーのものを英譯から重譯したのが多い爲め、世は彼をユーゴーの譯者として尊重した。

併し古い所では既に高山樗牛が「門末の輩は思軒を目してユーゴーの紹介者となすけれど、吾等は佛文を解せざる思軒が如何にしてユーゴーの紹介者であり得るのかを怪しむ」といふ意味の事を言つてゐる。又『太陽』の増刊『明治文藝史』の筆者(恐らく長谷川天渓氏)も「思軒は舊派文學の殿將たるに留まつた」と言つて、多くその價値を見てゐない。——併し私をして言はしむれば、それは少しく酷に過ぎるやうである。生前、餘りに彼が推重され過ぎた結果の反動である。

全く生前に於ける思軒の翻譯者としての地位名聲は非常なものであつた。その證據の一端と

も見るべきは、思軒が若松賤子の『小公子』の譯を激賞したのに對し、多くの批評家が「飜譯王思軒の折紙がついた名譯」として認容してゐる一事でも知れる。(第二版の『小公子』卷末附錄に收められた諸家の批評を參照せよ)——尤もさうまで言ふのは過褒である。だからこの讀者と斥者との中間說を取つた位な所に、丁度思軒の受くるにふさはしい評價が生れて來はすまいかと思ふ。田山花袋氏の批評が比較的に公平である。

「ビーコンスフイルドやリットンの飜譯から更に一轉化を試みさせたのは、思軒の功と謂はねばならぬ。それから、其時まで譯語譯法などの非常に亂雜であつたのを一新したのも此人の功だ。かれは漢學に通じてゐて、比較的譯字譯法に詳しかつた」(『小說作法』)

思軒の譯したものとして名高いのはユーゴーの『クロオド・ギュウ』『死刑囚最後の日』『バグジャガル』『隨見錄』『探偵ユーベル』(以上『思軒全集』)、『替使者』、『十五少年』などである。外にホウソン、エッヂオース、スーヴェストル、ポウその他の短篇の譯もある。

文章の上から見て、その思軒調の最も圓熟したのは『十五少年』であらう。この事は武田櫻桃氏も亦『古今名家文選』の中で論じてゐた。

併しそれは初め『少年世界』に揭載せられたのだから、どこからくに譯しこなした跡がある。

眞に飜譯の苦心を見るべきはやはりユーゴーのものであらう。どの篇であつたか冒頭に、譯語は一字一句苦心して、正確なことには幾分の自信をもつと書いたのがあつた。

(四)二葉亭四迷

とは言ふものゝ、思軒の飜譯は、今日から見ると歴史的價値以外に餘り多くのものを持たない。それに比して二葉亭の譯は何といふすばらしい光彩を放つて、今日までも生き輝くことであらう。二葉亭のものは、その選んだ原作からして文藝愛好家の必讀を要する名篇である上、思軒の大部分が重譯なのに比して原語直接譯であり、而も言文一致である。その意味から二葉亭の譯は鷗外のそれよりも遙かに高く評價されねばならぬ。

その『あひゞき』(ツルゲーネフ原作)が『國民の友』に出たのは明治二十一年である。それが當時の進んだ讀者に如何に異常な感激を與へたかは獨歩も說き(『欺かざるの記』)、蘆花も說いて(『黒い眼と茶色の眼』)ゐる。その他當時の青年文人(今日の花袋、藤村の年輩の人)も一樣に新らしい感激に打たれた事を語つてゐる。獨歩の如きは殊に非常に影響を受けたもので、彼の愛用して措かなかつた「四願し、傾聽し、默想す」のもとの句はこの『あひゞき』の中にある

のである。

その様に進んだ頭腦の讀者は一樣にこの名譯に魅せられたけれど、一般讀書界にはそのよさが分らなかつた(今日から考へると、何といふ驚異、何といふ不思議であらう)。そこで石橋忍月はわざ〳〵その詳しい批評をし、解說を附し、註釋を加へて、鑑賞の手引きをしたといふ。(尤も私はそれを讀んだ事はない)。

要するに二葉亭は明治文壇隨一の作家でもあり、飜譯家でもあり、又「人」でもあつた。二葉亭の作を讀破しない人が文藝愛好者の中にあるとは考へられない。隨つてそれに就いては普く知れ渡つてゐる事と思ふから、これ以上無用の讃辭を加へて彼が譯壇の功績を述べることを止めよう。

(五) 森　鷗　外

鷗外の譯はその調はゆる文語體のものは完璧に近い。が『みなを集』當時の言文一致のものは二葉亭に劣ること數等である。但し大陸文學の紹介者としての彼の功績は明治文壇隨一である。

ある人が獨和對譯の書を編纂するので、鷗外にその諸譯書中、最も正確な、最もよい一節の指示を乞うた所、『埋木』を出して來て、この何處でも節錄せよと言つたといふゴシップを昔の雜誌で讀んだ記憶がある。眞僞は疑はしいが、いかにも鷗外らしい自負と傲慢さとのある話である。又彼自らも『二人の舊友』(?)なる創作で、當時自分の譯がいかに識者から精嚴を以て推服せられたかを描いた。

思軒の文が『十五少年』に最高潮期を劃する如く、鷗外の文は、その文章體のものは、原作はあまりいゝ作でない『卽興詩人』(アンデルセン原作)を頂點とした。この書が又いかに當時の文學青年に感激を與へたかは言ふまでもない。中には殆んど諳記するまでに至つたものもある(富山房發行、長田幹彥譯『アンデルセン童話』序を見よ)。それは實に讀書界からの無條件的賞讚であつた。

但し、中にたつた一人この譯書にケチを付けた批評家がある。それは當時萬朝報の新刊紹介欄を擔當してゐた堺利彥氏である。氏はこの文章を、生硬な讀みづらい肩の凝るものだとくさした。所が鷗外崇拜者達は承知しない。すぐいきり立つて堺氏の無理解に嘲罵を加へたので、堺氏は再び駁擊を加へて、自分は讀者の立場から批評して、あの書が分りにくいものだと言つ

たのであると書いてゐる（この論爭、及び一切の『即興詩人』に對する批評は舊版第二版の卷末に附錄として收まつてゐる）。私は鷗外の譯文は殆んど諳誦する位にまで愛讀した一人であると共に、又堺氏の言にも一理あるを認めざるを得ない者である。

鷗外の言文一致の飜譯は後に大正になつてゲエテの『フアウスト』などに至つて圓熟の頂點を劃した。が、鷗外の飜譯壇に寄與した貢獻についても又詳述する必要はあるまい。

（六）坪内逍遙と增田藤之助

坪内博士の飜譯家としての事業が本當に實りを結んだのは、後に完成した『シエークスピア全集』及びイブセン、ショウ、ハンキン等の劇の譯に於てゞある。當時の博士には飜譯として完成したものはない。が『早稻田文學』に連載せられた『マクベス評註』及び國學院大學と東京專門學校文學科講義錄に連載せられて、後に單行本となつた『英詩文評釋』が、外國文藝わけても英國文藝の理解鑑賞に資する事の多かつたのは言ふまでもない。逍遙の英文學に鷗外のドイツ文學！——と、かう當時の文壇では言はれたものである。

坪内博士は『マクベス』譯書の附錄に於て日本に於けるシエークスピア飜譯に對する態度の

四變遷を述べ、第一期を日本化式時代（私の言葉を以て言へば極端なる National Possesion を目標とする時代）、第二期を奴隷的に原義を重んじながら、やはり國文の聯想に壓迫された結果は甚だしい日本化となつた時代、第三期を口語體時代、第四期を口語に多少の工夫を加へて明治大正の特殊的社會聯想の附帶を防がうとする時代――と分つて居られるが、これはひとりシエークスピアの飜譯のみでなく、全體の文藝ものゝ飜譯に對しても廣く言はるゝ事であらう。

譯壇に於ける坪內博士の功績と共に、見のがしてはならないのは、增田藤之助氏の貢獻である。氏にもさう大して纏まつた譯書はないが、日本に於ける謂はゆる直譯式な、生硬な譯法を排して、逐語的正確さを保たすと共に、日本文としても完全なものにしようとされた努力は異常なものがあり、それが間接に影響して文藝飜譯壇の弊風の大いに改まつたのは注目すべき事である。

英語の普及については辭書の井上、文典の齋藤、神田たど外に功績者がいろ〳〵あらうが、少くとも英文學を文法的に修辭學的に正しく移植する土臺石を据ゑた功績者は增田氏でなくてはならない。氏の主宰された『日本英學新誌』の古本が今日珍重せられて、篤學者に喜ばれてゐる理由の一つは右の點にある。併し氏の努力は結晶して後に丸善發行の『英和辭典』となつ

た。文藝翻譯の際、適當な譯語の搜索に役立つことこの辭典の如きは他にない。杉森孝次郎氏が洋行の際携へられた唯一の日本の書はこれであり、坪內博士も常に座右から手放された事がないと云ふ事は、今ではこの書を權威づける噂として、傳說として誰れ知らぬ者もない。絕版になつてから數年になるので、今ではこの辭書を所持する者は、それを一つの誇とし、所持せぬ者は血眼になつて古本屋を搜してゐる有樣である。

坪內博士は『英詩文評緖言』で、夙に增田氏の主宰さるゝ『日本英學新誌』の譯法の正確な事を認めて居られるが、後に增田氏は坪內博士の女房役となつて、早稻田大學英文科の重鎭と仰がれた。その譯壇に致せるの功はたとへ間接であつたとするも、看過してはならない。

(七) 內田魯庵と高安月郊

坪內博士が新如來の候補として數へた二人者のうち、抱一庵については、今日多くを言ふ必要を見ぬ。高山樗牛はその誤譯の甚だしい點を冷笑してゐるが、選んだ書物も『聖人か盜賊か』(リットン原作)などで文藝的價値の大したものではない。たゞ英語が多少讀めたが爲めに、半ケ通を振り舞はしてはゐるものゝ、その批評の如きも今日から見れば齒の浮くやうなものが多

い。

それに比して内田魯庵氏は、さすがに識見の高きを見る。今日、氏が坪内博士と並稱されて文壇の元勳の如く推重されてゐるのは、決して所以が無くはない。

吾等は『國民の友』に連載せられたドストエフスキーの『損辱』(『虐げられたる人々』)の梗概批評を一讀しただけでも、既にあの頃から氏の海外文藝に對する理解鑑賞が如何に精到で且つ正確なるかに畏服する者である。

氏が譯者としての功績を不朽に輝やかしむるものは『罪と罰』の飜譯であらう。

聞く所によると明治廿何年かに、この英譯は丸善に三冊だけ來たのださうである。その一冊は森田思軒に、一冊は坪内博士に、そして殘る一冊は内田氏に依つて購はれた。坪内博士は早く人に貸し失ひ、思軒も何かの理由によつて通讀せず、内田氏も亦最初の頃は記述のくどさに辟易して幾度か投出された。

が、内田氏はある夏(?)避暑旅行をされた時に持參して、我慢しながら讀んで行くと、遂に興にひき入れられ、日が暮れるとランプをつける間も手放すのが惜しくて、夕日の明りをたよつて緣側に出でゝ讀み、女中が食事を運んで來たのも覺えないでゐられたといふ。

その飜譯の第一冊は明治二十六年に出たが、分ると分らぬとに論なく、文壇は等しく驚異して迎へた。丁度探偵小説の流行してゐた時だつたので、依田學海を初めとし、批評家の中にはこれを探偵小説として讀んだものも少くなかつた。

坪內博士はさすがに英國文學に精進せらるゝだけに、之を現代の『マクベス』と稱した評家の言を援引し、公平な鑑賞眼を示されたが、言說多く、譯文の上に及んで、作の眞精神に徹してゐない。といふのはこの譯書は二葉亭などに依つて開拓された言文一致を用ゐ、そして日常の俗語を混用する事は更に遙かに多きを加へたので、それがたゞ〳〵當時紛亂を極めた日本文體の結果はどこに落ちつくかを考慮してゐられた博士の興を引いたと見える。

だが、紙背に徹する底の眼光を以てこれを再讀三讀したものもないではなかつた。北村透谷の如きがその一人である。彼がこの譯書に對する批評は、あの時勢にしてもこの言あるかと、吾等を驚嘆せしむるに十分である。藤村氏の『春』に於ては透谷をモデルとした青木が「內田さんの譯した『罪と罰』の中に、ラスコルニコフが考へることをしてゐると言ふ所がある。昔に於てもあゝいふえらい言葉を吐いた人があるかと思ふと驚く。」と言ふ意味の事を語る一節がある。それを思ふ時、後に藤村氏が『罪と罰』から巧みに換骨脫胎した『破戒』を書いたのに

も、一味の因緣のつながる事を感ずる。

內田氏の『罪と罰』は惜しい事に完成しなかつた。後に大正になつてから改譯されたがそれも前半だけで、後半は出てゐない。氏の飜譯家としての事業の完成を語るものには、『復活』『二人畫工』その他トルストイ、モウパッサン、ヴォルテール、エッヂオース等の短篇がある。

なほ玆に、是非忘れてならないのは、關西に於ける高安月郊氏が、早くから北歐文學に着目して、譯壇に致されたる功績である。氏がイブセンを何人にも先んじて讀み、且つ飜譯されたのは、その英譯がさきに神戸に着荷して、遂に東京に來なかつた爲めだとの說が、一部文壇に行はれてゐるのを耳にしたが、それは誤りであるらしい。同志社女學部發行の『灯』第四號に、それについて高安氏が自身で書かれた文が委曲をつくしてゐると思ふから、左に轉載するであらう。

「イブセンを私が手にしたのは、ラスキンの『近代畫家論』の末の廣告で見つけて、アメリカから明治二十四五年に取りよせたのが初めである。東京へ舶來の途中といふ說は誤。同時にツルゲネフの全集も取りよせた。其中から『荒原』一篇を譯して、大阪の雜誌へ寄せたが出さなかつた。ドストイニフスキイはそれより先、ヴィゼットレイ版が四五冊來て、東京で見

つけ、まだ作者の名は始てゞあつたが、『ロシヤの現實小說』としてあるのを奇として買ひ、一讀驚嘆、先づ『損害と侮辱』を譯して東京の雜誌へ寄せたが、それも出さなかつた。」

○

「其頃『同志社文學』が出てゐたので、何か寄稿をと望まれ、イブセンの『社會の敵』を譯出したのは明治二十六年。これが日本へ彼を紹介した始になつた。(次で『人形の家』を大阪の『一點紅』へ出した)。更に『損害と侮辱』も『同志社文學』へ出しかけたが、編輯人が變つて、それほど名著と思はなかつたらしいので、厭氣がさして止めた。今になつて見ると惜い事であつたのである。しかし無効では無かつた。これを東京で見てゐたと見えて、早稻田から文學叢書を出す時、イブセンをと需めて來た。」

(八)その他の諸家

胎成期の飜譯について、私はその概略を語り終つたやうに思ふ。日清戰爭後になると馬場孤蝶、戸川秋骨、上田敏等『文學界』一派の少壯文人達が譯壇にも活躍して來るのであるが、この研究に於ては、そこまで究める必要はあるまい。

フ　さて貴殿の謹深き。定の刻限ちつとも違へず……。

バ　今十二時も打ちました。貴殿はもはやおやすみなされ。

フ　有難う厶り升。何とまあ、この寒さは。拙者などは眞底ほと〳〵病氣にもなりさうです。

バ　それは左様と、今夜の御番。異變はありませんでしたか。

フ　あゝいや、鼠も噪ぎませで。

バ　左様ならば、御機嫌よう。……もしや途で朋輩のホラシオとマアセラス二人に御逢ひなされたなら、急いで來いと仰られて。

フ　しかし、あすこにあの足音。ほうい駐まれ。何者だ。」

惜しい事にこれは完結しない所か、第一幕だに終つてゐない。併し坪内博士の『マクベス』の附錄、シエークスピア三百年祭記念號』に楠山正雄氏が紹介されて人の注目をひいた。

その他民友社には才人が多く、西歐文藝の移植にも少なからぬ貢獻をなしてゐるが、中でも德富蘆花氏の『老武者』（ゴオゴリの『タラス・ブルバ』）や國木田獨歩の『糸くづ』（モウパッサ

ン）宮崎湖處子氏のものなど、或は長篇を壓縮して手際よく紹介した點に於て、或は短篇を殆んど逐語的に飜譯した點に於て、それ〴〵の價値を有する。

田山花袋氏の『コサック』は內田不知庵氏の『罪と罰』が出たのと同じ明治二十六年に出てゐる。米國版の縮譯からの重譯であるが、一脈清新の情味を文壇に投じた事は爭はれない。翌二十七年には鷗井雨江の『湖上の美人』（スコット）の完譯が出てゐる。たしか今樣長歌と云ふやうな制註がどこかに附してあつたと記憶するが、早くから喧傳され、移植された英文學でありながら、長篇もので完譯の出たのは或はこの作が最初ではあるまいか。

話が少し前後するが二葉亭の『あひゞき』の出た明治二十一年博文館發行の『大和錦』なる雜誌に某氏譯のツルゲェネフの『その前夜』があつたが固有名詞の發音から推しても、ロシヤ原語からの直接譯らしかつた。（註2）

それから同じ年に末松青萍譯の『谷間の姫百合』が出てゐる。多くの明治文學史の中にはこれを政治小說のやうに記述してゐるものを見受けるが、決してさうではない。政治家の譯したものではあつても、內容は純然たる家庭小說で、女流作家バーサ・クレイの『ドラ・ソオン』を譯したものである。譯は嚴正な逐字譯とは言へないまでも（原作が非常に重複の多い煩雜な

筆文だから、到底逐字譯は出來るものでない)、かなり忠實に原意を追うてはある。人名などが日本化されてゐるとは云つてもドラが寅子となつてゐる程度で、恣に改刪したやうな跡は見えない。再版の巻頭に皇后職(?)か何かそんな役にゐる人が皇后陛下の御覽に入れた所、大變與がられたと云ふやうな事を書いた手紙の複製版が附してあつたと思ふが、さうだとすれば、この作は或は照憲皇太后の台覽を得た唯一の西洋小說であるかも知れない。菊池幽芳の『乳姉妹』は、原作からしたか、この飜譯からしたかは知らないが、兎も角もこの作の飜案なるは疑ひを容れぬ。

創刊當時の『文藝倶樂部』に水谷不倒氏がシャアロット・ブロンテの『ジェーン・エア』の譯を連載してゐることは、氏が德川文學の研究家として聞えてゐるだけに珍種といふべく、同じ頃の『少年文集』に飜譯ではないが、綱島梁川がラムの『ハムレット』の譯註を連載してゐる事は、恐らく大抵の人が忘れてゐるであらう。梁川に親炙し、梁川の著作に詳しい望月世敎氏さへも之を見落してゐる。

なほ中江兆民の『理學鉤玄』『理學沿革史』(理學とは哲學のことである)、尺新八のスペンサアの『敎育論』なども明治廿年前後に出でゝ居り、切支丹方面の重要文獻『フランシスコ・ザベ

リヨ青翰集』『鮮血遺書』などの譯は廿年後日清戰爭までの間に出てゐることを附記しよう。之を概括して思ふに、明治大正の文壇を通じて飜譯が重要なる意義を帶びた事この期の如きはあるまい。當時に於ては飜譯は直ちに文壇の脈管に生氣を通はす酸素吸入の如きものであつた。だから又飜譯がこの期の如く尊重せられた事はなく、飜譯のみを以て優に文壇の大家となり得た。思軒の如き、抱一庵の如きがそれである。

さう考へて來ると、明治文藝胎成期に於ける飜譯の考察はなか〳〵輕視することを許さないものがある。例により大部分の參考書は手許になく、うろ覺えで書くのだから、記憶の間違ひは大方の是正を乞はなければならない。（大正十四年七月、『早稻田文學』）

（註1）これに對して吉野作造博士が左の如く書かれた。

「本年七月號の早稻田文學『明治文學號』所載、木村毅君の『飜譯文學雜考』中に、外國文學逐字譯の元祖として明治十六年頃の出版になる『鐵烈奇談』が擧げられてゐる。然るにテレマクの邦譯としては是より先き明治十二年刊宮島春松譯『哲烈禍福譚』といふのがある。『鐵烈奇談』は不幸にしてまだ見たことはないが、『哲烈禍福譚』は震災前最初の四冊だけ持つて居た。佛語の稽古の積りで第一卷を精密に原書と讀み合したことがあるが立派な逐字譯であつた。七五調の流暢な文章で而も相當正確な譯し振り

と感心したのであつた。但し全部が同じ調子の逐字譯であるか又完譯であるか今明でない。從て木村君の斷を覆へす材料にはならぬが、少くとも逐字譯の試みとしては成功せるもの丶中に數へてい丶と思ふ。毎冊和裝四六型三十枚ばかりの綸入本であつたと記憶する。」(『中央公論』大正十四年十一月號)

(註2) 矢崎嵯峨の舍氏が左の如く書いて居られるのが、恐らく私の言ふのと同じであるやうに思はれる。

「長谷川の同窓に佐波といふ男が有つた。此男は私にも同窓であるが、長谷川とは同級生で有つたから私より長谷川の方がズツと親しかつた。此男がツルゲエネフの『ナカヌウネ』を譯し、其を何とかいふ漢學者が訂正したものが有つた。何でも全部で七八百枚有つた。其出版と賣込を長谷川に佐波が依頼した。處が何處の本屋も引受けない。小說雜誌へ載せようとしたが、其を載せてくれる雜誌がない。餘り枚數が多いのに、譯者も訂正者も名を知られて居ないので、本屋も二の足を踏むのだ。佐波も非常に窮して、誠に訂正者に申譯が無い、せめて雜誌に載せて貰へば宜い、報酬なぞは一文も要らぬと言出した。私も同情して其では博文館に聽いてやらう、と私が其を持つて博文館に行き、何でも一枚十錢の割で賣込んで仕舞つた。其は私の處女作も春廻家主人補助の名あつてさへ一枚十錢に過ぎなかつたから、名の無い人の作は仕方の無いものだと思つたからで有つた。佐波も其で宜いと言うて私に禮を言つて其で濟んだのだが、其を五六日經つと長谷川と佐波の二人が私の處へ來て、長谷川の言ふには「君は實に不埒な奴だ、

ツルゲエネフの名作で、然も僕等よりズツと豪い漢學者の訂正した立派なものを僅に十錢で賣つたとは如何いふものだ。僕の『浮雲』さへ一枚一圓になつたぞ、僕とツルゲエネフと孰が豪いと思ふ」といふ詰問だ。私も之には喫驚した、「其は君も豪いがツルゲエネフには及ばんよ。然し飜譯だからねえ、其に佐波君が無報酬でも宜い、世に出さへすれば宜いと言うたものだから、其で十錢で賣込んだのだ」「假令佐波が左う言つたからとて、天下の名作を一枚十錢で賣込むとは不埒の至りだ、君行つて取返して來い、佐波は何といふとも僕が承知しない、」と非常の權幕で私を責めるのだ。長谷川の純理論に一理は有るが、然し最早其一部は雜誌に載つて居るので、私は其を取返すべき理由を持たない、私も斷乎として、「此事は最早是で濟んで居るのだからねえ、君に横合から其樣な事を言はれては僕も困るねえ、佐波君如何したものだ、」と私は佐波を顧みた。佐波は離儀な樣な顏をして、「僕は宜いといふのだけれど長谷川が此通り怒つて居るのだ、僕に何でもかでも一所に來いといふのだ、君には氣の毒だよ」長谷川は益々怒つて「否是は佐波の問題ではない、君は文藝家として、ツルゲエネフの名作を一枚十錢で賣つて其で宜いと思つて居るのか、君の心裡を僕が親友として問ふのだ。宜いと思つて居るなら其で宜い、僕は絶交だ。惡いと思つて居るなら話を附けて原稿を取返して來たまへ、」「其は宜いとは思つては居ないが社會の事情誠に餘儀ない。まあ君勘辨してくれ僕も微力だから、」「其はお互に微力さ、博文館は資本家、僕等は文藝の勞働者、勞働者が資本家に踏みにじられて、其儘泣寢入になるものか、其だから戰はうといふのだ、」

長谷川の此解釋は私の頭に肯綮の如く響いた。」（大正十四年六月『早稲田文學』明治文學研究號）

女

——（小說題材としての斷片的考察）——

（一）彙類的文學史

明治文學の研究が盛んになつて、文學史の最近刊行せられたものも一二ではない。中でも高須芳次郎氏、宮島新三郎君、小島德彌君のものなど最も目星しいものである。三書それ〴〵の特色と、それ〴〵の缺陷がある。

併しあゝ云ふ史實と思想と批判とを混融して、年代順に列序した文學史は、當分の間三氏の著述で十分だと思ふから、今後この方面に注意を向ける人には、もう少し變つた研究法を取つて貰ひたい。

その一樣式として、類題的研究（彙類的研究と呼んでもよい）なども、面白くはあるまいか。『英國文學に現れたる猶太人』と云ふ英書があつて、猶太人を題材として取扱つた文學のみを

類輯して研究論評を試みてあつたのを見た事があるが、あの様式を明治文學へも試みたらどんなものか。

私はその一例として軍隊生活に取材した文藝の類題式研究をして東京日々新聞で發表した事があつた。

(二) 藝娼妓と町娘

いま此の類題式研究法を用ゐて、明治から大正へ掛けての女を考察してみたら何うであらう。大がゝりで、急には完成せぬが、出來上れば面白いに違ひない。

不用意をゆるして貰へるならば、私は玆に極めて粗雑なそのデッサンを試みてお目に掛けよう。

先づ坪内逍遙博士の『書生氣質』を見ると、題材となつてゐる主なる女は藝者と娼妓である。徳川文學に題材とせられた大部分の女はさうした遊女であるから、その意味で女の方からのみ觀察すれば、この小説には新味はない。

この小説のすぐれた點は、作者が新時代に對する觀覺が甚だ鋭敏で、初期明治に著しく社會

的視聽を聳たしめた書生なる存在に着眼した點にある。だから巽軒篁村翁が之を模して『當世商人氣質』を描き、その筆致の輕妙に於ては春廼家を凌駕する者があるとしても、遂に『書生氣質』だけの點數が與へられないのは、この新時代への敏感性の甚だしく鈍い點である。

それにしても春廼家は『書生氣質』に於て、書生といふ新らしい題材を捉へながら、どうしてその配たるべき女には新機軸を出し得なかつたか。その說明はたやすい、藝者や娼妓を相手にする以外に、書生の逢遇し得るアヴァンチュールは當時に於ては無論無かつたのである。

この傾向は、明治卅年時代になつて、急に女學生の存在が社會的視聽をそばだゝすに至るまで續いたと言つてよい。

尤も藝娼妓以外に、小間使や町娘の題材になつたのもある。そして町娘には女學校を卒業した經歷を持つものもあるが、まだ女學生が中心をなすまでには至らなかつた。後の作であるが『金色夜叉』の宮など女學校を出た女であるが、あれを以て女學生を描いたものとは言へない。

(三) 女學生の出現

しかしその間に女學生は、ゆたかに社會的存在としての地歩を占めつゝあつた。『文學界』の

一派は、從來の日本の文學が、女を多く隷從の對照として見てゐる中へ、西歐のロマンチシズムに系統を引く聖母禮讃、處女崇拜の思想を注入して、日本人の女の觀方に、さゝやかながらも根本的な變革を促した。それは女性に新らしき美と權威とを與へた。が小說としては田山花袋氏のセンチメンタリズムの作品以外に多くの實を結んでゐるとは思へない。

この處女崇拜の傾向をもつた小說がさまで多くの實りを結ばなかつた原因はいろ〳〵あらうが、少くとも女學生題材の小說が俄りに急速度に繁榮したので、十分な成育を遂げなかつた事も一因に數へられはすまいか。

女學生小說を前後して代表するのは小杉天外氏の『魔風戀風』と小栗風葉氏の『青春』であらう。

それが新聞に連載せられてゐる時は庇髪と角帽との挿繪が每日の紙面を埋めてゐると言ふので、大いに教育家などに苦蟲を噛み潰したやうな顏をさせたと云ふ事だ。

かうした快活な、かうした新らしい洗禮をされた女學生が、家庭に入る日が來たら、日本の家庭は一大變革を起すであらう——と、田山花袋氏などを思はせた程、それはその時代の社會に色彩と活氣とを帶ばしめたのであつた。

（四）モダン・ガールと不良マダム

その中に自然主義が起つて、苦勞味と性慾が尊重されるやうになり、その二つともに疎遠な女學生の文藝題材としての價値が急に下落した。そして生活難を訴へる中流階級の細君や、男に頽廢的氣分を促す藝娼妓や私娼の題材價値が急に復活して來た。風葉氏と岩野泡鳴氏の『耽溺』なる作は、全部とまで行かぬにしても、其時代の重要な一部面の代表でなければならない。

その中にカッフエ女が今度は急に題材價値を增加し、谷崎精二氏や、廣津和郎氏の作に屢々現はれて來るやうになつた。平林初之輔君も、かく言ふ私も、二一時月評に於て、カッフエ女を題材にしたと言ふ事を、平凡と言ふ事の同義語に用ゐて、攻擊の矢を放つたものである。

カッフエ女の占める勢力は、大地震と共に、彼女達の生活が露骨に、表面的に、徹底的に私娼化された事によつて、一層鞏固なものとなつた。

その外には長田幹彥氏の作によつて急に文藝家にも注目され始めた丸ビル婦人、廣津氏の作などに色彩を添へてゐる婦人タイピスト——彼女達が題材價値も侮り難くなつて來た。——彼女達の性に無檢束な、併し或る考へはあつて聰明な、明日の煩ひはなくて現在の享樂に專心な

氣分は、漸く讀書界の興味の中心となり始めて、吾等が今迄に眺めて來た明治時代の娘や女學生とは、國土でも異にする女ではあるまいかと思はれる程の違つた印象を與へてゐる。恐らく最近しば〳〵口にされるモダン・ガールなるもの、中心勢力をなすものは彼女達なのではあるまいか。

モダン・ガールの家庭に入つたものに不良マダムなる言葉もある。新居格氏が本誌(『文藝日本』)の創刊號によせて世評の高かつた『明暗』の女主人公などは、そのタイプの最もいみじく描き出されたものであつた。世間があの作を喝采したのは決して單なるモデルの問題の爲めではない。あの作に窺はれる新居氏の新時代の感觸の鋭敏さに推服した爲めである。

(五)四期の分類

以上を要約して言ふならば、

第一期　藝娼妓、町娘、小間使時代(『書生氣質』當時より日清戰爭前後まで)

第二期　女學生(日清戰爭後から日露戰爭當時まで)

第三期　混沌時代(自然主義文藝全盛の頃)

第四期　モダン・ガール時代（カッフエ女の擡頭頃から、最近まで）

となるわけである。

尤も以上は、その時代の文藝題材の中心、もしくは、新奇なるものとして最も多く興味を惹いてゐた主流をさすので、傍流には、謂はゆる女學生時代にだつて、鏡花氏の如く、主として花柳の女を描いて一貫した人もあれば、現在だつて花柳小説で押し通す永井荷風氏のやうな人もある。一概に言へないのは勿論である。

たゞ、斯くして女に對する讀書界の嗜好の變遷を識るだけでも、世の轉變に對してさま〴〵なことが考へられる。

以上は本當にザツとした思付きであるが、誰か篤學の士が一々の作品に當つて、詳細なる研究を遂げるならば、一面の文學史としてかなり意味の深いものが出來上りはすまいか。

（大正十四年七月、『文藝日本』）

ヒロイン列傳

(一)新文學勃興以前

——毒婦と女政客——

秋の彼岸前後の季候のやうに慌しかつた明治から大正へかけての文化の變遷の後を、手取り早く知りたいと思ふ人には、その時々の有名な小說を讀むことを奬めたい。殊にそのヒロイン(女主人公)を仔細に點檢してくると、世の嗜好や風潮、婦人問題の消長などまで自らに分つてくる。それについて今試みに私の氣づくまゝを略叙してみよう。

嚴密な意味でいふ日本の近代小說は、坪内逍遙博士に依つて創始せられたので、その著『小說神髓』は理論的方面を確立し、『當世書生氣質』は實際の創作の範を示した。共に明治十八年頃の出版である。但しそれ以前にも小說に類する讀み本の類ひが絶無であつたわけではない。中にも『明治義士傳』は、婦人を中心題材にした實錄風の讀み物である點が、婦人讀者には特に

興味があるであらう。題名の示すが如く高橋お傳や鳥追お松や夜嵐お絹や權妻お辰など、謂ゆる當時の毒婦のことを書き綴つたものである。但し今日から見ると毒婦などゝいふ大形な名稱を付けなくてもいゝやうな女性が大部分である。

そして表現も粗硬で卑俗で、決して高級な讀み物ではない。しかし毒婦を題材としたさうした卑俗な讀み物が歡迎せられた當時の社會は、甚だ考察の興味をそゝるものがある。文化文政の頃に爛熟しきつた德川の封建文化が、明治維新と共に一大決潰作用を行つたが、その後へ、新文化はまだ基礎だも建設されてはゐない。その中間の過渡時代の讀者は、讀書眼も洗煉されてゐなかつたから、あゝした刺戟の强い毒婦ものゝ、而も粗雜な表現でなければ、興味をそゝられなかつたものと見える。

それから坪內博士の『書生氣質』が出たのと相前後して、やはり明治新文學勃興の前期に屬する政治小說が出てゐる。東海散士の『佳人の奇遇』末廣鐵腸の『雪中梅』たどが、中でも名高い。恰も國會開設の促進運動の猛烈に起つた時で、その勢は今の無產階級運動どころの騷ぎではない。景山英子、中島湘煙などゝいふ女政客が壇上に朱脣を飜へして、運動に氣勢を添へた。一方政府では條約改正の政策上、歐化主義を取つて、鹿鳴館で舞踏會を催し、伊藤、山縣

などいふ當路の大官まで假裝舞踏をなし、殊に今のT伯夫人はその頃十七八の妙齡で、會中の花として衆目を集めたといふ。――そんな時代だから前記の政治小說に現はれるヒロインの性格に、自らそれが反映し、華やかな舞踏會のシーンも描かれてゐれば、腕をまくり、卓を叩いて天下國家を論ずる女政客も出てくる。序に言つておくが『佳人の奇遇』の中に會津落城を回想するの一節がある。著者自身その戰爭に參加しての見聞を直叙したもので、書中「會津落城中に烈婦和歌を題す」といふ挿繪が入り、「明日よりはいづくの人か眺むらん、なれしお城に殘る月影」なる歌を城壁に題し、薙刀を揮つて奮戰した一少女のことが記してある。これは實際の史話をエピソードとして小說に取りこんだのであつた。唯作中にこの少女が「髮を薙りて、終生死者の冥福を祈れり」とあるのは小說的美化で、この少女は後に京都に出て、日本の基督教界及び教育界の巨人であり同志社の設立者である新島襄氏の夫人となつた。

(二) 新文學勃興當時

――異常な女性から平凡な女性へ――

坪內博士の新著が明治新文學の曉鐘をついたことは今述べた。當時の博士の創作は長篇『書

生氣質』中篇『妹と背鏡』短篇『細君』などである。

『書生氣質』は題名の示す通り、當時社會の視聽を聳たしめた書生を中心として、これが配とする爲めには藝者や娼妓が取扱はれてゐる。今なら學生の相手は女學生、もしくはカッフェ女給と相場のきまつてゐる所だが、當時はまだ女學生といふものは東京市内にも數へる程しかゐなかつたし、町家の娘は奥深くひそんで滅多に顔を見せないから、書生の戀愛對象は藝者か娼妓以外にはなかつたわけである。それに封建の遺風で良家の處女を恥しめることは非常な罪悪だが、玄人なら賣物買物だから公然接觸しても恥づる所はないといふ觀念が書生の間にあつたから、自然それが博士の作にも直接に現はれてきたのである。

『細君』は、身もちの悪い官吏の家に仕へてゐた小間使が、ある手違ひから井戸に落ちて自殺するといふやうな筋であつたと記憶する。——要するに博士の作には、際立つてこれといつて名前を記錄せねばならぬやうなヒロインは現れてこない。が、從來の讀み本や小説の類が、毒婦とか女政客とかいふ、千人萬人に一人しかゐないやうな異常な女性を題材としてゐるのに反し、博士は、その邊でいくらでも出會ひさうな平凡な女性を題材に取られた。文藝史に興味をもつものはこの點の注意を怠つてはならない。

坪内博士に刺戟せられて勃起した文人は多く、硯友社の一派もその仲間であつたが、しかし今日から見て最も傑れてゐるのは二葉亭四迷である。彼は作品によつて接觸するのにさへ、一種の畏怖を感ぜしめる程大きな、全く日本ばなれのした作家である。その處女作『浮雲』は明治二十年に出版されたが、あの早い頃、どうしてかうも傑れた作が出たらうかと思はれるやうな、驚異に値する作である。そしてもし明治小說のヒロインを論議するなら、この作に出てくるお勢こそ、擧げなければならぬ最初の名であらう。彼女は時の流行を追うて、漢學も英學も修め、學問を鼻に掛けてゐるハイカラである。新しいもの好きで、跳ね返りで、何にでも一寸は手を出すが、一つも最後まで仕了せるものはない。さうした娘がハムレット式の逡巡躊躇してゐる濕雜な、しかし世渡りは下手な青年と、調子のいゝしかし上には諂つて、どんな卑屈をも敢へて辭せず、隨つて世渡りはうまい青年との、愛の板挟みになつて揉まれる物語である。當時の新しがりの女の缺陷を突いて剩すところがない。

二葉亭はその後久しく創作の筆を絶つてゐたが三十九年に『その面影』、四十年に『平凡』の二長篇を公にした。前者に出てくるお小夜といふ女は、おとなしい好意の寄せられる性格の所有者だが、周圍に依つてどちらにでも動くので、あたら一人の男を迷らせてしまふ、これなど

も考へさせられる一女性だ。

(三)硯友社時代

――特に一葉女史に描かれた日本ムスメ――

尾崎紅葉氏は婦人に多くの讀者を持つてゐた作家だが、しかしヒロインとして特筆に値する女があるかどうかは疑問であらう。『金色夜叉』のお宮、『多情多恨』のお種なども強ひていふ程のことはない。却つて私は、女高利貸の赤樫滿枝にやゝ興味を惹かれた。それから題は忘れたが、お藤といふ園はれ者か何かになつた少女が、飢と病とで死に至るまで化粧を忘れなかつたといふ可憐な短篇があつた。あれなどは「身だしなみ」といふことを、喧しい婦徳の一つに數へてゐた、あの時代の婦人に對する一般的社會理想の卑俗な具象化として、必ずしも興味のないものではない。

幸田露伴博士の作は深玄に過ぎて、婦人讀者には一向に持てなかつたのだが、私は非常に愛讀してゐる。もし明治の作家中、誰を一番偉いと思ふかと問はれたら、私は、各々異つた立場からして、二葉亭か露伴かに指を屈するであらう。露伴に面白いのは主としてその男主人公で

あるが、女主人公にも注目すべきものが絶無ではない。『縁外縁』や『毒朱唇』には、なか〳〵變幻怪奇な姉人が描かれてゐる。また書冊にはなつてゐないが、雜誌『櫛草紙』に出たものに『風流艶魔傳』といふ短篇があつた。世故長けた女が男を籠絡する手管を描いたものである。これに類似の讀み物は渡邊霞亭も山田美妙も書いてゐる。いづれもみな支那か德川時代の古書に種本はあるのだと思はれるが、女を性慾の道具の如くに考へてゐる從來の一部の男子の觀念に對する痛快なる叛逆として、決して無意義ではない。

露伴に類似の變幻怪奇な女主人公は泉鏡花氏の『高野聖』にも出てくる。彼女は頗る美人で男を色で誘うては、その多情の度に應じて、彼等を馬にでも、蝙蝠や蟇にでも變じ得る神通力を持つた魔女である。それに掛り合ひながら、遂に誘惑に落ちなかつた聖僧のことを描いたのが『高野聖』の一篇で、また明治文壇の一傑作たるを失はぬ。

親友社の勃興當時、別に樋口一葉があつた。明治閨女の稱呼を恣にした創作壇の女流天才で『濁り江』、『たけくらべ』、『十三夜』などは不朽の名作である。純日本流の薄い女の最後の面影は、實に一葉の作の中に息づいてゐるといへよう。フランスの文人ピエル・ロチを初め、明治初年に我國に渡來した海外文人は、みな口を極めて日本ムスメの美しさと愛らしさを讃へてゐ

るが、さうした娘は一葉の諸作や、齋藤綠雨の『門三味線』のやうな作以後に於ては、これを躍活に描き得る作家がなくなつてしまつた。後年の永井荷風氏のものなどになると、同じやうな境涯の女性に取材してあつても、そこに大分の近代味が加はつてきてゐることは爭はれない。

(四)文學界の運動

——聖母禮讃・處女崇拜——

北村透谷、島崎藤村、平田禿木、馬場孤蝶、戸川秋骨、故上田敏博士等、當時の青年諸秀才に依つて一つの結社が設けられ、雜誌『文學界』の初めて發行せられたのは明治二十六年である。そして廢刊したのは二十八年だから、『文學界』の運動は極めて短いものではあつたが、それが日本の文壇乃至は思想界に投げた暗示は、前後に類例のないほど、深く、大きく、且つ影響の多いものであつた。殊に日本女性史の上に於て特筆大書すべきものがある。

といふのは、彼等こそ初めて、處女の純潔を禮讃する中世の騎士のやうな思想を日本に植ゑつけた人である。處女にして母なる聖マリヤの觀念を導入した人である。それまでの日本婦人は、男に對して單なる母か、單なる妻か、または單なる性慾の具ぐらゐな觀念しか持たれてゐ

なかつたのだから、文學界の青年諸秀才の投げたこの暗示は、小さいながら、實に吾が國有史以來の意味深いものであると言つてもいゝのである。それは對女性の觀念に根本的變革を招來した爆藥であつた。

尤もこれは小說の上には大して影響を及ぼしてゐない。小說は大體に於て現實の反映であるから、彼等の思想を現實化したやうな女性が當時の實際の日本には見當らなかつたのが最大原因であらう。隱然『文學界』の主盟の如く目されてゐた透谷には『宿魂鏡』なる作があるが、大して取上げる程のことはない。強ひて數へれば、雜誌廢刊の前にこの一派に加はつた田山花袋氏の初期の作品は、少女憧憬の特長が顯著な點に於て、處女崇拜の傾向の延長といふことができるであらう。『少女の戀』なる短篇小說集一卷に收められてゐる諸作は、みなその氣持を出發點としてゐる。自然主義以前の花袋氏の作では『名張乙女』といふのが廣く愛讀せられたもので、私の如きも、かつて伊賀の名張に旅行した時、あの小說を思ひ出さないではゐられなかつた。

（五）女學生の出現

――『魔風戀風』の初野・『靑春』の繁――

女子教育は明治十七八年頃から、漸く識者の間にやかましく論議せられてゐたのだが、明治廿年代に於て漸く基礎が据り、卅年代になると、俄然、女學生の存在が社會的視聽を聳たしめた。これは明治十年代に於て、書生が社會の注目を集めたのと、極めて好個の對照をなしてゐる。その進んだ新しい教育を受け、紫袴、紅袴を蹴つて快活に振舞ふ姿を見て、彼女達が今に結婚するやうになつたら、日本の家庭は一大變革を受けるであらうといふ、大きな希望と期待とを抱いて、女學生の出現を眺めたとは、田山花袋氏の直話である。そして女學生が社會的注目を集めると共に、その墮落の噂が廣く喧傳せられ、諸新聞は連日これに筆誅を加へたやうなこともあれば、また内田魯庵氏のやうな批評家は、これまで田舍の鎖守の森でなされてゐた逢曳が、單に下宿屋の二階に場所を移しただけのことであつて、何等怪しむに足りないと辯護したこともあつた。

そして明治十年代坪内博士の『書生氣質』が讀書界を風靡したと同じく、卅年代に女學生を描いた小説が社會から熱狂的歡迎を受けたのは當然の話で、その代表作となるものには、さきに小杉天外氏の『魔風戀風』（明治三十六年）があり、後に小栗風葉氏の『青春』（明治三十八年）がある。

『魔風戀風』の東吾と初野は當時隨分評判になつたものである。魔風戀風とは當時の男女學生間のある潮流の象徴語でさへあつた。そして作中には戀と學問に殉ずる才媛や、自轉車で乘り廻す女學生や、煙草を吹かす女學生や、從來の小說には餘り見えなかつたさま〴〵な女性が活躍する。同性愛も匂はしてあれば、ウオッチされてゐるなどゝいふ、當時の女學生の流行語であるらしい言葉もしば〳〵出てくる。またゾラ式の、不必要にエロチックな描寫もある。が、筋は、從來の草双紙式な、變に執念き惡人なども出てきて、決して新らしいものとはいへない。

『青春』の欽哉と繁もまた讀者の熱狂的歡迎を受けたもので、この繁は後に懷姙して墮胎した爲め、欽哉が罪を負うて入獄する所なども描かれてゐる。この作はロシアの大作家ツルゲネフの傑作『ルーヂン』の影響を受けた跡が著しい。文藝的價値から言つても『魔風戀風』に優ること數等である。

明治三十年代に於ては外にも家庭小說の優れたのが數々出てゐる。德富蘆花氏の『不如歸』は說明するにも及ぶまい。最近支那の『小說攻證拾遺』といふ本を讀んでゐたら、この作を解題して「德富猪一郎得意の著作を卽ち有名なる不如歸となす。その中描く所の浪子は卽ち大山

元帥の長女信子、稱する所の武雄は卽ち今橫濱銀行總裁某なり。此の書は哀情小說の傑出せる者、前後再版數十次、漢英みな譯本あり。蓋し日本小說近來最著名の作なり。猪一郎は蘇峰生の弟、自ら蘆花生と署す」とある。兄弟混淆して、蘆花氏の本名が猪一郎だと思つてゐる所が愛嬌ではないか。

懸賞小說として名高いものには中村春雨氏の『無花果』と、大倉桃郎氏の『琵琶歌』がある。前者は基督敎的愛を思想的中心とし、エミヤといふ外國婦人の純愛に牧師の汚れた心の甦ることを書いたものであり、後者には新平民の娘の里野といふのが出てきて、裂かれたる愛情の爲め狂亂して櫻月夜に琵琶歌を歌ふ一節がある。これらは今迄の作家の氣付かなかつたヒロインを取扱つたものとして忘れてはならない。

また社會主義小說に木下尙江氏の『良人の自白』がある。翠と呼ぶ美しき少女が戀に破れて渡米し、更にロシアに赴くが、風雨十數年、幾波瀾の後、彼女は露都に於てゆくりなくも昔の戀人に邂逅する。そして彼が革命戰の飛丸で斃れたのを故鄕に知らせる一條は、淚なしには讀めないものであつた。

なほ序に『明星』一派が詩壇に勢力を占め、星菫派だとか、戀愛神聖だとかいふ言葉が生じ、」

或は盛んに用ゐられたのも、この明治三十年代であつたことを附記しておく。

(六) 青鞜時代

——謂はゆる新らしい女——

今迄のことを略叙すると、明治の婦人運動は最初男女同權なる標語の下に、著しく政治的色彩を帯びて進展したのだが、途中からそれが戀愛神聖論となつて、全然政治と絶縁し、更に卅年代末期から四十年代に掛けては、婦人解放の標語と變つて、漸く西洋の近代思潮と歩調を合せてきた。殊にイブセンのノラが思想界に及ぼした影響が大きいが、それを移入した第一の功績者は島村抱月氏でなければならない。抱月氏は早くから『その女』なる小説を書いてこの方面の先頭に立つた。但しこれはグランド・アレンの『なし遂げたる女』の飜案で、純然たる創作ではない。

この情勢はひいて青鞜社の出現となり、「新しき女」とか「醒めたる女」とかの言葉を生んだ。が、その新しい女に反對と憎悪を露骨に現はしたのは夏目漱石氏であつた。『虞美人草』の藤尾なる女性がそのいゝ例證である。この藤尾のモデルは故白村博士夫人厨川蝶子氏であると專ら

噂されてゐたが、最近は、本誌(『婦人の國』)に處女作劇を寄せた閨秀劇作家氣鬱君子氏であるとも噂されてゐる。眞僞は知らないが、その昔漱石氏は氣鬱氏の持家を借りてゐたことがあつたのだといふ。しかし漱石氏は後に、頭腦の中で自分の好きなやうに作り替へた新しい女を描いた。『彼岸過ぎまで』の絹子の如きがそれである。『行人』の直といふ女、盲景清の話なども綜合してみると、漱石氏にイブセンの影響が幾分あるのは否み難いだらう。

當時は恰も自然主義が文壇及び思想界を風靡した時で、現實の暴露と、徹底したる人生味を作家が強調した結果、單なる女學生の戀愛などは、小說としての題材價値が大いに下落した。女學生の變愛などは要するに甘くてたはいのないものが多いから、甘酸に徹した味はひを熱心に要求する讀書界は、そんな下宿屋式戀愛では滿足しなくなつたのである。そして生活にやつれた人妻や、娼妓や、藝者や、私娼などが頻々として題材に上るやうになつた。田山花袋氏の『生』『妻』、岩野泡鳴氏、小栗風葉氏の『耽溺』、島崎藤村氏の『家』德田秋聲氏の『足迹』『爛れ』、正宗白鳥氏の『落日』、近松秋江氏の『別れたる妻に送る手紙』などが中でも名高い。田山花袋氏の『蒲團』にある中年作家が若き女弟子との情痴を描いたものとして世評を沸騰さした。このモデルは今の永代靜雄氏夫人美知代氏であると專ら當時の評判であつた。

國木田獨歩氏は『鎌倉夫人』なる作に、性道德の無檢束な某女を描いたが、大正に入つてから有島武郎氏が同じモデルで書いたのが例の有名な『ある女』である。

(七)最近の傾向

——モダン ガール——

大正に入つてから小說題材として著しい勢力を占めてきたのはカッフェ女であらう。好んでそれを描いた人に廣津和郎氏や谷崎精二氏がある。なほ大正式な新女性は菊池寛氏や久米正雄氏に依つても數多く書かれた。加藤武雄氏は『文學界』一派の傳へたやうな母にして處女なる聖マリヤ式の女性の心境に、男性としての一味の強い憧憬を寄せてゐる。『久遠の像』はその意味で注目すべきものである。藤森成吉氏は女性の健全性といふやうなものに抑へ難い愛着を感じてゐる。『東京へ』の女主人公などがそれである。

最近はまたモダン・ガールなる一種の女性が好んで題材に取られる。快活で、機智に富んでゐて、開けツ放しで、羞恥心と貞操觀念がなくつて、現在の享樂に專らな點が、彼女達の特長であらう。このモダン・ガールの出現を最初に敏感に豫知し、更にその典型を創造して見せ

た作家は新居格氏である。（大正十四年十一月、『婦人の國』）

小說に現れたモダン。ガール

(一)モダン・ガール

最近小說に現れた女性といふやうな標題でも、これが數年前に課されたのであつたら、目標となるものが必ずイブセンや、ショウなどの作の女主人公を生呑(なまの)みにして吐き出したやうな女性であつたらう。が、いつの間にか世は急轉して、現在ではノラ式やマグダ式の女性は、捜したつてなか〳〵作品の中には求められなくなつた。

然らば現在の小說に描かれてゐる女性で、讀書界注目の焦點となつてゐるのはどんな女であるかと言へば、モダン・ガールの一語が最も完全に近くその內容を盡くすであらう。

このモダン・ガール系統の女性を書いた最近の作品で、明かに私の頭腦に殘つてゐるものが三篇ある。第一は『文藝日本』の創刊(大正十四年四月)號に載つた新居格氏の『明暗』である。第二は『中央公論』五月號に載つた廣津和郎氏の『贈り物』である。そして第三は『改造』七月號

に載つた谷崎潤一郎氏の『赤い屋根』である。

『明暗』に描かれたのは、聰明で、機智に富んで、應接に遑のない程コケヲッシュで、併しどこか己れを高く持する所があつて、一寸御するに炎所の抑へ難いやうな人妻である。いや人妻と言つては聯想が古くなるから、吾等一流の造語の使用をゆるされるならば、不良マダムである。『贈り物』に描かれたのは可憐な、併し甚だしく享樂的なカッフエの女給で、『赤い屋根』に描かれたのは、活動の女俳優である。この外同じくモダン・ガールの範疇に入るものを小説と關係なく實在に捜すなら、丸ビルその他の職業婦人以外に、寄宿舍でウヰスキイを飲んで賽室を放逐されたり、腕まくりをして卓に頬杖をついて、煙を輪に吹きながら男と對談するやうな高等程度の女學生の群がある。

彼女達はどんなに境遇を異にしてゐても、現在の享樂に專念で、過去を悔いず、未來を思ひ煩らはない點で一致してゐる。男の立場から主我的に考へると、友達として無駄口をきいてゐる分には極めて面白いが、細君とするには十分信用がおけないやうな氣のする點で相一致してゐる。併し抽象的なことのみ說いてゐても仕方がないから、それらの諸作を讀んで居られぬ人の爲めに、梗概を掲げるであらう。

(二) カッフエ女給

便宜上まづ廣津君の『贈り物』から述べる。ある晩大貫と云ふ畫家が行きつけのカッフエで、毎晩のやうに落合ふ加藤と云ふ小説家の友人と待合せたが、たうとう來なかつたので、先日から自分に好意ある眼ざしを投げてゐたお靜と云ふ女給に話しかける。

「君の家は何處？」

「小石川ですの。」

「小石川では僕の家と方角が同じだな。どうだい送つてやらうか？　タクシイで。」

「ええ、送つて行つて頂戴。」

かうした會話を以つて小説は初まる。併し、自動車に乘る前に、女の提言で二人は散歩をする。

「あたし嬉しくつてよ。あなたとかうして歩けるなんて思ひも寄らなかつた事よ。——あたし先からあなたの事を思つてゐたのよ。」

女は先づかう口をきる。

だけど變なものねえ。こつちで思つてゐると、その氣持があなたにも自然に通じるのねえ。」

——途つて下さるつて仰有つた時、ほんとうに嬉しかつたわ。夢かと思つてよ。」

次いでかう言つて押し被せて來る。

自ら語る身上話によると、彼女はM呉服店々員となり、同じ務めにゐる男店員と、「立派に、正式に」結婚したが、「性格が合はない」爲め別れて、小遣取りに女給に出たのである。家には兄がゐて、さう經濟的に困つてゐるわけではないが、退屈な上、唯厄介になつてゐるのも悪いやうな氣がして務めてゐるのである。これだけの事を彼女が語つた時、作者はその次の動作を左の一句で描寫してゐる。

「(彼女)はそこで言葉を切つたが、いきなり情熱的な調子になつて、くるりと大貫の方へ向から身體を振向けた。『だから可愛がつて頂戴ね』」

彼女は快活に又言ふ。

「あたしね、あなたの前にもう一人好きになつた人があるのよ。——その人とあなたとたつた二人つきりよ。ほんとうに好きになつたのはね。その人といふのはね、それは可笑しいのよ、言つて見ませうか。」

と、明かしたのを誰れかと思へば巖谷小波である。小波の寫眞を見て好きになつて、それを切りぬいて、臺口や、手箱に入れ、十九の年嫁に行くまで時々出してみてゐた。しかし彼女は本物の巖谷小波は知らないのであつた。

女は又「ねえ、あたしあなたの事を、その中、折を見て、兄に話すわ。あたしの兄つて、それは解りがいゝのよ。屹度解つてくれてよ。さうしたらうちに來て頂戴ね、うちに。」と言ふので、大貫に氣の毒になつて、自分は結婚して家内のある事を言ふと、

「知つてるわよ。そんな事……そんな事みんな知つてるわよ……だけれどそんな事どうでもいゝぢやないの。奥さんがあつたつて好きな人は好きなんだから仕方がない。」

——これが彼女の返事である。

彼女は四五日したら店で暇が取れる。それまでに小遣を溜めておくから鹽原へつれて行つて呉れと求め、今夜何處かへ連れて行つてくれとも迫る。

私はこれ以上作の梗概を語る事は控へるであらう。

たゞ言つておきたいのは、モダン・ガールの特長はその輕快な、人に臆しない、それでゐて無邪氣を裝ふ會話の中に最も明瞭に認められる。その故にこそ私は特に原作からなるべく多く

の會話を引用して來たのであつた。

彼女は享樂の機會は決して逃すまいとする。享樂の爲めには對手の素性などは細かに詮索しない。そんな手數は思ふだに億劫とする。

『生ける屍』のジプシイの歌に「……好かれて、好いて、厭いて別れりや知らぬ顏」と言ふのがあつたが、モダン・ガールの念とする所もそれである。どうせ三世を契る夫ではないのだとなれば、享樂の道づれの男に妻子のある事などは問題でない。「奥さんがあつたつて好きな人は好きなんだから仕方がないわ。」である。

(三) 不良マダム

モダン・ガールの群は、女學生の中にも多い事は前にも說いたが、それが家庭に入つた不良マダムを新居氏の『明暗』に依つて、窺ふであらう。

この作には筋と云ふ程のものはない。一人の左傾思想を抱く革命家が、K市へ行つて昔のステッキ(この言葉にも註をしなければ多くの讀者には分るまい。街上散步などに必ずつれ立つて出る女性のことである。新居氏始め、江口渙氏、大宅壯一氏等、日本フエビアン協會の諸々た

る中堅諸君から來た遠足の誘ひ狀に、必ずステッキ携帯のこと、あつたのは、勿論この意味だつたらう)であつた活動女優と不良マダムとに會ふだけの話である。

そのマダムは歷とした夫があるのに、「いらつしやる日を樂しみにして待つて居るわ。その日が晴れるやうに、汽車の時間が決して遲れないやうに、そしてあなたがニコ〳〵して下さるやうに……氣にかけるのはその日のお天氣だけなの」と云ふやうな手紙を平氣で出す女である。

例に依つて彼女の會話を二つ三つ拾つてみよう。モダン・ガール乃至不良マダムに題材を取つた小說に、筋をくど〳〵と述べるが如きは野暮の骨頂である。彼女達の面目は會話に現はれる。

驛に出迎へたマダムと共に、主人公の富士はレストランに入る。

「電報は昨夜隨分遲くついたでせう。」

「ええ。寢こんでゐる所を叩き起されてよ。」

「濟みません。だがあなたはまあ我慢して貰へるとして、外の方は迷惑だつたでせう。」

「いいえ。でも宅がエフつて誰だいと訊いたわよ。で、Fつて富士さんよ。ねえ、あなた、富士さんがこちらへ居らつしやつたら、私毎日のやうに出て歩きますから、よござんすかと

尋ねたの。さうしたら何とも言はずに默つてゐたわ。」

「しかし二人のことを變に思つては居ないでせう。」

「さあどうですか。お前と富士との關係は文壇周知の事實ぢやないかとも言つてたわ。でもそんな事何だつて構やしない。」

さうかと思ふと斯る一節もある。

「宅は言つてたわ。一體、富士の奴怪しからんよ。俺の女房を引張り廻して、とう〳〵病氣にさせやがつた。その癖、看病させられるのは俺なんぢやないか、損害の賠償の責があるつて。」

「捌けてるねえ。」

「さうでもないのよ。隨分やきもちやきでもあるの。でも、あゝまでにしたのは私の感化だわ。」

この最後の一句に彼女の面目は活躍してゐる。ある時、二人のみ語つてゐて、富士は言ひ知れぬ力に引かれ、夫人の肩に手を掛けた。その時彼女の取つた態度は抗拒でもなかつた。默認でもなかつた。長い間女性の育てゝ來た本能的羞恥の言はす「いやだわ」でもなかつた。

「何をしてゐらつしやるの。」

と言つて夫人は潤みのある美しい瞳を見はつて、媚惑的な微笑を浮べたのである。それで彼の手は磯巾着のやうに引込んで了つた。

(四) 活動女優

谷崎氏の「赤い屋根」に書かれたのは、假りに廣津氏や新居氏の描いたのを普通の職工に譬へるなら、熟練工にも相當すべき活動女優である。この作も梗概は皆まで語らないが只一言だけ言はして貰ひたい。

このヒロイン蘭子はマソヒズムの男をパトロンに持つてゐる。だから同じ屋根の下に情夫の美少年をおいても咎められずにゐる。彼女はパトロンの來てゐる夜、彼に睡眠劑をしたゝか飲ませて、美少年との事業に耽つてゐる。所がある朝、京都で乘馬を教へてくれた大學生がたづねて來た。彼女はそれ迄に彼を誘惑するつもりで色々な謎を掛けた事があるのだが、それに大學生は一向不感性なのであつた。

だから男には揶揄れ切つた彼女も寺本(大學生)には處女のやうな愛慕と羞恥とを感じて、硬ば

つた態度が脫けなかつた。手紙で呼出しをかけても來ないので諦めたやうな焦燥を感じてゐる所へ、ある朝彼は突然訪ねて來たのである。だから彼女はまだ寢床にゐるパトロンを蹴起して虱蟲、早く出て行け！　と言ふ。パトロンがその男を一眼見せろと言ふのも容さないで「誰が見せてやるもんか。見せたら向うが汚れちまはあ。……さあい〳〵か、梯子段を降りる時に口を利くと承知しないぞ。默つて茶の間まで行くんだぞ。」と言ふ樣幕である。

何故にかゝる女性が發生するに至つたか、その社會的意義を考察してみたらさぞ興味があるだらうと思はれるが、現在の私にはその準備がない。

たゞ之に依つて一つ私の思ふ事は、かうした女性の數が實社會に日增しに殖えることは、何となく、世の末が近づいたと云ふ感じを抱かせる事である。澁季到來の symptom と云ふ感じがする。その意味で私の聯想はローマ頽廢期の女性や、フランス革命直前の女性に溯る事がある。

それから推論を付けて行くなら、彼女達は一つの文明が爛熟し切つて、頽廢の兆を見せた時の特產物である。潰壞腐爛しかゝつた文明の膿の中に、未だ將來の目標となるべき新理想が揭げられず、隨つて人心が緊張を失つたまゝでゐる時代の特產物である。現代の文明は資本主義文明だ。その資本主義文明が爛熟し切つたから彼女達の發生を見たのだ。論者は言はう。併し

無産階級の新目標が高く掲げられてゐるではないかと。併し来だそれは中産階級以上を承服させてゐない。中産階級以上に不安は感じさせたが、それだけに留まつたから、その不安の中から彼女達のやうなモダン・ガールは生れるのだ。たとへ彼等の中から生れないとするも、少くとも彼等を對象に生れるのだ。從來のまゝの藝娼妓が漸く Out of fashion となるのはこの意味で止むを得なからう。

私のある友人が甚だ適切なる皮肉を放つた。

「モダン・ガールは資本主義文明の根に吹き出した梅毒である。」と。

併し以上の如く、資本主義文明の爛熟から彼女達が發生したと見るのは、世界中どこの國にもあてはまる公理だが、それに日本のみの特殊的事情を附加するなら、一昨年の大震災が急速度でこの情勢を誘致したであらう。思想的に說明すれば、一瞬轉の變災がどんなに堅牢に見えたものをも土臺から覆へした事が、一般人心に明日の頼み難い事と、結局現在を糊塗し、享樂して行くのが功利的に言つて得である事とを痛感せしめたのである。社會事象の上から言ふなら淺草界隈の私娼が或は燒け殘つた、或は新たにバラックとして建つたカッフエや飲食店に普く散在して、職業婦人や女學生までをも徹底的に私娼的氣分に化せしめたのである。モダン・ガ

ールの氣分の上の著しい特色は、恐らくその私娼式と言ふ事の上にあるのだ。

アルチバァシェフが、これからの興味は百姓と私娼に集注されると云ふ意味の事を言つてゐるさうだが、これはさすがだ！　と感ぜざるを得ない。

私娼だ！　私娼だ！　その私娼化を、他の現世享樂的な希願、輕快な機智、堅い羞恥の殼の喪失、貞操觀念の打破、氣分の上の肉的飽滿、華やかな會話、惡どいまでに濃厚な化粧と共に、著しい特色とするのが恐らくはモダン・ガールの正體だ。

(五) 漱石以後

さきに適宜な機會に言及すべきであつたのをつい忘れたが、モダン・ガールの發生をかなり早くから豫觸して描いたのは夏目漱石ではあるまいか。その『三四郎』と云ふ作品の中に美禰子と云ふ女が出て來る。彼女は聰明で、機智的で、そして周圍に集る男の學生などを手玉に取つて飜弄してゐるやうな形がある。主人公の三四郎などは、駝鳥のボーアや (stray sheep) で何度も煙に捲かれてゐる。そして揚句のはてが、「われはわが咎を知る。わがあやまちはわが前にあり。」――の聖句で突き放されてゐる。

ロマンチック・アイロニイとか、de ta fabula! の言葉で三四郎を煙に捲く與次郎がモダン ボーイの先驅を描いたものであるのと共に、彼女は極めて面白い好對をなしてゐる。

そして、若しあの美禰子が現代の生存者で、そして家庭に入つたなら屹度彼女は新居氏の、『明暗』の女主人公と同じく不良マダムとなつたらうと私には想像せられる。

漱石門下で、久米正雄氏は新時代への觸感の鋭敏な人として聞えてゐる。久米氏にはこれぞと取立てゝ論ずべき傑れた作が少くとも小説の上では無いにしても、あの觸感の鋭敏さだけで現在の文壇的地位は許されてよいと言ふ人もある。或はさうであらう。だが私は作品を精讀してゐない事を悲しむ。

菊池寛氏の新聞に書かれるものは拾ひ讀みして同じく新時代的觸感の鋭敏なのに畏服した。併し(精讀し直さねば何とも言へないが)、そこに現はれる女主人公は、私達の謂はゆるモダン・ガールといふものとは少しく違ふやうに思つた。尤も菊池氏の作はモダン・ガールを主目標として狙つたのでないから、それが描けてゐないといふ事は決して作の評價に狂ひを生ぜしめるものでは、勿論、ない。

それから長田幹彦氏が丸ビルに居る靴みがきか何かの老爺が、丸ビル婦人の私娼的手ずきを

する事を書いた物語が、一時世人の注意を集めた事があつた。丸ビル婦人を口にするもので、長田氏の篇に言及しないものはない有様であつたが、これも遺憾ながら、私は一讀の機會を逸した。

谷崎潤一郎氏は古くからモダン・ガール・タイプの女性を數多く描いてゐるが、氏の作については既に論じた。

カッフェ文學に一つの流行を作つたのは恐らく谷崎精二、廣津和郎、相馬泰三などの諸氏であつたらう。だがその中では廣津氏の作のみが段々明確にモダン・ガールに屬する女性を浮き立たせて來た。この外廣津氏にはタイピストや洋妾を描いた作もある。

(六) 關西式と關東式

最後にもし自分の作について語るの僭越が許されるならば、先月(大正十四年八月)の『早稻田文學』に私の寄せた『旅のアヴァンツュール』と云ふ短篇も、この範疇に屬する女性を描かうと意圖したものである。京都に居る貧乏な畫家が、東京の友人の訪問を受けても饗應するものがない、が、彼は身輕な男なので、友人が退洛の際、驛まで見送つて來て、汽車がまだプラット

フォームに停まらぬ中に飛び乗り、その列車に乗合はせてゐる一番の美人の前に座席を占めてやる。これが彼の友人につくし得る唯一の好意であつた。所がその美人と友人とはすぐ汽車の中で親しくなり、途中下車して一晩を伊豆の温泉場で泊りあかす。男の方は勘定は全部自分で負擔する積りでゐたが、別れ際に美人が、

「會計を全部あなたに持つて貰へば、私は一夜賣淫を働いた事になるし、もし又全部私がもてば、あなたは一夜男妾になつたやうで、お互に不愉快だから、折半して持つことにしよう。」と主張する筋である。

私の作のヒロインは、先年の大震災で夫を焼き喪うたブルジョア階級の年若い未亡人になつてゐるが、かゝる種類の氣まぐれな女性享樂家を、少くとも前年の震災は各地に散布せしめたらう。

前年ロシア大革命の起つた際、シベリヤから浦鹽方面に出稼ぎしてゐた女性が一時に内地に還つて、北陸から關西方面の主要都市の旅宿や、カッフエや料理屋を充たした事があつた。彼女達が銀行に預けてゐた血肉の代償として得た銅塊は、革命の爲め無意味な紙片と化し去つたので、一様にデスペレエトな、現在享樂的な氣持でゐるのを、私は非常に面白いと思つた事が

あつた。今だつたら志賀氏や谷崎氏を初め關西に有力な作家が移住したので、自然さういふ女性も筆に上る機會があつたらうと思ふが、その頃は關西に作家がなかつたからシベリヤ逃げ歸りの女性は題材とされたのを見た事がない。

それは兎も角としてシベリヤ歸りのさうした婦人が關西の一部の情痴の世界を化膿させたのに引き換へ、關東のそれは震災に影響された女性に依つて完全に化膿されつゝあるのは興味ある對照でなくてはならない。

彼女達が社會に直接貢獻する所は殆んどないが、併し腫物に加へられた熱のやうに、社會の化膿と腐爛を促進し、この不合理な社會の廢滅を若干早からしめ、そして明日の新建設を幾分でも容易ならしめる間接な、無意識な寄與をなしつゝある事を思へば、必ずしも無意味な存在とは言へない。

人に依つてはモダン・ガールと言へば女性の運動選手などを數へてゐるやうである。多分さうした見解の方が、より正しいとも思はれるが、私達のサークルで使用する俗語のモダン・ガールの意味は、先づ上來說明したやうなものである。その特徵を要約すれば毒々しい化粧、明快な理智、口をついて出るキットとユーモア、羞恥觀念の喪失、人を飽かしめない對談、今日の享樂

の專念的追求、態度の私娼化、觀念上の肉的飽滿！——これだ。（大正十四年九月、『太陽』）

明治・大正文學と經濟意識

（一）文學と經濟學の相關關係

多分上司小劍氏であつたと記憶するが、「昔の武者修業は一體どうして喰つて通つてゐたのであらう。」と云ふ意味の皮肉を言つてゐた。

講談などの語る所を見ても、彼等修業者には別に大して裕福な者も居ないやうである。それが揃ひも揃つて勇ましく、且つ任俠で、弱きを扶け、強きを挫き、貧しい者には豐かに施しをしてゐる。吾等はその立派な行爲に眩惑せられて氣付かずにゐるが、なるほど、さう注意されてみると、如何なる經濟的根據の上に、彼等の生活が支持せられてゐたか、不思議でない事はない。

だが、恐らく獨り往昔の修業者のみに限らぬ。實を言ふと現代の小說に現はれて來る人物の大部分も、どうして喰つてゐるのか分らない。これは作者の觀察なり、批判なりが、十分なる

經濟的徹底を缺くのに起因するであらう。

但し私は文學を經濟學に隷屬せしめよと主張するものではない。文學の中には、たとへば露伴や、鏡花の或る作の如く、全く經濟意識と隔絶して評價を下すべきが至當な領域もある。が、少くとも生活への浸徹を主張するリヤリズム系統の作品に於ては、さうした空靈的態度は斷じて許されぬ。それ故に私は、哲學や、宗教が、それ〴〵文學との關聯に重要な一役を務めてゐる如くに、從來餘りに閑却され過ぎて來た經濟學にもその正當な關與權利を認めよと言ふのである。

尤も文學と經濟學との關係の無視せられてゐるのは、恐らく日本ばかりであるまい。不學な私は、或る意味で現代思想の樞軸と言はるゝマルクスの『資本論』を通讀してゐないので、そこで文學が如何なる批判考察を受けてゐるかを詳かにしないが、恐らく上部構造の一斷片として刷過的に片付けられてゐるであらう事は、諸家の紹介を綜合して推想するに難くない。又、今、試みに手許にある英米の數種の文學概論を披見してみても、やはり此の關係は無視せられてゐる事が分る。

隨つて私などには到底、文學と經濟學との相關作用を根本的に究明する事も出來ねば、又文

藝的作品の底を流るゝ經濟意識を檢討するに、如何なる態度を執るのが最も正しいメソッドなのかも分らない。玆にはたゞ、私の狹い視野に映じた貧弱な材料を基礎に、二三の所想を語りたいと思ふのである。もし他日この方面に大いに研究を進める學者に些少でも寄與する所があれば、それは望外の幸福と言はなければならない。

(二) 福澤諭吉と菊池寛

武士は喰はねど高楊子——

この經濟觀念を全然蹂躙した日本人の氣位を痛快に打破したのは明治維新の革命で、その中に一個の代表者を求めれば福澤諭吉である。その意味から彼は黄金崇拜を說いて、日本の士氣を銷沈せしめた怪物であるとまで、一部人士の間に貶斥せられるが、これは舊弊で頑固な僻論たるに過ぎない。聰明にして達識な批評家は必らず、新興日本が感謝を以つてその名を記憶すべき人傑の一人として擧ぐるに異論を挾まぬ。彼等は曰く、福澤が唯物的傾向を取つて、新日本の國民に黄金の貴重すべきを說いたのは、恰も、封建時代の武士に劍法の重んずべきを說いたのと同樣である。彼は、新日本の基礎となるべきものは獨立の市民でなければならないと信

じ、そして市民に獨立を保持せしめる要樞は黄金の外にないと信じた。それ故に甘んじて黄金崇拜を說いたのである——と。

かうした福澤の考へ方は、日本の資本主義確立の爲め、何よりも有力な土臺石となり、その善き感化は脈々として遠く世界大戰勃發の、生産工業空前の膨脹時代にまで及んだと言へる。併し今後の吾等は最早、彼から受くべき何物をも持たぬ。彼は今後は有害な桎梏であり、無用な殼である。餘事であるがその時に當つて『福澤全集』が複刻せられたのは、時勢が企まぬ皮肉に依つて、彼の爲めに吊鐘をついたものと言へる。

兎もあれ明治の文化は全面に涉つて福澤の影響を受けたが、もしその中から影響の最も稀薄であつた部分を拾へば、文學でなければならない。明治の文藝思想史の上には、彼の唯物的な功利主義學說が殆んど培育の肥料となつて居らぬ。

たゞ民友社に一人の山路愛山があつた。彼に最も多とすべきは、基督教や社會主義學說にも十分な理解を以て、數種の著述を試みながら經濟方面にも盲目でなくて、日本の歷史に自覺して唯物史觀的解釋を加へた第一人者たる榮譽を有する事である。明治の廿年代、彼は文學の實用性を主張してしば〳〵北村透谷と論戰し、双方で地平線下、高踏派と罵り合つてゐた。その

頃から見えてゐた思想が後に次第に圓熟して、日本歴史に對する新解釋となり、白柳秀湖氏が忠實にその衣鉢を繼いで『町人の天下』以下の諸著が生れた。又白柳氏を初め數個の社會主義者に依つて試みられた社會講談乃至新講談は、これ又愛山が既に試みてゐるお家騒動記錄の延長であると言へる。

そんな次第で愛山の繼承者は絶えず、隨つて彼の志は死なかつたとするも、而も透谷の感化が如何に明治大正の文學に甚大であつたかと思ふ時、顧みれば愛山のそれは何といふ寥々たる事であらう。

但し吾等はそれを以て直ちに兩者が優劣をはかる標準としてはならない。これは單に、文壇が未だ經濟意識に眼ざめる迄に、時勢が熟さなかつたといふ偶然に起因するものに外ならない。

世界大戰を境界として、わが一般思想界は急に「樞軸的轉回」を試み、封建の餘風で比較的今迄、不當の侮蔑を受けてゐた經濟學が、國民興味の中心點となつた。議會などでも急に氣付かれて來た事は、往年の河野廣中や犬養毅などのやうな志士的論鋒が急に勢力を失うて、濱口雄幸などの精緻な經濟論が注目の焦點となるに至つた一點である。後ればせながら文壇も亦、經濟的思想の忽諸に附すべからざる事に氣付いて來たが、これはプロレタリヤ評論家の功に負

ふもので、平林初之輔君が中でも花形であり、青野季吉君がこれにつゞいた。そして兩君の思想の培養に資した河上、福田、櫛田、小泉、堺、山川等の諸學者や社會主義者は間接の貢獻者だつたのである。かくて文壇の士も次第に昔日の高踏派ではなくなり、今更のやうに愛山の遺著などを珍重する者が生れて來たのが文壇の現狀である。

思想とは離れて別に、文學的作品を徹底的に商品化した功績者には菊池寛氏がゐる。作品の商品化は決して文藝の冒瀆ではない。資本主義社會に於ては必然である。然るに傳統に捉へられてゐた文藝家は、文藝を以て何か特別に神秘で高貴なものゝやうに思ひこみ、咽喉から手の出る程欲しいに拘はらず、當然の報酬をも要求しかねて「清貧」なる痩我慢に甘んじ、出版者といふ資本主義者にうま〳〵と利用せられてゐた。この不合理を觀破し、文藝から得體の知れない神秘性と高貴性とを排除して了つて、菊池氏は勇敢に文藝をマアケットへ引出した。この意味に於て菊池氏は文學界に於ける福澤諭吉であると言へよう。菊池氏が今日文壇の重望を一身に集めて、その象徴であるかの如き觀を呈してゐるのは作品の傑れてゐるのにも依らう。人物の大きいのにもよらう。學問的背景が比較的に深いのにも依らう。が、又今迄に死に切らずにゐた文藝に絡はる封建性を打破して、それを完全に資本主義社會に適準なさしめた功にも依

るであらう。

(三) 夏目漱石の經濟意識

以上に於て明治から大正へ掛けての、文藝思潮と經濟思想との、相關なり消長なりは略叙した。今度はそれを背景として浮み出した作品について、觀察したい。經濟意識を人間の方に延長させて最後にぶちあたるものは生活であり、物の方に延長させて最後にぶちあたる者は金である。經濟思想を根柢として論ずれば餘りに抽象的になり、生活に卽して觀察すると餘りに多岐に亙るから、玆では「金」を中心に、各作家がそれを如何に題材に用ゐてゐるかを見て、その經濟意識の濃度を計るであらう。

作品として明治文學の曉鐘をついたものは坪內春廼家の『書生氣質』と長谷川二葉亭の『浮雲』であるが、これは兩作共に、かなり「金」を明細に的確に書いてゐる。恐らく後世、明治十年代の學生の生活費や吉原の遊蕩代などをさぐるに『書生氣質』程の好參考書はなく、官省の下級官吏の俸給や生活狀態を知るには『浮雲』が絶好の手引きになると思はれる。殊に『浮雲』には免職と增俸とが婦人の心を動かすに如何に作用して來るか、その人の心生活の高下が

實生活に如何に無關係で無價値なものであるかといふ事も睨み殘してゐない。近代社會のハムレット的の悲劇は常に玆に生ずる。春廼家は此の外『一圓紙幣物語』なるものも書いてゐるらしい。純粹の文學者にして金を主題に作したもの、明治では恐らく之を嚆矢とするであらう。

後の文學に比して、明治創成初期の文學がかく揃ひも揃つて、「金」に接近してゐるのには、色々な理由があらうが、私は作家の敎養が主として然らしめたのではないかと考へる。まだあの當時は文學者の生活が確立してゐない時で、春廼家が大學で修めたのは文學よりも政治經濟學が主要部分を占めてゐた。又二葉亭も經世に志しある夢想家であつた。

然るに硯友社の勃興と共に文學も漸く專門化し、職業化し、文學界の擡頭は情熱への隨順を高潮して、文學を全く經濟と分離せしめた。

一體凡ての文化がさうであらうが、文學も、發生後、勢力を得て來ると、初期に附帶してゐた不純な含有物からなるべく逃脫して、それ自身の純粹な姿を完成しようとする傾があつた。藝術の爲めの藝術の主張は、この時にのみ有效である。硯友社や文學界の仕事を後世から顧みると、その功績は主として文學を純粹な姿に還らしめた點にあるので、この時、經濟意識との相關の缺如を責めるは、時勢を解せぬとの非難を免れまい。

併し尾崎紅葉の一代には、文學は純粹なそれ自身を完成した。而も純粹なそれ自身が存外大衆の嗜好に合しない事は、露伴と違つて大衆の人氣の上に存立してゐる彼には、淋しい事でなければならなかつた。掉尾の大作『金色夜叉』はこの焦燥から生れたが、これが比較的深刻に「金」と相關聯してゐるのは人の知るが如くである。金が重きか、愛が輕きか？　これを中心に旋回する悲劇が『金色夜叉』である。

明治三十年代にはこの外、社會主義的意味を有する唯一のユトーピアなる矢野龍溪の『新社會』が現はれた。又、日露戰爭と前後して木下尚江氏は『火の柱』に軍人と奸商との結託を摘發して當路大官の膽を寒からしめ、『良人の自白』に共產社會の理想生活を寫した。これ等は一般社會からは、明治出版物中、一つのレコードとなる位な歡迎を受けたが、經濟觀念に色青な文壇には何の刺戟も與へなかつた。

玆に擧も奇怪極まるのは、四十年代に入つて、生活への徹底を目標とする自然主義が起つたのに、生活に占める經濟方面の意義が一向に閑却されて了つてゐる事であつた。彼等のいふ生活はその爲めに著しく抽象的なものとなり終つた傾きがある。世俗にも「とかく浮世は色と金」といふが、彼等はその「色」の方面は、「肉慾描寫」なる標語を掲げて大膽に行つたに拘は

らず、「金」の方は一切無視した。ゾラに『ナナ』のある事は重要視したが『ラルジャン』のある事は無視した。

これに反し、低徊趣味を說いた夏目漱石は却つて金に向つてある程度の顧慮を拂つてゐる。試みに『三四郎』を繙いて見よ。野々宮なる理學士の話にかうある。

「お母さんが心配して、長い手紙を書いて寄こしましたよ。三四郎は餘儀ない事情で月々の學資を友達に貸したと言ふが、いくら友達だつて、さう無暗に金を借りるものぢやあるまいし、よし借りたつて返す筈だらうつて。田舍の者は正直だから、さう思ふにも無理はない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸方が大袈裟だ、親から月々學資を送つて貰ふ身分でのながら、一度に二十圓の三十圓のと、人に用立てるなんて、如何にも無分別だとあるんですがね——何だか僕に責任があるやうに書いてあるから困る……。

「なに、心配する事はありませんよ。何でもない事なんだから。たゞお母さんは、田舍の相場で、金の價値を附けるから、三十圓が大變重くなるんだね。何でも三十圓あると、三人の家族が半年食つて行けると書いてあつたが、そんなものかな、君。

「さうすると月に五圓の割だから、一人前一圓二十五錢に當る。それを三十日に割りつける

と四錢ばかりだが――いくら田舎でも少し安過ぎるやうだな。」（全集第四卷二六一――二頁）

元より漱石はのんきなブルジョア的知識階級だから、彼の經濟意識なり、彼の「金」に對する感觸の鋭敏さなりに就いては、今日から非議すべき點が多い。併し生活への徹底を缺く自然主義者が存外生活の抽象相にのみ意味を認めてゐたのに反し、漱石は生活の具體相に眼をそゝぎ、たとへ新聞の三面記事的接觸であつたとはするも、或ひは馬券の事を取入れたり、或は日糖事件の事を加へたりして、時代の經濟意識の波動を微弱ながら反映してゐるのは多としなければならない。漱石の讀者の多いのは決して彼の愛用したインテレクチュアル・トリックのみによるのではない。それが廣く世相に觸れてゐる點も有力な原因である。

餘事だが私は擡頭當時の『白樺』に向つてある輕慢を禁じ得ぬ者がある。彼等は口に人道と博愛とを說きながら、人もなげなる態度に十分平民蔑視を示した。

「金のある貴族でなければ、よき藝術は作れない！」――彼等はあの頃の一部の文學青年にかう思ひこませて了つた。彼等のある者は『桃色の室』なる劇を書いた。それは同族の學問藝術に理解なき徒から隔絶した室であると共に、又民衆をも超越した室なのである。桃色の室！それは貴族と藝術との象徵なのである。あゝした思ひ上つた態度を執つた事に於て彼等は社會

に謝罪の責がある。

(四) 三個の代表的作品

大正文學が、如何なる經濟意識を保持してゐるかを大觀する事は、今日、決して容易でない。殊にプロレタリア作家の末まで涉獵して行く段になれば大事業であるから、私は代表的二三作家の、金に緣ある作品を拾つて簡單な解說を試みよう。

私は作家として、菊池寬、芥川龍之介、加藤武雄の三氏を選び、更に作品として『眞珠夫人』と『拾圓札』と『銀貨』とを選び出した。

『眞珠夫人』は長篇小說であり、『拾圓札』は短篇小說であり、『銀貨』はコントである事に想ひ到れば、これで現文壇の中心作家、及び中心的藝術形式のもつ經濟意識は、ある程度まで明かにならなければならない。

『眞珠夫人』は、金と愛との相剋を經緯とする點に於て、大正『金色夜叉』だと言へる。そして此の作者に特に注目すべき二點がある。といふのは彼が熱心な、本質的な、女性擁護の爲めの騎士である事が、この作には最も明白に現はれてゐると共に、又、成金への憎惡、それと共

に意氣地のない華族への憫笑——これが露骨に窺はれる。

戰時の船成金なる荘田勝平が朝野の貴顯紳士を集めての大園遊會に、共に貧乏華族の子であり、共に戀人同志である杉野直也と唐澤瑠璃子とも參會して、成金の俗惡を攻撃してゐるのを、はからずも勝平に聞かれ、彼が、金を以て凡てを屈服せしめて、この青二才の誹謗に復讐しようとするのが、この物語の發端である。

直也の父の杉野子爵は成金の手足となる腰脱け華族だが、瑠璃子の父なる唐澤男爵は貴族院のリア王と言はれた清廉な硬骨漢である。たゞ此の硬骨漢も成金の奸策にかゝり、金故に陷穽に落ちた時、彼れ勝平は瑠璃子を代償に要求して一切の片を附けようと言ふ。

瑠璃子は又金故に清廉な者の苦しまねばならないやうな不合理の存するのを默視する事が出來ず、身を以て金の威力を征服する爲めに勝平に嫁いで行く。この作の一半の大切な楔點は茲に存する。

瑠璃子は身を犧牲にして美事「金」の力に復讐した後、今度は女性の立場から男性に復讐しようとする。そして遂に十分にその成功を見ないで、不慮な事から非業に死する事になる。茲に第二の重要な楔點が存する。

もし菊池寛論を試みる積りであるならば、私には、虐遇に泣く女性擁護の騎士としての菊池氏の方が興味があるのだが、文藝の經濟意識を論究するこの文章ではその餘裕がない。

たゞ一少女の殊勝な決心を以て、金の威力を征服せしめようとする。これは殆んど不可能な空想だから、そこに此の作の無理と缺陷と、同時に痛快味とがある。そしてこの作が大正九年の新聞に連載せられた事を思へ。あの時、既に經濟界の恐慌來は傳へられてゐたが、併し成金輩はまだ噴火山上の舞踏を止めては居なかつた。菊池氏は恐らく、彼等に對する憎惡と侮辱とを口火として、爆彈を投ずるやうな氣持を抱きながら『眞珠夫人』を書いたのであらうと思はれる。

菊池氏の作がかなり「金」に對して眞劍な切迫した氣持を見せてゐるのに反し、芥川氏の『拾圓札』は極めてのんきなものである。當の拾圓札に甚だ無反省である。

ある海軍の學校の教官で六十圓の月給と、一枚九十錢宛の價格ある原稿を何枚か書くのとを全收入とする堀川常吉は、毎日曜東京へ出る事をたのしみにしてゐた。明日の日曜も出られるならば、友人と晩餐を共にし、油繪具やカンバスも買ひ、フロライン・メルレンドルフの音樂會にも顏を出すつもりでゐた。所がその日財布には六十何錢しかない。彼はいら〳〵して新聞

と煙草とを賣つてゐる呼賣に向ひ、「朝日を呉れ給へ」と言つて、新聞ですか煙草ですかと反問され、「ピール」とあらぬ返事をしては痛快がつてゐる。それが妙な破目から自分と同じ學校の教官をしてゐる語學的天才栗野老人から拾圓札を借りる事になる。そして自分の威嚴を落さずに、これを返す方法を焦慮するたわいも無い小說である。

尤も芥川式機智は隨所に閃めいて思はず微笑させられるやうな所はあつた。「ロックフェラアに金を借りることは一再ならず空想してゐる。しかし栗野さんに金を借りることはまだ夢にも見た覺えはない」などはその一例である。これは吾々も思ひ當る所がある。それと最後に思はぬ印稅が入つて、拾圓札を遣はないでもそのまゝ返し得る事になり、初めてつく〴〵その札を眺める所は、さすがに芥川氏だと思つた。一節を抜いて見よう。

「彼はその夕明りの中にしみじみこの折目のついた十圓札へ目を落した。鼠色の唐草や十六菊の中に朱の印を押した拾圓札は不思議にも美しい紙幣である。楕圓形の中の肖像も愚鈍の相は帶びてゐるにもせよ、ふだん思つてゐたほど俗惡ではない。裏も——品の好い緣に茶を配した裏は表よりも一層美事である。これほど手垢さへつかずにゐたらば、このまゝ額緣の中へ入れても——いや、手垢ばかりではない、何か大きい10の上に細かいインキの樂書きも

ある。彼は靜かに十圓札を取り上げ、口の中にその文字を讀み下した。ヤスケニショウカ……

恐らく斯くまで拾圓札に向つて精細な觀察を下したものは、毎日金を手にしてゐる實業家や、會社銀行の會計係りにも多くあるまい。さうした取柄はあるにしても、これは決していゝ作ではない。芥川氏もこの作を以て全體の眞價を判ぜられるのは本意でなからう。聞く所によれば芥川氏が藤で社會主義文獻を讀み漁つてゐる事は非常な量に及び、その結果を何等かの形で發表されるのも遠くないさうである。その日の一日も早く到來せん事を待つ。

加藤武雄氏の『銀貨』はコントでありながら、併し加藤氏の全貌を推知さするに足る作である。『拾圓札』に依つて芥川氏を評價する事は氣の毒だが、恐らく『銀貨』に依つて加藤氏を評してもさう抗議は來まい。といふ意味は、取りも直さずこれは氏の作中でもかなり傑れた作品だと云ふ事を裏書きしたのである。

平作爺が奉公から暇を取つて甥の家に厄介になつた時、彼は百圓近くの金を以てゐたので、その中五拾圓を甥に分けてやつた。その金のきゝ目のある間だけは彼は大切にされた。併し甥の家は粗食なので彼は飴やアンパンを買つて來てあひま食ひをした。二人ある子供達にも分け

てやつたので、子供達は老いて愚に返つた平作の賑やかな相手になつた。その中に子供達は金をねだり始めたので、持金を村の店で銅貨に崩して貰つては二錢づゝ與へてゐた。

その後平作は甥の苦しい生活を見かねて拾圓やつた後、一圓紙幣を持つてゐたのを全部銀貨に代へて貰つた。持ち重りがするのが、次第に金の減つて行く心細さを幾分力づけてくれた。

爺は子供達に二錢づゝ與へてゐたのを一錢づゝに減らした。子供達からケチになつたと言はれたが、それでも彼等はまだ嬉しい相手になつて呉れてゐた。平作爺は殘りの金と自分の壽命とを比較して、どうも自分の命が少し長すぎたらしいと思つた。

やがて爺の財布には最後の五十錢銀貨がたつた一つ殘る日が來た。だからそれを崩すのが惜しくて、子供に小遣錢をやる事を拒絶した。すると子供が相手になつてくれなくなつた心細さに、又思直して駄菓子屋へ崩しに行つたが、いつの間にかそれが紛失してゐた。爺が歸宅してみると上の子が五十錢銀貨を玩具にしてゐるのが見えた。その夕、爺は冷たくなつた——。

此の梗概でみても分る通り、短かい中に淋しい人生の姿と、金が生活に對してもつ力とを巧みに描き出した好篇のコントである。移入されて以來一年にもならないのに、コントは各作家により隨分多く試作されたが、その中で私の最も感心した一篇はこれである。

(五) 結　語

以上の外、細田源吉君には未完の長篇小説『金』がある。國民新聞に連載されてゐたが震災と共に中止になり、未だ發行の運びに至らないのは惜しい。宮島資夫氏も、氏が實際經驗を有する株式市場に取材した作をある新聞に發表してゐるのを散見した。

まだその外、いろ〳〵な作家に依つて「金」が取扱はれ、そこから彼の把捉する經濟思想が窺はれる事と思ふが、現在の所それを一々詳記する材料がない。

そして結論的に言ふなら、世の思潮の推移と相俟ち、「金」が生活を支配する力、唯物史觀的モーチヴに成る作品は、日一日に多くなつて行く傾向はあるけれど、まだ〳〵未熟であり、微力であつて、特にそれ一つを論究の對象とするといふ程の名作は見當らぬ。

私自身も「夕刊の一字」なる短篇を書いた事がある(大正十四年十一月『文藝日本』所載)。ある高利貸が三枚五錢の夕刊を人から借りて、その一字分の購讀料が幾何に當るかを計算したといふ話の筋で、かういふ計算となつた。

五錢で三枚だから、夕刊一枚の代は一錢六厘六毛六朱である。これを假りに六厘までゞ切つ

て毛以下は紙代に宛てると、一枚は四頁だから一頁の値段は四厘に當る。一頁は十二段だから一段の値は三毛三朱で、一段は八十五行だから一行の値は三朱・九二となり、一行は十五字だからつまり一厘の一萬分の二六一餘につく事となる。

尤もこれは算數に甚だ明かならぬ私の計算だから大變に間違つてゐるかも知れない。要は金に病的に變質的に鋭敏な感覺を描かうとしたのだが、效果が擧つてゐるか否かは他の評價を待たなければ分らない。（大正十五年一月、『太陽』）

軍隊小說について

軍事教育反對の氣勢が盛んな時に當つて、文藝題材となつてゐる軍隊生活のことを一應考察してみるのも無意義であるまい。

軍隊生活を取扱つた文藝は大體に於て、小說と記錄との二つに分れ、その提供者は、軍隊生活に全然關係なき文學者と、軍隊生活に經驗ある(卽ち一年志願兵、もしくは普通の徵集兵として)文學者と、それから文字ある職業的軍人との三通りある。

明治の文藝史に、軍事的題材が際立つた色彩を點じたのは、日清戰爭の時江見水蔭、川上眉山その他によつて發表せられた戰爭小說を最初とするであらう(川崎紫山の西南戰史等は、明治文藝發生以前に加へて暫くそこ迄遡ることを差しひかへる)。そして此の系統に屬する、軍隊生活に經驗なき文學者が、軍人を小說の材料として扱つてゐる作には德富蘆花の『不如歸』をはじめ、川上眉山、泉鏡花、遲塚麗水等の諸作があり、下つては田山花袋氏の『一兵卒』『一兵卒の銃殺』

『軍の音』などがある。殊に『一兵卒』は『蒲團』と並んで、自然主義の勃興を記念する歴史的名作となつてゐる。

軍隊生活に經驗なき文學者が軍事的題材を作中に取扱ひはじめたのが日清戰爭を起點とするに對して、職業軍人中の文字ある者が一種の記錄的文藝を創造したのは日露戰爭の時であるのは面白い對照と言はなければならない。櫻井忠溫の『肉彈』『銃後』水野廣德の『此一戰』などは、この方面の代表的著作と言へよう。

普通の徵集兵又は一年志願兵として軍隊生活に經驗ある文學者は、この職業的軍人と、軍隊生活無經驗の文學者との中間的立場に位置する者と言へよう。この派の先頭に立つ者は、何と言つても大倉桃郎で、作としては『琵琶歌』をあげねばなるまい。この作は大毎の懸賞小說として當選したのだが、匿名の爲め作者が分らなかつた。角田浩々歌客が「この作の揭載せられ始めてから半年も立つに未だ作者の分らざるは歎ずべし」と書いたのがたま〳〵端緒になつて、作者が分つてみたら、丁度日露戰爭の時で、その人は旅順攻圍軍に參加してゐる一兵卒であつた。——これは實に明治文壇の生んだ最大のロマンスの一つである。

この作は軍隊では模範上等兵と言はれた水平社出身の青年に絡まる物語を描いたもので、中

村春雨の『無花果』など丶並んで、當時の家庭小説としては清新な題材だつたに違ひない。殊にそれまでの文藝には大抵將校しか描かれてゐなかつたのに、桃郎によつて初めて兵卒が描かれたといふことは、軍隊文藝に一つの時代を劃するものと言へる。

自然主義以後は、この派の作品は急に多くなつた。今文學者にして而も軍隊的經驗を有し、それを作品に描いた人を數へると、故人には有島武郎氏があり、現存者には吉田絃二郎、長田秀雄、岡田三郎、細田民樹、新井紀一、綿貫六助の諸氏があり、私自身も亦、その末班を汚すものである。この中綿貫君は職業的軍人だつたが、後に轉じて文學者になつた人であり、有島、長田、吉田の三氏は一年志願兵である。純粹の一兵卒として入つたのは細田君と岡田君と新井君と私と位なものであらう。

長田氏の作では『なまこ山の幽靈』と云ふのがい丶作だつた事を覺えてゐる。有島、吉田二氏のは際立つて此れといふ作が記憶にない。新井君は『山の誘惑』や『怒れる高村軍曹』に、到底軍隊生活の無經驗者では書けない一面を見せてくれた。岡田君も亦『涯なき路』に豫備召集中の一出來事を語り、それから題は忘れたが騎兵隊の馬を去勢する事を書いた面白い短篇があつた。綿貫君の『戰爭』はこの際見逃してはならない重要な作だが、私はまだ讀んでゐない

事を遺憾とする。

一時評壇で「軍隊小說」又は「軍隊もの」と云ふことが珍しさうに論じられた事があつた。これは主として新井君、岡田君、細田君などの提出した作品に依つてゞある。

併し軍隊ものを何も珍らしがるには當らない。文學者といふ文學者が、青白い神經質な人間の代名詞ではなくなつた以上、そして今のやうに近眼でも、遠耳でも、又はその他肉體に少々の故障を有する程度の者ならどし〳〵徵集し、第一乙種第二乙種の者迄、抽籤の結果は服役しなければならないやうでは、今後の文學者には軍隊生活に經驗を有する者が續々と現はれて來るであらう。さうなれば何しろあの別世界だ。それが文藝題材とならずに居る筈がない。

明治三十年代に於て文壇では一時「女學生もの」と云ふことが言はれた。これは女學生の存在が、益に社會的視聽をそばだゝしめた結果、それが題材となつた小說の頻發せられたのによる。そして此の「女學生もの」を代表する名作には前にしては小杉天外の『魔風戀風』があり、後にしては小栗風葉の『青春』があつた。

その『青春』や『魔風戀風』のやうな位置と品格とを以て、「軍隊もの」を代表する作家及び

作品は、誰であり、何であらう。私は細田民樹君と其最近刊の『一兵卒の記錄』を推したいと思ふものである。

『肉彈』や『銃後』は記錄が主であつて、文藝が從である。著者にたま〳〵文才があつたから、記錄も文藝的色彩を帶びて來たのに過ぎない。岡田、新井その他の諸君の作は、文藝が主で記錄が從である。或るテーマ、或る題材を心裡に思ひ描きながら、たま〳〵自分がその方面に經驗を有するから軍隊生活に背景を託するか、もしくは軍隊生活から取材してもそれに藝術的彫琢を加へて、記錄といふものとは遙かに遠ざからせて了ふか、二者のいづれかである。

所が細田君の作になると『一兵卒の記錄』といふ題名通り、それは正しく記錄である。軍隊生活のあの忙しい日、あのつらい日、あの飢じい目、あの怒罵、あの屈辱、あの虐使に、血と汗とで實際堪へて來た者でなければ到底書けない記錄である。がそれと共に細田君は小說家である。記錄が直ちに小說になつてゐる。それは小說であると共に精刻な記錄であり、記錄であると共に、頗る面白い小說である。此意味からの感銘はドストエフスキーの『死人の家』に似たものがある。卷頭には「此書を全國の現役軍人在鄉軍人諸君に呈す」とデデイカシオが附してあるが、實際、軍隊生活に實經驗ある者には殊に興味が深いであらう。私など在隊當時を追

想しながら五百頁に近い大冊を一氣に讀み通した。

工場で虐使せらるゝ勞働者諸君の生活は十分なる社會問題であり人道問題であるが、軍隊に於ける一兵卒の生活も到底それに劣るものではない。此意味から私は社會改革の戰陣に立つ諸戰闘士に是非此書の一讀を煩はしたいと思ふ。

次には直接兵卒と接觸してゐる全國の將校下士に讀ましめたいと思ふ。日本に軍制が布かれて正に六十年、今日この書に依つて彼等は初めて本當の兵卒の聲、僞らぬ兵卒の苦惱を、聞き得、見得るのだ。今迄兵卒としての生活を送つた者は日本で何萬人あるか知らないが、その思ふところを結晶さしたのが此の一卷である。ゴルスオーシイの作が監獄の改良に、コナンドイルの作が探偵法に一暗示を與へた如く、日本の軍隊制度もこの僞らぬ兵卒の心を見せられて、何かの刺戟を受取らないやうだつたら……又何をか言はんやである。

（大正十四年五月、『東京日日新聞』）

明治文壇雜事二三

（一）Passion の譯字

明治三十七年九月一日發行の『文藝倶樂部』に『好戰論者と不好戰論者』なる題下に上田敏の談話筆記が載つてゐる。その中にかゝる一節がある。

「また情熱と云ふ文字、これは北村透谷と云ふ人が、パッションと云ふ字を譯すに、感情でもいけず、熱情でも行けぬと云ふので、逆さに情熱と云ふ字を使つた。これが初めで、……また蝦茶式部と云ふ熱語は山岸荷葉君が始めたのだとか聞きました……」

山岸荷葉氏は、今で言へば久保田万太郎といふやうな風趣ある下町小說を書いた人で、私も少年の時に一讀した『紺暖簾』と云ふ作の如きは今もなほ忘れ難いものがある。だから明治卅年代に於て、急に社會的視聽を聳たしめた女學生の異名蝦茶式部が、荷葉氏によつて作られた熟字である事は、吾等の聊か意外とする所である。それに反して、情熱の譯字が透谷に依つて

作られた事は――情熱そのものを生き、短かい全生涯が直ちに情熱の結晶であり、象徴であつたと言つてもよい透谷の創造語として甚だふさはしきを思はざるを得ない。

(二) 獨歩の懸賞小說

明治三十三年の『太陽』にSSと云ふ匿名で、左の如き投書が載つた。

「太陽記者足下、藝術家の所謂理想主義なるものは暫く之を了せりとせむ。唯々予輩科學者の眼より見れば、幾多の馬鹿々々しき誤謬は、常に理想主義の名によりて行はれつつあり、是をしも尚ほ藝術の特權と許し去るべきか。

上野櫻ケ岡に於ける西鄕像の側にある犬の四脚は「パラレログラム」に立てり。四脚動物の歩行が、常に棒行に於てすることは、三尺の童子も知る所にあらずや。彫刻競技會に遊馬の繪型あり、其中の多くの馬も亦「パラレログラム」的に走れり、眞に噴飯すべし。

八月中旬の萬朝報懸賞小說『無窮』と題するものの中に、鳥が天文臺の雨量計中に、水浴びすとの意味を書せり。苟くも雨量計の構造を知れるものは、是の如き記事を讀みて抱腹絶倒せざるを得ず。(下略)

斯る問題に對しては直ちに一言なかるべからざる樗牛は直ちに『太陽』の時評欄で左の如くつた。

「藝術家の科學的知識に關するSS生の意見は、吾人大體に於て是を是認すべし。四脚獸が平行四邊形的に歩行し、烏が雨量計に水浴びし、楠正成がアラビヤ馬に乘るが如きは、眞に笑ふべし。但し所謂理想主義と所謂寫實主義との實際上の界限如何に至りては、問題はしかく簡單ならず。」

以上は『樗牛全集』第二卷に收めてあるから誰れしも讀んで知る所であらうが、この『無窮』と題する懸賞小說の無名の投書家が國木田獨歩であつた事に氣づいた者は少なからう。幸ひに此れは後に『獨歩全集』に收錄せられてゐるから、その問題になつた「烏が雨量計にて水を浴びる」一項を左に拔載する。これは書簡體の小說である。

「日々氣象臺にて風伯雨師の行方のみ氣にし玉ふこと御役目とは申す條、近頃御苦勞の儀に御座候。然るに先日來いたづらなる烏あり。君が雨量を測り玉ふ水盤にて恣に行水をつかひ其事すでに數度に及びしとか、其つど君は「また行水されちやつたア」と烏が飛び行く吹上御苑の杜を望んで口惜しさうに叫び玉ひしといふ。此事も君が手紙にて隱蔽しあれど同じく

松村の報告にて承知せり。鳥の飛び去り際、心地よげに翼をふるひて何と鳴きしやら、そこまでは判然せず。」

明治三十三年と言へば獨歩が三十歳の時である。彼はその前年治子夫人を迎へたが、その翌年五月は職を失ひ、試みに年表に依つてみるも「家計漸く窮迫を極む」とある。そして窮餘の窮策に萬朝の懸賞小説に應募して、たしか前記の『無窮』と『驟雨』の二篇が當選した。この意外の所得を喜んで、旅から家に送つた手紙を『獨歩書翰』で讀んだ記憶がある。

それにしても倣傚だつた樗牛は、自分の論文の一小材料となつた小説の投書家が獨歩なる事には氣付かず、況んや彼の歿後明治末期の文壇に獨歩の名が最も輝やかしきもの、一つとなる事などは夢思だもしてゐなかつたに違ひない。

(三) トルストイと德富蘇峰

トルストイが初めて知つた日本人は、恐らく小西增太郎氏であつたらう。併し、ヤースナヤポリヤーナ村莊の最初の巡禮客は、惟ふに德富蘇峰氏であつたに違ひない。當時のことは蘆花氏著『トルストイ』(四〇頁)の中に編入されてゐる蘇峰氏の『トルストイ翁を訪ふ』の中に詳

しい。

「露國旅行中にて、第一の快感は、トルストイ翁の村莊に、一日を暮したることぞかし。いでやその概略を、鄉國の朋友に物語らむ。明治二十九年十月八日午前七時五十分頃、モスコー、クルスク間の汽車はサセッカの小停車場に來りぬ……」と冒頭にある事は誰しも知つてゐる。

ところで蘇峰氏のトルストイ訪問は、トルストイにどんな反應を與へたであらうか。私は彼の手紙や手記を漁つてゐて、これは蘇峰氏の事を書いたのだらうと思はれる記事に三度位ぶつつかつた。今は手許にその一つしかないが、英譯によつてその數行を拔いて見よう。Maude の英譯した "Essays and Letters" の "To Peter Verigin, The Doukhobor Leader——II" (P. 172)に左の如き一節がある。

"……I come into touch with other men——as happened this autumn with a Hindu who fully shares our Christian outlook (and who has sent me an English book by a lady, his Compatriot, explaining the teachings of the Brahmans in conformity with the essentials of Christs teaching), and again with some Japs who profess and teach a quite Christian morality, and two of whom visited me a few days ago.'

此の最後の行「數日前に二人の日本人が私を訪れて來た」とあるのが少くとも蘇峰氏への言及であると見ていゝ二つの理由がある。卽ちこの手紙は一八九六年十月十四日附であるが、この年は恰もわが明治二十九年に當り、そして蘇峰氏のトルストイ訪問は前述の如く實にその年の十月八日である。そして氏が深井英吾氏と二人で同行された事は、two of whom の私の推定が愈々動かし難い事を語るものではないか。

(四) 臨川の杜翁論・橘香の批評

中澤臨川の『トルストイ論』と言へば、一度は島崎藤村氏から外國語に飜譯しても恥しくない名著と推稱されたが、後にロマン・ローランの燒き直しである事が分つて、二重に文壇の物議を招いた。インテリゲンチャをインテリゼンチャと讀んであつた事を記憶する。

明治三十四年、今の『新潮』の前身『新聲』の增刊に『桂花集』といつて全部懸賞文からなる冊子の出た事がある。今それを繙いてみると、論文の秀逸に『トルストイ伯を論ず』といふのが當選してゐて、中澤臨川なる署名のあるのを發見する。彼がこれを草したのは思ふに中學生の頃であつたらうから、してみると彼のトルストイも隨分久しいものであつた事を感ぜざる

を得ない。選評者の評にかうある。

「トルストイ伯を論ずの一文、文章暢達して再讀の價値ありと雖も、眞面目に人物評論の體を具へたるものにあらず。只、伯を讃する頌德文とも言ふ可きか。伯を世に紹介したる最初のものは、蘆花氏のトルストイ伯也。本篇、伯の性行を云ふところ多く蘆花氏のと酷似せり、而かも末段の結論甚だ輕弱也。人物評論の斷案としては、首肯し難き點ある也。」

文體から察するに、今の新潮社主、當時の佐藤橘香氏の筆であらう。氏は高須梅溪、奥村梅皐の二氏と並んで、『新聲』紙上の三羽烏の一人であり、且つその經營者だつたのである。

（五）大西操山の社會主義觀

社會主義の實現が最早時機の問題であることは、一般常識となり終つたが、玆まで到達するまでに明治大正の思想界は如何に嶮嶂の行路を辿つて來たことであらう。

中にあつて私が常に、その高論と卓識とに敬服せざるを得ないのは大西操山である。高山樗牛は明治三十年代に於て、社會主義を一個の夢想と罵殺し去り、島村抱月は明治の四十年代になつて、社會主義に多くの同情を寄せながらもなほ文藝領域の事で實行には遠い事ではないかと

言つてゐるが、獨り大西操山は明治二十九年十一月の六合雜誌に『社會主義の必要』なる論文を掲載して、

「予輩は現社會に社會主義を唱ふるの必要ある事に眼を覆ふ能はず、而して宗教は由來社會主義と親しかるべき筈のものなりと考ふ。予輩は宗教を說く者が今一層大膽に平等主義を主張せむことを希はずばあらず。」

と結論してゐる。

口吻の宗教的社會主義に類するものあるは彼が教養と時勢との然らしめたもので、この論文を精讀すれば、彼の社會主義に對する理解はかなり正しかつた事が分る。彼は決して單なる書齋の哲學者、象牙の塔中の文藝批評家だけの人ではなかつた。

然るに明治社會主義史を說く者が大西操山の名前に一顧の注意をも拂つてゐないのは私を悲しませる。（大正十五年一月、『早稻田文學』）

成島柳北

(一)平凡な一市人

成島柳北も亦、明治初期の文化史乃至は文藝史上、重要な地位を占むる一人物であらうが、併し彼はどの點から見ても、非常に卓越した所、又は非常に異常な所などのある文人墨客ではない、極めて平凡な、一市井人である。

元來、明治の文明なるものは、その政治的方面は薩長土肥の、謂はゆる風雲に乘じた連中に依つて建設せられた。之に反して官の力を借りない宗教的、文藝的、學事的方面の建設は、維新の大事業に參ずる事を後れたり、又は德川の親藩であつた爲め、新政府に睨まれた國の氣を負ふ人士によつて建設せられた。政治的には手も足も出ない連中が、その鬱勃たる反抗の氣、もしくは旺盛な向上心をやるに、政治的干渉もしくは連絡の最も少い分野に着目したのは、當然すぎる程當然な事だつたのである。

權威に對する隨從と阿諛以外の事は知らない無氣力な當時の佛教については暫く言はない。基督教傳播の根源となつた熊本バンドの發祥地は、島津久光の出た鹿兒島と大隈重信の出た佐賀とに挾まれて、維新の鴻業には何等參畫する所のなかつた熊本であつた。熊本バンドを繼承してよく此新宗教隆興第二期の中心となり、併せて泰西の學術の新らしい淵叢となつた同志社は、皇城を江戸に奪はれた跡の京都に、上州出の新島襄を中心者とし、官軍で散々痛めつけられた會津の山本覺馬をその補佐者として、建てられたものである。

これよりさき江戸では、勤王黨にも佐幕黨にも熱のない、併し舊幕臣ではある福澤諭吉に依つて慶應義塾が興され、それより少しおくれて同じく舊幕臣たる加藤弘之等が帝國大學に地位を占めてゐた。箕作麟祥とか、西周とか、中村敬宇とかいふ、謂はゆる明六社の同人として、明治新興の學問の基礎を築いた者も、多くは舊幕臣であつた。文藝方面の開拓者となつた春廼家おぼろは三家の一なる尾州の出身であつた。

かく政治的建設者と、文事的建設者とを色分けして見る時、成島柳北の位置はどう云ふ所にあるであらうか。柳北は言ふまでもなく幕臣である。隨つて後者に列すべき一員である事は論を俟たない。併し同じ幕臣中でも、福澤や箕作や加藤が田舍藩の出身なるに比して、柳北は生

えぬきの江戸ッ子である、文化文政で爛熟し、大成し切つた江戸氣分の眞中に生ひ育つた者である。從つて他の田舍出の者と違つた都會人らしい、又市井人らしい、洗煉味と小悧巧さとを持つてゐた代り、田舍者のやうな粗朴な、清新な、何物とでも結びついて逞ましく成長して行くやうな氣魄がなかつた。

さういふ人間が、世に時めく機會を失つて、なつて行くさきは、洗煉的方面に於ては世に拗ねた風流隱士となり、その社會批評は小さな皮肉、諷刺となることを、誰しも推想するであらう。柳北は、實にその通りになつて行つた人であつた。——もし柳北の本性に、何か異常な特異點でもあれば、さうした萬人の豫測を裏切つて行く、面白い發展もあつたであらう。が、さきに言つた通り、尋常な、平凡な人であつたから、環境の提供する軌道を、寸歩と雖もはづるる異常さを持たなかつたのである、柳北を論ずるには、第一、視點をそこに置かねばならないと思ふ。

(二) 柳北の略歷

柳北の略傳は、『文藝倶樂部』の增刊『柳北全集』の卷末についてゐるのだが、私は藏書の整理

がついてゐないので、今その本が見出せない。幸ひ明治元年秋に自ら選した『墨上隱士傳』なる自傳があるから、今それに依つて、概略をしるすと、天保丁酉二月の生れである。十八の春濕恭大君の侍講見習となり、二十歲の冬侍講となり、廿一歲の冬布衣(昔の六位)を命ぜられ、その間、或は幕朝實錄編輯の監督をなしたり、或は後鑑三百七十五卷を訂正したり、或は昭德公に讀書を授けたりしてゐるの事實に徵しても、學問は相當に出來たのであらう。後、洋學を主張した(?)ので擯斥をうけ、三年蟄居を命ぜられた。その間に英語を學んで一通り讀める位になつた。廿九の時に步兵頭に擢んでられた。その後の事を自分ではかう言つてゐる。

「其冬騎兵頭並に轉じ、佛蘭西騎兵傳習の事を建言し、其命をうけて、翌年より橫濱に陣營を造り、大に操練の事を管せり。營業の事、三兵の管轄、みな隱士の手にあり、佛國の敎師謝儀安に至て親しかりし。三十一の夏に、騎兵頭に登り二千石に加俸す。その秋、騎兵奉行の事をつとむべき由、命あり。隱士筆硯に成立したれども、時運に深意ありて、陸軍一局に非常の精神を費せしかど、竟にその志の如くならざるを憤り、病に臥して職を辭しぬ。家に臥す僅三十日にて慶應戊申の早春に、外國奉行に榮轉し、從五位大隅守に敍任す。其月の末に會計の副總裁に進み、參政の班に加はれり。此時は大阪敗走の後なり。」

明治初期に大いに風流文人を以て聞えた柳北の前半生の閲歴はこれで知られよう。もし徳川幕府がもつと長く續いたら、柳北はそのまゝ相當に顯要な地位を占めて、文事はその餘技とし、風流として娯しむに止まつたであらうが、維新の革命は、彼を文事に主なる風流隱士として了つたのである。これから愈々本論に入つて、文人としての彼が面目を窺はう。

(三) 常識的小不平家

柳北の代表的著作と言へばやはり『柳橋新誌』三卷と『京猫一斑』であらう。その中『柳橋新誌』第一卷は、徳川期の著作なるが故に明治混沌期の文藝研究號なる本誌(『早稲田文學』大正十四年三月號)刊行の主旨から言つても、暫く何も言はないことにする。それから第三卷は發賣禁止となつたので、本がなか〳〵手に入らないから、私はまだ讀んでゐない。で、今は主として『柳橋新誌』第二編と『京猫』一斑とについて語るが、私は前に柳北の一面は常識的小不平家であり、他面は常識的風流者だと言つたが、その前者の俤が『柳橋新誌』第二編により多く現はれ、その後者の俤が『京猫一斑』により多く現はれてゐるのを見る。

『柳橋新誌』第二編は明治六年に出た。名の示すが如く柳橋の花街の案内記と風聞記とをかね

たやうなものである。　劈頭にかゝる一節がある（元は漢文だが印刷の便宜を思うて直譯する。漢學力の乏しい私が譯すのだからさぞ誤譯が多いであらう。豫めお斷りしておく）。

「……德川氏西遷の後、東京府内の朱門粉壁、變じて桑茶の園となるもの少なからず、而して柳橋の妓輩依然としてその業を失はず、管絃を操し、風流場中に馳逐す。諸幕吏の兎脫鼠伏して生をぬすむ者に比すれば、豈まさらざらんや。蓋し王政一新して柳橋又一新す。而して未だ好事者のその新まれるを記する者あるを聞かず。聞く、頃日、わが柳橋新誌（第一卷のことである）を偷刻する者あり、而して風流子弟多く買つて之を讀む。余、この維新の日に方つてかの既腐の書を讀むを慨し、柳橋新誌第二編を作る。」

これで著作の動機は明瞭であらう。

事ごとに舊江戸の制度舊慣に愛著をもつ柳北は、江戸花柳の粹であつた柳橋が、新たに志を得た薩長の士人、急に市内に數の殖えて來た書生、及び新らしい文明に荒らされ、敎坊の校書の氣風が現金主義の俗に墮するのを慨いてゐる。興味のありさうな所を少しづゝ抜いてみよう。

「一書生、學校に入り、頗る英語に通ず。一夕、柳光亭に飲し、妓と語るになかば英語を用ふ。妓曰く、郎君よく英語を識る、奴聽解せず、これ甚だ趣なし。願はくば奴に敎ふるに英

語を以てせよ。書生は甚だしく得意となりて曰く、卿は才子、卿は才子、もし之を學べば數月にして必ず大家とならん。僕英語に於ては通ぜざる所なし。知らず、卿の學ぶところ何を先にせんと欲する乎。妓曰く、僻輩相呼ぶに常語を用ゐては風致なきに似たり。願はくば郎君、先づ教ふるに奴輩の名を以てせよ。書生曰く、妙々。妓お竹を問へば、曰くバンブウ、お梅を問へば、曰くプロム。お鳥を問へば、曰くバルド。お蝶を問へば曰く、シエーブル（今だつたらバツタフライと言ふであらう）。應答響くが如し。妓また美佐吉を問ふ、書生、首を俯して百考すれども得ず。又お茶羅を問ふ。書生ます〳〵困しみ、汗をその額に拭うて曰く、今は僕、辭書を携へず、近日英語箋一部を懐いて來り、以て卿等百般の問に答へんとす。」

これはその頃大いに社會的視聽をそばだてゝ來た書生の生意氣さを嘲つたのである。

又かう云ふ一節がある。

「兩雛妓、混堂にゆいて歸る。手に炒豆一囊を携へ、且つ嚼し、且つ歩す。甲、乙に語つて言ふ、妹、昨日おそろ可きの事に會ふ。乙曰く何ぞや。甲曰く、昨、翁屋の客に陪し、墨陀に遊び、翠を拾うて喜ぶ。忽ち見る斷髪の士人二個、各々大馬に騎して來る。その疾きこと風の如く、衆みな回避す。妹、狼狽、殆んど彼のために蹴らるる所とならんとし喜助翁の援

によつて、僅かにまぬがる。怖るべし、怖るべし。乙曰く、怖るべき哉、聞くならく、天王橋畔、騎人、一嫗を踏殺し、眼睛迸出す。騎人烟遁して獲られず、憎むべき哉……甲曰く、方今の騎人、何ぞ往なき。或は跳して騎し、或は履して騎す。傘を執つて乘る者あり、手を懐ろにして乘る者あり、奇々怪々、曲馬と一樣、且つ隱奔電馳して、稠人中を叫ばずして過ぐ。何ぞそれ無狀なるや。往日、公子の馬に乘るを觀る、整々肅々、眞に士人と謂ふべし。」

これは新政府に時を得た薩長の田舍士の禮なきを、雛妓の口をかつて罵つたもの、恰も今日の成金が泥濘を跳ねとばして自動車を疾馳さするを吾等が憤慨すると同じ心持である。

又こんな一節もある。

「聲に似て聲ならず、轎に似て轎ならず、乘者は仰して裾し、推者は俯して奔る。鐵輪木轅、轔轔聲をなして來るは人力車也。一酒樓上、數妓欄によつて觀る。一妓左右を顧みて曰く、隨たるかた車や、近來この車街區に遍滿す、東轔西驟、唱々怪事、往時遊客、みな街輿を倩ふ。街輿の物たる、便にして快、輿夫の健捷、連呼して勇を鼓す。その聲清亮、よく人をして遊意を勃發せしむ。眞にこれ江戸兒の氣象、この車の隨隨、殆んど乞兒が膝行の車と一轍なるに似ず……」

花街の風流を無粋の新文明の侵犯して來るを歎くもの、宛として後年の永井荷風氏の面影がある。

(四) 常識的風流人

永井荷風氏の名が出た序に書いておくが、私の記憶にして謬らずば氏が自傳的小說『祝盃』(『中央公論』所載、發賣禁止)及び隨筆『猥談』(『苦樂』連載)の中に、柳北の『柳橋新誌』が絶好の遊蕩案內書となつた事が書いてあつた。又『十年振』なる雜文には「この度西遊するに臨んでわたしは豫め成島柳北の戲著『京猫一斑』といふ小冊子を行李に入れて行つた。……柳北先生の戲文はわたしの言はうとする處を云ひ盡してゐる」(『麻布雜記』二六五)云々の句が見える。荷風氏をしてこれだけに迄傾倒せしめる著作の出來た柳北の風流人なるを否定する者はあるまい。

元來を言ふと、非常に守舊的な、頑迷な一面があつて、惡くすると電線の下を通る時は扇で頭を掩う一洋夷の風に汚さるゝ事を防いだと云ふ熊本神風連と同轍——でない迄も、少くとも漢學に凝り固まつた老儒、村學究位にはならないとも限らなかつたのを救つて、吾等をして安易に今日も彼に近づき得せしめる者はこの風流氣である。併しこゝでも亦彼が常識的風流人な

るを見る『京猫一斑』の一二節を引いて之を證するであらう。

「京とは何ぞや、曰く西京府なり、その舊帝都たるを以て、特に稱して京と云ふ。猫とは何ぞや、曰く歌妓なり、その猫皮に絃してこれを鼓するを以て也。」の一節によつても明かなる如く、これは京都の花街のことを書いたもので、明治七年の出版である。

それには、汽車も通じてゐなかつた昔に、異鄉の花街をよくもこれだけ細描詳叙したものだと敬嘆させる丈けの記錄的內容はある。併し觀察的勁拔、もしくは清新味に至つては一向にない。

「……概して之を論ずれば、彈は則ち緩漫濁濇、東人の耳に上らざるもの多し。舞は卽ち婉柔優雅、よく往昔白拍子の遺風を存して、東方の殺氣あるに似ず。」と言つて、東西兩京の花街の三味線と舞を比較してゐるのだが、この位な事なら、全然、そこに知識のないものにでも想像がつく。そして柳北の花柳エッセイは大抵この程度以上に出でゝゐる事は少ない。

柳北は、西京の舞妓のある事を記して、しきりに慘酷で、人情にもとつて、一點の風流情趣もないと言つて、憤慨してゐる。がもしこの事を、假りにオスカア・ワイルドか、或はその末輩が聞いたとしたら何うであらう。或は、その慘酷の中から一種の美——戰慄美を發見し、創

造しないものとも限らない。柳北にはさうした變態的な面白さはない。

隨つて柳北が讃嘆する妓は、世間的標準と常にその軌を一にする。『柳橋新誌』では、お幸といふ校書が、本阿彌なるものから五百金(當時にあつて法外の金だつたと見える)の聘を受けながら之を辭したのを一美談となしてゐるが、『京猫一斑』にはかゝる一節がある。

「來葉は鴨東有名の妓なり。たゞに才藝容姿、衆に超絶するのみならず、その志操風韻また古昔の名媛節婦に愧ぢざる者か。その夫、繰絏に死す。妙齡薙剃して尼となり、貞信と號す。性、閑詩を嗜み、その詠ずる所、往々人口に膾炙す。余かつて一たび眞葛原にまみゆ。その風丰なほ往時一笑百媚の色を想像するに足れり。」

その外には、非常によく眠る女や、やたらに儉る女や、よくユーモア乃至は笑話の材料となるやうな女の話はある。併し或は世紀末の頽廢派の詩材となるがやうな毒婦、妖婦、奸婦に至つては、その趣味に合はないものと見えて、只の一人も記述してない。況んやユーゴーやゴーリキイやその他の人道派乃至社會主義的文學者の材となり得るやうな、材料乃至觀察に至つては、更に影だもない。——もとより決して彼にさう言ふものを求めるわけでもないが……。

彼の文章は——漢文のことはよく分らぬから何とも言へぬが、流麗ではあらう。併し或は鴨

東解語の花の艶冶を叙し、東山の翠黛を賦するに當つても、よく、コンヴェンショナルな辭句を並列して來ると言ふだけのものである。たゞ一つ敬服するのは、花街のテクニックや、校書の談話や、俗謠や、風俗習慣などで、到底漢文では書けさうにも思はれないものに、巧みに漢字を宛て、句に綴り、辭となすの手腕で、そこに一種のユーモラスな獨得な味はひが汲まれる。尤もこれは德川末期の漢文家通有の特色で、現に柳北にこの方面の著作慾を刺戟した寺門靜軒の『江戸繁昌記』などにも見られるが、柳北はもと民間の學者でなく、幕府の御用學者として文を練つた人だから、一種御殿風の所があつて、それを驅つて卑俗の事を記する不調和さが、私にはより多く面白く思はれる。『一京猫一斑』中最も有名なザコ寢の項の如きが之を證するであらう。

(五) 詩學への着眼

世間的流俗に順應する事のみを知つて、それに先驅する意氣も、反逆する氣魄もなかつた小さなすね者、小さな反逆者の柳北だが、一つ感心なのは、さすがに風流人で詩を愛しただけに、泰西の詩學に目をつけてゐた。ある序にかゝる一節がある。

「詩賦は小技のみ。然れども全地球上、邦土森列して、而して未だかつて詩賦なきの國は非るなり。歐米諸國の如き、文明と稱するはみな詩學を有し、みな詩人あり。而して國を擧げて之を尙ぶの風、古今替らず。……（中略）頃年本邦士人、多く泰西の學を修め、物理を考究し、法律を採摘し、凡百の學科擧げざるなし、而してひとり詩賦に於ける、則ち擯斥して以て無用の物となすもの十の八九に居るは、余はなはだ怪しむ。」

しかしたゞ英語を讀めたから、その存在を知つてゐた位なもので、之を移植するなどゝいふ意圖はあつたと思はれない。

柳北について論ずべきことは以上につきまいが、さきにも言つた通り、私は家を移つて間がなく、書籍の整理が一向についてゐないので、參考書が探し出せない。それにどんなに多くの參考書を渉獵しても、柳北を凡俗の市井人とする私の信念は恐らく覆へるまいと思ふ。

最後に殘つた問題は、その凡俗の柳北が、なぜあゝも讀書界に喧傳せられたかといふことであるが、之は別に不思議はない。

世の歡迎する者は必ずしも卓拔な天才のみとは限つてゐない。否、却つて天才者ほど世に容れられない傾きさへある。

これで思ひ起すのは夏目漱石の『文學評論』の中の『ポープ論』だ。十二三年前に讀んだのだから十分記憶にないが、何でもポープは名文規範や金言集に採擇されてゐる句の多いこと、英國ではシェークスピアに次ぐさうである。これのみが文人の資格を決する標準になればポープは實にシェークスピアの次位に在る大詩人である。併しかくポープの句が人口に膾炙し、詩作が世に迎へられたのは、それが傑れてゐる爲めと言ふよりも、當時の常識をうまく洗煉せられた言葉に盛つた爲めである——そんな風に論じてあつたやうな氣がする。

柳北の世に迎へられたのも、それと同じ理由ではあるまいか。彼は實に明治混沌期の常識以上でもなく、以外でもなく、勿論以下でもなく、實に常識の中にあつて、常識と共に動いてゐたから、それであのやうに、讀書界の寵を得たのであらう。

柳北の著作に、獨立的、個別的、作者本來的の價値をさぐらうとする者があつたら、彼は必ず失望する。併し明治混沌期の世相、人情、常識、雰圍氣などに觸れたいと思ふ人があつたら、絶好の資料を供するであらう。（大正十四年三月、『早稻田文學』）

泉鏡花

私は恐らく謂はゆる鏡花黨、もしくは鏡花通の稱號に値するほどの讀者ではないかも知れない。併し鏡花氏の作品を一時、隨分愛讀することはした。私が鏡花氏の愛讀者であるなぞと言へば、ひどく方角違ひであるやうな感を懷く人があるかも知れないが、併しそれは僞りのない所である。

私が文學書を耽讀し初めたのは、明治三十九年あたりからだから、丁度自然主義の勃興當初で、自然派の作品の分らないものはまるで時代後れのやうに言はれてゐる時であつた。だから私も些とも面白くはなかつたが、藥でも飮むやうにして、月評を唯一のたよりにしながらそれらの作品を讀んで行くうち、しまひには次第に馴れて來て、自然主義の作品が面白くなつて來た。その頃は鏡花氏の作の如きは讀まうとも思つてゐなかつた。

明治四十三年に東京へ出た。すると、後に少女雜誌の揷繪畫家としてかなり有名になり、そ

して若くして死んだ同郷の友人であり、先輩である高代恒志が、鏡花を讀まないやうな事ではダメだと言ふので、それから少しづゝ讀み初めた。

その頃私は、兄が學生時代に知つてゐた緣故があつたので、よく、今の憲政會の代議士なる田中萬逸氏の所へ遊びに行つた。そして曾くは田中氏のうちで世話になつた事もあるが、その田中氏はかつて鏡花氏の門に入つて小說を書いた人なので、書齋に鏡花氏の著作はかなり澤山揃つてゐたから、それを片ツ端から讀んで行つた。

四十四年に私は早稻田へ入つた。島村抱月氏が文科の中心時代で、學校の中は自然主義の餘熱がまだ盛んではあつたが、天の邪鬼で人と同ずる事のさう好きでない私は、專ら幸田露伴氏や、木下尙江氏や、鏡花氏や、綱島梁川氏や、それから大杉榮氏の出してゐた薄つぺらな同人雜誌『近代思想』やに讀み耽つて、理想家だの頭が古いのと言つて、みんなから馬鹿にせられたものである。

大正三年十二月兵に取られ、大正五年の早春には朝鮮守備隊に派遣される事になつたが、字品を出帆する前に、それまでに讀んでゐなかつた『高野聖』が新潮社の代表的名作選集の一篇として出てゐるのを發見し、船の中でも、渡船後も幾回となく繰返して讀んだ。その中に春陽

堂からも『照葉狂言』の縮刷が出たので、これも京城の日韓書房から取寄せ、それから京城にゐる知人が『銀短冊』と『杜若』との合巻になつた『袖垣』といふ單行本を送つてくれ、なほ内地を出發する前に古い『文藝倶樂部』に載つた『白羽箭』を買つてゐたので、在隊中は外に讀む本も殆んどないのだから、それ等を幾回となく讀んだ。だからその諸篇なら今でも文章を諳記してゐる個所が少くなく、下手なのさへ我慢して貰へば、鏡花張りの文章を書いて見せる位の腹し藝はある。

私は鏡花氏の諸作の中でも、有名な『湯島詣』などはさう好きではない。『高野聖』が一番好きで、『白羽箭』『外科室』『三尺角』『註文帳』『袖屏風』『女仙前記』『舞の袖』『悪獣篇』『銀短冊』『歌行燈』『歌仙彫』などが之につぐ。所が奇妙にも世の中には私と好みを同じうする人があるもので、去年京都の古本屋をさがしてゐたら、それらの諸篇の雜誌に出たのを合綴してあるのを見つけた。何となく懐しい氣がしたので五十錢を投じて買つて來たが、これは後に人にやつて了つた。しかし愛讀したとは言ふものゝ、水上瀧太郎氏が『蜻蛉集』の巻末に附された著作年表を見ると、私の讀んでゐないのが半分位はある。

讀書界に於ける鏡花熱の消長は、少くとも四つ位の區劃を作ることが出來はしないであらうか。觀念小說の名に『外科室』その他が樗牛などに賞められた氏の文壇擡頭當時を第一期とし、それから日露戰爭前後の、『新小說』と『文藝俱樂部』とが、鏡花、天外、風葉、柳浪、春陽等數氏に依つて獨占されてゐる傾きがあつた頃を第二期とし、それから自然主義が起つて氏は文壇の主流を離るゝ形となりながら、而も潛勢的になほ多くの勢力を持つてゐた頃を第三期とし、それから今次の全集刊行及びこの記念號の發行などを第四期とする。私はその第三期の讀者の一人である。

今でこそ「泉鏡花氏を散文藝術家でないと云ふ勇氣があるか」といふ生田長江氏の問ひに對して大膽にも「ある」と答へ、更に「泉氏の持つてゐる藝術美は、我々が散文藝術美として認めてゐる美からは、かなり遠い」と斷言する廣津和郎君の如き人が出て來た。そしてその言葉にも首肯すべき理由が幾分認められる點もある。

併しもう十年も前に、そんな事を斷言したら、藝術の分からず屋と認定されるは勿論のこと恐らくは狂人と間違へられ、どうかすればブンなぐられないとも限らなかつた。鏡花氏が一部愛讀者の間にもつ魅力はそのやうに強度なものであつた。

私は古い『新聲』だつたか『文庫』だつたかに、現代眞に名人の稱を以てゆるし得るものは、木下尚江の演說と、泉鏡花の文章とのみといふ意味のことが書かれてあつたのを思ひ出す。全く日露戰爭當時までの鏡花氏の小說と言へば、そのまゝに第一流といふことの代名詞であつたらしい。

そして私達が文學青年であつた頃までは、鏡花氏の作と言へば——奇拔な比喩を許すなら、青年期に於ける戀愛のやうなものではなかつたか。

戀愛は必ず青年が病まねばならない病氣である。通過せねばならぬ關門である。戀愛のない青年期は考へられない。たとへ考へられてもそれはエンプティネスだ。ナッシングだ。それと同じく、文學を志す青年にして、一度鏡花熱を患はず、鏡花氏の著作を關門として滑らないなどゝいふことは考へられなかつたのだ。自然主義以後は又趣が變つて來たが、以前はさうであつた。そしてどうかすると私はその熱を患ひ、その門を滑つた最後の青年であるかも知れなかつた。

話が思はず——大變な老人でゞもあるやうに懷舊的に墮して、とんだお喋りになつたが、私に

課せられた題材は『辰巳巷談』かもしくは『誓の巻』について、批判乃至は感想を書けと云ふ事である。『誓の巻』も少年の頃一讀は確かにしたが記憶にない。で『辰巳巷談』についてその責めを果たしたいと思ふ。

これを讀んだのも十七八の少年の頃——明治の四十三四年の事と記憶する。田舎から出たてで、おまけに謹直な基督教徒であつた私は、變に物を履き違へて、女郎上りなどゝ言へば人間ではないやうに考へてゐたから、この篇は少くとも題材に反感を持つたし、書いてある事もよくは分らなかつた。そして田中萬逸氏に

「あれはつまらん作ですね。」と言ふと、

「そんな馬鹿なことがあるもんか。あれは鏡花の中でも傑作の一つだよ。」と、田中氏の答へられたのを記憶してゐる。

その後讀み返してみる機もなかつたから、かゝる題を課されても『誓の巻』と同じく、話の筋だに覺えてゐないのであつた。併し『誓の巻』は手許にないが『辰巳巷談』は幸ひ手許にある『遊里集』の中に收まつてゐるので、實はこれを機會に讀み返して見た。

讀み返して見ると成程いゝ作である。假りに鏡花氏の全作を出來榮えによつて、甲、乙、丙、

丁、戊位に採點すると、私なら乙を付ける作品である。

明治三十一年の作であるから、內容乃至取材の方面に於ては漸く鏡花氏の型がきまりかけた時で、文章に於ては、あの特殊な、縱橫な、絢爛な、怪奇な、韻致の高いスタイルが、まだ十分格をなさない前であるから、比較的にわかりがよく、鏡花入門作としては適當な一篇であらう。

併し文の變幻怪奇に迷はされないから、鏡花氏の抱く觀念の皮相と淺薄とを、かなり明白に了知させる作品である。あのお君といふ遊女あがりのたをやめの、風にも得堪へまじくなよなよとした、いかにも弱く、そしていかにも美しく、但し宗教的殉難者のやうな弱くして強い忍苦の姿、沖津といふ女のいかにも下町ツ子らしいテキパキとした齒ぎれのよい行動——それは鏡花氏が下町の、もしくは狹斜の世界の婦人に見出した二種の理想美、典型美で、それは多くの作に色々と形を換へては、しば〳〵繰返して描かれてゐる。それは鏡花氏がある傑れた性向、ある鋭い觀念の保持者であることを語るが、その天賦には氏が少しの敎養、少しの彫琢をも加へなかつた爲め、吾々からはかなり潛稽に見える點もある。

併し女はよいとして、それに配された眞なる美少年はどうであるか。それはまるで去勢され

た蠟細工ではないか。高山樗牛が『湯島詣』の神月梓を評して、あんな文學士がどこの世界にあるかと言ってゐるが、この點も、あまり首肯の出來る存在ではない。

之について思ふ。世界の文學を通觀しての話であるが、理想的なヒーローに配されるヒロインにはやつぱり理想的としてうなづかれる女があるが、理想的な、あまりに色濃く描き出されるヒロインに配されたヒーローには、ともすると蠟細工の男が多い。ツルゲェネフの諸作など既に幾分この傾きがある。通俗小說だが末松謙澄の譯した『谷間の姬百合』の原作者バーサ・クレイの作など、ベクにそれである。德川期から日本の花柳物語には著しくこの傾向があり、鏡花氏の作またその傳統を繼承するものだが、田舍者の私などにはその本當の面白味は分らない。

だが、私は、それが分らず、そして自分が田舍者である事を別に恥とも思はぬ。一體都會人が誇とする事は隨分くだらない事が多いではないか。殊に江戶ツ子の誇といふ奴はさうだと思ふ。着物は何とかでなければ着ないとか、料理はどこでなければ喰へないとか——そんな「通」が何になるのだ。それはみんな第五義、第十義以下だ。

鏡花氏の天才、鏡花氏の藝術味がその方面に立派な花を開いた事はよい。が、實は私はその

「通」が少し鏡花氏を蝕むこと深きに過ぎはしなかつたかを憂ふる者である。そして鏡花氏をそこに至らしめたのは一面氏の性向であるけれど、他面は謂はゆる「通」の讀者がそれを一層盛んならしめたやうな弊がなかつたか。伽羅の下駄を履いては得意になつてゐる連中よ。讀者としてあまりに鏡花氏を獨占しすぎてくれるな。鏡花氏の天才は君達の獨占に任すには、あまりに大きく、餘りに多面である。君達は君達の繩張りの範圍内に於てのみ鏡花氏の藝術を享樂し、讃美してくれ。そして君達が讀者として鏡花氏を獨占しすぎるが爲めに、鏡花氏の他面の才の生長を阻害するやうな事のないやうに注意してくれ。

「辰巳巷談」の感想を述べようと思ひながら、つい話が横道に入つて、而も鏡花氏のアラ拾ひになつた事は、鏡花氏に對しても濟まなく思ふ。併し私は鏡花氏に推服する熱度に於てはさう人後に落ちないつもりで、現にさき頃公けにした『小說研究十六講』の中には「明治年間の數ある作家中、先づ二葉亭と露伴と鏡花と獨歩との四家を推す」と明記し、その他にも鏡花氏については論ずる所が多い。

然らば鏡花氏のどこに推服するのかといふと、「辰巳巷談」などに見られる「通」を基礎とし

た作ではない。それは第二で、第一に好きなのは、さきにも言ふ通り『高野聖』のやうな『妖』を基礎とした作である。光彩陸離、變幻怪奇を極めた作である。でなくば『歌仙彫』とか『歌行燈』とかのやうな藝の三昧境に入れる名人物である。それから『女仙前記』に窺はれるやうな鏡花氏が識らずして「自然に還れ」といふルッソオなどの考へに合致したやうな閃きを見せてゐる作も好きである。私は『エミール』を讀みながら、しば〳〵鏡花氏の作を聯想した、思ふに、純朴な人間性を尊重する氣持に一味の共通點を發見したものと見える。『白羽箭』のやうなのも悪くない。私は平林初之輔君に『白羽箭』を讀むやうに進めた時、

「まあ、讀んで見給へ。その男主人公が葉茶屋の娘を相手に酔つてくだを巻く所など讀むと、酒が一層うまくなるよ。」と言つた事がある。さうしたら平林君も同じ事を言つて、この作の披讀を人にすゝめたといふ事だ。實際、支那の詩以外に酒の趣を描いて眞に迫れること、あの篇のやうなのは少ない。それから『舞の袖』(?)の筍を食ふところなども如何にもうまさうである。——尤も、斷るまでもなく鏡花氏に私の推服する所以は、味覺を以て作を讀む爲めではない。

一口に言ふと、田舍者の私は、田舍に取材した作を概して好むやうである。『日本橋』の中だ

つたと思ふ、狂して寢てゐる藝者が、銀の扇を空に投げ上げては受け、投げ上げては受けてゐる描寫など美しいとは思ふが、海苔巻きと書いて「てツぱう」とるびを振り、鮪と書いて「あかいの」とるびを振る類ひは、通人には最も愉快であらうが、私には馬鹿々々しくてたまらない。「奥さん。鯛なんて、なさけない事は言はないで、生きのいいのだ、てえと言つておくんねえ。」「それぢや私も奥さんと言はず、御新造と呼んで貰はう。」——そんな意味の魚屋と女との會話もどこかにあつたと思ふが、かうなるとバカ〳〵しさを通り過ぎて寧ろ愛嬌がある位だ。

私の希望としては、今後の鏡花氏に歷史小說の創作を見せて貰ひたい。『妖劍紀聞』の如何にすばらしき名作である事よ！

鏡花氏の「妖」才を今後大いに發揮するは歷史の上以外にはないやうな氣がする。白井喬二氏の神變怪異綺など、作者の本質との間にどれ丈けの必然性があるものか私は疑つてゐる。

そこへ行くと鏡花氏の「妖」才は氏の本質の根深い一部である。芥川龍之介氏の『地獄變』の如き題材など、もし鏡花氏の妖才を以て自在に描破されたのであつたら、それは素晴らしいものとなつたであらう。

いづれ鏡花氏に對する最仰數美の言葉は、他の諸氏に依つて、この全卷に充たされる事と思

ひ、心ならずも妄語を列ねて、推服して措かぬ先進に非禮を加へた事は幾重にも陳謝する。繰返して、最後にまた言つておく。私は鏡花氏の愛讀者としては、さう人後に落ちないつもりである。（大正十四年五月、『新小說』鏡花號）

モダン・ガールの創造者

(一)『二』とは?

新居さんの作品で、私が最初に讀んだのは『文藝日本』創刊號に載つた『明暗』である。これには大變感心した。

感心したのは構圖が巧緻だからとか、內容が深刻だからとかいふ意味ではない。この作はむしろさういふものとは最も遠い距離にあるのだが、全體の筆觸が如何にも清新なのに感心した。それも新感覺派の諸君の如く、清新を無理に捏造し、乞食してゐるのではなくて、如何にも自然なのが氣持よかつた。「新」の掛聲をしなくて自ら「新」なのである。

私は一つ感心すると、その人の作品を、片つ端から徹底的に讀んでしまはないと、氣のすまない性分がある。そこで、ある機會に新居さんのところへ行つて、從來の作一切の借覽を申しこんだ。新居さんはこゝろよく、伊東屋から買つて來た原稿入れの袋に收めてあるのを、貸し

て呉れた。
袋の上には一ぱい何だか書きこんである。よく見ると中に收められてゐる作品のコンテンツなのだ。而もそれが原題のまゝでなくて一々英譯してあるのだからふるつてゐる。如何に彼が語學に堪能なる事よ。そして又如何に暇人である事よ。試みに袋から轉載すれば左の如くである。

Promenade	25	明星	elle
An Illusion of a Nihilist	7	明星	elle
An Interpretation of One Day	14	明星	elle
Smoking in the Moonlight	11	明星	elle
The Crow (dedicated to the—)	7	解放	
Rendeveus	5	文藝日本	elle
Light and Darkness	27	文藝日本	elle
Pseudo-Love	19	週刊朝日	elle
Ni_era	57	明星	e.le

25
7
14
15
7
5
27
+19
95

僕の百錬の翻譯的技能を以て、之を邦譯すれば左の如くなる。讀者は之によつて原題を知り得るであらう。

プロムナアド
ニヒリストの幻想
或る日の解釋
月夜の喫煙
鳥
ランデブウ
明暗
擬似戀愛
ニゲラ

下の數字は枚數で、その次は掲載誌、最後の計算は枚數のトータル・サムのつもりであらう。

それにしても elle とは何だ。『鳥』一篇を除く外は悉く此の elle が怨靈の如くに各作に付いて廻つてゐる。とすれば恐らくは此の elle の正體を明かにする事によつて、新居さんの作家として立つ土臺も明かになるに違ひない。

(二) 擬似戀愛

高等學校時代の新居格は「若きカント」であつたさうだ。彼は英語と獨逸語を得意として、一君、大學へ行つたら願はくば銀時計を貰つて本校の名譽を擧げてくれ給へ」と、言はせた程大いに校長を嘱望させたものであるといふ。

所が彼は東上して、一夕椙牛會記念講演會に上田敏の話を聽き、非常に感激して「これはフランス文學をやらなくてはならない」と思つたさうだ。

法學士新居格は、どうかすると文學士ではないかと間違はれる。私も二度目に彼に會つた時に、その事を訊ねて「そんな事、君どうでもいゝぢやないか」と、野暮をたしなめられた事がある。

彼のさう思はるゝに至るまでに文學的薀蓄をなさしむべく彼を感化した者は、上田敏、森鷗

外、泉鏡花、「その次ぎ位には君、彼女だね」と彼自ら語つた。etc とは勿論その彼女だ。長谷川如是閑さんはさすがにうまい事を仰有る。「新居君のはみんな彼女小説だ」ツて。

だが私はその彼女に會ふの榮譽を未だに有しない。併しモダン・ボーイの典型大宅壯一君は僕に密告して曰く

「新居格はどこがあの女が氣に入つたのかな。鼻筋なんかに、べつたりと濃く白粉を塗つて、そりや厥な女ですよ。」

あゝ、語を愼しめよ。大宅壯一。彼女の價値に盲目なのは、まだ君の眼が熟しないからであらう。

彼女は戀愛の神の嫉みを受けて、本當の戀愛をする能力を奪はれたハートの不具者であり、呪はれた運命のもとにある女なのだ(尤も近代女性はみんなさうなつて行く傾向がある)。だから彼女が異性との間に釀し得る關係は擬似戀愛以外にはあり得ない。試みに『文章往來』新年號(大正十五年)を繙け。大宅壯一の寫したる『文壇新語集粹』に擬似戀愛を定義していふ。

「外部に現れたる症狀は、眞性戀愛と何の變りもないが、未だ戀愛菌の認められざるものをいふ。」と。

新居さんの小說のテーマは凡てを通じて"elle et lui"の間に生じた擬似戀愛である。その作中に出沒する男女は、常に「他人」に見られてゐる事を意識して私語し、接吻し、抱擁してゐる。手紙には熱烈な愛の言葉を嘔吐の如くぶちまける。それはその手紙をどこかに落して、人に拾はれて讀まれる意識が、潛在的ながらにあるのだ。それから又たとへばこんな一節がある。

「そんな事では駄目ぢやないの。お手をお出しなさいな。」

私は彼女の云ふまゝに握手をした。

「それから」

「…………」

「それからわたしを抱いて、强く、勇士のやうに」

私は彼女の云ふ通りになつた。

それから、彼女は低い聲ではあつたが、力强く私の耳元で囁いた。

「接吻して」

星が手を打つて喜んだ。音樂を奏した。舞踏を初めた。

「こんどはあなたの番よ。あなたがアクチイブなの。私に命令してね。」

と彼女が言つたので、やつと強くなれた私は、手を、抱擁を、唇を、と順次に云つてのけた。(『ニヒリストの幻想』)

何と諸君。これが街上で演ぜられた狂態なのだ。而も全篇を檢微鏡にかけて仔細に點檢しても、眞性戀愛菌はこの作のどこにも發見されない。

不都合なる新居格はこの無菌戀愛を享樂しておきながら、たまに之を有菌戀愛の如く思ひ誤まる家の人に向つて、不滿を抱いてゐる。「主觀に觸れない客觀解釋に對する抗議」(『或る日の解釋』)とは換言すれば、無菌戀愛を有菌戀愛と、又、擬似戀愛を眞性戀愛と誤診した夫人の藪醫者的見解へ對する抗議なのだ。

(三) モダン・ガールの母胎

わが議論、或は急性業屋墮落症に罹りて、衆耳に徹せざるの憾みなきを恐る。もつと分り易く作家としての新居格が如何なる新意義を文藝の上に創造して見せたかを檢討したい。

吾等は實を言ふと、未だ新居さんによつて資本主義文明が總崩れとなるやうな有力なプロレ

タリヤ文藝を見せられた事はない。又崇高、深刻、壯大、華麗、幽遠の何物をも提示されては居らぬ。

が彼は、私が本稿の冒頭で述べたやうな清新な筆觸で「モダン・ガール」なる新時代女性の一典型を提示してくれた。——兎も角もモダン・ガールを社會的視野に拉し來つた功績は、當然新居さんが占有してよい。今のやうな意味に於けるモダン・ガールなる語は、恐らく新居さんに依つて創造されたのだ。谷崎潤一郎の小說も、里見弴の小說も、その廣告を見ると、みんなモダン・ガールの典型が出沒するやうに書かれてゐるが、モダン・ガールはあんな病理學的な惡どさを含んでゐたり、日本式傳統のベタ〳〵した脂ツこいものではあるまい。世の出版者に告ぐ、誰れか『新居格創作集』を刊行する者はないか。それこそ「初めて眞のモダン・ガールを創造して、文化史的價値の豐富な、劃時代的名篇」として廣告する事が出來、新らしがらんとする世の女學生達は蟻の甘さに集るが如く之を競うて買ひ求め、世の女子教育家達は爭うて之を論究の對象とするであらう。そして文壇は一脈の生氣を注射され得る事は、私が批評家として之を保證する。

モダン・ガールと言へば面白い話がある。去年（大正十四年）の九月の『太陽』が、世相批判號

なる増大號を出すについて、新居さんには『モダン・ガールの社會的考察』、私には『現代小說に現はれたモダン・ガール』の執筆を求めて來た。二人はそれ〴〵に求められた事に對する責任を果たした。

二人は一夕、私の書齋に落ち合つて、共に執筆した論文の內容を語り合つた。ところが私の考へてゐるモダン・ガールと新居氏のそれとの間には若干の開きがある。私は上品な種類なら（例へば廣津和郎氏の『贈り物』のヒロインの如きなら）カッフエの女給までも網羅しようとするに反し、新居氏はもう少し知識的訓練のある女でなければ、モダン・ガールの中に數へられないと言ふのである。

フィールディングは自著の序文に小說を定義して、小說は私の創始した文藝の新形式だから、私は勝手に定義していゝのだと言つてゐるが、モダン・ガールを文壇に創造したのも新居氏だから、新居氏の此の際の定義は絕對であると思つて、傾聽してゐると、新居氏は縷々として、近代女性必備の資格を述べる。遂に私もその正體をつきとめ得たが、揚句のはてには、

「はゝあ、してみるとモダン・ガールとは新居さんの小說に出て來る一人になるわけだね。」

と言つた。その通りを又『文藝春秋』の『女を語る』なる感想の中にも書いておいた。これに

は如何な新居さんも參つたらうと思ふといさゝか溜飲がさがる。

(四) 飄　簞　男

碩學ミル先生は女に掛けては頗る甘く、自分の思想は何んでも彼でもテイラア夫人から得たものゝやうにのろけてゐる。わが新居さんの創作もまづそんな所で、創作の全部をcloに負うてゐると言つてよからう。彼はK市に於ける擬似戀愛實演の爲め何百金かを工面して、遙々西征の途に上つたが(尤もそれはフエビアン協會の講演會も兼ねてゞはあつたが)、その返濟には去年一ぱい四苦八苦のあがきをしたのは氣の毒だつた。併しそれが爲めに名作『明暗』は生れ、急に作家としても鮮やかなる存在を劃し得たのだとすれば、煙と化したる何百金に未練は殘るまい。

但しストリンドベルヒは、『ブリュウ・ブック』の中でミルを評して、テイラア夫人と懇親を通じてから眼に見えて思想が惡化し、墮落したと言つて、テイラア夫人の感化の如きを卽ち女禍に數へ、彼がwoman-hatingの一材料としてゐるが、新居さんよ、日本でも如是閑ベルヒが、たしか新居さんの彼女小說を怪しからんと言つた筈であつたなア。

さて顧みて思へば、以上わが尊敬する先輩作家に對して妄語を加へ、非禮を重ねたるの罪、決して淺しと言ふ事は出來ない。

以下謹嚴に結論を作る。

私の最も親しい、最も尊敬する友人であり先輩である人々の間に於て、藤森成吉氏と新居格氏とは好箇の對蹠的存在である。

人は藤森氏に接して、そのポートレイチュアを作る場合は、誰れでも膝を正してかしこまるのだ。一つを越えて語るだけの親しさになれば藤森氏は、高雅なユーモアもあれば人生に對して絶對に無效の駄洒落も言ふ和氣靄々たり、春風駘蕩たる愉快な人なのだ。

之に反して新居氏に對すれば、人は先づ戲畫を用意する。で誰れでも容易に近づけるやうに思つて、私の謂はゆる「屑々たる末輩」どもまでが身の程知らずに、この先輩を愚弄するの言辭までも發してゐるのを耳にした。あゝ、彼等の舌よ、呪はれてあれ。

ぶら〳〵して居れども氣筆の、胸に一括りあるのが新居さんだ。最後の一つ手前まで戲畫で、最後の一つに嚴肅なるものが新居さんだ。——作を讀んでもそのまゝの事が感ぜられる。最後

の一つの價値が分らない者は、新居さんの眞の友でもなく、又新居さんの作の眞の鑑賞者でもない。（大正十五年二月、『解放』）

明治文學渾沌期補遺

——(『早稲田文學』の特別號を讀んで)——

(一) 明治文化研究熱の原因

去年秋(大正十三年)には、文明協會が「明治文化發祥記念會」を催して其記念號を出版し、それと相前後して吉野作造博士外數氏の發起にかゝる明治文化研究會が設けられ、其機關誌「新舊時代」は今年に入つてから創刊號を出し、今『早稲田文學』は三月號の全誌を擧げて『明治文藝渾沌期研究』に宛てた。『早稲田文學』は來る五月號をも全誌をあげて明治文藝胎生期の研究に宛てるさうだし、更に文明協會は明治初年より廿年頃までの文物の變遷から街談巷語の末までも網羅した『舊東京』なる一大書籍を編輯中であるといふ。まさに明治初期文化研究の機運一時に到れるものとも言ふべきであらう。

之は何に起因するであらうか。私は十五六年前の學生時代から明治初期の書籍が見つかれば

少しづゝ買集めて來たが、それは主として德川時代の草双紙の木版字が讀めない所から、私自身が讀み得るオリヂナルの最も古いものは、明治初期以前にさかのぼり得ない爲めであつた。併し今斯の研究の機運が向いた事はそんな淺薄な理由からではあるまい。まだ十分には考察してみないが、この數年來流行してゐる幕末の研究の當然の歸結であるといふことも一因であらう。また大震災が東京に殘る明治の遺物を殆んど全部失はしめた爲め、一部人士に急に愛着が生じて來たことも一因であらう。更に、日本の文化がある地點の到る所まで行きつくして、昨今停滯して來たから、この單調さから逃れる爲め特に新文化創成期の稚拙と無智と、非常な意氣込みと盲滅法との混淆した時代の精神生活に憧憬を感じて來た加減もあるであらう。——その理由はいづれにあるにせよ、未だ大部分の材料は手に入り、當時のことを目のあたり見た人も多く殘存してゐることだから、諸方でこの方面の研究に着手されはじめたのは可なり遲かつたとは言ふものゝ、全然機を逸してゐるとは言へない。吾等の双手をあげて歡迎する所以である。

冒頭に擧げた諸刊行物の中、私は特に『早稻田文學』の『明治文藝滯沌期研究號』に對し、多少の所感を述べてみたいと思ふ。

この號は初期明治の研究を、特に文藝にかぎつてゐる。それを又、更に明治初年から坪內逍遙博士の『小說神髓』の刊行された二十年前後の間にかぎり、假りに之を文藝渾沌期と稱してゐる。

先づ此の區分の當否から考査するに、私はこのやり方に贊成である。特に研究の範圍を文藝の分野にくぎつたのには、『早稻田文學』が文藝雜誌であるからといふ以上の意義がある。

かつて雜誌『解放』が明治文化研究號を出した事があり、更にさかのぼれば明治天皇崩御の翌月にはあらゆる雜誌が明治文化の總括となるやうな特別號を出してゐる。しかもそれらの諸雜誌が今日研究資料として大して役立たないのは、餘りに廣く文化の全面にわたりすぎた爲め、勢ひ大觀的な、たれしもが常識として知つてゐる程度の事しか、發表出來なかつた爲めではないか。今日の吾等の研究的要求はその程度では滿足出來ない。

そして普通常識を突破して究めようといふには、吉野博士外數氏の『新舊時代』の如く、特に機關誌を發行して逐號徹底的に資料の集積と檢討とに努めるか、もしくは『早稻田文學』の今回の擧の如く、對象の範圍及び年月を狹い範圍に限るかしたければならない。この意味において『新舊時代』も『早稻田文學』も、最も適當な方法を取れるものと言はなければならない。

(二) 新舊四個の視點

更に『早稲田文學』の寄稿家を見るに、上は安政六年生れの坪内博士を初め、それと年齢において多くの隔たりなき幸田露伴博士、淡島寒月氏、野崎左文氏等、身親しくその渾沌期を潜つて來た人にはじまり、下は日清戰爭の年に生れた私、その二三年の年長者である日夏君や宮島君にまで及んでゐる。そして中に、諸專門家をはさんでゐるのだから、この點でもほゞ申分はない。思ふに一つの時代を正當な位置において見るには、それより以前に生れた人の眼も、その中に生れた人の眼も、その後から生れた者の眼も通さなければならない。そして『早稲田文學』この號の最も興味ある一面は、全くの舊時代者と、舊時代者にして新時代に理解ある者と、全くの新時代者と、新時代にして舊時代に愛着と同情との豐なる者と、四通りの色分けの出來る視點を通じて、初期明治文藝の眺められた點にある。

その、いろ〳〵な點において『早稲田文學』のこの號は非常に面白く通讀出來た。私などは半日を費して、始めから終りまで一氣に讀了した。又非常に有意義な研究である。今までにこの研究對象で、これ以上の發表のあつた事はなく、恐らく今後とてもこれ以上のものは容易く

は望まれまい。そして後々の研究家に取つては絶好の資料となるであらう。

もつとも完全を望むなら、多少の遺漏がないとは言へない。第一は基督教文學の生成及び安井息軒の『辯妄』を筆頭として基督教に對する興味ある辯駁書が數種出てゐるのを無視した事である(尤も此點は初め計畫の中にはあつたのだが、本間久雄氏が編輯の際病氣された爲め、遂行出來なかつたのだと、後になつて聞いた)。第二は本間久雄氏の『毒婦物研究』の好對をなすともいふべき明治の俠客傳(清水次郎長の如きを言ふ。山本鐵眉の『東海遊俠傳』は次郎長を傳する最初のもの)や、叛臣傳(雲井龍雄の傳の如き)を無視したことである。第三は野崎左文氏も當時の投書家の勢力の事を語つて居られるが、『顯才新誌』を初め初期の投書雜誌のことを調べてもらひたかつた。『顯才新誌』の事は當時の投書家であつたといふ田山花袋氏か京都の眞下飛泉氏(『こゝはお國を何百里』の歌の作者)の筆を煩はしたらよかつたと思ふ。第二期の投書雜誌なる『學術共進會』や『學生筆戰場』においては、今の野作造博士と新潟社主佐藤義亮氏が相對立した有力な投書家であつたといふから、この次の號には兩氏いづれかの執筆を煩はしたいものだと思ふ。

大きな項目でさしあたり氣づいた遺漏はその位だが、小さい點になると未だ補遺しておきた

い事がちよい〳〵ある。別にアラを探すつもりはないが、かゝる雜誌の記述漏れを補遺しておく事は、後の研究家に取つて必要だと思ふ。思ひついたまゝを列序なく書きしるしてみる。

坪內博士が『新舊過渡期の回想』で『大菩薩峠』の系統を明かにされたのは、無識私の如き者には非常な新知識であつた。なほ博士は文の終りに染崎延房の事を語つてゐられる。その染崎延房と條野傳平との共著に『近世紀聞』の大冊がある。同書が又、中里介山氏、前田曙山氏、その他維新に取材して物語を製作する諸作家に、豐富な材料を供給してゐる事を、附加へて書つておきたい。黑船渡來後から西南戰役までの諸々の史實街談巷語の類ひはあの書に集大成されてゐると思ふ。

(三) 飜譯小說と譯詩

それから長谷川天溪氏の『新聞雜誌と海外文學の飜譯』で思ひ出したが、海外文學の飜譯の出たのは明治十一年リットンの『アーネスト・マルトラバース』の譯なる『花柳春話』を最初とすることはたれしも知つてゐる。それから明治十五六年以後になつて『慨世志傳』『春鶯囀』以下數種の譯書の出てゐることは、どの明治文學史にも書いてある。が、不思議にも明治十三

年にスコットの『ザ・プライド・オブ・ラムマアムーア』が『春風情話』なる題で譯されてゐる事と、明治十六年に『テレマック』が『鐵烈奇談』なる題名で譯されてゐる事とは、完全に見落されてゐる。前者は海外文學の五番とは下らない早い飜譯なる榮譽を荷ふ書である上に、原作者がスコットなる點が注目に値する。後者は又佛原文からの殆んど忠實なる逐語譯である點が見のがし難い。普通逐語譯は森田思軒あたりからはじまつたやうに言はれてゐるが『鐵烈奇談』はその斷定を覆すものである。此の兩書とも明治初期の古本の集輯に關しては天才とも言ふべき柳田泉君が珍藏してゐる。しかも兩書とも上は岩城準太郎氏より、下は宮島新三郎君の『明治文學史』に至るまで記載されてゐないから、後世の研究家は補遺するを要する。

それから長谷川氏は高田早苗、坪内逍遙、天野爲之三博士がスコットの『レディ・オブ・ゼ・レーキ』を譯された『春窓綺話』を見た事がないと書いて居られるが、私は一度だけ見た。それは大正二年早稲田大學の創立三十年記念祭が開かれた時、文科では教授及び校友の著書を展覽した事がある。片上伸氏が、その方の委員で、學生だつた私達はその下で働いたが、その際私が江戸川橋の横の古本屋で發見して、片上氏に報告して、購求されるやうにとすゝめたのだが、片上氏はたゞ「君はよく色んなものに眼がつくね、」と言つて微笑されただけであつた。その後

二三年してから長谷川氏が非常にそれを捜して居られる事を傳聞して、買ひに行つたが、もう無かつた。青色クロースに金字で表題をぬいた當時流行の體裁の本だつたと記憶する。今長谷川氏の文を讀んで、當時これを購求しておかなかつた事を殘念とする。

日夏君の『新體詩創始とその背景』に就ても一言したい。明治の新體詩が外山博士、井上哲次博士等の『新體詩抄』にはじまる事はたれしも知る。そして『新體詩抄』が西詩の剽竊による事甚大なるは詩抄の半ば以上が譯詩なるに見ても明かである。そして西詩紹介のことは成島柳北も之を心掛けて居た事が、その遺文によつて知れる。それから實際に西詩を和譯したものは、私の究めた限りでは勝海舟が一番古い。彼は青年時代オランダの Loeſden Heer なる詩を『思ひやつれし君』と題して琴歌のやうに和譯してゐる。私はこれを田邊蓮舟、戸川殘花等の發行してゐた『舊幕府』の中に見出して、東京日々新聞の『學藝小話』及び『文藝の先驅』創刊號に紹介しておいた。新體詩抄の著書の一人なる外山博士は海舟と親しかつた人で、海舟の自叙傳『氷川清話』の中にはかうある。

「外山正一も學者としては兎に角やりてだよ。何時ぞやあれが文部大臣になつた時に、おれの處へやつて來て『今度伊藤さんから是非やれと言はれるので文部大臣になりました。その

ため御披露に參りました』と云ふから、おれは『それは目出たい。折角勉强しておやりなさい。併し餘り永いこともあるまいから、其積りでゐるがよい』と言つた。……（中略）……それにしてもあんな小僧が、大臣になるやうになつたのだから、己れも老衰した筈さ。」（初版八九頁）

といふ意味の事が書いてあるのに徵しても、兩者の關係の親密の程度は知られる。としてみると『新體詩抄』の譯詩發表については——少くとも外山博士の譯詩は、何か彼が少年時代勝海舟からの暗示でも受けたやうな因緣はあるまいか。この點は更に『外山丶山博士全集』でも調べて、日夏君の該博なる考證に接したいと思ふ。

（四）『小說』と云ふ言葉

それから淡島寒月氏の『明治十年前後』の中には

「一體小說といふ言葉は、すでにかなり新らしい言葉なので、はじめは讀み本とか草双紙とか呼ばれてゐたものである。が、それが改つたのは戊申の革命以後のことである。」

と書いてある。

これは私が長い間疑問としてゐた事に少くとも、ある解決の手がゝりの一つを供してくれた。私はさき頃公にした『小說研究十六講』において、かう述べておいた。

「――今までに見て來た通り、在來の日本では實質において小說である書も、實際書名に小說と銘打つたものはかつて無い。有るかも知れないが、吾等が文學史で知る範圍の書においては見當らない。みな「物語」と言ひ、「草子」と言ひ、「草双紙」「讀み本」「人情本」「續き物」など、呼ばれてゐる。併し小說といふ支那の漢時代からの傳來語が是等の總稱として、いつの頃からかばくぜんと宛てられてゐたものと見える。此の、在來からわが國に製作され、傳はつて來た物語と、西洋から移入せられたノヴェルやヒストリカル・ロマンスの觀念とを合はせた――言ひ換へれば、吾等が今日抱いてゐる小說といふ概念に「小說」なる名稱を冠して、はつきり動かぬものにしたのは、やはりこの坪内博士の『小說神髓』ではあるまいか。但しこれは私の妄斷に過ぎない。小說なる語の日本への移入、語義變遷の徑路等においては專門の國文研究家の考證示教に俟ちたいと思ふ。私がこの著述において明かにし得ないのは遺憾である。」

實際「小說」なる語の、今のやうな意味においての使用については、研究すべき點が多々あ

るが、この淡島翁の示教を得て、少くともそれがいつ頃から使用されはじめたものであるかは明かになつた。この一言は研究の範圍を限定しただけでも、今後の研究家に非常な便益を供するものでなくてはならない。

本間久雄氏の『似而非惡魔主義』は謂はゆる毒婦傳の研究で、甚だ興味の深いものである。この一文は本間氏の多くのエッセイの中でも傑れた地位を要求すべきものであらう。本間氏は毒婦ものとして『鳥追お松』『夜嵐お絹』『高橋お傳』の三者に關する諸書の名を擧げて居られるが、なほ外に『權妻お辰』以下數種ある。本間氏は草双紙式の木版本で讀まれたらしいがこれは後になつて活字本となり、一人々々別冊にして販賣されてゐた。それが明治十六年になつて一卷に合冊されて『明治毒婦傳』と題されたのである。その事も一寸附記しておく。

河井酔茗氏と高安月郊氏とに依つて大阪のことが記述されたのは當を得てゐた。併し京都と名古屋が見殘されたのは遺憾であつた。名古屋の事はよく知らないが、明治初年の京都は非常に興味ある研究題材である。最も守舊的なものが、又最もよく突飛に急進的であり得る。それに新島襄が山本覺馬の援助を得て、今の新しい主義者も同じ盛んな意氣込みで、そして今のコムレードといふ字をそのまゝに直譯した字を校名に宛て、敷地は舊皇城と相接する所に選んで、

同志社を設立した事は、少くとも明治新文化の重要な大潮流を作つた。後年「國民の友」を興し平民主義を唱道した德富蘇峰氏も一度はこゝに學び、後年社會主義運動の頭目となつた安部磯雄氏もこゝに學びかつ教へ、後年イブセンを初めて日本に移入した高安月郊氏もこれに關係し、キリスト教的清新味あり、社會主義的思想をも含む小說を書いた德富蘆花氏も之に學び、「國民の友」に相對立する「同志社文學」なる文藝雜誌も創刊されてゐた同志社の創立時代などは、見のがしてはならない好題目であつたと思ふ。（大正十四年三月、『東京朝日新聞』）

雜學問答

第一

○出典

尉繚子に、野物不レ爲二犧牲一、雜學不レ爲二通儒一とある。これが雜學の文字の出所であるさうな。取つて以て文の題とする。

○聖範

新村出博士の南蠻の研究は、日頃から私の愛讀して措かぬものなので、先日、『南蠻更紗』が上梓されると共に、早速一本を求めて與に入つて讀み耽つた。書中、『邊主聖範の舊譯本』と題してトマス・ア・ケンピスの名著・イシテーション・オブ・クライスト』の邦譯が慶長の昔に二種出てゐるのに對する頗る興味深い考證がある。文の冒頭、博士は大正になつてから中村昌樹、

中村詳一兩氏の新譯書が出たことに言及し、「明治以後尚古く和譯があつたと聞いたことがあるが私はそれを知らない」と書いてゐられる。そこで私は何かの參考になりはしないかと思つて、書架に所藏の一本を人に託して博士に獻呈した。それは明治二十五年譯同三十年神戸で發行せられた『聖範』と題する邦譯書である。すると博士からは折返し鄭重な禮狀が來て、別に、東京柏木の某氏からも邦譯別本を贈られ、大阪の某氏からは漢譯の寫本を贈られ、坐ながらにして各種の書を見ることを得て歡びに堪へない、いづれ他日一文を草して諸氏の厚意に酬いるの機があらうとの旨を記して居られる。

柏木の某氏の贈つた別本とは多分明治二十五年に出た櫻井ちか子夫人譯「基督の模倣」であらうと推測したが、博士邸に出入する私の友人からの手紙で、やはりさうである事が明かになつた。——それは兎に角として、面識もない吾等無名の一後進の些細な寄與に對しても鄭重な禮辭をつくされた博士の高風は、私を欽慕せしめておかないものがあつた。

○天來の『神曲物語』

そこで私は新たに又書を寄せて、「南蠻更紗」の中にある博士の些細な思ひ違ひをお知らせし

ておいた。博士はアメリカのハーバード大學圖書館のダンテに關するコレクションの目錄の中に、「日本の重野某氏のダンテの神曲の物語が見えたが原本にあたる暇がなかつた」と書いて居られる。併しそれは重野でなく、籠野天來氏の事に違ひない。天來氏は前に富山房から『ダンテ神曲物語』を發行された事があるのだから……

○ユリシスと百合若

新村博士の著書では『南蠻更紗』も面白いが、前に見た『南蠻記』は、もつと遙かに面白かつた。かゝる名著が久しく絶版になつて、大正四年の出版といふのに今は古本屋にも滅多に見られないのは嘆ずべきの至りである。

近頃又それをよみ返してみた。日本の百合若傳說がホーマアの名作『オデッシー』とほゞ筋を等しうし、オデッシーのラテン名ユリシスが轉訛して百合若になつたのであらうとは、例の坪內博士の有名な考證である。その『百合若傳說の本源』なる論文をよむと、坪內博士の推斷は間違ひはないやうな氣がする。坂本健一氏の『西洋歷史集成』杉谷代水氏の希臘神話などみな此の說を引用してゐるのに見ても、その道專門の識者も相當にこれを肯定したものと思ふ。

そして坪内博士が「要するに百合若物語はオデッシーの粗筋を飜案したるものたる事疑ふべきにあらぬものから、いづこの國人よりいつごろ我が國には傳へたりけん、我が文藝復興のフロレンス、ネープルスともいふべき山口、堺などを經て生ひたちしならんかとも思はれるど未だ考へず」とあるのに對し、新村博士がポルトガルのホーマアと言はるゝカモエンズの事を語り、「日本人は嫣港かマラッカか、ゴアか、さもなくば『波濤の諸所』でカモエンズに會ふ機會があり得た筈であるから、萬一その口から古希臘の百合若の話を聞いたならば、此の上もない面白い話である。」と言つて居られるのは頗る興味が深い。

カモエンズから聞かなかつたとするも、少くとも彼等南蠻人から直接に傳へられたもので、決して支那からのセコンド・ハンドではないと考へることは、さう無稽であるまい。なぜならば百合若傳說には支那臭の薰染が殆んどないと言つてもいゝのだから。

○葡國新作家

ポルトガルと言へば Richard Eaton の飜譯編纂した "The Best Continental Short Stories of 1923—24" の中に A. d'Aguilar といふ作家の "The Treasure of Almeida" といふ作が載つ

てゐる。ポルトガルの現代作家といふのが、一寸珍らしい上に、劈頭『お蝶夫人』のオペラの文字が見ゆるのはなつかしい氣がする。

○菊池純

ポルトガルの隣邦スペインのアラルコンといふのは私の好きな作家である。と言つて今迄は内海月杖氏の譯した、『笛』と、上田敏氏の譯した何とか云ふ短篇と二つしか讀んだ事はなかつたが、頃日、『釘』といふ短篇の英譯を得て一讀、やつぱり相當に面白かつた。

この『釘』は "The Lock and Key Library" と題する世界各國の探偵小說と怪奇小說の傑作を集めた十冊つゞきの叢書の中に收まつてゐたのである。丁度この『釘』の收まつてゐる卷に、日本の物語『雄辯の力』(The Power of Eloquence) といふのも入つてゐる。これは越後の豪族魚住瀨左衛門の娘雪野にかゝる物語である。作者は Kikuchi Jun とある。菊池ジユンとは如何なる人か、又この物語の原典は何か、御存知の方はどうぞ敎へて下さい。存外誰れでも知つてゐる物語かも知れないと思ふけれど、寡聞な私は知らない。

○知りたい事二つ

知りたいと言へば、社會主義なる語を日本で初めて使つた人は誰れであるか？——これも私が今さし當つて知りたいと念じてゐる事の一つである。安部磯雄氏と石川三四郎氏に尋ねてみたが、やつぱり分らなかつた。森鷗外の『西周傳』をみると、その著作目錄に『社會黨殘缺』一卷のあつた事が記してある。文獻に殘る限りで西周を最初の人と斷じて、過ちはないであらうか。

それから平民新聞に載つた幸德秋水補、石川旭山（三四郎氏の由）稿の『日本社會主義史』を見ると、明治七年頃、加藤弘之が福澤諭吉と交はした論爭の中に『コムニスト』（Communist）の語の見えることが、その原文の一節をひいて、說いてある。これは一體何に最初載せられた論文であるか、（或は明六雜誌？）御存知の方は敎へて下さい。石川氏に會つた時、質したけれど何しろ古い事なので、氏の記憶にももはや殘つて居ないやうであつた。實は私はフエビアン協會の『社會主義研究』の爲め、『明治社會主義文獻史』を書きたいと、もう半年餘も思つてゐるのであるが、開卷第一頁に必要な上記二項が不明なので、一向はかどらないでゐる。

（大正十四年三月、『文藝春秋』）

第二

○蘇峰學人よりの來書

「只今『文藝春秋』三月號を拜見候處木村毅君の雜學問答中一八頁三段に、菊池ジュンとは如何なる人かと有之候

此れは菊池純翁のことと存じ候翁號三溪明治初期に於ける漢文の大家也紀州の人にして京都に住してゐた物語は定めし日本處初新誌にあるならん此れは手許に其書なければ只だ想像のみ申上げ候

木村君の宿所を知らざる故乍御手數貴臺を煩し候」

以上は蘇峰學人が菊池寛氏に宛てられた手紙である。菊池氏は直ちにそれを私に報ぜられると共に、翌月の『文藝春秋』に「蘇峰學人の如き、老文豪が本誌を精讀して居られることは、編輯者の欣びであると共に、雜誌としては一の誇りであらう。」と書かれた。

菊池純が三溪なるを知らなかつたが如きは、私も聊か迂濶な話で、現に私がかなり愛讀した

成島柳北の「柳橋新誌」の木版本の序にも「三溪菊池純識」と書いてあるのだつた。私は深く自分の不學と疎漏を恥ぢた。

そして蘇峰學人の指示に隨ひ「本朝虞初新誌」をさがしてゐた所、柳田泉君が見つけて持つて來てくれた。成程、上卷八丁に「嬌賊」と題する篇がそれで、「北越糸魚川有二一豪戸一焉、曰二魚住瀬左衛門一、曾擧二一女一、名二雪野一」とある。かう云ふ歡びは吾等貧しい讀書生にのみ許されたものである。

○ヨーク

三月は私が非常に書籍に惠まれた月で、內田魯庵先生が轉宅された爲め、先生に於ては邪魔になる書數十卷の惠與を受けた。私は木綿の大風呂敷に一ぱい引つかついで、家へ歸つて來て、整理した。そしてその中に"The Yoke"なる一卷の小說を見出して、はからずも十五六年前の回想に耽らざるを得なかつた。

このヨークは私も少年の頃一讀した事がある。繼母子の相姦を描いたもので、確か英國植民地で發賣禁止になつた爲め一時に有名になつた筈である。

私がこの書の存在を知つたのは、明治四十三年夏の頃の『文章世界』の論文投書欄にこれの批評が選外佳作で掲載されてゐたのを讀んだのが初めてであつた。そしてその論文の投稿家は今の三上於菟吉君であつたと記憶する。恐らく三上君が早稲田の豫科生あたりの頃書いたものであつたらう。

三上君は昨今の雜文で推想するのに、一種のすぐれた讀書家であるらしい。そしてその素質は早く十五六年前の少年時代から現はれてゐたのだ。文壇的にかなり危い道を歩みながら、今日君が長篇小說の作家として動かし難い一地歩を占めて來たのは、君が非凡な讀書家であつた事がその重大な原因の一つとなつて居りはしないか。

○『氷川清話』

『文章倶樂部』三月號に於て、三上君はボスエルの『ジョンソン傳』の面白い事を頻りに說いてゐる。この價値については私も夙に諸書に於て知り、一本は座右に備へる事久しいが、やはり未だ讀んでゐない事を恥づる。

三上君は同じ文章に於て更に勝海舟の自叙傳『氷川清話』の魅力ある事を述べてゐる。この

書は私も愛讀したので同感と言ふより外ない。

○『田舍源氏』

その一『氷川清話』で思ひ出した事一つ——

藤岡東圃博士の遺稿『近世小說史』中、柳亭種彦を論ずる條(六八一頁)に左の一節がある。

「帝國文庫本乙羽生の解題に勝海舟の談とていふ。

あの評判の田舍源氏な、あれは大奥の事を書いたもので、その頃の大御所樣は妾の四十人もあつて子が六十人もあつた程の豪奢な方であつたから、種彦はそれを材料にして、大御所樣をあの光氏に擬らへ、其の他繪組の模樣などもお濱御殿をその儘書いた所もある。身分が旗下で人間が如才ないと來て居るから、大奥の部屋々々へも這入つてその事情が精しく判るから面白い。書いたものが皆活動してゐる。——」

これは『氷川清話』(初版一六七——八頁)に出てゐるのを、大橋乙羽が受け繼いで序に用ゐたのだが、それにしても不思議なのは、あの博覽にして强記な東圃博士が『氷川清話』を讀んで居られなかつたのであらうか。(大正十四年四月、『文藝春秋』)

第三

○自家廣告

――風貌魁偉、常に長髯を撫して文壇に亂を構ふるものに中村武羅夫あり。一日辻堂の新邸に自稱天才島田清次郎の訪を受く。清次郎問ふらく「あなたは語學は何をおやりになりました？」

武羅夫の答ふらく「いや、亂學の方で。」

「ランガク？――では和蘭語ですな。」

止んぬるかな武羅夫や、未だ不惑に充たざる事數年なるに、忽ちにして天保の老儒の列に伍せられんとは。――

こんな風の意味の一文が數年前の時事新報に掲げられた事がある。

その島田清次郎君は世に敗れて癲狂院に收容さるゝ所となり、中村氏は大久保彦左衞門と自稱して、依然文壇を睥睨してゐる。

私の玆に掲げた看板は雜學であるから、亂學の如く、普に依つて天保の老儒と誤まらるゝ恐れはないが、私の名その者は、博識の士をして、事によると幕末の一人傑と思ひ違へをさせるかも知れない位な危險性は十分に含むのである。

幕末の重要な文獻の一つに『黃粱一夢』なる書のある事は知る者が多い。その著者の木村芥舟翁である事も大抵の人が心得てゐる。その芥舟翁の名前こそ私と同じ木村毅なのである。

私がこの事を初めて知つたのは沼南島田三郎氏の名著『開國始末』によつてゞあつた。これは明治二十年の出版で、かのカアライルが『クロムエル』の大著に依つて、百年梟雄の名を負はされてゐた偉人の爲めに、筆を呵して世の蒙を破し、迷謬をたゞしたのに沼南翁も亦ひそかに倣うて、非伊大老の爲めその奸賊の汚名をすゝいでやつたのである。その論斷には一々俄かに同じ難きも、その意圖とする所に至つては、まさしく史筆を執るものゝ好領域たるを失はない。

『黃粱一夢』のことは同書百八十三、四の兩頁に跨つて出てくる。試みに引用すれば次のやうである。

『黃粱一夢の作者は幕府の目付より軍艦奉行に進みたる木村毅にして、此人初め勘助といひ、

後に攝津守と稱し、萬延元年正月幕使の米艦に搭じて合衆國に航せしとき、幕艦咸臨丸にて共に米國に赴きし者にして今芥舟と稱す。嚴潮震等の友なり。黄粱一夢は明治十六年の出版に係る。」

但し、思ふに私の名は芥舟翁にあやかれと言つて付けられたものではない。政治に興味をもつた父が同郷出身の犬養毅氏を慕ふの餘り付けたものらしい。政治に野心のない私は、これを甚だ有難迷惑に思つてゐたが、後年『開國始末』を讀むに及んで、芥舟翁が自分と同姓同名なるを知り、若干の懐しさは感じた。

因みに記るす、世の人の親よ。子に命名するには決して劃の多い字を用ゐてはならない。私など區役所でも警察署でも、軍隊でも、自分の名を言つて直ちに書け得る書記に出會つたためしが無いのである。「木村――キ、そのキと言ふ字は犬養毅の毅です。」と言つてやつても分らないから、最後には必ず指で板の上に書いて見せてやらねばならなかつた。

○假葬行列

大阪朝日新聞が五千金の賞を懸けて募つた映畫『大地は微笑む』は既に作製を終つて各地に

映寫中である。

私はまだ見ない。が、よろしく現代意識に觸れる修養の爲めにとて、わざ〳〵見に行つたある小說家の友人から梗概だけを聞いた。

それによると、ある私立大學の記念祭に、學生が假裝行列として葬式を出す場面があるとの事である。私に於て一言の瞥辯なきを得ないのはこゝの事だ。

實は大正二年仲秋、私の母校早稻田大學では創立の三十年記念祭祝典が行はれた。私達は丁度文科の二年生で、出すべき假裝行列のことをより〳〵協議した後、遂に運動場で斂葬を行ふことゝした。

僧侶、牧師、神官——三教合同の葬式で、葬儀屋から本當の白張提灯、蓮花の造花、花輪、素屋（すや）などを借り出し、鐃鈸を鳴らしつゝ一大行列を靜々と運動場の眞中に繰り出したが、その時には、場にあつた朝野の貴顯紳士、淑女令孃、學生など、この目出度い日に思ひ切つて緣起の惡いものを出したと言つて、或は驚き、或は眉をひそめたさうである。

併し私達は必ずしも母校の前途を葬つて了ふ程、反逆的な學生ではなかつた。私達がその時茶毘に附したのは實に「現代」の死骸なのであつた。

私は僧侶に假裝して「現代」を葬るの弔詞を讀んだ。ソクラテスは眞理の爲め毒杯を仰ぎ、キリストは道の爲めに十字架にかゝり、八百屋お七は戀の爲めに所刑され、然り而して汝現代は形式に捉はれて死す、嗚呼哀しい哉。といふやうな事を書いたのを今も記憶する。

その葬儀には死したる「現代」の遺族として、ある學生の扮裝した井上哲次郎博士を參列させた。雜誌『青鞜』の發行されてゐた時分だつたから平塚明子も燒香者の一員に入れた。私の記憶に誤りがなければ、今イプセン會にゐる河野義博君が平塚氏に假裝したのではなかつたかと思ふ。新時代劇協會の役者が來て、顏などはそれ〳〵幾分か似たやうに作つてくれた。

現代を葬ると共に私達は、發賣禁止になつた圖書、及び絶版になつた明治年間の珍書の爲め、盛大なる圖書供養を營んだ。

『大地は微笑む』の作者は葬式の假裝行列を全然の空想によつて思ひついたのであるかも知れない。晴合などゝいふことは屢々あり得るものである。或は又あの際私達の營んだ假裝行列を見るか聞くかしたのかも知れない。いづれにせよ私はその映畫に向つて一種の興味を感ずる。

○圖書供養

その供養の際、多くの珍らしい圖書を方々から借り出して陳列したが、私も又所藏の數卷を出陳した。

國木田獨歩の著書なる『ウオーヅオースの詩評釋』もその時に出した一冊であつた。これは『英語新報』と云ふやうな題の月刊雜誌の增刊で、前半には原文がついて居り、後半はその飜譯ではなく、その大意とその味はひ方と、思想として注目すべき點とを說いたものであつた。

多分獨歩が窮迫時代に作つたものであつたらう。然るに『新潮』や『趣味』の獨歩追悼號に於てもこれについて、一人言及する者がなく、田山花袋、前田晁兩氏の編纂の『獨歩全集』の年表にも一言としてこれに說き及んでなく、その後出版された諸種の獨歩の文集にも網羅されてあるのを見た事がない。

この珍書はその際誰かゞ持つて行つたものと見えて再び私の手へは還らなかつた。併し圖書館へでも行つて寫して、何かの書冊に收めておかないと、今にその存在を知る者もなくなつて了ふであらう。

クロポトキンの書を譯した『青年に訴ふ』といふ小冊子もその時私が出品した。これは多分明治四十一年幸德秋水が渡米した時に計畫を立てゝ發行したものと思ふが、サンフランシスコ

の五車堂といふ本屋の出版であつた。

譯者の署名はしてなかつたが、大杉榮氏が平民新聞に連載したのを纏めたものである事が後に兩者を對照してみて分つた。卷末の一頁には「革命は荒原に駛る燎火の如く、積水の氾濫する如く、今に何處へも擴がつて行くであらう。」といふやうな秋水の短い文章が付いてゐた。

外國で印刷した日本文だから、現在の日々、朝日などの諸新聞に見る如く、活字が揃はないで、大學を「大がく」とするといふ風に、成語まで漢字と假名との片チンバになつてゐるのが二三あつたのが頗る異樣に眼に映じた記憶がある。

このサンフランシスコで發行された小冊子がどうして私の手に入つたかといふと、明治四十二年の後半から、四十三年の前半期にかけて、宣傳の爲め、日本の投書雜誌を調べてはそこへ送りつけたものである。私はその頃『文章世界』の投書家だつたから、それでその惠贈を受けたのであらうと思はれた。

初めは「勞働新聞」といふやうな表題の四頁の新聞が來た。管野すが子に對する裁判所の處置に對して憤慨した論說も出て居り、　を名で呼び捨てにしてある項もあつた。又今は誰れ知らぬものもない有名な『　　』などゝ云ふ詩は到底日本で發表された筈はないから、

恐らく最初はその新聞に出たのであらう。

『青年に訴ふ』はその翌年（　事件のあつた年の春に、私達の所へ送つて來たのであつた。新聞は無くしたが、その小冊子は保存しておいたのである。

その小冊子が吾々に與へた感激は非常なものであつた。投書家仲間で寄り合ふとその話が出たもので、森れじなといふ投書家はそれを讀む事をかいた『枝』と云ふ風な題の小說を書いて、花袋氏の選で當選した事があつた。

この本も供養の際に、誰かに盜まれて了つたが、後年宮島資夫氏が東京を引上げて叡山にこもつた際、整理した反古の中にあるのを見つけて貰つておいた。尤もそれも、よく私の所へやつて來た憲兵に貸してなくして了つた。

あの頃のアメリカに於ける社會主義の邦文の刊行物について、誰れからかあの地の狀況を詳しく聞きたいと思ふ。現在出てゐる日本社會運動史の諸書は何れも記述が十分でない。

○『秋水隨筆集』

秋水と言へば新居格氏が『秋水隨筆集』を編むさうである。その遺著『平民主義』『長廣舌』

『社會主義眞髓』『基督抹殺論』及び平民新聞などから主として採るのであらうが、内務省のお目こぼしに與るのはどうせ少數な篇に違ひあるまいから、いろんな書の序文や書翰や詩も採擇したらよいであらう。

私に於ても二三思ひ浮んだ材料があるから以下書きしるして見よう。些少でもこれが編纂の際資する所あらば、その幸いかばかりであらう。

隆文館から出た秋水の譯書に『神啾鬼哭』といふのがある。これは或るロシヤの亡命客の自叙傳だが、あの序文だけは採擇しても禁止にはなるまい。

兒玉花外氏の『社會主義詩集』が發賣禁止になつた時、文壇諸家の感想を乞うて、次ぎに出た『花外詩集』の巻末に收めた事がある。その時秋水は一篇の詩を寄せた。

たとへわが舌破るとも
石は代りて物言はん

といふやうな一節があつたが、あれも收めて貰ひたい。四十年頃の『中央公論』に齋藤緑雨のことを書いた一文が載つてゐる。あゝ云ふものも面白いであらう。

それに秋水は漢詩を作ることがかなり好きで、アメリカへ渡航する際、船に備へつけの記念

帳へ二三篇題した。後からその同じ船に乘つて行つた茅原華山氏が『海外文章』だつたか『銀杏樹の葉蔭』だつたかに、それを轉載してゐるのを、軍隊にゐる時讀んだ事がある。それらも逸したくない。」――七十阿嬢停門泣」の母に寄せた最後の詩は勿論のことだ。

明治三十八年十月の讀賣新聞に秋水が小司小劍氏に宛てた手紙がのつてゐる。大して長くもないから全部を引用する。

「御無沙汰致しました。

社會主義評論は中々の才筆ですね。僕はあのために本月一日から貴紙を取つて、毎朝非常の興味を以て愛讀して居ます。平民社の連中も是から追々記者の槍玉否筆玉にあがる事でせうが、どんな非難でも、攻撃でも、之をなす人の心持が眞摯でさへあれば、僕は只感謝して教を聽くのです。

先日社會主義評論記者が僕等に對して、『異議あらば與り聞かん』とか、『說あらば貴紙上に紹介する可からんか』など書いてありましたが、アレはちと無理だと思ひました。貴新聞に限らず、何新聞雜誌でも、目下僕等の議論意見を紙上に載せるものがあつたら、夫れこそ警

視廳に睨まれて、白羽の矢が立つたと同じです。骨までシヤブラレずには濟みません。現に先日も平民社解散の廣告を某新聞に依頼したら、時節柄不穩だからといつて謝絶された位です。それにお氣がつかれないのは、如何に才子でも、流石に洋行がへりの學者で、田舍に養生してゐる方(?)だと思ひました。

平民社も僅かに一ケ月の停止で脆くつぶれました。愚痴も未練も申しません。全く僕等の德と識と才と力の足りない爲めで(ここまで書きかけた所へ警部巡査が澤山這入つて來て、家宅捜索が行はれました。御苦勞な次第です)お恥しい次第です。併し實際社會主義の運動も、今迄はまゝ事のやうなもので、眞けん勝負は是れからです。少し長い眼で今後を見て貰ひたいと思ひます。

千山萬水樓君に便りがあつたら幸德がこんなことをいつてよこしたといふことを傳へて頂きたいのです。

小生は來月十四日の汽船で、立ちたいと思つてゐます。それ迄には度々まだお眼にかゝる機會もあり、小生も近々お宅へ伺ふつもりです。今朝社會主義評論が休載なので、少しく失望して思ひたつたまゝくだらぬことを並べました。

北鷗先生にはまだおめにかゝりませんが、宜しく御傳聲を願上げます。

十月十二日朝八時　　秋水拜

小劍賢兄玉案下」

かうした手紙も採錄して貰ひたい。

明治四十一二年頃博文館から出た『名士の演說振り』といふやうな表題の本があつた。速記者の書いたもので、幸德秋水の項には「政府の壓政を說いて、今にも中止命令が下りはしないかと、聽衆をヒヤ〳〵させ、チロリと警官席を睨んでから、さう云ふ事は日本に無いかも知れませんが、西洋には隨分あつたやうでありますと言つて、巧みに逃げる」といふやうな意味の事が書いてあつた。

あの中に秋水が筒袖をきて壇上に立つてゐる凸版の挿繪があつたが、あれを轉載するも面白いかも知れない。

以上、新居氏よく首肯するや否や。（大正十四年六月、『新潮』）

第四

○『二十五絃』の公孫樹

明治文壇の諸業績のうち、その整理の最も見事に急がれつゝあるのは、恐らく詩の方面であらう。比較的に範圍が狹くて、研究に便利な點もあらうが、詩史には日夏、河井兩氏の如きすぐれた發表を見、詩集としては、藤村、晩翠、夜雨、醉茗、有明諸氏の全集まづなり、今又、上田敏(改訂版)、薄田泣菫兩氏の集が刊行せられて、目星しいところはほゞ揃つたかの觀がある。

明治の詩を語る者は先づ藤村を最も愛讀したといふのが、恰かも符節の合ふ如くあらゆる場合を占めてゐるやうだが、私は詩に門外漢の加減であらう、藤村への熱度は他の諸家程に高くなく、實は、敏と泣菫とを最も愛讀したのである。而も最近知友から兩家の詩集を相前後して贈られたので、いま暇のある度に出しては讀んで、少かつた日の追憶に耽つてゐる次第である。

『敏詩集』が著者歿後門人の手に依つて編まれたのに反し、『泣菫詩集』は著者在世中自からの

手によつて採擇が決せられた加減もあらう、前者が一斷片の譯詩をも洩らすまいと努力した跡があるのに引換へ、『泣菫詩集』には纏まつた詩でも落ちてゐるのがあるやうな氣がする。

豐葦原の瑞穗の國に生れ來て米が食へぬとは嘘のよな話

この名歌を卷頭とする安成二郎氏の歌集『貧乏と戀と』は泣菫氏も亦序詩を寄せてゐられたやうに記憶する。そしてそれは「秋田うまれのけらつつき」が何とかして「……難波江の、舟乘女房に惚れられて、四十島田の寢白粉」と言つたやうな俗謠體のものだつたと覺えてゐるのだが、『泣菫詩集』をざツと頁を繰へしてみたのに、それが發見出來なかつたのは、私のやうな一短篇をも推重する愛讀者に取つては、少くとも一つの失望であつた。

併し今の場合、そんな詮索はどうでもよいとして、暫く『泣菫詩集』の中の一つの詩について語りたいと思ふ。

あゝ、日はかなたイタリアの
七つの丘のふるあとや
圓き柱に照りはえて

……

これは言ふまでもなく『二十五絃』の巻頭を占めた有名な『公孫樹下にたちて』の冒頭である。私は今でもこの詩の大部分を諳記してゐるが、それは單にこの詩が好いものだとか、晩翠の『星落秋風五丈原』の次の時代の一般學生に愛誦しておかれなかつたものであるとか言ふ事ばかりでない、他に特殊な懐しさを寄せる理由がある。試みに『泣菫詩集』巻末を見よ。

「公孫樹下に立ちては三十四年十月、少年の頃世話になつた人をたづねて、作州津山に旅をしましたが、その折近郊に大銀杏の樹が風に吹かれて突つ立つてゐるのを見て出來たのがこの作でした。」とある。

更に詩を見よ。第二節にかうある。

ここ美作の高原や、
國のさかひの那義山の、
谿にこもれる初嵐、
ひと日高みの朝戸出に、
遙く銀杏の影をみて
……

この一句の爲め、『二十五絃』が發行されると(明治三十八年五月發行)、「あれは菩提寺の公孫樹を歌つた詩だ。」と云ふ噂が美作一圓の文學好きの青年の間にパツと擴がつた。

菩提寺。それは美作勝田郡豐並村大字行方字高圓にある名刹で、恰も山陽道では第一の高山なる那義山の中腹より稍々下寄りの谿の中にある。私が出生の村から遠くない。

この菩提寺にすばらしく大きな公孫樹がある。元來公孫樹の名木は必ずしも少くはない。鎌倉八幡宮のもの、下總八幡のもの、上總八幡のものなどは中でも都人士によく聞えてゐるが、それは別當公曉が隱れたといふ歷史的事實や、都人士遊覽の便があるから名高いので、大きさから言つたら那義山菩提寺の半分位なものであらう。同鄕の先輩なるK理學博士は日本全國の有名な公孫樹を調査して歩いたのに、やつぱりあの位な巨木は他にも見なかつたと語つたといふ事である。

この公孫樹が鄕間に名高いのは單に大きいからばかりでない。抑々菩提寺は法然上人が最初に入門した寺で、現に『十六門記』には「永治元年辛酉の歲末當國(美作)菩提寺の院主觀學得業の弟子となる」とあり、『勅修御傳』にも同じ事が書いてある。右の公孫樹は法然上人が少年の時の手植の木といふ事になつてゐて、長くなるから玆には書かないが、上人に關する或る興味あ

る傳說をも持つてゐる。

泣菫氏は恐らくこの菩提寺の公孫樹を見られたのではあるまい。津山からは十里近くの遠距離で而もかなり高い山の上にあるのだから、人を訪ねて津山へ行つたからとて、なか〳〵一寸には立寄る事は六ケ敷い。それにその村まで入つたものとすれば法然上人の傳說を聞かないで了はれた事は考へられないし、聞いたとすればあの詩のどこかには上人への言及があつてもよささうに思はれる。

だから泣菫氏は恐らく、書いてある通りに津山近郊の公孫樹からあの詩想を得られたのであらう。が、讀む方になれば、那義山の文字がある以上、その山腹の古い傳說とも纏はつてゐる名高い巨木を聯想しないでは居られなかつたのだつた。

私達の鄉里は有名なもの〻全く乏しい所で、東京の新聞雜誌に何か書かれると云ふやうな事は絶無と言つてもよかつた。私達は日本海にバルチック艦隊を擊破した東鄉平八郎の幼年時代の話と共に、その出生地なる九州の一寒村の名が麗々と東京新聞に出てゐたりするのを見ると、一種の愛鄉心から自分の出生地がかつて活字になつた事のないのが殘念で堪らなかつた。その時に鄉土の有する唯一の誇と言つてもいゝ大公孫樹が、日本一の詩人泣菫の詩材となつたのだ

から、それは私達の幼ない心を歓ばすに十分であつた。

同じ思ひの人は郷里に多かつた。無名の郷土詩人が菩提寺に詣でゝ、公孫樹の幹の皮の剝げた跡へ、鉛筆で右の詩の一節を書いてゐるのも見た。又秋になると黄金色の美しい葉をわざわざ拾つて来て、詩集の栞にしてゐる人にも出會つた。井汲清治君が學校を出立ての頃、『三田文學』へ歸郷記を書いた事を記憶するが、その中にも泣菫氏の詩の一節は引かれてゐた。

私達は『廿五絃』の巻頭の油繪の挿繪にある公孫樹が、平地の農家の傍にあつて、しかも菩提寺のそれとしては餘りに貧弱に過ぐる爲めに、畫者なる岡田三郎助氏を輕蔑した。又菩提寺の住職に向つて

「薄田泣菫と云ふ有名な詩人が、この公孫樹を歌つた詩があるが、御存知か。」と尋ねたら彼から「その詩は五言律か七言律か」と反問されて、これ程榮譽のことを彼が心得てゐないのを憤慨した。

繰返して言ふ。泣菫氏は多分あの詩に於て菩提寺の名木を歌つたのではあるまい。併し「那義山の」といふ一句がある以上、郷土の者が菩提寺のそれを聯想するのは當然である。だからあの名高い詩は恐らく後々までも、菩提寺のそれを歌つたものとして郷土に語りつがれるであ

らう。又、さうあつて欲しいと念ずる。泣菫氏如何となすや。

序だから言つておく。菩提寺の公孫樹は須藤南翠著『法然上人』の口繪の寫眞に出てゐる。淨土宗では名刹だが前年住僧が雪中で凍死して以來、あんまり山の上で不便だから誰れも後繼者となり手がなく、現在では無住のまゝに荒れてゐるといふ。

○南原陷落の記事

文壇が不振だとか單調だとか言ふ者があるが、そんな人は一體、どの範圍までを文壇と認めてゐるのだらう。『中央公論』と『改造』と『新潮』との小說欄だけを文壇だと言つてるのだつたら、そしてそれのみを讀んでゐるのだつたら、たとへそこにどんな傑作が載つたつて、既に味覺が鈍滯してゐる彼等はその正當な鑑賞に堪へまいと思ふ。佳肴も毎食之を喫しては藥を嚙むのと等しからう。廣く異種の物の味を識つて、その上で、諸雜誌の小說なども本當の讀書的價値が分つて來るわけだ。

生田長江氏が本誌(新潮)に於ける堂々の筆陣は目ざましなんどゝ言ふも愚かである。實際文藝評壇の活氣と權威は現在の所たゞ一人の長江氏に依つて保たれてゐると言つてよい。廣津

氏は別だが、他の青年批評家諸君が口を極めての長江氏への漫罵は、氏にあつて鎧袖の一觸にも値するものではない。

長江氏は本誌の三月號で史的文藝について論じて居られた。敢てその尻馬に乘るわけではなく、勿論ひどく別種に屬する事だが、私も一つ貧弱な史談を試みたいと思ふ。

市島春城翁が近刊の『隨筆頼山陽』は、元より長江氏の引例として言及されたカアライルの『フランス革命史』などゝはまるきり種類の違ふもので、價値も亦決して同じではないが、しかし仲々面白い史書ではあつた。

その『日本外史』を論ずるの項に、山陽が史實にほしいまゝな手加減を加へた事を言つて「机の上で勝手に兵數を增減したり、或は、晝の戰ひを夜襲などにして、隨意に變化を加へた痕が歷然として見られる。而もそれが何か史實に基いたのかといふと、さうでない。單に、夜襲にした方が面白いとか、これ位の軍勢でなければ、興が乘らぬといふ工合に、彼れ自ら工夫したものである。」と書いてある。

實はこれで一つ思ひ出した事がある。『日本外史』卷の十六豐臣氏(中)の朝鮮征伐南原攻擊の項に「――伏二卒一面一。而三面塡レ塹蹈藉而登。揚元在二帳中一。裸跳走。其所レ率遼東突騎數千。爭レ門

馳出。伏兵要レ之。奮レ刀斫二馬足一。適、月明。」とある。

然るに南原の城に傳はつた記錄『龍城祕史』によると、この戰爭は月明の夜でなく、大雨で咫尺も辨じ難い、眞暗な夜に行はれたのだと書いてある。

南原は全羅北道にあつて、今も全州につぐの名邑である。實は私は大正五年を約一ケ年南原で暮らした。歩兵第八十聯隊第二中隊がその町の守備に任ぜられたので、隊所屬の一兵卒であつた私も亦當然に南原に派遣された次第であつた。

私達の前には岐阜聯隊から派遣された中隊が守備してゐたのだが、その中隊長は非常に歷史が好きで、附近の史蹟をめぐり、古書を涉獵して『南原戰史』なる一小冊子を作つた。私達の中隊長もそれに刺戟され、史料蒐集の業を繼續したが、それには、兵隊としてはもてあまされてゐた私が割合に役立つたわけである。

南原の城を龍城と言ふ。公立普通學校に宛てられてゐる。その龍城の祕史は、寫本として今も鄭重に郡廳に保存してある。奉書のやうな紙に楷書で淨寫した漢文で、十年目とか廿年目とかに一度づゝ寫字生が淨書し直すのだから墨の色も新らしかつた。南原の戰を知るには、少くとも朝鮮に於ける史料としてはこれが最も價値あるものゝ一つでなければならないと、史學に暗

い私には思へる。それにはこの戰爭が月明はおろか、沛然たる大雨の夜だと書いてあつた。これは十年前の私に於て一つの大發見でなければならなかつた。

それから私は手に入る限りの邦人の手になつた『朝鮮史』(みんな明治以降のものだが)を集めて讀んでみると、悉く山陽と同じく月明の夜としてあつて、雨夜としてあるのは私の見た範圍では一つもなかつた。

それから十年に近い月日が立ち、私も身邊匆忙、この疑團を晴らす機會もなかつたが、たまたま德富蘇峰氏の『近世日本國民史』が朝鮮役の事に入つたので、私は毎朝、國民新聞の配達されるのを待ちかねて、貪るやうに讀んだ。

それには「明兵の來緩も案外におくれた。七月の初から大雨四五日止まず……」(『近世日本國民史』朝鮮役下卷四六九頁)とあるが、肝腎の南原陷落の八月十五日は『懲毖錄』を引いて、外史と同じく「適月明」とあり、又『兩朝平攘錄』と『大河內秀元朝鮮物語』なども併引してあるが、此れには大雨とも月明ともない。

『龍城祕史』の記事は外史よりは密で、稍束を以て濠を埋めた事など書いてあつたが、『懲毖錄』よりは稍々粗であつたと記憶する。そこで私が思ふのに、南原の攻撃から陷落まで三日間か、

つてゐるのだから、或は攻撃を開始した夜は大雨で陷落した夜は月明であつたのかも知れない。

蘇峰先生が龍城秘史を引用されなかつた事は一寸私を悲しませたが、或はそれは引用の價値のないものかも知れない。或は多分刊本がないから未だ一讀されてゐないのかも知れない。私はたゞ南原の城にさうした寫本の記錄が殘つてゐる事と、それが『日本外史』の記事とは眞反對である事を記すれば足るのであつた。

南原の守備隊ではその編纂した書を『南原戰史』と命じ、謄寫版で數十部作つて諸方へも寄贈し、兵卒にも頒つた。その中には勿論『龍城秘史』と『日本外史』との右の記事の相違は併せ揭げて對比に便にしてある。又明將揚元が險要の蛟龍山に據らずに、平地の中に在る南原城を守つて一溜りもなく負けたのを時の朝鮮人が憤慨した詩「明將揚元兵を知らず、蛟龍を衞らずしてこの城を衞る――」といふやうな七言絕句をも收めてあつた。私はこの『南原戰史』は早く失つたが、後に朝鮮總督府の月報のやうなものに全部轉載せられてゐたさうだから、存外にたやすく手に入る道があるかも知れない。

『日本文學史』の著者として名高い例のアストン（W. G. Aston）はその著『秀吉の三韓征伐』（Hideyoshi's Invation of Korea）に於て

"They cut down and bound in sheaves all the grass and grain in the neighbourhood, and carrying it by night to the moat,……

と、單に夜(night)とのみ言つてゐる。アストンは『徵毖錄』をも『日本外史』をも參考して居りながら、その落城の時を月明とも何とも書いてゐない。何か考ふる所があつたのかも知れぬ。

○『春香傳』の舞臺

無學で殊に史學に暗い私などが、柄にもないこんな考證めいたものを試みるのは、恐らく識者に取つてはひどく滑稽でもあらう。片腹いたくもあらう。言葉を控へた方がいゝ位は萬々承知してゐるが、私は輕い氣持で、そこはかとなき文藝漫談を試みるので、學問を論ずるのではないから、凡ては識者の示教と寬恕に與りたいと思ふ。南原の事をしるした序にもう一つ附け加へておかう。

高濱虛子氏の名作『朝鮮』に、洪さんといふ志士が、素淡なる妓生を作者に紹介するの項に、こんな會話がある。

「この方は『春香傳』のやうな小説をお作りになる方だから、お前の身上話を書いて戴くといゝと申しましたら、素淡はどうかなるべく善く書いて戴きたいと申しました」と言つて洪さんは笑つた。

「『春香傳』位のものは妓生でも讀むのですか。」

「讀むどころではございません。朝鮮假名の本もありますから、それも讀みますけれども第一『春香傳』ほど一般に行はれる芝居は無いのでございますから、この素淡など度々春香に扮した事もありませう。」(一二七——一二八頁)

こゝに語られた『春香傳』とは、別名『地獄の花』とも『廣漢樓記』とも言ふ。私も五年前ある雜誌にその梗概を紹介した事があるが、去年(大正十三年)の『女性改造』で中西伊之助氏はかなり忠實な抄譯を試みてゐる。その冒頭に附してあつた氏の解說から左の一節をかりる。

「この小說(『春香傳』)は嬉德の中の烈を描いたもので、『沈香傳』は孝を描き、『燕却』は友を描いてゐる。朝鮮では、この三つの小說が、最も有名なクラシックとなつてゐる。……『春香傳』はその濃艶な戀愛を取扱つてゐる點に於て、他の二者の首位にある。朝鮮の婦人にはとりわけ

て『春香傳』が熱狂的に歡迎せられる。」

この『春香傳』がやはり南原を舞臺とした物語である。豐公征韓役の古戰場としての南原を記憶するものは、今は朝鮮にも少なからう。併し『春香傳』の舞臺なるが故に南原は朝鮮全土の子女にも廣く知れ渡つてゐる。再び中西氏の譯文を借りるであらう。

「絕世の美人は常に、江山の精氣を受けて生れるものだとは、昔から言ひ傳へられてゐる。……後には俠艷を千古に讃へられた名妓生春香もやつぱり美しい花の精であつた。彼女の生れたのは朝鮮でも、暖かい南國の、全羅北道南原である。」

この『春香傳』が決して全然架空の物語でなく、そこに昔から傳はつた傳說に材料を取つたものである事が、同じく前記『龍城祕史』の卷末附錄に書いてあつたのを記憶する。『春香傳』の別名を「廣漢樓記」と言ふ、この廣漢樓は私達の守備隊にゐた當時は裁判所になつてゐた。

金樽美酒千人血
玉盤佳肴萬姓膏
燭淚落時民淚落
歌聲高處怨聲高

これは春香の戀人李夢龍が乞食に扮して惡郡主の酒宴の席に入つて、作つて示した詩であるが、物語に連絡なく、このまゝで意味を汲むならば、今のブルジョアの膽を寒からしむるの力がある。

○『美味求眞』補遺

酒で思出したが、十八世紀英國の代表的ダンディにリチャード・ナッシュと云ふ男があつた。Beau Nash の諢名さへあつた位だから、よほど女に甘い好男子だつたのであらう。その傳記はゴオルド・スミスが書いてゐる。私はまだ一讀したことがないが、何でもその中には、彼れナッシュは少年の時情婦の肌着を漉した酒でなければ飲まなかつたといふことが書いてあるさうである。(内田貢氏著『ジンソン』二十八頁)

かゝる珍趣向の酒は、文壇の酒徒と言へば必ず先づ聯想さるゝにきまつてゐる水守龜之助氏も葛西醉狸州先生も未だ味はれた事はあるまい。

この同じナッシュは、情婦の靴を細斷してフライにして舌鼓を打つてゐる。かゝる珍料理に至つては木下謙次郎氏の名著『美味求眞』の中の惡食篇の中にもしるしてない。

未だ讀まれぬ人にはこの『美味求眞』の一讀をすゝめたい。その惡食篇に至つては毛蟲、芋蟲、ばつた、蛇、むかで、モルモット、モグラモチその他様々の珍料理が約二百頁に渉つて列記してある。

私はよく冗談に、私の本が出來た時、會をして呉れる親切な人があつたら、精養軒帝國ホテルは御免を蒙る、兩國橋際の「ももんぢ屋」で、狸と狐と貉のよせ鍋で太白を上げて貰ひたいものだと言つてゐたのだ。が『美味求眞』を一讀するに及んで、ももんぢ屋の料理なんかは到底言ふに足らない事を知つた。

話が文壇の事とかけ離れてもよいなら、私はこの書に一二を補遺したい。

蚯蚓は甘酒のもとを作る際に投げこんでおけば、その甘酒が大變にうまくなるさうである。私はまだその蚯蚓甘酒を飲んだ事がないけれど、私の鄉土ではそんな事を言つてゐる。『蟲類の奇味』の項にも『美味』の項にもこがね蟲が落ちてゐるのは遺憾である。アメリカの葡萄園では、その葉にこがね蟲が澤山湧いて驅除の方法がない。そこで農事試驗場の一技師が一計を案じて、こがね蟲が食糧として大變にうまいものである事が一般にわかれば、栽培者もまたゝく間に之を捕りつくすだらうと考へ、試みにそれをフライに揚げて、客を饗應してみた。

所がある客は、とても臭くて食へないと言つて吐き出し、ある客は又うまい〳〵と言つて舌鼓を打つた。そしてこがね蟲を美味とする者とせざる者と約半數づゝ位であつたといふ事だ。これは前に農業雜誌で讀んだ記憶がある。

蛇は岡鰻と稱して、仲々うまいものである事は、大抵の者が食つた事もないくせに、併し大抵の者が心得てゐる。夏目漱石の『猫』のどこかには、確か蛇飯の作り方まで挿話として詳述してあつた。『美味求眞』にもいろ〳〵蛇の料理法は並べてあるが、蝮の骨を炙つて食つて根氣のぬけた時の藥とする事は見當らないやうだ。試驗前になると私など、藥屋から蝮の骨を買つて來て、それを燒いて噛下して徹夜をつゞけたものである。これは吾々の如き不勉強な學生にのみ必要な應急策で、勉學な青年に知らしむべき事ではないが、最近は謂はゆる文壇人なる存在があつて、原稿〆切の期日を達へる事位は屁とも思つてゐないさうだから、編輯者は贈るに蝮の骨を以てし、徹夜でもして執筆させるがよからう。但し東京の藥種屋で賣つてゐるのは、贋物の加減かあまり効力がない、田舍から送つて貰ふ眞正の品だと、食つて暫くすれば耳の中が蚊の羽音のやうにピーンと鳴り出して眼が冴えて來る。尤も度をすごすと鼻血が出るから用心しなければいけない。（大正十四年、『新潮』）

探偵小説家としてのアラルコン

最近の英米の探偵雑誌に現はれてゐる短かいもの〻中には、コナンドイルは勿論のこと、ルブランに向つてさへ、もう帽子を振りたいと思はせるやうな、すばらしい名篇が時々ある。がさう云ふ作は大抵本誌(『新青年』)で紹介されて讀者も既に御存知であらう。それにそんな作家は、私にはまだ閲歴が十分に分らない。

だから自分の好きな探偵小説の作家及び作品についての感想を求められると私は勢ひ古い作品以外の事の書けないのを遺憾とする。

古い作家ではスペインのアラルコン(Pedro de Alarcon)など好きな作家の一人である。一八三三年ゴオテイクスに生れ、グラナダ大學で教育されて一八五三年に政治記者となつた。五七年にはモロコ戦争に従軍し後に下院議員となつた。初めは急進黨に屬したが一八七四年王政復古後は保守黨に代つて、九一年に死んだ。

彼の作の中では長篇の Three cornered Hat と言ふのが最も通俗的に世に聞えてゐて、マルチネ・シェラのバレットの題材とさへなつた。然し藝術家としての彼を重からしむるものはその短篇である。

彼はスペインに於ける十九世紀ロマンチシズムを代表する作家の一人で、少し荒削りではあるが、毒藥のやうに異常な芳烈な匂ひに、讀者を酔はす所がある。

英譯で一冊の書に纏まつたものは恐らくないであらう。私は最近心掛けて『世界短篇傑作集』のやうな叢書や、今から廿年も前に發行された英米の古雜誌やを集めて、やつと左記の諸作の英譯を手に入れる事が出來た。そして今も、珍藏してゐる。

（1） The Nail

（2） The Patriot Traitor

（3） Two Kinds of Glory

（4） The Fortune Teller

（5） The Choir of Angels

右の外二篇の日本譯がある。

（ハ）　孤島（上田敏著『みをつくし』の中）

（ニ）　笛　（内海月杖著『われから』の中）

私は學生の頃右の上田、内海兩氏の譯を讀んで大變に特色のある變つた作家だと思つて好きになり、その作品の蒐集を初めたのであつた。

併し本來が探偵小説家ではないので、上記私の讀んだ七篇の中、純粹の探偵小説と見なすべきものは(1)の『釘』だけである。鐵釘の立つてゐる髑髏を見てから或る檢事が犯罪の探偵を初め、苦心して犯人を捉へてみると自分の戀人なる美人であつたといふ筋で、非常にロマンチックた薫りの高いものである。アメリカにアシュリイといふ小説學者があるが、その或る著書の一つに、藝術的探偵小説の代表的作品として、此の作が擧げてあつたのに見ても、これが如何に傑れてゐるかゞ分らう。

友人額田六福君が先頃の『週刊朝日』に『髑髏の戀』なるヒストリカル・ロマンスを連載してゐた。あれを書く前、「何か面白い材料はないか」との話だつたので、「これを換骨脫胎したら……」と言つて、私はこのアラルコンの『釘』をすゝめた。その結果が岡本綺堂氏の『半七捕物帳』にも讓らない程の名作となつた事は、額田君の物語的手腕と、その豐富な歷史的知識とに

依る事勿論だけれども、一つは作の暗示となつた『釘』のすぐれてゐた加減もあるだらう。

(2)の『愛國的反逆者』はナポレオンのスペイン遠征當時に取材したもので、初め愛國家だつた藥劑師が俄かに賣國奴となつて同胞の憎惡を受けるが、それは實は敵に近づく手段で、毒酒を以て敵も倒し、自分も倒れるといふ悲壯な話である。(3)の『二種の榮光』は例の有名な畫家ルーベンスが無名の畫家の手になつた愛と死の苦悶を象徴した名畫を見て、その畫者をさがす物語で、これは一寸面白い。一體大抵の探偵小說が、求める所は大金か、國事の祕密かである。だから私は時々そんな第二義的なものを求めて生死の苦をなめるのを馬鹿々々しく思ふ事があつた。眞理とか、愛とかもつと第一義的なものを求める探偵的物語も一つ位出ていゝと思つてゐた。この『二種の榮光』は純然たる探偵小說とは言へないけれど、少くとも探偵小說の爲め一つの新領域を暗示してゐると思ふ。

(4)の『卜者』は、パオンと云ふ有名な山賊がゐて、人さへ見れば必ず打ち殺した。だからパオンの名は知れてゐても、實際彼が如何なる人物か見た者は一人もなかつた。所がある時ジプシイの卜者がパオンに捕へられ、而も彼の手を逃げて、奉行所のやうな所へ訴へ出た。すぐパオンの討伐軍が編成されたが、その隊長こそパオン變名したものであつた事が件のジプシ

イに依つて發見されるといふ筋である。

（5）の『合唱團天使組』は、內氣な、そして容貌の醜いことを自覺して絶望してゐる娘は、決して口說けないといふのに對し、いや、口說いて見せるといふ男が出て來て、カシミラといふい醜少女を口說く。容貌の事には決して觸れず、或はその趣味の高雅な事を賞めたり、或はその心立てのいゝ事を說いたり、巧みに女の弱點を捉へて、口說き落すその心理的經過が面白いのである。

上田敏博士の譯した『孤島』は、北海の孤島にたつた一人流れついた漂流者の事を書いたものである。內海月杖氏の『笛』は、二人の親友同志が敵味方に分れて戰うて甲は乙の軍の捕虜となる、乙の軍では樂隊に笛手が一人足りない。そこで自分こそ笛の名手だと名乘り出て志願さへすれば命だけは助かるので、乙がその事を甲にすゝめる。甲は笛など吹いた事はないのだが、命を賭しての一心な練習はえらいもので、暫くの間に笛の名手となるといふやうな筋だつたと記憶する。

右の梗概でも分る通り、アラルコンは純粹の探偵小說家ではない。藝術的小說家で、そして探偵小說に接近して行つた人である。この點、最近の專門的探偵小說家でそして藝術小說に接

近しようと努力してゐる諸作家と面白い對照をなすかと思ふ。（大正十四年七月、『新青年』）

（附記）　雜學問答中にアラルコンの事を書いたのでその補遺としてこの篇を收錄した。

ハムレットとアミエル

（上）

雜誌『女性改造』に連載せられてゐる森田草平氏の『小說作法講話』は非常な興味を以て讀んでゐたが、八月號（大正十三年）に一箇所私の眼に落ちない所が出て來た。まづそれに關係のある本文を引用しよう。

「吾々は小說又は戲曲中の人物を實際にあつた歷史上の人物よりも一層實在性を帶んでゐるものゝやうに考へ勝ちである。マーカス・ブルタスと言へば、吾々は直ちに沙翁に依つて描かれた戲曲『シイザア』の中の假構的人物ブルタスのことを考へる。羅馬史の中にその事蹟を曖昧に傳へられてゐる實際のブルタスは、今の人に依つて殆ど忘れ去られたと言つてもいい。ハムレットも丁抹の古い王室にあつたヘンリー・フレデリック・アミエルといふ公子の事蹟から取つたものだと言はれるが、誰もそんな人間のことを覺えてゐる者はない。」

私が質したいのは其圏點を打つた諸點であつて、私はそれに三樣の疑念を狹まざるを得ない。

第一は、ハムレットは果してヘンリー・フレデリック・アミエルの事蹟から取つたものであるか？と云ふことである。

第二は、ヘンリー・フレデリック・アミエルは果して丁抹の古い王室の人であるかと云ふことである。

第三は、ヘンリー・フレデリック・アミエルは、「誰もそんな人間のことを覺えてゐるものはない」程有名ならざる人間かと云ふことである。

先づ第一から質すが、「沙翁研究家としては世界的に著名なるべき坪内逍遙博士の譯本『ハムレット』の序文には「最も古きハムレットの傳記はデンマークの史家 Saxo Grammaticus が紀元後一二〇四年に拉典文にて著はしゝ一書『丁抹人文史』の第三卷及び第四卷なる Amlethus の物語りなりとぞ。」とある。市川三喜博士の『註釋ハムレット』の序にも同じ事が書いてある。さすれば今更西洋の沙翁學者の引用などしなくても、これを十分に信用してよいと思ふ。卽ち結論を作れば、ハムレットは丁抹王室の Amlethus の事蹟に據つたのではあるが、斷じて森田氏の

言はるゝやうな、アミエルの事蹟に據つたのではない。但し Amlethus と Amiel は少くとも頭級とmと丈けは共通してゐるから、森田氏は思違ひをせられたのではあるまいか。

それならそれで差支へはない。誰れだつて思ひ違ひはある。併しアミエルはそんな混同をされる程世に知られない人間であらうか。森田氏もはつきり Henri Frederic Amiel と書いて居られる以上、それは二卷の日記と共に不朽の名をとゞめてゐるジュネーヴの厭世的哲人に相違ない(森田氏も確に彼をさして言つて居られるのである事は後にその理由を明かにする)。併しそのアミエルなら、ルナンも、トルストイも、ヲウタア・ペエタアも、グリヤスンも、その他の諸家も評論を書いてゐる。四五年前に私もその日記の前卷だけ邦譯を出したことがある位だから、「そんな人間を覺えてゐる者はあるまい」所ではない。現に百田宗治氏は『讀賣』で、岡田八千代氏は『朝日』で、アミエルを自分の愛讀書に擧げて居られたのは、この八月に入つてからの事である。併しそのアミエルならば一八二一年に生れて、八一年に死んでゐる。シエークスピアが墓場からでも甦つて來ない限り到底彼の作の題材となり得る筈はない。生地はジュネーヴであつて丁抹の王室などゝは素より何の關係もない筈である。

（下）

然らば森田氏はなぜこんな念の入つた間違ひをせられたのであらう乎。それには一つの理由が見出される。

森田氏の『小說作法講話』はクレイトン・ハミルトンの A Manual of the Art of Fiction からその骨子を借りて來て、それにいろ〳〵日本の例を附加されたものである。この事は氏も公明に文中に斷つて居られる。所でハミルトンは同書の Fiction and History と題する項下で（第九頁）から述べてゐる。

"We know Hamlet even better than we know Henri Frederic Amiel, who in many ways was like him, even though Amiel has reported himself more thoroughly than almost any other actual man."

これは意譯すればかう云ふ意味である。「ハムレットとアミエルとはよく似てゐる。アミエルは實在した人物中の殆んど誰よりも、もつと徹底的に自分自身の事の記錄を殘してゐる。しかも吾々はアミエルよりハムレットの方をよく知つてゐる。」

森田氏のあの講話は勿論ハミルトンの飜譯ではない（飜譯の部分も隨分あるが）。それからハミルトンの書の意味だけを正しく傳へるとも書いてない。だから森田草平と述作者の名前を書いてある限り何を述べられやうと隨意である。たとへハミルトンと正反對な意見を述べられたとて私は少しも驚かぬ。見解の相違點は十分胸のすくやうに述べられたがよからう。併し時とすると、歷史的事實が儼として横はつてゐる爲め、變つた見解の加へやうのない所がある。ハムレット對アミエルの類似の如きはそれで、森田氏がハミルトンの著書を根據として、その類似を認むる限り、之は決して違つた見解を加へる事の出來ない場合である。この場合アミエルとハムレットと類似點が少しもないと云ふ異說を樹てるのならばそれでよい（尤もそんな事をすれば識者の嘲笑を買ふのみである）。だが、苟くも、少しでも文學史の知識があり、又人並に英語の讀める者ならば、ハミルトンのあの原文から、あのやうな珍妙な、奇怪な結論を引き出して來ることは出來ない筈だ。又そんな事をするのは斷じて許されない。

もし森田氏が文壇の一雜兵であるなら、私はこの位な事は問題にしない。併し作家としては文壇の大先輩であり、學者としては法政大學の教授である。その人から斯の如き珍說をきけば、無識なる世間は本當にしないとも限らないし、有識なる世間は、森田氏を以てしてだのにあの

通りだからと言つて、文壇人の物の知らなさ加減を馬鹿にしないとも限らない。もし森田氏に異説か辯解があるなら謹んで承るが、恐らくさう云ふものは有り得まい。とすれば文壇の先輩及び大學教授と云ふ地位から言つても、公けに正誤をされた方が安全であらう。

（大正十四年八月、『國民新聞』）

（附記）　森田氏は直ちにこれを訂正された。

雜著亂讀抄

(一)あまんじやく

かつて大和の法隆寺を訪ねて、國史に名高い古代美術の祕寶を護つて立つ四天王が、脚下にあまんじやくを踏んづけてゐる木像を見た時、そのあまんじやくの面が、角を立て牙をむいて蹲いてゐるにも似ず、存外のんきさうで、愛嬌があつたのは、頗る我が意を得たから、思はずその埃の溜つた頭を撫でゝやつた事がある。

あまんじやくとは天の邪鬼と書くらしい。この者性頗る頑迷にして人が右といへば必ず左と唱へ、人が天を指させば必ず自らは土を踏んで、異を樹てねば止まぬと言ふ。その異に正理あり、その主張に情熱がこもつてゐれば、十分改革家たり、反逆兒であり得るのだが、あまんじやくの言行には、そんな立派な根據はない。たゞ何となく人に逆らつてみたいといふ呪はれた星のもとに生れて、何のやくにも立たぬ舌を動かすのだ。

あまんじやくよ！　私は汝の中に最も多く自分の姿を見出す。私はお前だ。頃日新小説子の來訪を受け、明治大正の古本の事について何か書いてくれとの註文に接したので、少しこの本性を働かして見よう。

名著を讀破し、よく秩序と統一をつけ、正しき價値の査定を下して、一點の誤謬も些少の思ひ違ひもなきを期するは、學者の仕事だ。あまんじやくの讀書の領域は、別になくてはならない。

（二）明治元年の出版物

吉野作造博士外數氏の主唱によりて成立した明治文化研究會の機關誌『新舊時代』創刊號に井上和雄氏の『明治元年の出版物』なる一項があつて、多くの珍らしい書籍目錄が掲げられてゐる。

それから思ひついて、私の書架にも何か明治元年出版の本はないかと、漁つてみると、たつた一冊、蒲生君平の『皇和表忠錄』が見つかつた。『明治紀元戊辰冬十月新鐫』とある。但しこれはさうと斷わつてないけれど、勿論、この時初めて公刊せられた書物でなくて、いづれ德川時

代に一度出たことのあるものを此の時複刻したものであらうと思はれる。だから殘念ながら私はそれ以外元年出版の文化史的意義のありさうな珍籍は一部も所藏してゐないわけだ。

私の所藏の書にして、明治初年の東京を興味深く窺はしむる事、『東京新詞』に如くはない。これは大橋直と北眞逸との合著で、かの頼山陽の「雲耶山耶呉耶越」の詩の韻に合はせて、新東京の風物を叙したのである。私は初編しか持つてゐないが、後編は出たのかどうか知らぬ。

(三) 明治初年の職業婦人

この書の出版せられたのは明治八年である。今試みにその數篇をぬいて、當時の東京には婦人の職業として如何なるものがあつたかを數へて見よう。

地　獄

繰耶寡耶孤耶獨。化粧爲レ誰結ニ亂髮一。一身生計付ニ媒媼一。送レ郎迎レ郎類何沒。曾見無情似ニ有情一。坐背ニ燈華一起愧レ月。

藝　妓

會耶席耶亭耶樓。有レ客促來未レ理レ髮。浴後輕粧亦堪レ看。海棠江涙痕未レ沒。曾見桂鏡相照姿。宛

擬嫦娥恍望レ月。

女太夫

哀耶別耶離耶苦。應レ絃撥搖美人髪。俚調數曲淨瑠璃。小姑席讓ニ大姑一汝。瞥見素顏鉤簾下。一雙紅燭照ニ眉月一。

この女義太夫も藝妓も今日依然として存するから別に珍らしくはない。但し地獄だけは私娼の名に變つて了つたやうである。

茶坊

嬝耶姑耶姉耶妹。輕裝還落巧ニ綰髪一。一點香湯無ニ冷溫一。半鼎清風餘醒汝。瞥見遊客來憩レ床。玉腕捧出盆中月。

明治初年の事に暗い私には分らないが、この茶坊とは今日のカッフエの元祖のやうなものではあるまいか。但しこの詩でみると出したのはコーヒーや紅茶でなくつて、日本茶のやうである。この茶坊とはどんなものであつたか、博識の士の示教に俟ちたい。この正月(大正十四年)友人藤森成吉氏の鄉里なる信州諏訪へ行つて、その地方では私娼のことをサボシと言つてゐるのを耳にした。サボシとは茶坊子の訛ひで、或は今日のカッフエのウエイトレスの類ひであつ

たのが遂に私娼の名稱に轉訛したのではあるまいか。

女工場

紡耶績耶裁耶縫。幾家江娘梳二翠髮一。繡レ花鉞線春日長。和レ鶯投梭聲不レ沒。瞥見女師上レ場來。素姿燦然霞外月。

細井和喜藏君に『女工哀史』なる著書がある。一部は去年の秋頃の『改造』に連載され、後に全部が纒まつて同社から出版せられた。細井君は紡工として十何年かの經驗を有する人で、その肉を削ぎ、血を絞るやうな體驗を基礎として書かれた同書を、私は原稿のうちに讀むの機を得たが、恐らく近年私の讀んだ書のうち、この書の如く深刻な、嚴肅な感銘を與へたものはない。――今日の女工は貧乏と忍苦と肺病と虐使との異名だ。悲慘そのものだ。この明治初年の、わが國の產業革命の第一頁を飾る――否、嚴密に言へば產業革命以前の女工とは何といふ懸隔であらう。この詩はまるで漢宮の妃嬪のやうではないか。

日本に於ける紡績業は、幕府の瓦壞前島津齊彬が英國から機械を舶載し、士の娘を女工にして就業させたのに創まる事は、その細井君の著書に依つて初めて知つたのだが、この詩に描かれてゐる女工も、そののんきさが島津家藩中の士族女工と多く異る所はなかつたらう。

代書人園輝女

被耶袴耶傘耶靴。男裝而縮浴鴉羣。玉腕綴成訴答文。(一字不明)行雲烟一揮洩。瞥見明眸排三群蒙。阿輝照出人中月。

園輝は明治の女權伸長史の第一頁を飾る女傑であつて、明治八年既にこの書にかく謳はれてゐる位だから中島湘煙や景山英子の大先輩なるは言ふまでもない。が園輝のことは、實は私はよく知らない。この『東京新詞』を私に贈られた京都の濟生病院長小林參三郎氏は米國留學中あの地で彼女と邂逅された事があるさうである。それから早稻田大學の史學科の教授野々村戒三氏は麻布の教會で彼女と會つた事があると語られた事があつた。それはいづれも明治廿年代のことであらう。何にせよこの明治初期の女傑の閲歷が今日殆んど傳はる所がないのは惜しむべきの至りではないか。

(四)古本道樂

地方を旅行して最もたのしみなのは、その地の古本屋や、古道具を漁つて古書をさがす事であらう。菊池寛氏は地方旅行の際一時間位でも暇があればその地の圖書館に入つて讀書される

とのことが新聞に見えてゐたが、私は古本をあさる時によると思はぬ獲物が多い。

京都には何といつてもまだ珍書がある。殊に明治初期のものなら多い。

一體京都には、大學の圖書館が設立される際、當事者が少し大きさうな古本屋は片ツ端から店及び倉庫にある書全部を一纏めに買上げて、中から有用の書だけをぬいては、殘りを又もとの本屋に拂ひ下げたので、少し氣のきいた本はすツかり大學へ根こぎにされてゐるから、碌な本はないとの事を聞いた事があるが、併し何といつても京都だ。氣永にさがして居れば、まだ却々いゝ本が見つかる。成島柳北の『柳橋新誌』初版の木版本など、私はわづか拾錢で買つた。その他荷が重くなるから買つては來なかつたが日本最初の哲學史なる『理學沿革史』もあつたし、明治四年に出た箕作氏の『自然神教』などもあつた。まだその外にいろんな本を見たのはまだつい去年の秋の事だから、今度行つたら又買つて來たいと思つてゐる。

奈良にもある。日清戰爭前後すぐのものなら、停車場前の古道具屋を漁つてもかなり買へる。それから本ではないが、昔の切支丹禁制の立札を賣つてる家もあつた。少し大きすぎたので買はなかつた。

藤木猶太と二人で伊賀の上野へ行つた時、私は七十錢を投じて森鷗外の『つき草』を買つた。

あとで聞いたら本間久雄氏は東京で六圓で買つたと話して居られた。諸種の古本目錄を調べてもそれが通り相場らしい。同じ伊賀の本屋で藤木は飯田旗軒がピエル・ロチの日本紀行を譯した『岡目八目』を買つた。明治二十年代の出版物である。

房州の鴨川なんていふ小さな町でも一寸珍らしい本を見つけたことがある。金が出來たら靜岡と金澤と福井へは是非古本を買ひに行きたい。安井息軒の『辯妄』がほしいのだが、これは靜岡で見つかりはしまいかと思つてゐる。水戸で『小學暗誦萬國歌盡』といふ本を買つた事がある。明治十年の出版、和裝の薄い本である。一節をぬいて見よう。

「獨逸に諸州を取合せ、六萬八千餘坪にて、七百十八萬餘人……」

といふ調子で世界萬國のことを歌つたのである。面積を坪數で勘定してゐる所が面白いと言へば面白い。

(五) 切支丹關係の珍籍

さうかと思ふと、遠くの古本屋ばかり搜してゐたので、藤元の發行元に初版の新本の殘つてゐるのを氣付かずにゐたやうな事もないではない。京都の寺町の古本屋で明治二十四年出版の

『聖フランセスコ・ザベリヨ書翰集』を見付けたが、その時は別に必要もなく、それに重いので買はなかつた。併し歸京後急に欲しくなつて、その古本屋に紹介してみたけれど、もう賣切れてゐた。それから三四年の間といふもの、氣に懸けて古本屋を捜したり、各地から送つて來る古本目錄を調べたりしたが、どうしても見付からなかつた。

所が或る日に松崎實君が遊びに來て、

「あの本なら未だ關口の公教會に僅かだけれど殘つてゐる。各地の公教會に委託しておいたのが賣れ殘つたのを集めたのだ。僕の名を言つて宣教師のフロージャックさんを尋ねて行けばすぐ賣つて呉れるだらう」との事であつた。

關口の教會には成程、初版本の手の切れるやうに美しいのが殘つてゐて、約八百頁の浩瀚なものが三冊で五圓といふ値段だ。古本屋で高價をぼられるよりどんなに好いか知れない。それにしてもカトリックの出版物であればこそ發行後三十五六年經つた今日でもなほ叮嚀に殘本を保存してあるが、これがもし普通の商人だつたら夙くの昔に、處分してゐたであらう。

カトリックの出版物には貴重な切支丹資料が數々ある。而もその『鮮血遺書』も『公教會の復活』も『聖ドミニコ會日本致命傳』も、私の手では一冊も見付からなかつたが、松崎君に頼

んだら、直ぐ持つて來てくれた。蛇の道は蛇といふが、かういふものになるとその方面の人を煩はすが一番早いやうである。

(六)『義經再興記』

さき頃、源義經と成吉斯汗とは同一人であるとか、無いとかいふ問題が、單行本や雜誌で騷がれてゐたやうである。

私もこの問題は小學校の時代から教師にきいてゐた。そして子供の時には、いづれ德川時代あたりからさうした事は唱へられてゐるのであらうと思つてゐたが、後に『義經再興記』なる書を早稻田の古本屋で見つけて、一過讀して、これが明治年間になつてから唱へ出された、まだ苔のむすには早い新說である事を知つた。

『義經再興記』は明治十八年の出版で、內田彌八譯述としてあるが、原著者の名は署してない。序文には「偶友人惠一英書、繙而見之」とあり、「故偸今玆歲始之休暇、紓譯述之」とあることに信用がおけるとすれば、英書の飜譯である。

加藤武雄氏も亦吾黨の雜著亂讀の業しみを解する一人だが、氏の曰く「末松謙澄が英國滯留

中、日本にも祖先に英雄あり、日本の優良人種であることを外人に知らしめる爲めに、彼は義經成吉斯汗同一人説を創造し、それを英文で書いて英國で出版したといふことを何かで讀んだ事がある。」

その後この話の典據については、加藤氏に糺しても見ないが、もしさうだとすれば、この『義經再興記』は恐らくその末松謙澄の英書を更に邦譯したものなのであらう。

(七)『沙漠の花』

成吉斯汗で話が滿蒙の方へ飛んだから、今度は一つシベリヤの話をしよう。併しそれには少しく前置きがいる。

早稻田大學の前のある古本屋の店前に Eminent Women and Tales for Girls (『少女用名婦傳及名譚集』)なる一書が、五十錢の札を貼られ、見切品として埃にまみれて轉がつてゐた。その裝幀も中の挿繪も、到底今日の本ではない。何だか『國民の友』でも刊行されてゐた當時に日本へ輸入されたやうな匂ひをもつてゐるので、一寸私の眼をひいた。が、どうもそれを買ふ氣にはなれなかつた。

私は一ケ月程してから又その本屋をのぞいてみると、本は未だに賣れないで轉がつてゐたので、再び手に取つて目次をながめ、何だか氣が惹かれるので、とう〳〵買つて來た。私にさうまでこの書を懷しませたものは、書中の一章なる "The Heroine of Siberia" (シベリヤの少女)の物語である。その書き出しにはかうある。

「非常に有名な物語の一つに『エリザベス、別名シベリヤの流刑囚』といふのがある。フランスの女流作家コタンの作で、歐洲各國語に飜譯されてゐる。コタンはそれを小說として描いたのだけれど、もとは一八〇一年に死んだパウル一世帝時代の實際の出來事なのである。」

そしてプラスコフイ・ロブウルフといふ少女が、無實の罪の爲めシベリヤへ流刑されてゐる父母の赦免を得る爲め、徒歩でシベリヤからペテルスブルグまで數千哩の道を踏破して、皇后に謁見して希望通り父の赦免を受くる話が書いてある。

これを材としたコタンの作は、マダム・ド・スタエルの如く力強くはない。併しロマンチック派の勃興の爲めに、一つの礎を据ゑたものとは言ひ得ると或る批評家は言つてゐる位である。

私はこの少女用の一書でコタンの作の題材となつた實話をよみ、何となくそれは少年の頃、日本語で少くとも讀んだやうな氣がしてゐたが、頃日『沙漠の花』なる一書を得て、私の感じ

に根據がないわけではなかつた事を明らかにした。

『沙漠の花』は明治二十年の出版、淺井榮照と坂本筒藏との共譯で、序文には佛國忽陳女史の原作なる旨が明記してある。——田舍の百姓にしては珍しく藏書家であつた私の家には、この書があつて、私は子供の時それを讀んでゐたのである。

因みに此の少女用の史譚の書には、この外ジャンヌ・ダルク、グレス・ダアリング、フロラ・マクドナルド、レムブラントの妹、マダム・ローランの傳もあり、『貧しき乙女の日記』『愛は力也』などゝいふ假作物語もある。一體に産業革命初期の愛、平和、自由、平等などの語が思想界の目標となつてゐた當時の一味の氣脈が全卷に漂うてゐる。

貧しい家に生れた少年なり、少女なりが、不撓不屈の努力の後に、富豪や貴紳に見出されてその寵を得るといふやうな筋は、當時の多くの物語に見られる。ホウソオンなどにもさういふ匂ひのする話はある。それに『シベリヤの少女』は物語そのものは、たとへばエクトル・マロウの『アン・フアミユ』やアミチスの『クオレ』のある物語と似通ふ特色を持つてゐる。

(八)追悼號

『新小說』によつて『泉鏡花記念號』が刊行されたが、作者の生前にこれが出たのは、或は鏡花氏のそれを以て最初とするかも知れない。

死後に出た追悼號はかなりある。尾崎紅葉のは同じく『新小說』で出した。口繪に印譜を集めてあつたのを珍らしいと思つた。齋藤綠雨のも『新小說』で出た。揚羽の蝶と西洋草花のついた表紙であつた。その他に『新小說』の出したのは夏目漱石號と森鷗外號である。

國木田獨歩のは『新潮』と『趣味』が出した。島村抱月のは『早稻田文學』が出した。

併し以上の諸冊は今日なほ古本屋で得られるが、『帝國文學』の出した小泉八雲號、『新人』で出した綱島梁川號、『藝文』で出した上田敏號などは殆ど得られない。

小泉八雲號は、野々村戒三氏から惠贈されて珍藏してゐる。私がこの書の存在を知つたのは神田の貸本屋の目錄にのつてゐるのが最初であつたが、その貸本屋に實物はないので、二ケ年位は氣に掛けて搜したけれど、自分の手ではとう〳〵見つからなかつた。

『新人』の綱島梁川號は、少年の頃出入してゐた原宿教會の書棚にあつたのを見つけて讀み、後年ある必要が生じた時には、安倍能成氏の所藏のを借りた。

上田敏號は平林初之輔君の持つてゐるのを借りた

『泉』の有島武郎號の如きも、もうそろ〳〵古本屋にその影を沒しかゝつてゐるかも知れない。兎に角かゝる記念號は二三年經つと無くなるので、私は出るとすぐ買ふことにしてゐる。併し『英語青年』で出してゐる厨川白村號はどうも保存する氣がしなくて、とう〳〵失つて了つた。高山樗牛の追悼號などは何かの雜誌で出たことがあるのだらうか。北村透谷は如何？　落合直文は如何？

（九）トルストイの手紙

『新人』の綱島梁川追悼號で思ひ出した。あの號には築山正夫の追悼記事も合併して收めてある。その中に誰かゞ築山正夫に『長恨』なる長篇小說の作があると書いてゐたが、あれは創作ではない。トルストイの『クロイツエル・ソナタ』の飜譯で、後に單行本として出版された。

大阪の百島操氏は邦文になつたトルストイの文獻の蒐集家として名高い人である。私はある機會に氏の作られた總目錄を見た事がある。藤森淳三君が國民新聞に書いた『有島武郎氏の死とトルストイの家出』といふ風な雜文の末から、私達の書いた零細なものまで、拾はれてゐたが、確かこの築山正夫の『長恨』はそのリストに洩れてゐたと記憶する。

洩れてゐたと言へば、『書物往來』で外國文豪から手紙を貰つた日本人の表が出てゐたが、やはりトルストイのがぬけてゐた。トルストイから手紙を貰つてゐる日本人は澤山あるだらうと思ふ。安部磯雄氏の貰はれたのは中でも有名で、ロマン・ローランの『トルストイ』の中にもそれに言及してある。それからモウドの『トルストイ評傳』の下卷に、ある日本人の貰つた長い手紙がアペンデイクスとして付いてゐるが、あれは一體、誰が貰つてゐる手紙なのか。

（一〇）コムニスト黨

私が『文藝春秋』三月號に書いた『雜學問答』の中の一問ははからずも德富蘇峰先生の眼にふれて示教を得たが、他の一問は、京都市外花園村の中川新吾氏の示教に預つた。無斷でその手紙を轉載することは幾分の憚りがないとは言へないが、問題が問題故、恐らく氏も深くは咎められまい。

「……（前略）……文藝春秋三月號所載、貴稿雜學問答によれば、明治の初年、加藤弘之氏の、福澤諭吉氏に對してなせる論爭中に使用せられたる「コムニスト黨」なる語の出所を御探索の由、實は吾等も所存ありて、先年來より、明治の初年に於ける外來思想の輸入についての

資料を蒐集致居るものに候が、幸ひ御疑念に關する典據を、手許に所持いたし居るを以て、左に御通知申上ぐべし……。

あれは福澤氏著明治七年一月慶應義塾出版『學問のすゝめ』第四編所載、學者の職分を論ずと題する章の反駁として、同年二月の『明六雜誌』の卷頭に於て公にされたる『福澤先生の論に答ふ』の中に見出さるるものにして、謂はゆるリベラールの福澤氏が洋學者の仕官を非とせるに對して、加藤氏はこれを不可ならずとし、かくリベラールを破る論據として『フランツと言へる人のヒショロギー・ホン・スタート』(書名・國家の窮理といふ義)を引用し來るものに候が、卽ちその文句に、例のコムニスト黨云々の語を見出すわけに候……(下略)……」

ここで中川氏に向つてはその好意を深く感謝するものである。

(一一)西洋小說の支那譯

柳田泉が上海の新潮社で發行された『新潮叢書』の第二編と三編とをもつて來て呉れた。周作人の譯した世界の短篇傑作集である。ありがたい。右に目錄をのせて見よう。

(1)我國託爾斯泰(ロシヤ・トルストイ)作『空太歡』

（2）但衆珂（ダンチェンコ）作『摩訶末的家族』
（3）契訶夫（チェホフ）作『可愛的人』
（4）梭羅古勃（ソログープ）作『童子林的奇跡』『鐵圈』
（5）庫普林（クープリン）作『帝王的公園』『聖處女的花園』『晩間的來客』
（6）安特來夫（アンドレイフ）作『齒痛』
（7）波蘭、顯克微支（ポーランド・シェンキヰッツ）作『酋長』
（8）什朗斯奇（ゼエロムスキ）作『誘惑』『黄昏』
（9）丹麥、安兌爾然（デンマーク・アンデルセン）作『賣火柴的女兒』
（10）瑞典、斯忒林堉克（スヰデン・ストリンベルク）『不自然淘汰』『改革』
（11）新希臘、蔼夫達利阿諦斯（不明）二篇あり
（12）南非須萊納爾（不明）二篇あり
（13）日本江馬修作『小小的一個人』
（14）匈加利、育珂（ハンガリ・ヨーカイ）作『愛情與小狗』
各篇の終末にはそれ〳〵解題がついてゐる。

試みにトルストイの所を讀んでみると左の五種の支那譯のあることが分る。

（1）心獄（復活の抄譯）
（2）婀娜小史（アンナ・カレニナ）
（3）驃騎父子
（4）托氏宗教小說集
（5）羅刹因果錄

右の中（2）は加藤朝鳥氏が所藏して居らるゝといふことである。（3）は未だ原本と對讀しないから原名を說明出來ないと、譯者は書いてゐるがこれは英譯で Two Hussars といつてゐる中篇のことであらう。（4）は芥川龍之介氏が五六年前の『新潮』の隨筆に紹介してゐられた事がある。私もこれは芥川氏の紹介より一二年前に手に入れて片上伸氏に上げておいたから、恐らく今日は早稻田大學の圖書館に收まつてゐるであらう。ロシヤのトルストイ博物館に收まつてゐる支那譯トルストイもこれが只一冊だと云ふことである。解題には「全く白話を用ふ。惜しむべし、現在絕板し了す。」とあるから支那では珍本なのであらう。併し神田あたりの古本屋で時々見かけることがある。（大正十四年五月、『新小說』）

——『文藝東西南北』了——

大正十五年四月十八日印刷
大正十五年四月廿二日發行

（定價壹圓八拾錢）

◁文藝東西南北▷

著作者　木村毅
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（八八八）八〇〇〇番　六七八九番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區指江戸川町　電話小石川五九二一番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

木村毅氏著

思想・文藝講話叢書(8)

小說研究十六講

（十三版）四六版特製 紙數五百卅頁 價貳圓五拾錢 送料拾貳錢

作家として立たうとする人の絶好無二の指導者である

現代文學の中樞は、何と云つても小說にある。小說こそは、現代文學の王座を占むる最高の文學であり、現代文學の領域の八九分を領略せる最大の文學である。しかも、我邦には未だ小說に對する根本組織的の研究書といふものの出て居ないのは、わが文壇の一大缺陷であるとし、これを充たす可く此の書は公にされた。先づ小說とは何ぞやに說き起し、小說の發達を迹べ、更に小說の作法を、徹に入り細を剖つて解說すると共に、小說家の素質・用意にまで論及し、一面近代小說を鑑賞せんとする人々に周到なる指針を與ふると共に、一面、親しく小說の筆を執らんとする人々の爲めの、親切なる敎示を爲してゐる。堂々たる小說論の規模に、極めて平俗なる談話を盛り、何人が讀んでも直ちに理解し得る入門書たる點に著者の苦心を見る可く、引例また最も豐富、海外の諸名篇は勿論、日本文壇の諸作に亙つて、その粹を拔き精をあつめてゐる。

文藝入門叢書

第一編

世界文學の輪郭

木村毅氏著

新四六判紙裝
紙數二百頁
價八拾錢
送料六錢

一般文藝研究者の必讀書

日曜の半日で優に讀了し得る二百餘頁の小册子に、東西古今六千年の歷史を縱橫に貫いて、文藝全面の知識を網羅した文學史中の文學史は本書である。名作の拔萃、文人逸話の收錄にも細心の注意を拂ひ、殊に、新興プロレタリヤの評論家が、過去の文藝史に加へた新批判の如きも遺漏なく收め、從來の無味乾燥にして記憶に不便な配列を全然廢し、著者が讀書的經驗から割出した泰西にも類例なき新創意の記述法を用ゐた。一般文藝研究者の必讀すべきは勿論、中等學校、高等學校の副讀本として絕好のものであると信ずる。

吉江喬松氏著

佛蘭西文藝印象記

中版特製美本
定價貳圓
郵送料拾錢

吉江氏は、夙に思想界の權威、新時代の指導者と目せられてゐる。曩に佛蘭西に遊んで、その風物に親み、その文藝を究むる事數年。本書は單に嘱目の事を記せる旅行記にあらず、實に一大批評にして、人類生活最高の指標たる佛蘭西精神の深刻なる解剖である。「南國」「ポール・ロワイヤアル訪問」「ヴエルサイユ」以下十數篇を收む。外遊記印象の類、數甚だ多いが、その含蓄と風格と、本書の如きは斷じて匹儔を見ない。

日高只一氏著

英米文藝印象記

中版特製美本
價貳圓貳拾錢
郵送料拾貳錢

實實なる學究の精神に、豐潤なる詩人の情緒をあざなひつゝ、英米文學の眞髓をその深遠なる學識と、親しく耳聞目睹せる印象との兩方面より說けるもの。或はエマルソンの跡をたづね、或はハアデイの家を訪ひ、ポオを品し、コンラツドを論じ、バイロンの自然觀を說き、一面より見れば精到なる近代英米文學論たり、一面より見れば多彩なる英米遊記たり。英米文學徒ならむとするの時、正に熱讀せらるべき書である。

島崎藤村・有島武郎・片上伸・長谷川天渓四氏選

現代小説選集

▼布表紙天金最美本
▼定價參圓八拾錢
▼郵送料拾八錢

三十三名家の自選傑作集也

島崎藤村　谷崎潤一郎　里見弴　中村星湖　藤森成吉　正宗白鳥
有島生馬　上司小劍　相馬泰三　水上瀧太郎　谷崎精二　菊池寛
加能作次郎　廣津和郎　芥川龍之介　吉田絃二郎　豊島與志雄　久保田万太郎
小川未明　江口渙　宇野浩二　久米正雄　水守龜之助　葛西善藏
室生犀星　中戸川吉二　加藤武雄　細田民樹　田中純　近松秋江
白石實三　佐藤春夫　有島武郎

――第十三版――

劇作家協會編

現代戯曲大觀

▼布表紙天金最美本
▼定價金四圓五拾錢
▼郵送料拾八錢

三十九名家の自選傑作集也

秋田雨雀　灰野庄平　長谷川時雨　林和　伊原青々園　池田大伍　伊藤松雄
川村花菱　菊池寛　北尾龜男　近藤經一　久保田万太郎　久米正雄　楠山正雄
武者小路實篤　長田秀雄　仲木貞一　中村吉藏　中島俊雄　長與善郎　有島武郎
額田六福　岡田八千代　岡本綺堂　大村嘉代子　小山内薫　里見弴　佐藤紅緑
瀬戸英一　島村民藏　鈴木善太郎　鈴木泉三郎　田島淳　田村西男　田中純
谷崎潤一郎　山本有三　山崎紫紅　吉井勇

――第七版――

感想小品叢書

第一編	我が文藝陣	菊池寛氏著
第二編	泉のほとり	正宗白鳥氏著
第三編	微苦笑藝術	久米正雄氏著
第四編	七寶の柱	泉鏡花氏著
第五編	草原	武者小路實篤氏著
第六編	白醉亭漫記	里見弴氏著
第七編	文學的散歩	宇野浩二氏著
第八編	百帥	芥川龍之介氏著
第九編	わが小畫板	加藤武雄氏著
第十編	文壇隨筆	中村武羅夫氏著
第十一編	途上	山本有三氏著

一冊壹圓貳拾錢◇送料八錢

思想・文藝講話叢書

第一編・近代思想十六講	中澤臨川 生田長江	著
第二編・社會問題十二講	生田長江 本間久雄	著
第三編・近代文藝十二講	生田長江・野上白川 森田草平・昇曙夢	著
第四編・近代劇十二講	楠山正雄	著
第五編・改造思想十二講	相田隆太郎 宮島新三郎	著
第六編・日本近世文學十二講	高須芳次郎	著
第七編・日本現代文學十二講	高須芳次郎	著
第八編・小說研究十六講	木村毅	著
第九編・婦人問題十六講	奥むめお	著
第十編・東洋思想十六講	高須芳次郎	著
十一編・社會學十二講	杉山榮	著
十二編・近世歐洲繪畫十二講	伊達俊光	著
十三編・マルクス十二講	高畠素之	著

定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

但し2は貳圓3は貳圓參拾錢4は參圓貳拾錢12は參圓五拾錢

社會哲學 新學說大系

(1)	(2)	(3)	(4)	(5) アダムスミス	(6)	(7)	(8)	(9) 思想の
唯物史觀の改造	社會學的認識論	時間と自由意志	田園・工場・仕事場	富國論	社會生活と精神生活	社會學通俗教科書	政黨心理の研究	社會學の人生的價値
バラノフスキイ 高島素之氏譯述	ラッツェンホーファー 宮崎市八氏譯述	ベルグソン 北昤吉氏譯述	クロポトキン 中山啓氏譯述	アダムスミス 神永文三氏譯述	オイツケン 高橋正熊氏譯述	ギッデンタス 神永文三氏譯述	ロベルト・ミヘルス 西村二郎氏譯述	ウエ・スモール 高島素之氏譯述

中版背布特製 ◆ 一冊壹圓貳拾錢 ◆ 送料貳拾錢つゝ

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02953 0573